

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



特275  
675

山町と古刹法然寺

佛生山町は香川郡の中央に位し、面積〇、一八六方里、人口四千人、東に觀音社を奉祀せる抹山、綠樹鬱蒼と繁り麗池、塵池、平池の碧水には遠く阿讃國境の連峰靜かに倒影し、殊に平池は周圍一里十二町治承二年平相國清盛の下命により築造せるもの池塘に櫻樹多く春風至れば爛漫として花吹雪池面を埋め近時櫻名所として頓にその名を高くしてゐる。附近にはまた本縣唯一の大馬場あり。春秋二季のシーズンには大盛觀を呈する此處に雄山の東麓同町百相に古刹法然寺がある。佛生山來迎院と號する淨土宗の一本山にして舊藩主松平家の廟所にて知られる。同寺の縁起は七百餘年前に遡る建永年間淨土宗の開祖法然上人が讃岐に流謫された。當時那珂郡小松庄（現在琴平）に居り一字を建て、阿彌陀如來の像を刻んで安置し、生福寺と稱した。其後同寺は兵亂に依り堂塔坊舎悉く破壊し、僅かに竹庵に彌陀善導圓光の影像を殘すのみにして、爾來四百年を経て寛永八年高松藩祖松平頼重公法然上人の舊蹟の失はれん事を悲しみ、また佛生山は古來靈場たるを以て生福寺廢寺の本尊等を此の地に移し、丘陵を開き土木を起して三十三間二十餘宇の堂塔僧坊を造營し、南海屈指の巨刹となつた。將軍家綱公之を嘉して朱印寺額三百石を贈與し、また畏くも東山天皇の延寶三年閏四月御輪首並に常紫衣被着の御賀旨を下賜あり。松平家代々

の善堤所とはなつてゐる。

寺内に安置せる釋迦如來の涅槃木像は國內第一の稱もあり、釋尊の臥像長さ一丈餘、文珠、普賢三尊の座像各々四尺、諸大士梵天帝釋二天並びに四天王十六羅漢、長者居士天龍八部善神等空中より摩耶天人阿那律尊者侍女等雲に乗つて天降る像の外鳥獸五十二類備はり總て木像である。その他同寺には什物多く殊に大部分を藏する一切大藏經は本邦無比と稱せられてゐる、就中圖寶に指定されてゐるものは、紙本着色觀世音功德圖（傳鶴州筆）六曲屏三雙二曲屏一雙、絹本着色十王像（陸信忠筆）一幅、紙本着色源氏初音の卷、紅葉賀の卷（晴川筆）八曲屏一雙等である。

一の宮田村神社と素婆俱羅社

香川郡一宮村（琴電一宮驛停留所北）に鎮座する國幣中社田村神社は倭迹々日百襲姫命、五十狹芹彦命、猿田彦大神、天照山命、天五田根命、の五柱の神を祭り、その起源は極めて古く元明天皇の和銅二年社殿を創建すと。往古より田村大社定水大明神又は一宮大明神とも稱し朝野の崇敬淺からず。仁明天皇の嘉祥二年以後屢神階を授けられ清和天皇の貞觀三年二月には宮社に列せられた。延喜の制名神大社で讀岐國の一宮たりしが、明治四年國幣中社に列せられ、爾來皇室、國家の有事の際は勅使の御差遣あり。





法然寺迎尊堂



佛生山法然寺



一宮國幣中社 田村神社



田村神社御旅所

大正十一年十一月 聖宮殿下大詔習御統監の爲め行啓せらるるや同月十六日勅井侍従を御差遣になつた。同御社の東殿の床下には深淵あり板を以て之を蔽ひ古くより神祕を傳へていま窺ひ知ることを得ないが、往昔は領内に水旱ある時は領主、奉行必ず先づ同神社に祈願をしたと云ふ。同社の建築物は東殿、本殿、幣殿、拜殿、神饌殿、神門、神庫、末社、兼盛供養社、同宇都伎社、同磯島社等が重なるものである。末社中兼盛供養社は主神として中央に少名毘古那神を祀り左右に大年神、大水上神、宮原神を配祀し疾病治癒の靈驗妙顯を以て聞え、他府縣よりの祈願奉賽者踵を接してゐる。靈驗奇蹟の實例は枚舉に遑もなく、最右の一例に左の如きものがある。

香川郡川東村宮本眞一氏は昭和六年の夏より發病し、同年末には肺結核と診定さるゝに至つた、同氏の妻サイ女は醫師の絶望的宣告を受けるや最早神佛の加護によるの外なしと決意し、毎朝一里餘の田舎路を兼盛供養神社に日参すること一ヶ年に及んだ時に、その至誠神に通じて夫君の重患は次第に薄紙を剥ぐが如く全快に赴き、昭和七年の秋夫婦揃うて御参りも出來得る程に健康回復し、一家を擧げて神徳を讃へてゐると云ふ。なほ神社境内附近には夫々由緒深き舊蹟があるがその主なるものは花泉、袂井、休石、天降等である。同神社の例祭は毎年十月八日、初夏祭は五月八日神輿の渡御があるが、最近竣工した御旅所は九百五十二坪の面積を有し、周圍には土塼を築きその上に延

長百十一間の石造玉垣を廻らし、西方に花園白檜十二坪の神門駐車所を築造してゐる。鳥居は明神型の鐵筋コンクリート造、高さ二十七尺この外明神型燈籠、祭器具庫等あり制札場は伊勢神宮の古殿舎撤下材を以て造営したものであると。



### 瀧宮天満神社

歴史的情緒と水明の景勝を誇る綾歌郡瀧宮は夢平電線沿線又綾南に於ける中心邑であつて特に地の深谷美と「念佛師」を以つて知らるゝ瀧宮天満神社は有名である。同所はその昔瀧岐の國守菅原道真公に由緒最も深き境域にして、同神社の縁起も菅公の遺徳とこれを追慕する里人の敬仰を傳へて最も厚しきものがある。

菅原道真公が讃岐國司に任せられたのは大承第五十八代光孝天皇の仁和二年正月にして、同四年來任、別野南條郡（現在の綾歌郡地方）瀧宮の官舎に住み給ふことになつたが、在任五年間の治績は著しく顯はれ教育勸業その他百般に亘る仁政に領民悉く飽服する所となつたが仁和四年の夏大旱魃至り領民の悲嘆その極に達せる時、公深く之を憂へ附近の城山に登り一身を捧げて齋戒斷食して天神地祇に祈つた所、天感應して甘雨沛然と三晝夜降り續き、領民は歡喜の餘り手の舞ひ足の踏む所を知らず公の官舎に至り報恩謝徳の舞踏をしたといふ。これ今にして念佛師の遺徳である。後に菅公筑紫に於て薨去されるや曾て公の知遇を受けし瀧宮龍燈院綾川寺の住職空澄法師等の首唱にて村上天皇の天曆二年二月菅公御赴任中住み給ひし官舎の跡に一祠を創建し公の御装束並びに尊像を奉安し、公の冥福を祈り、併せて國家安康を禱るに至つた。これ瀧宮天満宮の起源である。斯くして時代と共に社

殿の修築あり。仁孝天皇の文政五年に改築せる本殿拜殿玉垣等を初め諸建築物は瀧岐隨一の輪奐の美を誇つたが、明治六年暴民の放火のため烏有に歸し、再建同廿一年一月七日落成したのが現在の社殿である。同社の主要なる寶物は公の御眞筆般若心經の一部、青蓮院宮尊眞親王御筆の天神の尊號、狩野水雪筆菅公祈雨眞影その他數十點である。なほ附近綾川の深谷美は瀧岐山水美中の特異的觀景をなしてゐる。

### 金藏寺と軍神乃木將軍

仲多度郡龍川村大字金藏寺に四國第七十六番の靈域と軍神乃木將軍の由緒に輝く名刹天臺宗寺門派難足山金倉寺がある。多度津、丸龜の兩港より一里の西南國道に沿ひ豫讃線金藏寺驛より東一丁交通の便よく賽客四時絶ゆる時がない。同寺は光仁天皇の寶龜五年和氣道善長者の開基、智證大師の御誕生所として知られてゐる。本尊は藥師如來（智證大師作）で初め道善寺と號したが醍醐天皇の延長六年地名に因んで金倉寺と改め、又寺城の海に近く三方山に面して迦葉尊者の入定し給ひし印度の難足山の大河に似たりとて難足山と號した當時は境内南北二里、東西一里餘に及び佛開敷十僧坊百三十二ヶ院の盛觀並ぶものなき大靈場であつたが、建武の争亂の際堂宇減少し水正文以來打ち續く兵亂に堂塔伽藍悉く烏有に歸し、僅かに兵火を免





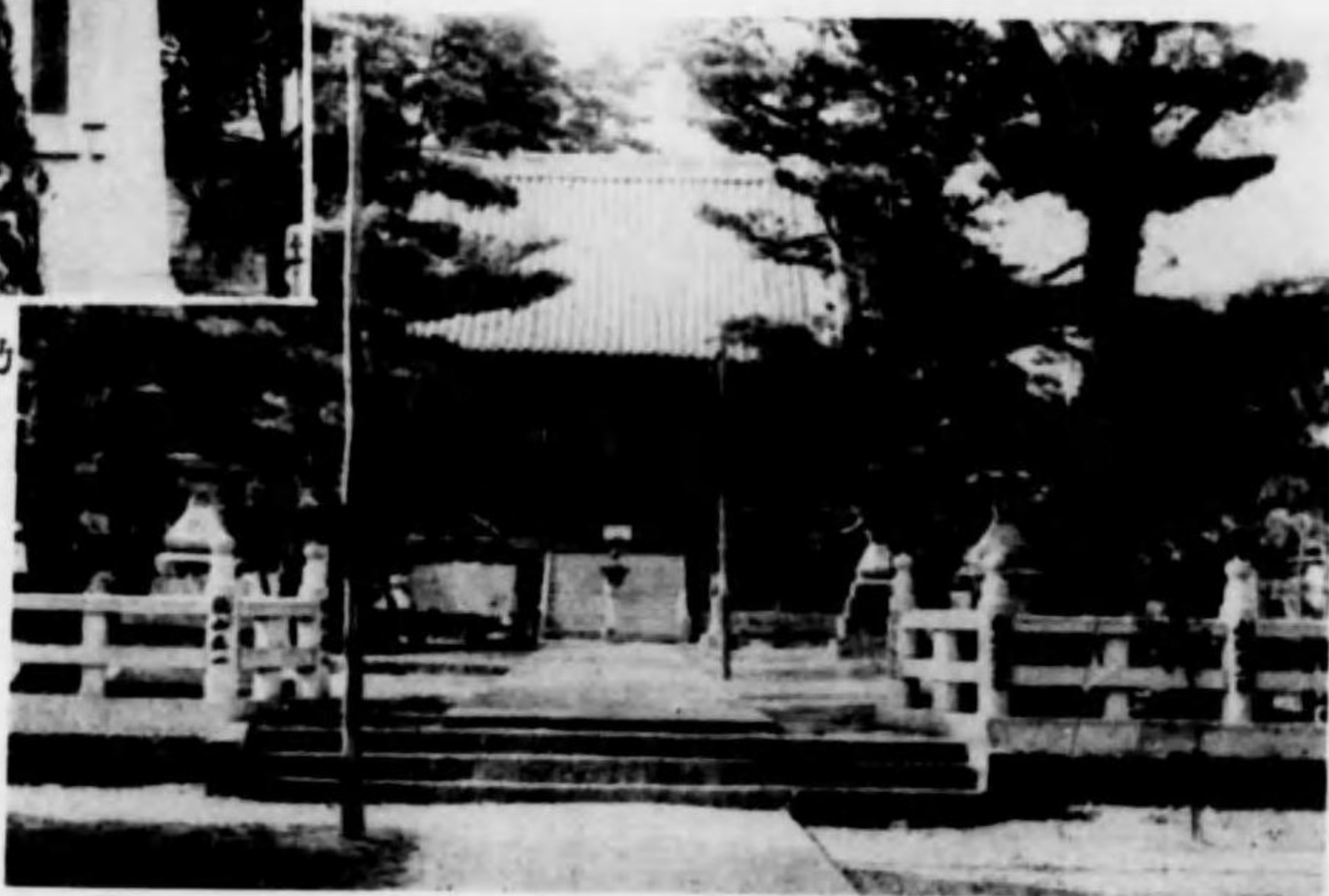
瀧宮天宮



天宮瀧物孔聖像



乃木將軍銅像



第四十七番金藏寺金堂

れし本館車賃を月割る草庵に安置して、百餘年の星霜を経た。斯くて寛永末年に至り松平頼重公讃岐の國守となるや。自ら大増主となり伽藍再興し寺額を寄附して、一郡一ヶ寺の祈禱所となし靈域再び此處に光を得て今日に及んでゐるが、更らに同寺の近代史に特記すべきは乃木將軍が第十一師團長として善通寺に在任の當時明治三十一年十月より三十四年五月まで此の寺内に起居されし事であらう。今に將軍遺愛の品を傳へて有りし日の軍神を偲ぶよすがとしてゐるが最近同境内に勇壯なる將軍の銅像愛馬の銅馬の建立成り賓客をして將軍遺慕の情を新らたならしめてゐる。



丸龜市と龜山公園

西讃丸龜市は人口三萬、讃岐海岸線の中央部に在り東は土器川を境として綾歌郡に隣接し、西は仲多度郡豊原村、南は同郡龍川村及び南村に接し、北方一帯は海波を隔て岡山縣下津井港に對し、沖に上眞島、下眞島の二小嶼浮び、本上四國連絡の最近距離を保つ要樞であつて、瀬戸其他の産業は夙に知らるこの地も三百年以前は一小寒村に過ぎなかつたが、慶長年間生駒氏支城を築造してより戸口漸増し山崎、京極二侯治府を此の地に定めてより一都會を成すに至つた。この城下町の歴古的名園龜山公園は市の南部に自然の要衝をなす丘陵龜山一帯を稱し、その頂上には天主閣普賢に高き名城普賢城がある。又北麓には歩兵第十二聯隊の兵營及び練兵場あり、一度同公園に立つて展望すれば全市街の雲の波濤を越へて、内海の瑠璃盤上に葺布する鳥光帆影一幅の水彩畫の如く、更らに遠望すれば山陽の連山煙霞のなかに指呼するを得。峠を南に轉すれば西讃の山川草野誠匪の如く展べられて空を劃する阿讃連峰以北の一大パノラマを脚下に集める景觀は將に丸龜市風景美の王座を爲すものである。

この好麗望景をなす普賢城は大正八年六月初めて城内の一部を開放してより各種設備を施して龜山公園と稱した。園内には角藩主京極朝敵及び土肥大伴村岡宗四郎の勳王を表彰する碑石に市上水道の配水池

がある、尙近時は保勝會その他の有志により講山櫻樹を栽植しその春日に於ける麗觀を讀へられて居る。

又同市には有名なる孝子田宮坊太部分付塔あり。遠近旅客の參詣甚だ多く。又京極侯の臣井上通女の墓もあつて、同女は幼にして聰敏經史に通じ有智子内親王以來の人なりと謂ふ。揮毫名畫の誇る藥村寺あり。御供所町には師弟の松とて眞光寺境内に傳言として老虬の蟠屈せしが如き老松、幾多の所以を傳へらる。尙市内にはこの外古蹟は數へて置ない。



明治天學行在所址碑



田宮坊太郎の墓

丸龜第二十聯隊通門



龜山公園の緑林



善通寺町と大本山善通寺

仲多度郡善通寺町は、仲多度の中部に在り人口一萬六千を算し、第十一節團の所在地として知らるゝと共に、町の西方縁樹鬱蒼たる香色の山麓には世を絶塵の徳城たる巨刹大本山善通寺がある。四國八十八ヶ所中第七十五番の札所にして、五岳山藏生院と號し弘法大師誕生の靈地として著名である。抑もこの寺は大同一二年眞言宗を弘すべき勅許を得た大師が曹代の唐僧を喜懐して、印度八ヶ帯場の土砂を請來してこれを敷き唐の青龍寺の輪奐を撰し、大同二年工を起し經營七ヶ年を経て弘化四年十八年の堂塔堊を連ねて竣工せし、眞言宗最初の伽藍にして大師の父善通卿の御名を寺號として善通寺と呼び、寺院の後方に重疊せる火上山、中山、我拜師山、華山、香色山の五岳を取つて山號した。また同所を屏風浦と呼ぶは往昔この山麓まで海水滲入して、五岳の投影宛然屏風の如き景観をなしたるに因るものである。斯くて讃岐の一隅に壯嚴の大寺院成るや皇室の御敬仰は殊に篤く、歴代の帝より度度か御諭旨を戴きつゝ時代は移り堂塔の修理、再建等あり、現在の金堂、常行堂、御影堂等は天文年間より漸次落成した。天保十年五重大堂焼失するや、元治元年再建に着手し明治十五年に至つて竣工し、今日に及び昭和六年三月大本山に昇格し、これと同時に初代善通寺派管長として、知徳備の大川郡豊水村豊田寺住職蓮生觀善大僧正衆望を擔つて就任し、由緒も深き大師發祥の靈地に法燈は愈々熾然と輝き増すに至つた。寺内の主なる堂塔林泉には常行堂、五重大塔大門石の五輪塔二基、金堂、積善功德塔、五所明神祠二殿、二大楯中門祖習院、石橋、仁王門、御影堂、御影の池、茶堂、護摩堂、本坊

寶寶館等にして、寶寶館には弘法大師御作吉祥天一宇一佛、法華經、行基菩薩の御作地藏尊の國寶を初め珍寶什器を納めてゐる。

多度津町と桃陵公園

仲多度郡の西北端に位置し、波靜かなる筆の海に望む東西十餘町南北十數町の多度津町は古來本土と四國とを結ぶ交通の衝を占め殊に金毘羅詣りの諸船旅人を吞吐する事にその地名を得たと謂ふ。其昔讃岐唯一の良港として同町は諸商賈盛を極めて、地方は培はれた。同町の西方、多度津山は貞和年間香川刑部大輔景則が堅城を築きしもので今なほ城山と呼ばれ桃陵公園もこゝにある。又町の北東海邊に丸龜城主京極若狭守の庶弟高通の陣屋の趾がある。城山の西麓海岸は屏風ヶ浦海岸寺と呼び弘法大師御誕生、御修行の舊蹟と知られる。而してこれ等勝地の近代的面面を代表する桃陵公園は御大典記念事業として多度津山の展望秀絶の地を選び十一節團工兵隊の力援開拓してなれる公園にして、その山麓より道路は垣々紙の如きドライブウェイをなし園内の歩道緩やかにして雲雀ヶ丘、紅楓、觀月臺、觀魚臺、松韻莊城ヶ崎臥龍松、祖廟社、望岳頂、南嶺、等の秀地は眺望絶佳。また全園に亘つて櫻桃露瀝を植栽し、草花園を配し萬壽池を掘り水草を植え更らに櫻樹と萩と梅林を中心に椿を併植して四季と共に千變萬化する。その風情は近代造園術の粹といふべく、斯くて旅情は愈々濃やかなるものがある。園内の廣場に袂をかゝけて立つ老婆の銅像は國史に輝く「一太郎やーい」是を叫ぶかめ女の雄々しき姿は今も尙將又永遠に祖國を愛の象徴として居然たるものあり、同公園の一儼風こそ爲して居る。



四國七十五番屏風ヶ浦大本山善通寺金堂



善通寺大門及五重塔

「一太郎やーい」の  
園田かめ女の銅像



明能成る多度津桃陵公園



國幣中社金刀比羅宮

「こんびら船々追手に帆かけてしゆらしゆらしゆら」その神徳四海に瀾く年々賽客三百万人に達する國幣中社金刀比羅宮は仲多摩郡琴平山に鎮座しその麓に人口七千の神宮琴平町を育て終極鎮るが如き賽客群のため關西橋有の宏大楯比せる旅館と土産店を集中してゐる。金刀比羅宮は神宮琴平神社と稱し大物主大神を祀つたのが、後醍醐天皇の御宇寛元元年勅して祭儀を修めしめ給ひ。更に一條天皇詔して社殿を修築し給ふた。また保元の亂の際には崇徳上皇諸般に遷らせ給ふや深く同神社を尊信され宸翰を納め給ひ親しく御参詣あらせられし等の御縁由も深く、朝御の翌年永高元年七月御相殿に齎き奉り此處に御威靈定して海内に著れるに至り、歴代の皇室の尊信は幾度か御代奉を遣はされ勅御所に或ひは御祈禱仰出された。斯くして皇宮移り明治元年七月特に宮號を仰せ出され金刀比羅宮と改稱になり。同四年六月國幣小社に加列、同十八年國幣中社に階格、今日に及んでゐる。同宮の毎年十月九、十、十一日の大祭は天下無比にして八少女舞、大和舞の奉奏、奉幣使参向、神樂夜御あり。夜をこめて山中、山麓不夜城と化しその壯麗至紙に盡し難いものがある。

に至る。宮司琴城氏の歌に「春風の上よとばかりの音つれも許さぬ程の花の眞盛り」とある如く、春風騎馬たる頃ともなれば櫻引く紅梅は賽客の歸途を忘れしめる様に同宮には古來珍奇なる種々の寶物を藏しこれが保管の方全を司する爲明治三十八年七月御苑鑑圖に寶物館を建設し社寶を陳列一般の鑑覽にも供してゐる。此處に保管せる主要寶物は先づ國寶に指定されてゐるものに國山懸筆の紙本墨畫瀟布及び山水三十三枚。竹林七賢圖十六枚、紙本墨畫遊唐圖二十四枚、紙本墨畫福鶴圖十七枚、絹本著色辨財天十五童子像一幅がある。その他貝石不動（房州平郡府天神山浦の砂中より出現せしもの記相添）植髮三尊彌陀（中將齋師作）藥師如來（智證大師の作）不動明王木像（弘法大師作）鈴五鈴（智證大師御所持）その他化像花畫佛器畫等數多の社寶を藏してゐる。

因みに同宮の神職は左の諸氏である。

宮司	琴城光熙
權官	久世章業
主典	宮内辰二
同	井上功
同	細井丑太



堂本宮羅比刀金るつ爾も原靈殿神



社旭のそ



同境内の博物館



琴平山の景容



### 観音寺町と琴弾公園

西濃の名邑にして近時激刺たる町勢を以つて躍進を續けて居る観音寺町は人口一萬七千餘人、戸口三千五百五十餘戸を擁し財田川の下流有明の濱を抱く町内九區と並の伊吹島より成り、水産、工業品、絹紡、煉瓦の産地として有名である。而も同町をして更に名譽あらしむるは豫讃線観音寺驛より北方十五町にして至る勝地琴弾公園で同園は観音寺町を貫流してゐる財田川を挟みて街衢を穿ち琴弾山と有明濱の二大景観を集めてなれる山紫水明を以て明証せる周圍約一里の公園である。琴弾山は金山採掘に包まれそこに密生せる約一萬五千本の小松は所謂小傘松として大正三年天然記念物に指定された。樹身最高一丈三尺より最低三尺三寸の奇松群である。山頂には琴弾神社鎮座まします。社記によると大正三年秋八月西の方より雲氣騰騰として日月の光を見ざること三日諸人はあやしみ海濱を見れば船中に琴を弾する老翁あり、梧桐權化の僧日證といふ者何所の人やと問ふ答へて曰「朕は應神帝なり(中略)其の御船を山の上に曳上げて宮殿を造り琴と船を廟中に納て永く爾現の重跡とし琴弾八幡宮と仰き奉る云々とある。有明濱には浴日館、共榮館、動物舎等を設置し附近には天狗松、象が鼻岩龍石等の奇岩がある。而も皓々たる白砂上に描き出された寛永通寶の古銭形の奇観は蓋し南海橋有の眺望と云ふべきであらう。

而して同公園は現町長の巖父西山茂登彦氏が維新前丸龜大庄屋大官心得役勤務中拂下げになつたが、同氏はこれを固辭して大衆に捧げ現町長西山彰氏は岳父の意志を繼ぎ多年保府會長として自然公園としての審美保全に努力してゐる。

観音寺町興昌寺境内に俳人山崎宗鑑爰に居りしと云ふ一夜庵がある宗鑑は江州の人。初め支那彌三郎範重と稱し足利將軍義尚に仕へてゐたが、その後後難髪して尼ヶ崎に隠れ、後山崎に住して連歌を能くしたが、晩年西國に行脚して歸途観音寺に到り舊知の興昌寺の僧梅谷を尋ね享祿の初年寺内の北方小高き所に草庵を結び而も訪客を遇するに一夜以上を過さしめず、その壁に題して「上は去に中は日暮し下は夜まで一夜泊りは下々の下の客」と記し一夜と名付けた。興昌寺には宗鑑所持銘の古瓦硯その他の遺物を藏してゐる。

### 名刹観音寺

三豐郡観音寺町の名に負ふ古刹観音寺は四國八十八ヶ所中第六十九番の霊場にして日々の賓客跡を絶たず。靈氣一山に漲るを覺える。同寺は人皇第四十四代元正天皇の養老六年行基菩薩の開基する所、その後平城天皇の大同年中弘法大師四國巡化の途次同寺に詣らせ給ひ自ら本地佛阿彌陀如来畫像を御染筆あり。また本尊觀世音を彫刻し給ひ此處に観音寺を建立し琴弾八幡宮を四國第六十八番観音寺を第六十九番



の霊場となし給ふた。而も當時の堂塔は東西金堂及び中本堂の制を南都興福寺の建築にならひ西金堂には丈六薬師如来及び十二神將中本堂には聖観世音及び四天王東金堂には彌勒菩薩を祀り大同二年三月二十一日一山の遺靈悉く成り爾來附近一帯の地を観音寺の邑と稱するに至つた。

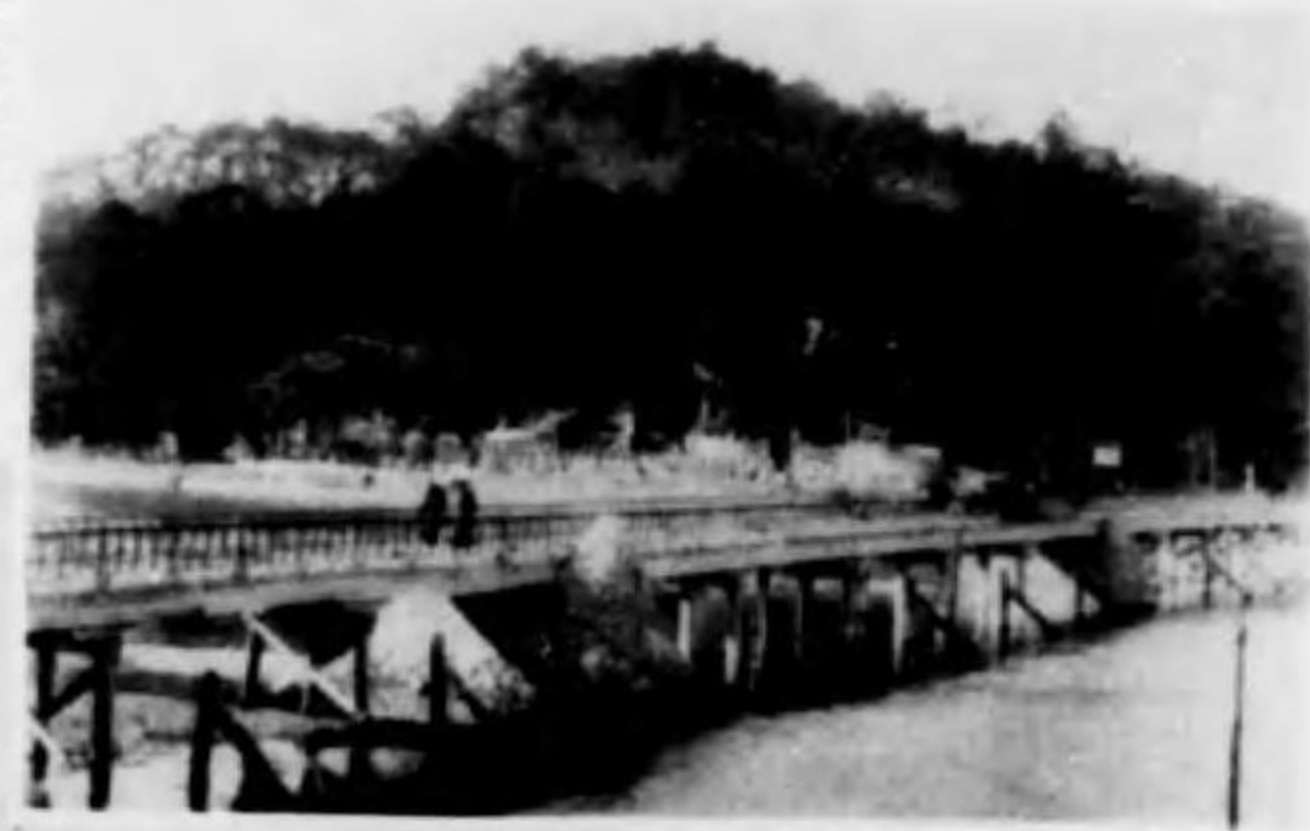
斯くて朝野の尊崇を集めつゝ時代は移り明治維新に至り神佛判然の際琴彈八幡の本地佛を西金堂に遷座して四國六十八番札所となし、一山二個所の霊場を擁することゝなつた。  
同寺の什物中國寶に指定されてゐるものは琴彈山繪巻起不動尊、弁加羅童子青多加童子琴彈八幡本地佛、阿彌陀如来、薬師如来、釋尊涅槃像でその他數十の珍寶を傳へてゐる。



四國第六十八番琴彈本堂



堂本寺音觀 番九十六第國四



琴彈公園  
三架橋



觀音寺琴彈公園より同町を望む



### 小豆島神懸山

内海の浪枕靜かに聖島小豆郡草野町下村の船首に到るれば北を一里に天下の奇跡神懸山がある。この明境は東西二里南北約半里に亘る秀麗にして古來文人墨客達により讚揚、釣鐘流花溪或ひは寒霞溪の別稱もある。傳ふる所によると應神天皇の二十二年秋九月朔、天皇漢路に暫し轉じて吉備に幸し小豆島に遊び慈に登山し給ひしが、峻峻登攀するに難く乃ち釣鐘を岩角に懸けて山頂に達し給ひしより讚揚の名ありと云ふ。全山の地質は花崗岩、其の基礎をなして火山岩これに被覆し大氣水觸の作用により蜂蟻奇絶怪秀絶松杉雜樹その間を點綴して、清水消々とその中を縫うて流るゝあり、一步は一景を呈し表十二景裏八景の景観の如きは最も深山の妙を極めてゐる。而して春花夏綠秋葉冬雪何れも任なりと雖も晩秋の副補遠眺透明の時を以て最も賞せられてゐる。山腹には神懸山名勝碑の碑あり。明治三十年一月三日山頂の碩學中桐徳吉氏の撰文を刻み、また山麓四望頂には猿蓑の碑あり。安政三年桐石水大橋子朝等の首唱により當時來遊中の俳人可大に騙して蕉翁の名吟「初しぐれ猿も小蓑をはしけなり」の句を書せしめて刻んだものである。

山頂の四方指は一名御前ヶ丸と呼ぶこの島第二の高峰にして海拔二千五百六十尺、その第一が星ヶ城で海拔二千七百尺兩山ともに神懸を

中に挟んだ峰巒きでこの星ヶ城は興國元年備前の豪族佐々木信胤居城を築き諸國の志士を募つて遙るかに南朝に應じたる古蹟である。その山腹には奇峰清瀧あり大洞窟を以て知られてゐる。

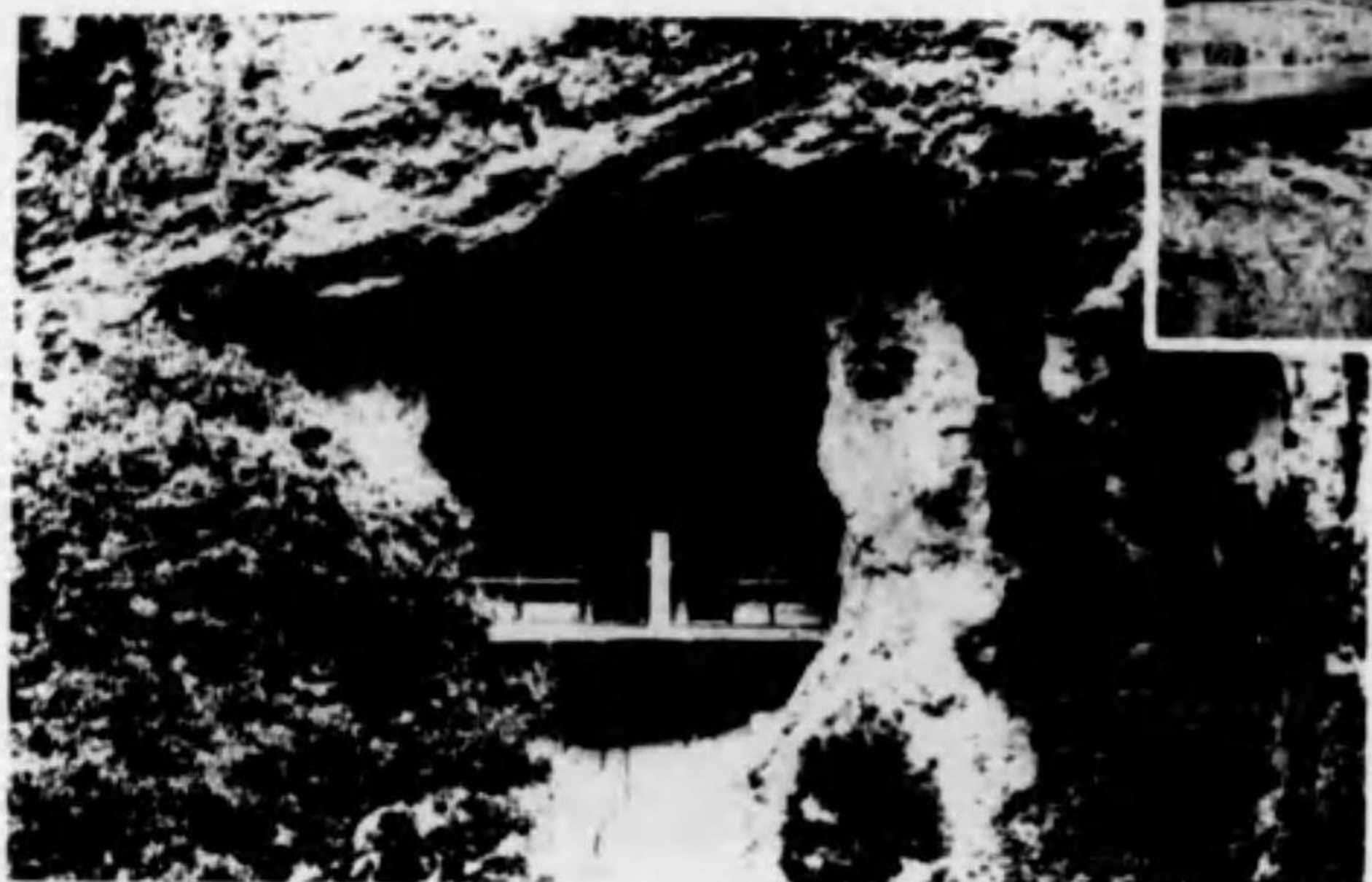
四方指山の絶頂に登れば眺望瀾然と開けて東は淡路島、鳴門の海峡、西は瀬戸内海、南は瀬戸内海、北は讃岐の諸島を一望することが出来る。

なほ神懸を中心とする名勝に坂手村の洞雲山、土庄町の神島、三都村の花詩波、西村のオリブ園等があり。洞雲山は櫻樹と洞窟と雲城を以て知られ、神島は青松白砂の名海水浴場、花詩波は大小二ヶの岩奥の脚下空洞をなし大は孤城の如く小は獅子に似て岩壁突兀として奇觀盡ざるを以て知られてゐる。

尙この地邊を控して瀬戸内海海上公園の重要區域に指定され視聽を鬼めて居る。



寒霞溪十二景ノ二  
紅雲亭



寒霞溪景の大洞



同景景の松茸岩



同上その十二景四望頂



## 本縣財界の長老鎌田勝太郎氏と事業

噫「近時の坂出」その近代的姿は日廻るしくも新興産業都市グレート坂出市形成を一途に躍進又躍進眞に激濁たる生彩の發展振を示して洵に雄々しい展景であるその全容は實に經濟的生産の強靱性を把握して日に月に旭昇の繁榮を誇りつゝ、



更に高遠の理想と飛躍の第一階梯たる内海屈指の港灣修築工事も殆んど完成し續いて上水道、臨港道路等凡ゆる社會施設産業施設の完備實現も又目捷にあるは蓋し多幸の展望でなくてはならない。

あるの觀にして。

今や坂出は町ならざる町として人口二萬を遙に突破し

殊に又同町一般商人の著しく進取的にして常に活眼大局に着想せる特異は夙に朝鮮、臺灣、滿洲、北海道等新地との商取引股盛を極め近くは經濟問題として政論高議の焦點をなせる弗買の如き同町一部商人は盛に與り出動せりと事の理非は暫く措き其尖端的商行爲と激濁性は等しく同町並に商人の青年心理の俊敏さを想はせ其面目躍如たる所であらねばならぬ。斯くの如く熱と異彩に富んだ現代坂出町も今を去る四十年前は恐らく戸數三百餘戸等の城砦なく野風徒らに寥々たりし一濱村に過ぎなかつた。こゝに想倒せば如何に開發建設の人爲又偉大なりと謂はざるを得ない。この坂出の近代的發展の裏に町の大勢を爰に誘導し隆興の基調を創造等内外に異常な貢獻を施せる人即ち鎌田勝太郎氏に負ふ所大なるを知らなければならぬ今同町民の全部は同氏を目して新興坂出の父としその人格徳望を讃仰措かざるなきは蓋し當然にして、以下聊か同氏の片影を描き如何に氏が社會人として高貴な觀念の下に國家社會に奉仕貢獻せるか其艱苦の跡を訪ね見よう。



夫れ氏の前半世は郷黨少壯の感激發奮を促し今往きつゝ、あ  
る後半世は須らく總ての人々に銘すべき人生の理想道を展し  
て居るものとはするであらう。氏は文久二年正月廿日讃岐阿  
野郡宇坂出の舊家鎌田家に生れ、醬油醸造を業とする温衣の  
裡に育まれたが、天稟の叡智は年少早くも其片鱗を現はし且  
長するに従つて社會の風潮を逸早く洞察し各般の事象に對し  
て常に人の及ばざる一雙眼を持して居た。即ち明治十九年廿  
才の時私立濟々學館を坂出に建設し、青年子弟の薰陶に當つ  
た。當時氏は讃岐に中等教育施設なきを痛嘆し獨力創始せし  
所であつて、その氣魄すでに現代遊事逸樂薄志弱行の徒輩の  
よく愧死に値する勇奮であらう。

かくて同學館は明治廿六年高松中學創設さるゝまで八ヶ年  
間本縣教育の中心機關として縣教育史の一頁を燦然と彩り今  
もなほ鎌田圖書館の南側に建立された記念碑はその輝く遺蹟  
を語つてゐる所である。

濟々學館を建設して世の認識を高めた青年鎌田氏は明治二  
十一年愛媛縣より分縣香川縣制の實施さるゝに及び衆望を荷  
つて本縣第一期縣會議員に選出された次で廿五年第二期當選  
と同時に議長の要職におされ時に氏は白面廿六歳の少壯にし  
て然も大任を擔はしめらるゝ身の英器こそ以つて窺知するに

足るところである。政界に進出した氏は一方事業界にも一大  
雄飛を馳せ明治二十四年中讃宇多津に鹽田會社を創立鹽田六  
十餘町歩の新築開墾を企圖した。即ち氏が實業方面進出の第  
一步である。元來坂出は藩政時代久米榮左衛門氏によつて鹽  
田業は夙に發祥の歴史あり然るに業績やゝもすれば遅々たる  
の狀にして、ひそかに慨嘆の氏は卒先時流に投じ會社組織を  
以て一意鹽田事業の發達改良を圖つた。爾來氏の經營方法に  
左配して族々鹽田會社の創設を見、現況の如き盛大を見るに  
至つた。かくて鹽田事業の成功を見た氏は廿七年地の産業發  
達を期すに金融機關の必要かくべからざることを思ひ有志と  
語らひ坂出銀行設立を劃し創成するや自ら頭取となつて金融  
機關の利用展勢に努め其後間もなく氏は代議士に押され始め  
て我國中央政界に驥足を伸ばすに至つた。又明治廿九年氏は  
我國事業界經濟界を達觀して紡績業の前途有望なるに慧眼を  
馳せ讃岐紡績株式會社を設立したが之縣下に於ける紡績業の  
嚆矢にして日下坂出町に偉容堂々たる倉紡坂出工場はその前  
身實に氏に倚りて創設された讃岐紡績に介す。この鹽田、紡績  
の二大事業は氏にとつて千鈞不拔大成の楔子であり實に本縣  
事業界に於ける晴天の霹靂であつた。かくして氏の事業に對

するインスピレイションは人格と共に彌々回熟を加へ、實業  
界に歩一步牢固たる地位を築いて行つた。同時に又政治方面  
にあつても卅年代議士を辭すや直に多額納稅議員として貴族  
院に席し爾來大正十四年まで二十八年間議員として誇々の高  
論を立てしは周知にして就中かの加藤高明内閣第四十九議會  
に於ける氏の貴族院改革論は一世の卓説として巖然當頂を射  
すの感ありこの餘韻を間もなく斷然議員を辭し政界を引退し  
た。斯の如く氏はその出所進退に於て常に異風世の意表に出  
たがその歩行は駿足俊敏である。なほ氏はこれより先明治三  
十七年日露の風雲將に急を告げんとするや炯眼常人の企劃し  
能はざる遠大の理想を朝鮮に馳せ縣下有力者を糾合して朝鮮  
實業株式會社を創立、これも自ら社長に就任し日韓融合の大  
旗も雄々しく海外興業に先鞭長驅したこの一舉こそ邦人にし  
て彼地開拓の最初の斧鉞であり、然も創業當時は幾多の受難  
累々にして迫害狼籍いたらざるなく一時は多額の投資と努力  
も一抹の妖雲に閉されるの觀もあり、しかし鎌田氏並に關係  
者一同の意氣は幾多困難の荆棘をきりひらき春秋三十年經て  
今日全羅南道一帶廣袤たる四千餘町歩の耕地には數千名の鮮  
人を使役して眞に桃源の地として米作に従事しつゝあり。こ

の國家的事業については創立當時總督府に於ても大いに共鳴  
し特殊の便宜も與へられたのである。素より同會社は氏が畢  
生の大事業として今尙老軀を挺して社務を總攬し日鮮一体の  
高貴なる使命に努力しつゝ、一方食糧問題解決に直接の貢獻を  
してゐる次第である、斯く對内外に活躍せる氏は明治四十年  
南滿洲鐵道株式會社の創立委員に任命されたのである。この  
外氏の關係せし事業に朝鮮興業、滿洲興業、南洋殖産、日米  
信託、日英醸造朝鮮殖拓、東京郊外土地株式、朝鮮鐵道、東  
洋生命保險その他著名なる諸會社の新設經營にも參劃し我が  
國實業界の俊髦として截然たる手腕を揮つた。更に縣下にあ  
つても大正十年本縣唯一の讃岐貯蓄銀行を又十五年讃岐信託  
を創設、銀行の合同等金融と保全機關を統整し、その他四國  
水力、高松百十四銀行等各種會社に關係する等、本縣經濟界  
の御者として君臨今日に及び又夙に縣下文教方面にも心を碎  
き、明治卅四年縣教育會長卅六年には縣育英會理事長に就任  
何れも沈滞せる縣下教育界の改革に努めた。斯の如く氏の卓  
越せる玲瓏玉の如き人格と手腕徳望は掉さす所可ならざるな  
く未踏の地に偉大なる功績をかゝげ他而其後に來るもの即ち  
社會的救濟事業としては世に薄倖の子弟教育にも多額の資財



を投じ大正七年坂出町に鐘田共済會を設け十一年圖書館を創設し、文化施設を通じて弘く大衆の智徳啓發に資せる等眞に氏の一投手一投足は地方産業開發は素より國家的見地に立脚し以て人類共存共榮の高貴なる精神に最後の殉道を求めて邁進する所は常に現實匡救たるのみならず人として完成の權化とも謂ふべきであらう。されば國家は氏を遇するに眞に勳三等に叙し昭和三年十一月御大典に際しても社會事業功勞者として藍綬褒章を下賜、其功勞に酬ひた尙又氏は先年來より深く佛教を修行し東京郊外井の頭公園附近に巨資を投じて般若

道場を設立し敬虔なる宗教的心境に安心立命の本義を體して奉仕に勵を刻みつゝ精進を持続しその雅懷徳望をして事に當つて至誠堅實よく積みよく散すの信條を持すところ高風清月の一大人格は彌が上にも縣民の尊崇敬慕を集め輝く徳は實業文教社會の各方面に燦然たるあり彩光は後人をして必然肅條として襟を正さしむる氏がその偉なる青年時代の精力を善用して今日を大成し今の老境にも天祐は愈々不滅の生氣を感受して矍鑠壯者を凌ぐ氏の存在こそ正に典型的實業家であり日本縣至寶の人材とはなす。

## 四國水力電氣と景山會長の功績

現時科學文明を表徴して絶大なる偉力を國民生活の上に發揮せるは蓋し電氣であらう實に二十世紀文明のモンスターとしてその驚異的跳躍は僅々六十餘年の短日月産業に將亦吾人の日常生活に必須缺ぐべからざる偉大なる利器として發達普及し巨歩を運んだものである。この電氣萬能の現代に於て絶へず豊富なる電力を提供し香川縣を中心に四國三縣に渉る各

種産業の開發に多大の貢獻を爲せるはこれ西讃多度津町に本社をもつ四國水力電氣株式會社であらう。今や同社は本邦屈指の電業會社として年次の業績を誇つて居る。しかもその過去半世紀に纏綿たる沿革を展望しては實に隔世の感や深くこゝに會社の經營の苦心衷情又察するに餘りある所である。

そもく四國水力の發祥は三十餘年前に發した即ち明治三十年西讃の有力者近藤秀太郎外十一氏の發起によつて當時多度津、丸龜、琴平間を貫通せる讃岐鐵道株式會社の沿線の



景山社長



高橋專務

地に電燈點燈を畫し創立された資本金十二萬圓の西讃電氣株式會社こそ現時二千三百餘萬圓の大資本を擁し縣下第一の事業會社として繁榮を誇る四國水力電氣株式會社の前身である、かく

て創業の時には必然苦難の伴ふ夫れ比々皆然る所にして就中電氣事業の如きは最も受難滋く迫が遠大なる理想のもとに出

發せし西讃電氣株式會社もあたら時運に遠くめぐまれず、萎微不振を極むること三年餘明治卅三年社名を讃岐電氣株式會社と改稱すると同時に更新の意氣も華々しく銳意社業の進展を劃した。この混沌たる幾多の迂餘曲折を経緯して辛ふじて明治三十六年二月待望久しかりし金藏寺發電所の工事完成を告げ、先づ多度津に試燈し次で丸龜方面に試燈の結果意外の好成績を得愈々七月三十日營業第一歩の生聲を擧ぐるに至つたのである。これ實に劃時代的企業にして本縣事業史に燦たる一大記録すべき快事たりし事は謂ふまでもない。この當時は社長増田穰三氏、常務取締役東條正平氏社務を執掌し發電出力六十キロワット點燈數四百八十三個これ今日を誇る四國水力創業當初の實勢であつて、現況に對比して月釐の差こそ餘りに大ではある。然して營業第一期の成績は結局五千六百餘圓の缺損を來し、社運の前途暗澹たるものあり其後の經營にも依然曙光を望むに至らず苦心の業績を續けつゝ明治三十七年日露戰役に際會した。かくて天下の事業界は一齊に活氣を帯び、同社も亦飛躍を企劃して善通寺、琴平方面に進出し、點燈も一躍二千餘個に及びしが遺憾ながら業績はこれに比例せず經常費の膨張には依



然缺損の窮状を脱しなかつた。爰に於て同社幹部は大英斷起死回生を目して明治四十年資本金十二萬圓を三萬六千圓に減資し、同時に社長として當時縣下事業界に令名噴々たる現取締役會長景山甚右衛門氏を推し、一路魁生の壯圖を邁進したのである。これ景山氏が四水電氣に直接關與の第一歩にして且同社として特記すべき紀念時とは爲すであらう。

減資斷行後堅實にして進取的なる景山社長の毅然たる營業方針は、社業漸次隆盛に轉向し更に明敏果敢の商策として資本金三萬六千圓を十五萬圓に増資した、次で四十一年再び五萬圓を増加して資本金二十萬圓となし、同時に發電設備と點燈獎勵に献身的努力を致せばこの激濁さは同年末如實に三千五百餘圓の純益を現し、創立以來十ヶ年無配當繼續の同社も爰に始めて配當の喜悅を喫し一陽來福明朗さを觸手したのである。斯くて元氣百倍躍進の氣運に向つた同社は當時我國電業界の趨勢として從來の火力發電から水力發電に轉遷しつゝありこれを察知した同社亦當然水力企業を劃して地域を水量豊富な四國の巨川吉野川の上流三繩に選定以て出力二千キロワット計劃下に理想的發電所建設を期した。然し一方工事籌整には巨費を要すべく故にさきの資本金二十萬圓を一躍

百二十萬圓に増資、更に社名を四國水力電氣株式會社と改稱し氣宇既に全四國を呑むの概を示した。而も次いで躍氣勃々たる同社景山社長はその深遠なる發意に四十四年三月本邦電業界の飛將福澤桃介氏を社長に聘して自らと交代し陣容を一新と共に社内に清新の氣宇を注入した。かくて同社の大事業三繩發電所建設を着工、難工一年六ヶ月大正元年十月これを完成し、同月十日最初の水力發電供給を開始の運びに至つた素より三繩發電所の完成は發展途上の同社をして千鈞の礎石を成築せしは勿論爰に逸すべからざるは景山氏の偉大なる成案と功績にして爰には氏が往年代議士在任中既に本縣が工業地帯として自然に恵まれ且將來の工業は必然電氣力に頼るの外なきを切に痛感し秘かに水電事業の發達せる北陸東北地方を視察して業況を詳さに察知するや本事業の有望且緊要なるを自信して上記三繩發電所建設を劃したものである、以來順風滿帆一路洋々たる碧海に針路を求めた同社は社運いよ／＼隆盛を來し威風堂々四隣を壓して大正二年辻町水力電氣の合併を端緒に同年六月香川水力電氣を買収し更に大正五年六月高松瓦斯株式會社を合併して瓦斯供給事業を兼營し越へて大正五年九月には特筆すべき資本金一百万圓の東讃電軌株式會

社と合併四水第二次躍進の重要機構を整へた現時同社の經營する四水屋島遊覽電車である其後同軌道は昭和三年三月時代の要求に鑑み公園築港間を複線とし同時に新式大型ボギー車を運轉尙屋島グラウンド建設房前海水浴場開設等文化的設備を整へ今や遊覽都市高松の重要な交通機關に任じて居ることの如くして大正六年當時福澤社長は中央電業界の要務繁忙を加へ爲に同社を辭任するや同年六月景山氏は再び社長に就任經營の局に當つた縣下電業界の先覺者たる景山社長の經營方針は益々同社の聲望を高め既設の金藏寺辻町三繩の總計三千七百キロの電力を以て尙不足を告ぐるに到り直に堀江發電所を建設し又大正九年丸龜瓦斯を合併尙も躍進して大正十三年祖谷川の上流出合に第二水力發電所設置を劃したが不幸同年十二月景山社長は不慮の眼疾に社長辭任の止むなきに至れば急遽取締役寒川恒貞氏を後任社長に推輓既定の出合發電所完成に直進した大正十五年同發電所を完成し同社は日進月歩隆々として恰も無人の曠野を測歩する如くであるこの間西讃電氣高松電燈大川電燈の各株式會社を合併その目覚ましき飛躍は駭々乎として今日二千三百餘萬の大資本を擁する豪華燦然たる四水王國を形成するに至つたのである。

去りながら記して茲に至れば何人も現取締役會長景山甚右衛門氏の過去半世紀に亘る終始一貫社業に盡瘁せる讃仰すべき不撓不屈の偉大なる功績をして實に此豪華は大半氏の驚嘆すべき獻身的努力に負ふ所なるを知らなければならぬ然も氏は獨り電業界に偉功を致せるのみならず記すべきは四國鐵道運輸の開發に先驅者たるの貢獻である即ち明治十九年氏は京阪地方の交通文化に接するや直に鐵道企業を計畫した然るに時は利せずして有志の贊同少なく正に挫折の危地に立つたが信念に燃ゆる氏は幾多の艱苦を踏破して遂に明治二十二年資本金三十萬圓の讃岐鐵道株式會社を創立し丸龜多度津琴平間を開通して地方文化に鐵道運輸の新機軸を劃したこれ即ち四國隨一鐵道交通事業の嚆矢にして然も創業振はず氣息掩々の苦境を忍びつゝ二十五年當時の社長三木彌吉氏逝去後遂に推されて社長に就き氏は銳意社運の進展に努力し二十七年一割配當の社益を得その後業績漸次盛大を來すに至り日清戰後には戰勝の景氣を驅つて長驅高松延長を劃し遂に明治三十年これも完成して資本金一百五十萬圓の堂々たる鐵道會社を定礎した其後明治三十五年時代の要求により山陽鐵道と合併次で國鐵に買収されたが現今國鐵四國循環鐵道はその起源實に四



十二年前の讃岐鐵道に發せる双葉の香を追憶せざるを得ないかくて鐵道經營から電氣事業に變轉の氏は更に至難なる電業經營に實踐躬行よく社員を統制しその人格は濃厚に朝氣を藏し事業に處する確固不拔の迫力は幾多受難の險線を突破して文化の沃野を開拓社業は進展して搖ぎなき基幹を樹立せしのみか現時七十七才の老軀を取締役會長として三度社業の統營に當つて居るが失明の今日活眼以て尙遙かに本縣産業の發展を思ひ意氣壯者を凌ぎ尙今後十年間の健在を自ら祈りつゝこの間氏が縣民への最後の置土産をとほ。其心事の貴き且雄大なる事よ世に二眼の人徒らに多しと雖も眞に活眼の士跡きを覺ゆるの時冷水三斗を感じざるものなきや斯く崇敬の念禁ずる能はざる氏を以て縣下事業界の一大恩人とし信望洪洽たるも亦當然と謂はなければならぬ。

かく縣下事業界の長老を會長に推戴せる多幸なる同社をして前途更に繁榮を祝福すべきは現時四水王國を會長と共に双肩に擔ひ一心同體活躍日尙足らざる専務取締役高橋正忠氏の赫然たる存在にして氏は三豊郡粟井村の出身丸龜中學東京帝大卒業後逡信省電氣局を振出しに數次郵便局長を歴任その後電氣事業視察のため歐米出張を命ぜられ歸朝間もなく電氣局

長に勅任爾來昭和四年七月まで本邦電氣界の總本山電氣局長として敏腕を揮ひ同年四水の懇望もだし難く官界を轉じて郷里四水専務取締役として樞機に參畫して今日に及んで居る氏は専務就任以來時代の趨向を洞察し一意業務の刷新を企圖其信念とする所は會長景山氏と共に電力の大衆化を標識し且共存共榮の趣旨に則り需要者との關係を一層密接不離ならしむべく全幅の蘊奥を傾注しつゝあり今や氏は同社の中樞人物として廣く内外の信望を集め固熟にして該博なる經綸手腕を着々實行に移し獻身不斷の努力を続け社會的獨專事業の本旨完済に邁進しつゝある顧みるに創業當時僅々千燈未滿の微々たりし同社が創立四十七年の今日資本二千三百餘萬圓従業員八百餘名點燈數四十萬二千三百六十一燈供給電力二萬四千キロワット高松觀音寺に出張所を設置し配電區域も亦二市百九箇町村に及ぶ名實共本邦屈指の電業會社を示現尙も一步將來の飛躍と幸運を理想しては新事業として徳島一字に九千キロワットの第三發電所建設計劃あり又新居濱に本據を有する住友電氣と合理的電力交換を約し更に西讃瓦斯事業の統一發展として琴平普通寺金藏寺に瓦斯施設をする等何れも顯然たる業容にしてその内容外觀は共に縣下事業界に最大の存在でなけ

ればならぬこれをして今や同社は資本の九割を縣人に於て所有しその廣茫且盤石の配電區域は全國稀に見る社務經濟機構の環境を既成しひたすら社會大衆の福利増進と地方産業開發を使命に邁進して居る因に同社現重役は左記の通り

取締役會長 景山甚右衛門 取締役 合田房太郎  
 専務取締役 高橋 正忠 同 寒川 恒貞

取締役	福澤 駒吉	監査役	鎌田勝太郎
同	大西虎之介	同	武田 謙
同	鎌田 榮	同	鹽田忠左衛門
同	風間八左衛門	同	飯田 憑

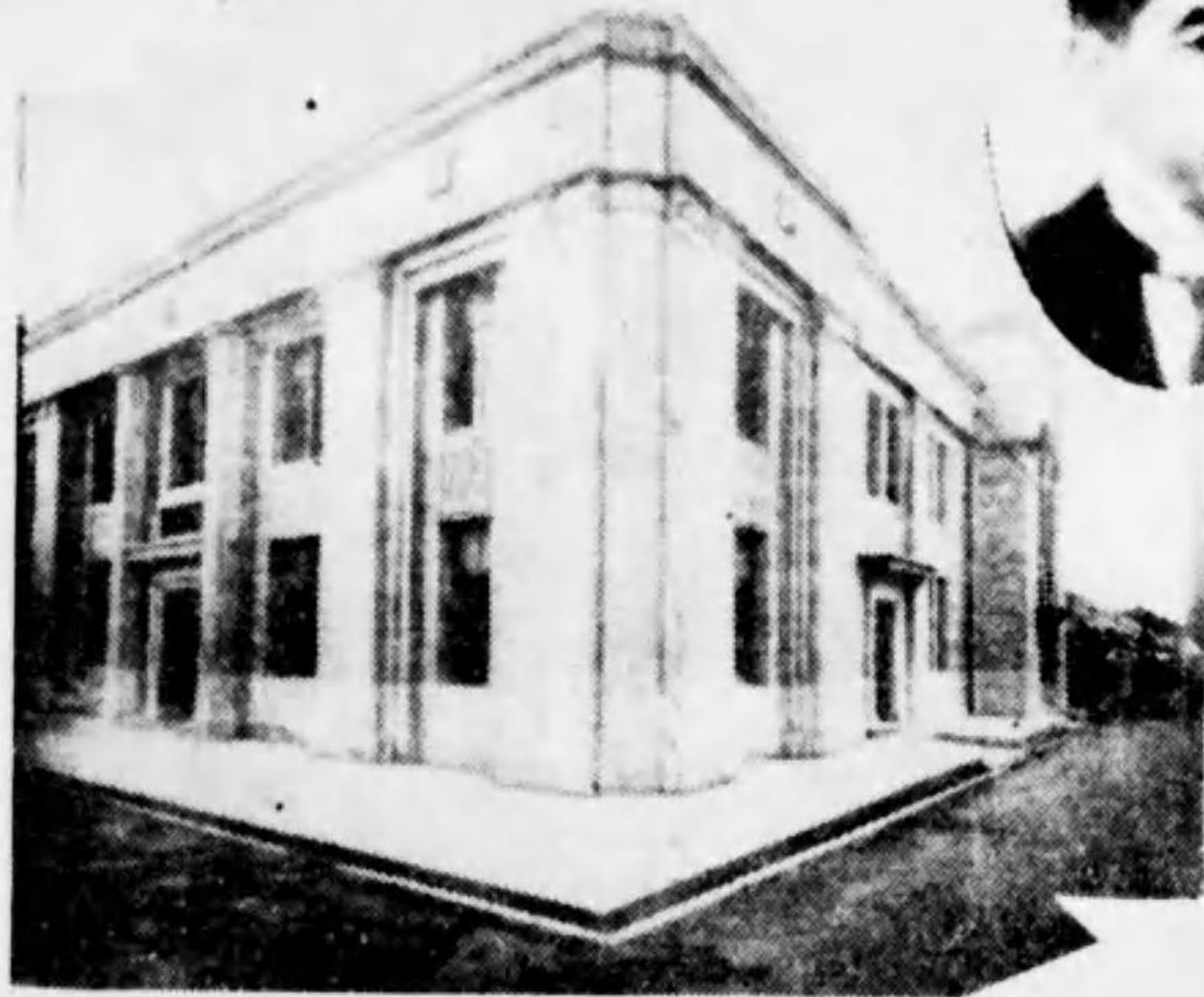
## 本縣金融界の王城高松百十四銀行

本縣八十萬縣民の金融的動脈の傳統を把握してこれが産業に將亦商工業の重要機關として財務的健全機能發揮し赫々たる業容を誇れるは即ち株式會社高松百十四銀行であらう。同行の創立は遠く明治初年に發し十一年廢藩後舊藩士松本貫四郎、福家清太郎、鎌田房次、井上三造、片山高義、森崎延造、谷口誠績の諸氏主唱して縣下大衆の福利を目標に同年十一月一日國立銀行條例に則る第百十四銀行と稱し資本金五萬圓を以て現地丸龜町に創立された。

これ同行の濫觴であり縣下銀行業の始祖である。初代頭取には鎌田房次氏就任、勿論當時は世人は未だ金融機關の理解とぼしく従つて業務遅々たるの狀態にして、翌十二年七月爲替取扱ひを開始するや俄然その妙味は一般民衆をして漸く銀行業に對する興味と信賴を致さしめ預金も漸増を見るに至つた越へて十三年一月二十三日資本金四萬圓を増加して九萬圓と爲し爰に同行の前途にも一つの光明を確認された。かくて第二段の躍進を遂げた同行は漸時世運の興隆と共に



一般市民の利用益々多きを加へ且明治十六年七月一日には國庫事務取扱ひを命ぜられると同時に日本銀行代理店を兼營して



一躍縣下財界の權威たるを認めしめ、爾來歩一步順調なる發

展を辿つた其後中央諸政漸く整ひ日本全土興國の氣運隆々たる廿二年七月一日には更に六萬圓を増資し總資本金十五萬圓とし。正に同行は旭昇の勢ひにあり。三十一年十月六日國立銀行條例廢止と共に同行は組織を變更し純然たる株式會社として民間金融機關を自負直進し。かくて更に明治三十三年六月三十日高松貯蓄銀行を合併して資本金六十三萬圓とはなつたがなほ風潮に乗じて大正二年四月二十六日大川銀行と合併して百十三萬圓同年十二月十五日宇多津銀行と合して三百十五萬圓、同年六月一日高松商業銀行と合して三百五十萬圓、同年十二月十七日東讃銀行と合併して三百九十萬圓越へて十三年三月卅日には縣下金融史上に輝かしきエボツクメイキングを印した高松銀行との解休合同を敢行し資本金一千二百六十二萬圓を擁する名實共に縣下金融界の覇者として偉容を誇るに至つた。茲に特記すべきは高松銀行の業況である。當時百十四銀行は専務取締役に豪の者井上耕作氏あり高松銀行には現常務取締役宮武、鹽田の俊雄あり、互に斯界の爭鬪を競つた。元來同行は維新直後高松糖業大會社にその端を發し明治二十八年組織を改め資本金二十萬圓の高松銀行として金融界に驥足を伸した時の頭取都崎秀太郎氏は當時縣下

會議長に擧げられ又高松商工會議所會頭の要位にも坐して縣下商工業發展の爲東奔西走眞に實力の將として任じ、更に之に配する常務取締役宮武恒造、鹽田伊三郎兩氏又舊高松銀行時代より金融界に馳驅すること永年何れも緻密なる計數的頭腦とそして究めた經驗の徳は獨り同行の主役的存在たるのみならず、縣下金融界の權威者として洽く尊敬と信賴を博してゐる。この兩氏の外つらなる重役何れも本縣經濟界の主腦を網羅し人材の壯觀は縣下金融界を支配統制の一大偉觀にしてその先賢が残せる敬すべき遺業高松百十四銀行は更に現任重役の賢明と相俟つて將來愈々繁榮し本縣最大の本店銀行たる權威に於て縣下産業發展のために絶大なる幸慶を手向ては居る。尙同行現重役は左の如くである。

專務取締役	中村新太郎
常務取締役	宮武恒造
同	鹽田伊三郎
同	品川隆
同	井戸文四郎
同	今井傳太郎
同	下津一
同	大津虎介
同	北村之吉
同	都發太
同	鎌田勝太郎
同	相談役

事業界の逸材にして都崎發太郎氏の嚴父に當る氏の健實なる經營は期せずして信用を高め業績益々發展し三十七年資本金四十萬圓に増資し更に合併直前には百五十萬圓の資本金を擁する一權威でもあつた。然し地域を同じふして徒らに對立競争の結果は預金の爭奪より惹いて地方産業發展を阻害する大なるを憂へ、爰に兩者は崇高なる共存共榮の信念に基き果斷解消し百十四銀行として時代的陣容を以つて縣下産業開發に金融總帥の重大使命遂行に當つた。即ち現在地方銀行として全國屈指の大銀行に連り不時俗説の波瀾苦曲と不況の痛苦を嘗めつゝかつて本縣金融界にさの異狀を見せしめざる業容は如何に同行の一般大衆的信賴を集め基礎の鞏固を語るものでなければならぬ。されば今同行は資本金一千二百六十二萬圓拂込額三百十五萬五千圓、預金總額三千二十九萬一千餘圓貸出一千九百餘萬圓、常に資金の運用に細心の注意を拂ひ所々價證券九百五十九萬八千餘圓現金預け金四百五十五萬三千餘圓を有し此準備の充實こそ絶大なる信用を博する所以である。かくの如き縣下金融界の重鎮たる同行をして更に重味を添ふるは錚々たる縣下一流の人材を網羅せる華々しい重役諸氏の列立である。専務取締役中村新太郎氏は帝大法科出身さきに井上氏の後を襲ひ就任しその圓熟の才氣は前に高松市



# 高松電軌と北村苟吉氏

現時完成された本縣交通網中の電軌界にあつて歴史と實績而して内容の堅實を誇るは蓋し高松電氣軌道株式會社であらう。その雄たる同社が東讃電車たる名稱のもとに過去二十幾年地方産業の開發と交通文化に營々として致せる偉大なる貢獻は現實傑として同軌道全線九哩、大川、木田の十ヶ町村に見る恵れの發展が炯々これを實證する所である。



同軌道全線九哩、大川、木田の十ヶ町村に見る恵れの發展が炯々これを實證する所である。

以下同社の現況滾々として流れ行く順境の由來とそれを發する源泉人爲の周心と努力獻替を明かにして我が事業界に一大實行の要訣たらしめんとする。

回顧するに同社の創業は約二十四年前即ち明治四十二年であつて、それより先中部木田、大川を絡ねて交通機關に恵ま

れず徒らに廣漠未開の状態にあつて同地方人士は文明の利器交通機關を希求するの情や切なるものがあつた。當時高松電燈社長北村氏はこの状態を見て早くも遺憾とし率先電氣軌道を敷設し貨客の運輸を以て多年翹望して熄まぬ同地方を文化的に匡出すべしと秘に研究を續けた。而してこの結果氏は思ふ。同地方産業開發は必然この機關に頼るべきの外なく、且事緊急なりとし斷然何物かを決意した。即ち熟慮の理想は遂に一步を移し直にその筋に軌道敷設許可を申請すると同時に先賢諸士(特に秘す)の意見を徴した。豈計らんやローマも一朝に成らず、知名の諸士は多く氏の雄圖を無謀として半ば嘲笑を以つて迎へた。然るに今は胸中期する所あり再考の餘地だに殘さざる氏なれば更に進むべき針は時計の如く分秒を前進にきざむのである。

而して異常な決心と抜くべからざる自信と熱は天なる哉至難と謂ひし當時の鐵道院總裁仙石貢氏を感動せしめ遂に許可の指令を受け爰に無謀視された鐵扉は半ば開かれ一筋の光明

は熱血の氏が胸裡に流れた、しかも本計畫を繞る楚歌の裡に援軍萬馬にも値せしは即ち氏が常に畏敬し且高松市民の尊敬する小田知周氏の友情と鞭撻であつた。小田氏は人も知るさきの高松名市長として一世に謳はれ大高松市建設の礎石をきづいた大人にして同氏の協力を得た北村氏は歩一歩高松電氣軌道株式會社創立に向ひ歩み續けて漸く明治四十二年三月資本金三十萬圓の會社は創立し同時に小田知周氏は社長に就任し、その後は一意軌道完成に急いだ。素より工事其他は擧げて電燈社長北村氏がその研究精通を以て全部を督しある時は自ら北海道に渡り極めて經濟的に枕木を購入し又は當時私鐵に稀な四十五ポンドレールを神戸カーネギー支店長の好意によつて破格の供給さる等なほその運搬の如きは沿線町村青年團員が殆ど奉仕的に懸聲勇ましく曳き行き又當時線路用地買収に際しても全線一致の協定を以て一件収用法の適用すらく至極順調圓滿裡に進捗したが當時その任にありし滋江嘉太郎氏の如き顧みて感慨無量なりと謂ふが如何に氏が最少限度實に全國無類と稱する資本豫算を以て熱よく他を動かし、之を達成せしか苦心の程は思ひ半にある。かくして明治四十五年五月工事は目出度く竣成し、地方文化開發の先驅として

沿線十ヶ町村民の感激と欽悻裡に同電車の創業第一歩は輝かしく印せられた。元々同社の創業たる共存共榮を目標として社益を外に至誠地方文化と産業開發の崇高なる使命に邁進したれば漸次營業は革まり社内は充實を加へついに今日の如く比類なき内容の堅實を來したのである。而して創業二十年後の現時にあつては乗客百萬人貨物又遞増して眞に赫々たる業況を示して居る前小田社長歿後北村氏は社長に就任小田榮次氏營業部長として經營しつゝあるが更に事業の堅實性に着眼して電燈事業を兼營し沿線町村及隣接部落を開拓して目下一萬五千燈を算してゐる。之を觀て僅に三十萬圓の資本金を以つてする同社が延長九哩の電軌と一萬五千の電燈の經營は他を見て優に百萬圓以上の資質營業量たる所にして爰には創業以來二十年間重役は報酬を求むるなく従業員又會社と共に榮ゆるの他いづれも薄給に甘んじ協力する高貴の結晶にしてその眞價は現實同社の配當並に株價に如實示現して居るこれ等素より同社幹部の功績であるが特に北村氏に至つては建設より成育に全力を注ぎ人格高潔、手腕識見の高邁に因るところにして氏が常に新舊思想を究め縣下政界にあつても獻替を過らず、又携はる各種事業をも堅實第一主義を信條として經濟



の本格を諒知し常時「會社の株金は株主よりの絶体的借金なればよく之を心して株價の保護成長に努めなければならぬ」と謂ふは銘すべく斯の如き重役幹部あれば同社は景不景に關せず毎期償却に償却を以つて内容を充實し不況を尻目に一刻配當を敢行して多數株主に酬ひて居るのである。

されば先年鐵道當局は同社の内容適良なりとて検査を行つたとの快よき、ナンセンス物語りだにあつた。北村氏の如き政治と經濟の眞諦を極め將又積極消極緩急の配劑宜しき士は實に完熟の人としその事業即ち高松電氣軌道株式會社の現勢とその將來の全使命を通じて眺くとも世の樂天的事業家共に

異常のショックと感激を與へ且氏を以つて本縣政界事業界の偉大なる指導者とは謂ふであらふ因に同社現在重役は左の通りである。

取締役社長	北村 苟 吉
取締役	西本 政次 郎
同	小田 榮次
同	廣瀬 凌太郎
監査役	中村 祐吉
同	加藤 謙吉
同	鎌田 連

### 本縣鹽業界の偉材加藤勘學氏

凡そ事業の經營に當つては其何業を問はず初期創業の受難は所詮免れないものであらう。即ちこの受難こそ事業の成否を決する試金石であり、之を打開し各々業務に正体眞實を掴み變通自在の妙要を把握するに於て其事業は既に成功の圈内

に入れりと謂ふべく普通成功性なき事業者は多く、この期間に於て收壞瓦解の緒を萌し收拾すべくもなく遂に挫折して再び起つ能はざる苦境と悲運に逢着するものである。況や現時の如き峻相と不況に際しては痛切にこの事を感じらる。され

ば創業の當初に於て周到彫心して事に従ひかくて掴み得た貴き自信こそその事業の成功性そのものであり且事業的免疫の礎石でもある。故に世の人事の關する總ての事業は須らく先づ以て貴き犠牲を交拂ふ事に於てのみ成功は訪れるであらうこの頗る高遠深長な犠牲の發動する所大にしては國威を宣揚し國勢の進展に資する事は勿論類關の業も既倒に覆すあれ



ば身を以て企劃せる一事が尙よく大衆の福祉に寄與して、偉大なる世益をもたらす等の好事例證は古今の巨人

徳士に依つて燦然幾多の實蹟は示されて居るのである、こゝに本縣の重要産業鹽業界に於て香川郡弦打村加藤鹽田の經營者加藤勘學氏の存在は餘りにも偉大である。その經營する弦打濱三十餘町歩の鹽田中約十町歩は明治二十五年の築造にかゝり明治十七年頃氏の先代これを着工したが幾多の災害に遭遇して遂に事業中止の所を明治二十五年頃若き英才の氏が

然として工事を進め一部を成し更に囚徒二百名を使役し一氣にこれを完成した。當時氏は佛生山に在り毎朝この區間をテックツでは刻苦この難工事を進捗せしめた。その努力は實に異常であり、完成後鹽業に興味を覺へた氏は更に斯業の研究を積み遂に明治四十年意を決して同鹽田の北側現新濱三十二町餘歩の鹽田築造を劃し着工三ヶ年にして完成この新舊兩鹽田と其他高松市宮脇濱並に沖松島所有鹽田等を併せて數十町歩の宏大なる鹽田を經營しなほ其後三豊郡に松崎沖鹽田株式會社を創設目下社長としてこれが經營の衝に當る外松田鹽田株式會社も社長として經營に當りつゝあるこの現況は正に本縣鹽業界の覇者たる實勢にあり、現に弦打鹽田のみを以ても年産五六百萬斤十數萬圓を計上する盛況にして、これが同地一帯に齎す事業的惠澤こそ至大である。

氏は常に一人一業の鐵則を堅く持し一意鹽業の外に視野を求めず只邁進するのみにして今日を築いた。しかも茲に特筆せざるべからざるは東讃鹽業界に對する絶大の貢獻であり又本縣産業組合界に寄與せる功績であつて、即ち大正四年東讃鹽業組合長に就任以來、斯業の發達擴充に意を用ひ、殊に最も經濟關係多き石炭の共同購入を主唱し實施しては多數石炭



商人の反對故障を蹴破し、剩つさへ常に數萬金の私資を流用して鹽業者の便宜一般經濟に資し時には自ら宇部炭坑、筑豊炭坑に出張直接商談を試みる等常に其取引は鹽業者の有利を専念して居る。大正七年同業組合を改組して東讃鹽業信用購買組合組織と同時に氏は組合長に推され今日に及んで居るが本来同組合は鹽業者のみの組合として稀な好績を示し、石炭の如きも年六七千萬斤を主として三菱三井、貝島、蘆生、と取引し絶大なる信用を以つて安價に仕入れ、組合員に供給しつゝある。また本縣産業組合聯合會の參與理事に推さるゝや、

## 琴平電鐵株式會社と其眞使命

今や瀬戸内海々上國立公園を展望して年々來遊する旅客は日に月に増加しつゝあるも何分財界未曾有の不況の爲未だ其數必ずしも多からず一朝景氣恢復の微見へんか蓋し思ひ半に過ぐるものあらん。この時此際に處し琴平電鐵が如何に其の本性を發揮するや刮目して待つべきのみ然らば此最も將來性に富む琴平電鐵は何人によりて建設せられたる乎。 多度津

町現四國水力電氣株式會社社長景山甚右衛門氏の發起により大正九年免許を得たるも財界の激變に遭ひ、暫時會社の創立を見合せ或ひは不幸暗より暗に流産するに非ずやとさへ按ぜられたるも右景山氏の委囑により一度現事務取締役大西虎之介氏起つて其の創業を引受くるや氏の慧眼必ずや財界の恢復近きに在りとなし、大正十二年末同志現常務取締役細溪宗次郎

産業組合法の精神を體してこれが健全なる發達を期し、成果は體てそれが利用階級の更生を意味する事に於て折角盡瘁して居る。兎角氏の觸るゝところ總て犠牲的奉仕的努力快刀斷麻の果敢を以て有終の美に邁進し爰には俯仰天地に愧じぬ高潔さがあり、然してその卓見高毅は恐らく現下斯界の一權威にして且本縣多額納稅者中優位の實力と共に本縣産組聯合會の偉材である尙叙上の貢獻に對して昭和七年四月二十五日第三十八回全國産業組合大會に産業功勞者として表彰された。

氏と協力して夙夜匪懈或は出でゝ有力者を説き資本を集め或は内に於て緻密複雑なる官廳への事務その他一切を統理しつゝ遂に大正十三年七月會社設立の創立總會を了し、次で事業經營の許可を得て大正十三年十二月設立の登記を完了し、此時年齢僅に三十五歳、白顔の青年なりとは何人か思はんや既にして會社設立せらるゝや廣く人材を天下に聚め十四年土地買収を了し、着工十五年十二月二十一日には栗林公園瀧宮間を開業越て昭和二年三月十五日琴平迄全通したこの。投下資本三百五十萬に垂んとする本事業は開業するや直に政府は國家的有要なる線路として地方鐵道補助法による補助を支給し其第一回検査に於て詳細を極めたる内容調査の上、今日全國の地方鐵道百七十餘社の平均一哩當り建設費二呎六吋にて十六七萬圓四呎八吋に於て二十四五萬圓を下らざるに同社が四呎八吋を三呎六吋分にて完了し而も一點非難すべき失當のものなしと感嘆の聲を洩したがこの一事を以て余事は類推足れりとする之れ一に大西氏が渾身の智を絞り勇を鼓し事業に専心されたるは勿論、寛嚴其宜敷を得たる統率振りには社内一致常に春風飄々たるものありて何れも其身命を擲つて努力したる賜に外ならざるものと謂はざるを得ない。

次で開通するや、琴電の名聲頓に揚り四國阪急の稱號を恣にし且同社の投じたる勝地紹介の第一石は次第に萬波を畫き今日勃然として起りつゝある讚岐宣傳は以て風を爲すに至れるは如何に同社が遊覽讚岐の眞髓を夙に觀破せるか一に大西氏の慧眼の至す所と爲さざるべからざる所である。既にして琴電完成のゝち氏は擧げられて屋島ケーブルの社長に推され四國水力の取締役に任ぜられた、之れ蓋し氏の人格より生じたる世の信任に外ならない。

今や事務大西氏は本縣選出貴族院議員としても活躍して居るがその琴平電鐵は觀光地讚岐の絶体的中樞機關として重要使命を果しつゝある。尙現在重役は左の通りである。

- 専務取締役 大西虎之介
- 常務取締役 細溪宗次郎
- 取締役 合田房太郎
- 同 熊田長造
- 同 川崎舍恒三
- 同 武田謙
- 同 中村實
- 同 武田亮太郎



監査役 加藤 謙吉  
 同 今井 傳太  
 同 三輪 繁太郎  
 同 中村 新太郎

相談役 景山 甚右衛門  
 同 鎌田 勝太郎  
 同 寒川 恒貞

## 健實を誇る高松製紙株式會社

本縣工業生産品中輝かしき歴史と且隆々として發展全國的名聲を博せるは實に機械製紙である。製紙は其製造の沿革手漉に始まり爾來幾多の變遷改良を製造の上に加へられて既に今日では高松市を中心に年産約三百萬圓に上るの驚異的進展ぶりを示して居る。此業界にあつて唯一の株式會社組織であり常に營業の堅實基礎の鞏固を以つて誇るは高松製紙株式會社であらう。同社は、大正六年北村苟吉、井上耕作、鎌田連、高宮喜平次、奥村五郎氏等が機械製紙の好望を見込み發起創立したに始まり、同年八月三日資本金十萬圓四分一の拂込を了し會社創立の手續を完了するや、當時宮脇町に於て古くから手漉紙製造に従事しつゝあつた、潮詰忠次郎氏經營工場の

一切を譲り受け、更に工場設備の改善を加へ現在工場の陣形を構へた一方會社の主腦部は斯界に令名高き北村氏を社長に又配するに理財の士鎌田連氏並に工務精通の潮詰氏を以て健實無比の幹部陣營を整へた。この遠觀敏明の陣容こそ創立直後に而した財界の好況、次に來た一般的不況の樂悲兩面を調理してさの遺憾もなく會社をして泰山の現況たらしめて居るその手腕統營は實に敬服に値するものがあり。更にこの間四十名の従業員を督して年産二十五萬圓の生産製紙を大阪方面へ、あるひは全國の商戰に馳驅する取締役營業部長岡田氏の英才着實又凡ならざるものがある。斯く順風の裡にその基礎をかためた同社はもと／＼一大家族的會社であつて創立當時

株主僅に十九名にして現在では株數二千株四十圓拂込二十名の株主には殆んど異動なく重役又毎期重任／＼を以て恪勤精勵を續け毎期の成績は平均八歩配當を繼續しつゝ餘裕綽々一方一萬餘圓の積立を擁すが如き如何に同社の内容充實せるかは凡そ推知するに足る所である。因に同社現在重役は左の通り。

取締役社長 北村 苟吉  
 常務取締役 鎌田 連  
 同 潮詰 忠次郎  
 取締役 山内 勝造  
 取締役 岡田 辰三郎  
 營業部長 松野 長五郎  
 監査役 小田 榮次  
 同

## 上枝貞一氏と其の丸高製紙工場

本縣殊に高松市を中心とする製紙界の進展は正にこれ幾何級數的と謂ひ得るこの活躍圈内にあつて信用と牢固たる礎石を築き、日に寸進尺歩の繁榮を以つて常に業界の先驅者たるは市内松島町丸高製紙所主上枝貞一氏その人で、經營する丸高製紙の三千坪工場の偉觀は正にその全貌を語つて居る。但し氏が今日ある決して偶然にはあらずして、其處には先代貞一氏の苦しみを厭はざる異常の努力と奮闘の結晶こそ今日の成功を招來して居るのである。本來先代貞一氏と製紙業は極

めて因縁深く明治三十年十五歳にして築地町の叔父上枝寅吉氏方に手漉製紙を見習ひ後神戸に出で兄高宮喜平次氏と共に新聞用紙の殘裁を利用して機械漉紙の製造販賣を開始して茲に意外の好績を收め其の後明治四十年兄と離れ、自分は中國四國の一手販賣を引うけて歸高して高宮支店を開業した。かくて刻苦經營の中に時代を觀る俊敏の氏は大正二年機械製紙を開始すべく決意しチツシユマン式連續ドライヤーを据付けこれに着手した。時は大正二年十一月であつて。本縣に於け



る機械製紙の始組である  
 斯く積極進取の營業方針を以て専ら直進した同氏は時代に魁け人を制し頗る順調なる成績を収めた。爰に於て兄高宮喜平次氏は斯業の更に將來性を想ひ爰に上枝氏と相謀つて資本金一萬七千五百圓の高松製紙合資會社を創設した。然るに大正十年ゴム工場を併設してその試運轉に際し惜くも高宮氏は機械に觸れて不慮の横死を遂げたのであるこの變災後上枝氏は遂に會社を解散し同時に全部を引受て同氏の個人經營に移した。現丸高製紙の



始流でこそある。  
 斯くて工場設備の改善を加へると共に能率増進を主眼とする斯界最初の電気電動機を据付け、超へて十三年更に新式ヤンキー式製紙機一臺を増設したが不幸にも八月三日乾燥機爆発し、約五萬圓の損害を蒙るに至つた。  
 この時に當つて氏は再び意を決し直に復舊工事に着手して大正十四年整然たる工場設備を完成し、同時に直徑九尺の第三號機を増設、四年更に最新製紙機一臺増設と共に一臺を豫備として目下三臺を以て晝夜兼行事業に従事し、現在年産額百萬圓に達し斷然斯界の雄として自他共に許すに至つたが、製品天狗製紙は品質又優秀各地一店主義の合理的販賣方法と相俟つて全国的に名聲を博して居る。尙同所の特筆すべきは勞資の協調で一切の業務を八田・山縣兩氏が擔任し、以下全員百二十名一糸亂れず常に能率の増進成績の向上を計り、一方工場主上枝氏又現下變態的不況に直面しては經營の合理化を以て先行し更に晝食の無料給與を、なほ諸規定を定めて慰安と優遇に努め工場を統る一團は常に春風駘蕩其處には階級を離れた温かい家族的の流露がある。  
 されば同工場は模範工場と推賞され又陸軍々需動員の指定

工場の重責と光榮を擔ふに至つた。斯くの如く年少より出でて幾多の狂亂浪濤の洗禮と厄災に身を鍛練し生産生存の眞理を培つた先代は頭腦の俊敏とその抱擁の雅量に於て今日の基礎を築き、且その所信斷行の勇こそ現實の進展を劃したが惜

## 栗林製紙所

天下の名園栗林公園の正門近くに構へた産業の衙門は中村友吉氏の經營する栗林製紙工場である。一見その工場の外觀よりしても如何に石橋を叩いて渡る堅實主義なるかは察知し得る所であつて、その事業今日の充實は勿論中村氏が正八年斯業創始以來把握せし堅實の二字、この信條こそよく今をあらしめては居る。氏は幼にして父業製紙原料商に従事し父の歿後これを経営してゐたが大正八年現工場さきの丸平製紙場の設備一切を買収してこの經營に當つた。これ氏が製紙界への發足にして、これとても多年製紙原料に關する体験を有し且斯業の將來にも興味を感ずればこそであつて、爾來氏一流の努力合理化經營に於て年と共に内容革り基礎は築かれたのである。

むらくこの大器に天は齡を假さず昭和八年二月急逝した。當主は直ちに先代を襲名この誇るべき生産の陣營父業製紙業を統營して活躍して居るが本年二十六歳の新進である。  
 今やその生産和紙は關西をはじめ滿鮮、臺灣に好評を博し發展してゐるが、尙薄口紙は別に愛媛縣西條に於て生産共の名聲を轟はれ、氏は昭和八年高松商工會議所議員に製紙業を代表して推された。



## 高松南部の功人鎌田長八郎氏と其錘

最近高松市南部栗林方面は數年前國鐵栗林驛設置を一轉機に誇るべき各種工業は勃然として興り、遂に高松市の重要工業地帯化するに至つた。然らば何が同地方の發展の素因か即ち爰に没すべからざる人爲の加減がある。これを希求する地方人士の協力と先覺的發動なかりせばその發展は望まれない。

南部開  
發に多  
大な貢  
献をな  
し近來  
出色の  
人材と



しては鎌田長八郎氏を指すであらう氏は

常に大局に配意し冷靜水の如く地方開發産業の隆興を専念してその地方と共に活る信念は如實栗林の力強き發展に與つて大なる力となり、且今日を形成せしめて居る。氏がその灼熱的公共觀念は向ふ所幾多重要問題を解決して異常の進境を示せるは世人周知の事實にしてかの栗林驛設置の如き全くその中心的活動に由るものである。氏は元來鑄物鐵工業を本務とし明治三十一年先代長八郎氏の歿後これを繼承した。先代長八郎氏は夙に鑄物業を修得その後専ら鑄物火鉢の製造に従事して居たが壯年四十歳にして惜しくも早逝した。爰に白面の一少年長八郎氏は齡未だに十七歳決然家業の經營に當つた。去りながらこの頃の氏は餘りにも若く加ふるに資本少ければ營業も振はず動もすれば生活そのものにも追れんとするや屢々あつた。然し一事が萬事不撓不屈の氏は汎ゆる不幸を身に集めつゝ吾と我がを鞭打ちながら日夜玉碎的奮闘を續ける事十五年、遂に大正三年歐洲戰亂の勃發さるゝや業界頓に活氣を呈し前途に一條の光明を認むるに至つた。

氏はこの時敢然積極方針に轉向躍進又躍進同時に營業の基礎は一日々と確立されて往く。爾來大戰の餘波と思はぬ好況に恵まれて隆々朝陽の如き業績にして殊に同所の専門製作とする度量衡用各種錘は質の優と器格の正確に於て全國を風靡し特に朝鮮總督府よりは唯一の指定を受けて居る。かくて賢實なる營業方針は不況と雖も巨歩を續け一時南洋にも進出したが更に滿洲に新販路を求め愈々躍進して居る。この如き産業の活風景は氏が青年時代より凡ゆる世の辛酸を體驗し身を斷つ思ひの中に氏が數人の長兄として常に舍弟等の心情を思考し父なき後の父とはなつて濶愛情理よく弟等を統合協力の賜に外ならない。兎角長子とか云ふ者には濶容の徳こそ養ふべき

## 畑尾鑄造所と其の鹽田釜

本縣鑄物製造業界に於いて赫々たる歴史の下に牢固として抜くべからざる歩地に安住するはそれ高松市松島町畑尾龍太氏經營の畑尾鑄造所である。

同所は今を去る明治の始め現在畑尾氏の祖父太三郎氏が東

ではあらう氏が今日その全従業員の福祉のために自家購買組合を組織し關係者職工に限つて一切の日用品を殆んど原價で供給するとか、其他各種の制度施設を整へ時代の事業家として先驅をなす。この如くしてその工場一團は模範工場として當局の表彰を受けた。なほ先きに世の信望を集めた氏は大正十一年擧げられて高松市會議員更に昭和五年商工會議所議員に當選其後感ずる所あつて之を辭したが八年再び當選した尙昭和六年教育勸語發給紀念日に際しては特に其の社會的功勞を表彰されたが今日高松市に於ける氏の存在は産業と政治の兩面に偉大な存在として謳はれて居る。

謙志度より高松に至り松島南浦現在の倉紡北側に居を構へ釣鐘及荒磯火鉢を専門に鑄物業を始めた。

其後畑尾太三郎氏歿し市兵衛氏其家業を繼承したが更に現在の畑尾龍太氏家業を總攬するに至り昭和三年現工場を落成





したのである。  
氏は性來寡言黙  
行の士であつて而  
も天賦の事業家肌  
に加へ時勢を觀る  
敏にして、かつて

明治四十年頃市内同業  
者間に於いて火鉢の亂  
賣を行ひ大に狼火を削  
つた氏は之を遺憾とし  
自ら製品を轉向すべく  
鋭意研究の結果遂に目  
下専門的に製作しつ



全國鹽田業者の間に好評噴々たる新案特許の鹽田釜を考案し  
たのである。  
斯くの如く自己事業に對して絶えず創造眼を以てする熱意  
と努力は業績彌が上にも向上進展を呼び確固たる地盤を築く  
のみにして。今や同所製作の鹽田釜はその特殊性に於て全く  
他の追隨を許さず着々未開の進境に獨歩盛に活躍しつゝあり  
さきには文字通り開闢以來の支那蒙古に輸出を試みた程であ  
る。この如きは國產獎勵の今日實に誇るべき一大快事とし畑  
尾氏の苦心努力その面目や躍如たる所である。この信念を把  
持して直往邁進する氏は未だ壯にしてその事業慾は果樹園の  
如く、未來の成果こそ期待され昭和四年以來選ばれて高松商  
工會議所議員に當選し擧げられて工業部部長の要務に就いて  
ゐるが昭和八年度の改選にも高位再選し衆望を蒐めて居る。

## 金物鑄物の宮本和太郎氏

高松市田町宮本芳太郎氏は早くより鑄物業の將來有望なる  
に着眼して先代多田丈之助氏等と協力し斯業の發展に盡瘁し  
た先覺的恩人であるが、目下は家業を當主和太郎氏に委ねて  
悠々自適老後を無上の悦樂にひたりつゝある。そも、宮本  
芳太郎氏の先代五郎氏は維新前高松藩の鐵砲方で。廢藩置縣



後金物商を始め明治十一年芳  
太郎氏これを繼ぐや新進氣鋭  
の芳太郎氏は自家に最も關係  
多き鑄物業を以つて地方産業  
開發に資すべく多田丈之助氏  
に助力し鑄岐火鉢を製作せし

めて阪神地方面に移出販賣したがこの結果意外の好評を博し  
先づ第一の成功を収めた。  
其後測らずも鑄岐火鉢に數等優秀な東京火鉢は出現し爲め  
に鑄岐火鉢は敢なく凌駕壓倒されて如何ともなし難い苦境に  
直面した茲に芳太郎氏はこの一大受難を打開すべく決意し同  
志と相謀つて遂に明治三十年八月資本金六千圓の鑄岐鑄物會

社を組織した。こゝに宮本氏は選ばれて社長となるや、爾來  
一意専心他の重壓下にある我が鑄物製品の聲價挽回と販路擴  
張に鋭意したのであ  
る。この結果幸ひに  
努力は酬ひられ社運  
と名聲は漸く進展の  
歩を辿るに至れば明  
治三十二年更に會社  
の資本を増加して九  
千圓としたのである  
が天なるかな命なる  
不幸にも三十四年火  
災の見舞ふ所となり  
工場其他一切を灰燼  
に歸せしめ致命的打  
撃を蒙つた。會社はさらに一同勇を鼓し三十六年それが再建  
を完成し捲土重來製造品の改良と販路の擴張に専念したれば





社業は順調を辿り歐州大戦時の如き同社製品は遠く支那方面までも輸出するの盛況を呈したが、その後財界變動その他の事情のために昭和二年遂に意義深き同會社は解散となつた。然し爰に知るべきは同社存立中市内鑄物業者に對する好刺激にして斯業今日の發展成長の裏に否定し難き貢獻のある事である。

斯かる微妙の作用の下にあつて個人宮本氏もあるひは栗林町に或は藤塚町に工場を建設して専ら機械、農具、家具類の

### 轡見鑄物鐵工所

今や縣下鑄物製造業界に君臨して堂々たる地歩を築けるものに高松市栗林町轡見鑄物鐵工場がある。而して同工場をして今日をあらしめた轡見芳太郎氏の過去に於ける不撓不屈の意力と精進こそ世にも敬して學ぶべき實訓と云ふべきであらう。

その休得体現の人芳太郎氏は今まさに五十歳の開熟境を迎へて事業的才腕精彩の盛時であるが、氏がその鑄物製造業界に一步を踏み入れたのは年齢未だ十五歳の少年であつた。練

鑄物製作に従事して着々と營業の基礎を確立し、明治四十年には東田町に六百坪の現工場を建設移轉して縣下一般の需要を満たすと共に廣く縣外各地に進出して本縣産業の爲めに氣を吐いて居る、當主和太郎氏は極めて圓滿、加ふるに時代を察し熟慮斷行の士である尙商工會議所議員に當選する事數次更に昭和五年三月高松市會議員に當選して、市政に貢獻し重きをなして居る。

譬の家は縁者鎌田長八郎氏經營の鑄物工場で此處に一見習職工として奮闘し先代長八郎氏指導下に熱火烈々たる鍛鍊体験を重ねたのである。十八歳の時の如き不慮にも作業中溶鑪の飛沫を浴びて遂に右眼を失明した。この時の如き家族及周囲の人々は斷然鑄物をよせと大の反對諫止する所はあつたが氏は斷乎としてこれしき事に屈して何かあらんと百日療養の後隻眼再び起つて業に就いたが遂に二十四歳にして獨立現在の轡見鑄物鐵工場を創設した。かくて當初は僅かに火鉢農具

類の微々たる製作に止りしものを、負けじ魂に熱と努力は不斷を以つて發展を劃し縣下鑄物業界に於て牢固たる現在の地位を獲得した。

その製品としては農具、器械、製紙用鑄物等その他に亘り異常なる活況を見せつゝ、目下長男武男君以下多數職工と共に更に將來への雄躍を續けて居る。

### 鶴尾清氏と重油發動機

今や四國の玄關、高松港頭の一角にハンマーの音も勇ましく整然たる威容を放つて不斷の活動を續けてゐる鶴尾清鐵工所の存在は、財界不況の今日業界の一大偉様として認識されてゐる。元より所主鶴尾清氏が十余年前、赤手空拳萬難を排して現工場を設置創業せし以來、幾多の受難に遭遇し、且洗禮にも他日を期して忍苦よく險を突破したフィルムの如き經路こそ今日他の追従を許さぬ盛況にある所以である。由來鶴尾一家は高松藩の士族にて清氏の祖父利吉郎清重氏は舊藩時代鐵砲鍛冶として仕へ、維新後現在の鹽上町に於て鐵工業に轉職するに至つた。祖父は性來頭腦密にして聰明發明創造に長し夙に明治三年頃苦心考案して電氣船を造り、更に之に改良を加へて蒸氣船を建造、高松神戸間を運航して稱讃を博し

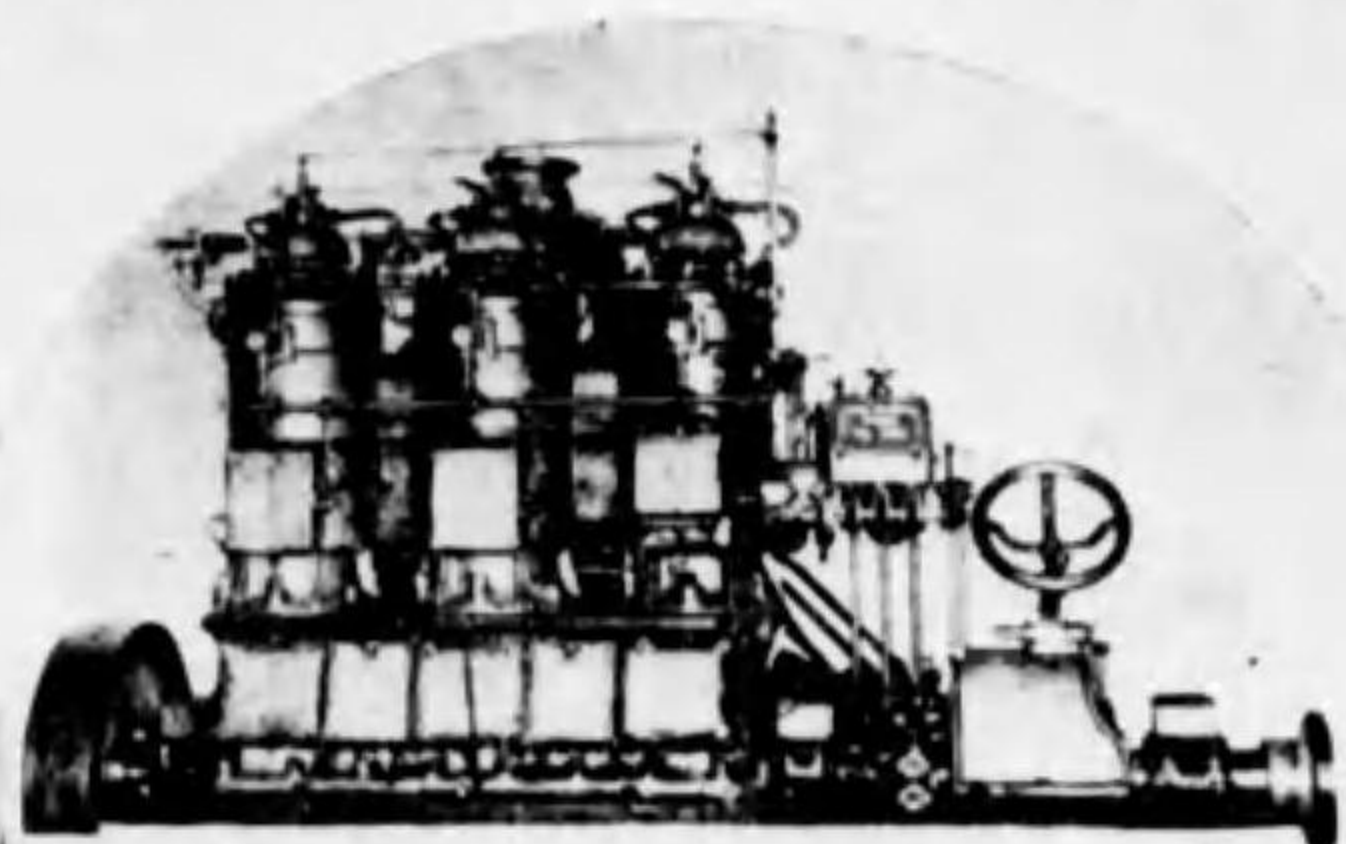
或はその當時神戸沖に沈没せし佛國軍艦の拂さげを受けて部分品により自ら船舶機關の研究をなすとか又世にも珍奇な電信機の發案公開する等凡そ世人の意表に出ざるなき傑士であつた。當時人は明珍某と共に高松の二傑と稱した。この天賦の多藝多能の英才も世に惜しまれつゝ、明治十八年六十三歳にて他界した。



その後鶴尾先代はいよ／＼



時代の進運を洞察して明治三十一年初めて石油發動機の製作を試みたが。これ本縣に於ける陸上内燃機製作の嚆矢であつて更に後年瓦斯發動機の製作にも成功し一躍斯界に勇者を馳せたかくて四十五年ドイツモンロー瓦斯發動機をも製作また時勢を達観した同氏は船舶發動機の將來有望なるに着目し大正九年十月同所の分身として現在の玉藻町鶴尾清鐵工所創設した。



同工場は經營者鶴尾清氏が永年本家鶴尾にあつて先代とも、に斯業の研究を積み固き自信と抱負に基いて計畫された理想的工場であつて氏が普く經驗發揮の道場でもあつた。然して

## 老舗池田屋吳服店

細溪宗次郎氏經營の池田屋吳服店が祖始六代春秋百四十年

糊眼紙背を徹する清氏は創業の受難とそれ以來の反動的經濟界の嶮難に處し一意職工奉仕の信念のもとに邁進しつゝ、外交にもなくして優に四國關西九州はもとより臺灣、朝鮮、北海道、カムチャツカに至る迄驥足を延す盛況である。これとても新鋭鶴尾鐵工所製作純國産無注水重油發動機の性能優秀にして價格低廉なるが故にして。

現今縣下を通じて業者多く製品又多しと雖も、およそ大馬力製作品の過半は同所の製作なりと斷じて敢て過言でない。然してその設備の壯大は五馬力乃至二百馬力發動機製作を完備して居る。

以上創立日尙淺き同所が驚異的この進展振りを見せるに至つた諸因は清氏が祖系の密にして常に研究的努力の人なると共に圓滿なる人格を所有し情理厚く、主と職工は一体となつて互に尊敬と信頼の念を以て不斷精進の賜と尙良妻ヒデ夫人の外交的あるひは事務的内助の功等に由る所であらう。

世の變轉を眺めつゝ獨り一片の汚點なく隆々進展の一途を辿

れるは以て奇とする所であらう。蓋し爰には人の求めて難き貴重な何物かを發見されなければならぬ。そも、同店は今を去る百四十年前享保の頃鼻祖細溪太四郎氏が藩主の許を得て南新町に吳服店を開業したに初まる當時は主として絹物販賣にして外に鹽屋町に某綿物店あり市内に於てはこの二軒に限られて居た。かくて吳服店として發足した同店は家紋のつけた印を俗化して屋號池田屋と稱し徐々に發展を劇した。次



で世は移り人も迭つて五代宗一氏が家業に就くに至れば賢母の譽れも高く且つ男勝りの女丈夫春女は氏を督して家業の發展に力を注いだ。この賢母に薰陶された宗一氏は商機

を見る敏にして且老練忠實なる番頭清兵衛と協力して一意發展に努めされば同店の信用と取引の殷盛は年と共に加はり顧客は文字通り門前市を爲す商況である。殊に新正月の初賣と舊正せいもん拂ひ、夏物見切り大賣出し等年中行事の如きは鶴鳴三時にして顧客雲集し笹切、落切れ等を奪ひ買ふのである。

時は明治二十二年頃にして宗一氏隆運の初潮である。斯の如くして當時に於ても年賣上げ三萬圓を越へ高松一吳服店の名を恣にした。かくて氏は他而高松商工界發展のために農工銀行、糖業會社等有力なる金融並に産業機關を創意し更に奉公の美事は年々多額の私財を公共團體に寄贈して惜しまず。

而も名利を追はず榮譽を求めず恬淡高潔その人格は一世の名望を擔はしめた。この社會的榮譽を完了した氏は信仰の念又篤く七十九歳の徳と齡を以て惜くも昭和六年七月五日逝去した現店主は六代目であつて、氏は同家中興の英器宗一氏の直嗣明治四十五年帝大法科出身本年四十七才温厚な紳商にして大正十三年以來市會議員に當選を続け現に市政に盡す傍ら商工會議所議員として商工界に盡瘁其他琴電、讃岐貯蓄、鹽之江電鐵等縣下事業會社の重役として活躍しつゝ。今や氏は高松政界實業界に於ける巨頭として嚴たる存在をなし、他方池田屋吳服店としては糊眼よく時代を洞察してさきに洋服部を新設縫職をして東京關根洋服部に習得せしめ裁縫の妙を以つて謳はれ、又店舗を鐵筋二百餘坪の堂々たる洋風に改築する等輝く歴史と時代色を調合して活躍令名を馳せて居る。



# 洋品店「クリヤ」

高松市あまた洋品雜貨店中群鶴の一鶴として確かな店であり確かな商品なりとの認識を得て居るところに栗屋洋品店がある。同店が今日他の追従を許さざる獨特の營業と牢固たる信用を培つた反面には努力で彩り正しく古哲運根鈍の範疇にある現店主安田美代造氏が小資以て今日の魁脊を致せる過去五



十幾年の峻路は茲に遇然の榮を招きしにあらざるは勿論にして氏は明治九年舊藩士勇三郎の長男として生れ明治十年頃より現住南新町に雜貨小賣業を営み帽子、マツチ、石油、ランプ、手拭、シャツ、股引等片々微たる田舎雜貨店の營業であつた。氏は女丈夫として智に長けた母フデ女の調育を受、長じて店業にたづさはるや先づ爛眼と太ッ腹異數の商人として同業者に一驚を吃せしめしは明治三十八年日露戰役に當り第十一師團御用達として乾坤一擲戰用

シヤツ四萬枚を請負つた一事である。これを機として氏は更には洋雜貨の前途有望に着目し茲に實弟勇記氏と協力大々的に店業の發展を策した時に氏は二十八歳、夜々營々夜に目を繼ぐたゆまざる努力と銳意店業の發展を期したれば數年成ならずして「クリヤ」の名聲を獲得するに至つた。

然して大正十二年現在の堂々たる店舗を新築斷然近代的經營に則る流行の尖端を歩み、所謂明るくして這入り易き確かな店の定評を以つて始終一貫顧客に十二分の信頼と満足と與へ徒らに廉價の美名に狗肉を賣る舊商業方策を排撃して専ら健實なる發展を期したこの眞摯なる氏の誠實はそれを反映して今日高松一流の洋品店として偉容を誇るに至つたのである。加ふるに氏の温厚は信望を集めて現に多額納稅者高松實業界の重鎮としてさきに商工會議所議員たる事二十數年繁忙の身を介せず副會頭に推され只管市商工業の發展に努力しつゝある。

# 高松冷蔵製氷株式會社

高松市内町高松冷蔵製氷株式會社は資本金三十萬圓拂込二十二萬圓を擁し目下食料品その他の冷蔵並に一日約七千貫の製氷を高松市及其附近に供給して生活文化に掉し多大の貢獻をなしつゝある。凡そ夏期に於ける食料品の貯蔵調節ほど至難を語るものはない。殊に鮮魚鶏卵果實野菜牛肉クズシ菓子等總て腐敗性の食品は冷蔵する事に於て完全な調節の目的を達し而して一般文化生活者の需要を満たし得るのであつて、近時生活の向上に基づくこの種施設の絶体的必要は農林當局の極力本事業を奨励助成に努むるを見て明かである。

同社の冷蔵装置は當時農林省の指導と嚴重なる検査を経た最新設備にして約三十坪の冷蔵室は盛夏常に二十五度内外の低温に調節され實に理想的装置を整へられ、加ふるに技術の熟練料金の低廉、又取扱ひ丁寧等は委託物に損傷を來たさしめず、かくて時代の要求する大衆的冷蔵機關の重要使命は完全にはたされて居る。さればさきの苦心に今は酬ひられて水産農産加工食料品其他の委託冷蔵は絶へず庫中に充滿の盛況

を呈して居るが尙同社の創立は大正十一年資本金十萬圓を以て現專務取締役中村新一郎氏其他の發起設立に係り以來經營その宜しきを得て社業日に進展しついで昭和四年十一月日東製氷高松工場を買収するに及び一躍斯界の覇を爲した。

素より創業當時の苦心經驗は想像に許さぬものあり。未だ一般は冷蔵の如き理解尠くこの難面を打開に不撓不屈の重役従業員の功績は實に大なるものである。今や社は昇天の如き勢ひを以て本縣冷蔵製氷界の王座に鎮座し事業内容愈々堅實にして株主に對しても年一割の配當を持續し尙餘裕綽々たる業績を示せる事は之ひとり同社のために慶すべきにとゞまらず本縣事業界の一大誇りとするに足るものであらう。尙現重役は左の諸氏である。

- |       |       |
|-------|-------|
| 專務取締役 | 中村新一郎 |
| 取締役   | 久米房藏  |
| 同     | 木村淳   |
| 同     | 枝松胖   |



取締役 千葉久太郎  
監査役 大西愛三郎

監査役 鎌田 連  
同 宮村 通三

## 日本勸業銀行高松支店

本縣金融機構中一般普通銀行業者近來の傾向ともするアンチ不動産主義の中にひとりその獨得の機構機能を發揮して不動産大歡迎特別低利融通の大旗をかざして大正十一年以來驚異すべき活動を以つて、本縣産業上に記録的貢献をなせるは日本勸業銀行高松支店である。素より同行の存在が、全國的特別使命の特殊銀行たる所に、一般金融機關のそれとは別様の存在ではあるが、國家的機關の同行の機能をなほよく理解せずして、金融上の苦惱を語るものがある。

洵に迂遠の極みと謂ふ。同支店は去る大正十一年二月二十日當時營業中であつた株式会社讃岐農工銀行を合併銀高松支店の名の下に進出の一步を發した。爾來滿十一年このかた本縣産業史上に燦然たる貢獻を綴つゝ、行務の進展又驚異的數字を示し特にその不動産金融と各種公共事業の助成融資は

縣民の齊く感激すべき協力寄與ではある。爰に同支店の業績として數字的に示そう。

不動產抵當貸付	六五七口	(單位千圓)
公共事業無抵當貸付	一〇一口	一、五六〇
計	七五八口	五三四
合併十一年間に於て貸出せる總高		二、〇九四
不動產抵當貸付	二、九八七口	千圓 九、二六三
公共事業無抵當貸付	五〇四口	八、七七一
計	三、四九一口	一八、〇五四
同期間内に償還を受けたる總高		
不動產抵當貸付	一、五八〇口	千圓 六、五六五
公共事業無抵當貸付	二三五口	三、七〇八

計 一、八一五口 一〇、二七三  
昭和八年一月末貸付現在高

不動產抵當貸付 二、〇六四口 四、二五八  
公共事業無抵當貸付 三七〇口 五、六一七  
計 二、四三四口 九、八七五

右によつて觀れば同店では過去十一年間に於いて千八百五萬四千圓の貸出を扱ひ其の反面に償還を受けた高も亦千二十七萬三千圓に及び、現在一千萬圓近くの貸付けを保有してゐる。若し之を開店當時の僅々二百九萬四千圓に比較するとき、驚くべし五倍に當る躍進率にして、其今日までに縣下に放出された貸付高も實に千八百五萬四千圓の多き上なるが、此金融機能の濫洩さは一般業者に教示する所大なるのみならず、其放出金利の如きも遙かに低位にあり仍つて一般利用者の負擔を軽減し産業上大きな貢獻をしてゐる。

現下の諸情勢からしても低利長期資金の供給は各方面共時同支店の飛躍こそ賀すべきであらう。同行の長期資金は例の勸業債券に據り之も既往十一年に縣下から吸收せし債券應募額は四百廿五萬三千圓にして、此吸收資金と放出額千八百

五萬四千圓を對比する時其投入された資金の恩恵は餘りにも大なる事に驚かざるを得ない。如斯同店は縣下の爲異常の活躍を續け渡邊前支店長の如きは自ら縣下各町村を行脚して廻つた程で可なりの効果を收め得たと、現任横山支店長も亦前任者に譲らぬ努力家であつて嘗て濱松や鶴岡の前任地を開拓して來た經驗と手腕を以て七年三月中



に何でも顧客本位に寄りつきよい店に仕上がつてはならぬと言ふ親切主義を行員一同に鼓吹し貸付其の他諸般の事務に就て

旬着任以來第一



も迅速主義を實行して面目を一新した更に第二には同氏年來の主張として郷に入れば郷に従へで先づ其の任地に入れば逸早く事情に精通する必要があると云ふので、石渡主事と協力して短期間に縣下の産業状況から金融状態をつくり吾物にして夫に基いて進展方策を講ずる等、全く善意を得たものである。夫れに據ると現在縣下に於ける不動産抵當の負債高は四千三百萬圓もあるに拘はず勸銀の取扱ひ高は未だ僅に其の割にしかならず又一面縣下の田地總反別三萬九千四百町歩に對して精々三分一厘より抵當に取得して居ない。更に

畑地に至りては一萬千四百町歩に對し其取得率僅に九厘にしかならず。爰に於て勸銀の月五朱八厘の低利資金利用は私見を離れた實際問題として確に現下農村經濟の救済法たるべきは自明の理であらう。

尙同店の地方に於る組織及陣容は左の如くである。

地方監理官内務部長	鹿野三郎
地方顧問	牧伴五郎
支店長	横山敬輔
主事	石渡忠四郎

## 中國銀行高松支店

本據を岡山に置く中國銀行はさきに大原孫三郎氏を頭取とせる第一合同と土居通氏の山陽銀行を合併し由り昭和五年十二月二十一日成立された中國金融界屈指の大銀行である。而もその絶大の信用は資本金千五百萬圓、預金總額一億一千萬圓の巨額を擁し今や獨り山陽一圓を勢圖とするに止まらず、廣島、兵庫、香川其他隣縣各地の主要地に支店を設置して旭

日昇天の隆々たる業容を誇つてゐる。

然して高松に驕足を伸ばした同行は高松市目貫の丸龜町に堂々白亜の一美觀たる高松支店をはじめ縣下二十余ヶ所に支店、出張所を設置し躍進も又目覺しき進境を辿つて居る、今や預金高一千五百萬圓、貸出し六百萬圓に上り縣下金融界の双壁として嚴然たる金融地盤を築いてゐるのである。殊に現

支店長守分十氏は昭和三年姫路支店長から舊合同銀行支店長として赴任し同行生粹の少壯銀行家にして鋭敏眞摯なる事務家として大原頭取の信任特に厚く、現同行支店長中最もその將來を囑望されてゐる逸材である。

氏は中國銀行に改稱されると同時に第一次高松支店長を受任し且四國支店出張所總監督たるの要務を擔へるを見て氏の總身を窺知し得べきであらう。斯の如き氏を支店長とする同



行高松支店の營業方針又異とする所多く、曰く從來何れの銀行業者も専ら預金重視に流れ單に預金の數字にのみ吸々として居た。ところが氏はこれを銀行本來の使命目的にあ

らずと爲し、且時代は正に斯くの如き不親切なる利差専念を許さざるの趨勢を看取して進んで時代の要求する方式、即ち金融業者は常に商工業者と密接なる關係を保持しその内容を熟知し資金を扱ふ善良なる顧問であり、時には共存共榮の立場に於て指導をなす以て地方産業の開發に金融業者としての當然の使命を盡すと言ふ高貴な對蹠的精神を以て營業標識

と爲して居るのである。而して亦曰く從來一般業者は慣習として自己の營業内容を極力秘すの弊あり。氏はこの弊風を打破し以て商工業者對銀行業者の健全なる提携を圖るは最大の急務なりとして鋭意努力して居るがこの時代的主義營業方針は近時市内商工業者をして共鳴せしむるに至りその實績はよく全國支店銀行稀に見る好績にして本縣金融界に於ても異色の寵兒として光彩陸離たるものがある、斯く進む氏は更に對内的行員に對して寬嚴よろしく人格陶冶を第一として修養怠らざるなきを努めしむる等は實に銀行業の重大性を知る用意として極めて周到と謂へよう。



# 讃岐信託株式會社

さきに大正十四年我國に初めて信託業法の制定さるゝや乾天雨露に會するが如くこれが經營會社設立の聲は轟然として起り續々實現を見たのである。これ實に我國經濟史上記録的事實にして且潑刺たる時代の曙光であつた。

素よりこの信託業務が現金は勿論一般證券、不動産、保険金の保管、諸取立等本業と附帶を通じて個人並に法人の一切財産の擁護保全を使命とする所に異常の歡迎を博したのである斯の如く時流に投じた我信託業は以來加速度を以て發達し既に今日では我國經濟界に確乎たる分野を築いた然もその組織取扱ひ内容に至つては極めて進歩的にして敢て諸外國にも遜色を見ない完備と健全なる發展である。この一期に激成された信託業も一は法律の地域的制限保護の恩恵に因るのであつて該事業の健全性も蓋し茲に存する事であらう。

讃岐信託株式會社もこの恵まれた環境に育まれ、今日の盛大を來したのであるが、同社は大正十五年二月本縣財界の大御所鎌田勝太郎氏以下有力者の提唱により資本金二百萬圓拂

ひ込五十萬圓を以て創設された。かくて財資保全を觀念して生れた同社は以來金錢、有價證券、保險、不動産等の受託を主に附帶業務としては家賃債權の取立て及び家屋の保管等機微にわたつて誠實熱心に營業を續けてゐる。故に創業日尙淺きに拘はらず目下受託者千數百名、金額約三百萬圓に上り毎期相當の受託増加率を示してゐる盛況である。

而も常に自社の合理經營を以つて同信託利用者の利益を念とするが如き、その本來の使命に忠なりと謂ふべきであり。かくて同社の創立功勞者鎌田氏は昭和四年社長を退くや、かふるに高松財界の長老北村苟吉氏が就任したが、同社の陣容を一瞥しても縣下隨一の信託會社にして自己財産の安全地帯たる信賴は寄するに足る事を肯定される。

殊に支配人原田豊氏は嘗て二十數年間縣下金融界の王座百十四銀行に職し計數と金融道を了得せば信託財産の運用利殖管理には妙諦を極め不振の今日と雖も相當の成績を納めて居る。目下同社の重役は左の諸氏である。

社 長	北 村 苟 吉
取 締 役	宮 武 恒 造
同	武 田 謙 謙
同	入 谷 哲 平
同	佐 藤 員 善
同	中 村 新 太 郎

取 締 役 支 配 人	大 西 誠 夫
支 配 人	原 田 豊
監 査 役	鹽 田 忠 左 衛 門
同	都 崎 發 太 郎
同	鎌 田 連
相 談 役	鎌 田 勝 太 郎

# 讃岐貯蓄銀行

高松に本據を置く讃岐貯蓄銀行はさきに銀行條例の改正に基き貯金と預金の分別を以て普通銀行は商業資金事業資金を取扱ひ貯蓄銀行とは人をして節約塵も積るの貯蓄心を養ひ更に零碎の資を以て不知不識に集積し子女の養育、修學資金あるひは結婚、企業、養老祝壽等の資金所謂感ぜざる少資を以て感ずるある大資を作る必然の賢明なる用意を熾應した意義深き庶民階級の金融機關とした、爾來絶大なる信用の下に異常の發達を來し、遂に現時の如く普通銀行の壘を摩すの觀を

呈するに至つたのである。

株式會社讃岐貯蓄銀行が創立當時。即ち貯蓄法規の改正直後恰も地方金融視察のため來縣せる時の黒田大藏省銀行局長が當時の知事佐竹義文氏と談話中にたま／＼貯蓄銀行の須要缺くべらざる所以を力説し、且銀行設立を勸説するところがあつた。同知事亦それを痛感して縣下財界の權威者鎌田勝太郎井上耕作、中村新太郎の三氏と鼎座談合の結果遂に縣下金融界に一新紀元を劃する資本金百萬圓讃岐貯蓄銀行の創立を



見るに至つた。

時は大正十年まもなく現南新町に堂々店舗を新築、縣下貯蓄機關の一の本店銀行として縣民多數の福利増進を主眼に不斷の努力を爲し多數庶民階級の要望に相呼應し逐年隆盛に赴きつゝあるが、今日預金總額六百萬圓縣下各地に散在せる出張所代理店總計三十ヶ所其内容健實にして且信用は縣下各地の公共團體並に産業組合等庶民階級唯一の金融機關として機能を發揮しつゝある。同行の營業一般としては、

▲定期積金 ▲普通貯金 据置貯金 ▲中小工業資金融通

等にして特に貯金全般に亘る所得税並に資本利子税免除の特典あり尙創立當時の趣旨に鑑み一變動常なき株式放資の如きは嚴禁し安全第一主義をもつて一般預金者の利益を顧念し現下經濟界の不況に際會しても尙易々貯蓄銀行としての特異的機能は譲はれ。しかして各重役亦何れも縣下財界一流の紳々を網羅せるは同行の偉容を更に巨大ならしめると共に一般的

信用の博大を語るものである。  
現在重役は左の通り。

取締役	鹽田伊三郎
同	武田亮太郎
同	鎌田晃
同	細溪宗次郎
同	香川金三郎
同	武田謙
同	都崎發太郎
支配人	龜友廣吉
監査役	鎌田虎太郎
同	香川金三郎
同	淵崎準一
相談役	鎌田勝太郎

## 不動貯金銀行高松支店

不動の大精神と確固不拔のニコ／＼主義をモットーとして競争熾烈なる縣下金融界に介入し独自の境地を開拓しつゝある株式会社不動貯金銀行高松支店は本縣支店銀行中その歴史古く既に二十餘箇年の長日月を経てゐる。従つてその信用の絶大と一般的認識は敢て地方銀行と異なるなく日進月歩よく縣下貯蓄界の白眉として毅然たる業容を誇りつゝある。

素より同支店今日隆盛は論ずるまでもなく基幹本店の不動的存在に因る所にして抑々不動銀行はその創立すでに一般各銀行と趣きを異にし獨特の彩色あり明治三十三年現頭取牧野元次郎氏が獨力僅々二萬五千圓の小資を以て敢然銀行業を企劃したこれ同行の濫觴である。以來幾多の變遷を経つゝ大黒神をマスコットに一人一業ニコ／＼主義を高唱し相互扶助共存共榮を旗幟に異常なる奮闘努力を續けた。かくて恰も燎原の火の如く何ものも焼き盡さざれば熄まざる氏の信念は大正十年遂に驚くべし一億圓を突破し次で同十五年二億圓に達するや豪放不羈の牧野氏は更に一步を進めて五年五億圓計劃を樹立發表し、業界をして驚異晒然たらしめたこれ古語の曰く「精神一到何事不成らざらん」。牧野氏の熱誠と努力は滿五ヶ年の昭和六年爰に完全なる成果を納めた。即ち創業卅周年の

今日預金總額五億一千十三萬七千圓、資本金又八百萬圓の巨額を抱擁し、支店を設置すること東は北海道から西は鹿児島に至る七十四ヶ所、東京芝大門に堂々たる輪奐の美を誇つて本邦金融貯蓄界の大銀行として君臨するに至つたのである。この搖ぎなき本店を背景に立つ高松支店が絶大なる信用と隆盛を誇りつゝある所以も又爰にある。

然し本店の偉業が一朝一夕の業にあらざる如く同支店も亦幾多の苦心をなめてゐる同行が高松の地に營業を開始したのは明治四十三年日露戦後世は文物燦然の和平時代であつた。かくて市内通町に代理店として發足した同支店は本店のニコ／＼主義に則り只管業務發展に努むること四年餘、本店の隆盛と共に代理店亦預金激増大正三年願望爰に達成されて支店に昇格し同時に本據を市内樞要の地兵庫町に移し新に支店長として藤浦猶藏氏本店より來任、大々的に發展を劃した。當時藤浦氏は文字通り不眠不休の活動を續け同支店今日の基を築いたかくて逐年躍進を續け昭和七年現支店長北田哲郎氏本店より着任氏は更に一大飛躍を志しつゝ現在四百萬圓の契約高を有しこゝに縣下金融界に獨歩の地位を確保してゐる。



## 岡山合同貯蓄銀行と高松支店

高松市片原町に店舗を構へた岡山合同貯蓄銀行高松支店は、夙に本縣金融界に於ける異色の存在を爲して居る。同行は明治廿八年岡山市に創立され大正十一年二月高松支店を設置した。凡そ銀行を語るにはその資本と預金額の多寡を以て率するを常とする。然らば同行は如何にと云へば資本金百六十二萬圓内拂込資本即ち純資金は僅に五十七萬三千圓これを以て預金總額は二千七百五十餘萬圓、この人員約十五萬人その利益金半期に七萬餘圓とは如何に資本少にして預金の多額又預金額に比して利益の寡少この一事となほ所有証券國債其他投資の概別常に機宜を得、又所有土地、家屋、什器の評價積立金等その何れを見ても比類なき内容の堅實と言はざるを得ない。故なる哉同行に連なる重役は何れも中國財界の雄にして貯蓄銀行業務の本質と業者の無限最大の責務を自覺し且其努力砕心の程を現實雄辯に具現して居るものである。

然して同行の利益配當は創業以來かつて年五朱を出せず只管内容の充實を意とし所有財産の評價を低めかつ償却に意を

そ、げば株價常に漸騰を示し、斯の如きは實に零碎なる預金を蒐集する貯蓄銀行本來の使命に誠實なるのみならず、専ら預金の安全に意を注げる營業方針には世の不用意なる銀行業者をして顔色なからしむる高額として同行の面目躍如たるものでなければならぬ。

この本店に支配された高松支店も亦貯蓄銀行の眞使命に基き本縣商工業者の發展に資すべく創設され貯金收拾の外貯蓄銀行法による健全なる貸出しをも懇切に扱つて居る。かくて同支店はその堅實性を認識されてか一人の集金行員を置くのみにして多く窓口預金にして尙百六十有餘萬圓を算し、遂日業績の進展を示し毎期の支店勘定の好績の如き支店長笹光氏の合理的經營の賜である。

## 愛國貯金銀行高松支店

庶民大衆の安寧慶福を助長せんとする趣旨から全く特異的立場に頼り斷然創設された。株式會社愛國貯金銀行が高松の地に支店を創設されたのは大正元年にして、今を去ること實に二十年前であつた。尤も當時は南新町の一角に恰も滄海の一票の如く微々たる一代理店として百十四、不動、安田等の銀行に伍し「奢侈は亡國、貯金は愛國」をモットーに庶民階級に潛入してひたすら同社の認識獲得にこれ努めた。

當時代理店長は元香川郡長近藤縮往氏にして、今日縣下に於て百餘萬圓の巨額に達する預金を占むるに至つた所以は一に以て後圖を策した同氏の周到なる營業手腕に負ふ所大なりと言ひ得べく、所謂霜を履みて堅氷に至る萌芽時代の遠大なる營業方針そこに今日の基礎は胚胎し業容を燦然たらしめては居るのである。

元來同行は大阪に本店を有し、創業實に明治三十一年の古豪にして、支店並に代理店を關西主要の地に設置し社會奉仕國利民福を主眼として、共存共榮の趣旨に則る時代的營業方

針は漸次社會民衆の信用を博し逐年業績振盛を極め現在總預金高優に二千五百萬圓を遙か超過し全國一流銀行の中位に坐し、更に貯蓄銀行別にして正に十二位の上位にあるは如何に同行が堅實にして全國的貯蓄銀行なるかを認識せざるを得ない。高松支店素より以上の營業方針を踏襲して堅實を金科玉條に群雄割據の縣下金融界に着々歩地を築き絶大なる信用を博した、大正九年四月支店に昇格、同時に渡瀬繁榮氏が支店長に就任し、昭和三年小森鐵市氏と更迭する八年間専ら業務の發展に努めその間現在の如く堂々たる支店を建築外容を整へ又これと同時に内容亦發展して、預金高百萬圓を突破するに至つた。

現支店長富岡豊喜氏は昭和七年五月小森氏の跡を襲つたが多年本店にあつて敏腕の令名あり亦前任者の遺鉢を繼ぎ全社員を督して行務の發展に奮勵努力しつゝあつて、今や同行は縣下金融界の雄として牢固抜くべからざる存在を示し最近の業容は益々盛大を加へ他面地方の産業開發には低利の融通を



なして一般農商工業の發展に貢献しつつある。

### 香川第一無盡株式會社

縣下東部の庶民金融機關として高松市今井戸筋に据然たる香川第一無盡株式會社は大衆の要望に應じて、大正十五年十二月創立を見てより僅々六年餘この短日月にも拘はらず、開年隆盛に赴き現契約高二百五十萬圓を突破し、一般本格的金融業者をして瞠若たらしめてゐる。誠に偉なる哉と言はざるを得ない。これ同社の信用と不斷の努力によるべきは勿論、他而縣民多數の理解透徹に基く所である。

然して爰に同社の事業を説くに當り一應我が國に於ける無盡創始の概念を摘記する。元來無盡なる語は我國古來から自存使用された金融機關上の言語にして、所謂頼母子講用會なる語は等しくこの無盡の一亞流たるに過ぎぬ。

惟ふに明治より大正の初期に涉つてこの種用會並に講會が恰も雨後の筍の如く簇々發生し、その傳播繁行は遂に所謂用

會屋或は講會ブローカーの徒輩を跳梁跋扈せしめ一般無辜の加入者をして憎むべき欺惑的詐術に涕泣せしむるのみならず更に純美なる日本古來の庶民金融機關を惡辣にも邪道に導くの結果を招來するに至つた。かくて幾歳か彼一部の不道德者によつて冒瀆されつゝあつた庶民の金融機關は俄然大正十四年無盡法の制定公布に倚つて恰も惡鬼雲霧を散ずる如く法の偉力は嚴正であつた。それと共に無盡の妙味は競ふて合法的組織内容を具へた會社を信賴委託の風潮を瀰醸するに至つたのである。

かくて同事業は駭々乎として發展獨得の妙味を發揮して遂に今日の如く庶民唯一の金融機關として全國總契約高十數億圓の巨額を誇り國民をして強く明るき生活に誘導せしめつゝあるのである。

香川第一無盡會社も亦叙上の理由に依り現專務堀川忠文常務大崎繁次郎其他重役諸氏提唱の下に大正十五年資本金十萬圓を以て設立され、以來會社本來の趣旨により敢然時代の要求に合致せる營業方針に基き鋭意縣下幾百萬の庶民階級に無盡利用の得失を力説普及に努めた。

然るに創業當時の同社は四圍の無理解と愚な惡宣傳を流布されたが好悪何ぞ正義の前に耐するを得ん。創立僅か六ヶ年余の今日二百五十萬圓の契約高を計示するに至つた。この現實證明こそ同社の社會的認識と堅實性を雄辯に物語つて居るが加ふるに專務取締役堀川忠文氏は軍人出身清廉にして崇高なるその人格と而も武辯稀に見る經濟的手腕を有する老練の士として、斯の如き社會的事業に携はる誠に適材適所と言ふ

べく、氏の存在は蓋し同社の威信を一段重からしむるものと稱しても敢て過言ではないであらう。なほ氏に配する百戰練磨の大崎繁次郎氏あり。今や同社は縣下最大の無盡會社として一般庶民並に中小商工業者無二の金融機關として發展して居る。尙重役は左の通り。

- 專務取締役 堀川 忠 文
- 常務取締役 大崎 繁 次 郎
- 取 締 役 堀 川 忠 一 郎
- 常任監査役 日 下 晋 吉
- 監 査 役 松 原 利 章
- 同 多 田 丈 之 助

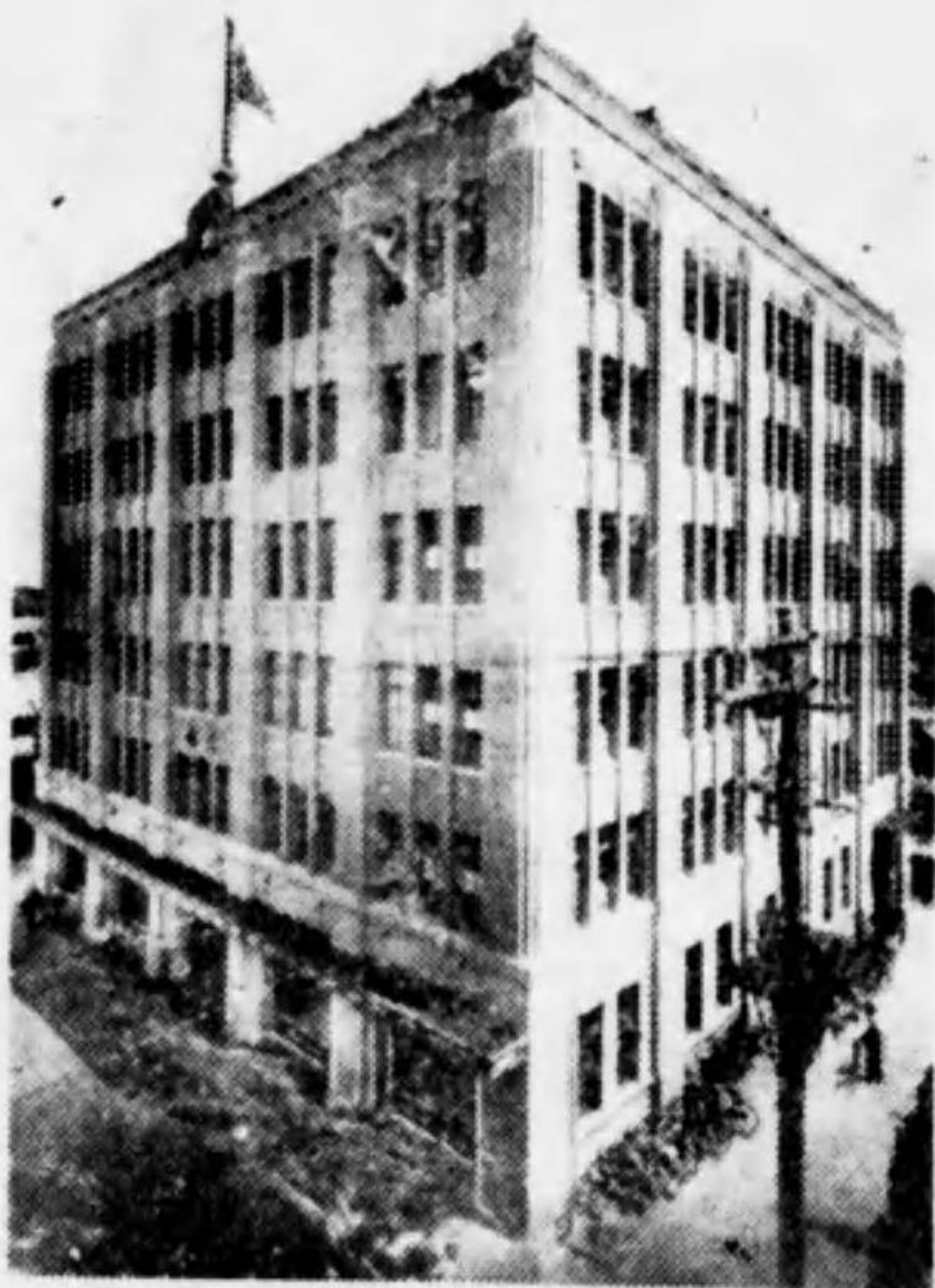
### 三越 高松 支店

天下の強豪三越が奇縁にして昭和六年三月一日華々しく高松の中心街に於て盛大に開幕さるゝや潮の如く寄せ打つ大衆は文字の通り無慮幾萬の日は暫し續いたのである。その後の

今日と雖も相當の盛況を見せて居るが、三越のこの盛觀を眺めて我高松商人のために否將來の高松商工業のためにも敢へて數歩をあゆめば抑も時代文明を表徴し精華を擔つて出現し



た三越は時代がデパート三越を存在せしめてゐるのである。かくて三越支店は慣習の一部高松商人の頭上に三越を通じて進化の鐵槌を下せる事は否定し難き事實である。即ち移り行く時勢に盲目の者ありとせば、それは白らの求むる當然の



悲哀でなければならぬ。爰に觀じて三越の出現は恐らく四國の支關高松の將來に與へた明朗なる曉鐘であり、且偉大な生氣でもあらう。

而して斯く解する以て許さるゝなれば三越の出現は近き將

來轉禍爲福の悦を招來せざるべからざるものなりと期待せざるを得ない。何となれば時代は既にこの矜持と發奮を促すや切なるものありければである。夫れ高松商人としては三越を認識組上に上し常に敵を抱擁の雅量を持つ所にその進展性ありと云ふも敢て過言ではあるまい。爰に高松三越の商則と獨特性を上ぐれば、三越は最近資本金三千萬圓に増資し、名實共に我國百貨店の王座に鎮座して、本店の外數ヶ所に營業所を持つて、驚異的繁榮を誇つてゐる。

この時高松支店の第一次支店長たる三浦勉三氏はかつて大阪支店に十數年勤績し、才氣縱横の敏腕家であつて、氏は三越支店の使命と本領に就いて次の如く語つて居る。

「私共の店は常に消費者と生産者の中間にあつて最も單便に商品の配給をさせて置く事を使命とし、如何にすれば御客様に良品を廉價に然も便利と満足願へるであらうかとばかり苦心を拂つて居ります。只私共商人は一途に商品をお渡して代金を頂戴すれば我事成れり終れりと考へればそれは商業道徳に反したものと考へて居ります。故に私共と店を生活させて下さる最も尊敬する御客様に對して飽くまでも誠意を披瀝して居ます殊に皆様が商品を買はれ實用に供されて、最後の

快感と満足される事を以て私共の本懐とするのでありましてそれを信條とし理想として全従業員は精進して居ます」以上の如く敬服すべき信條を以て三浦支店長以下數百名の店員は一意精進して居る。而して同店が常に品物を賣る以外更に本縣産業上に特殊の貢獻を爲して居る事は全國の同本支店を通じて本縣特産品を紹介販賣せる事である。現に足袋、麥

稗帽子、手袋、漆器、下駄、日傘等特産品はその重なるもので更に三浦支店長の希望としては自今如何なる生産品と雖も時代向商品の資質を具備せるものはどしどし取扱ふと謂ふに至つて三越高松支店の出現と存在は高松八萬市民に對して餘韻も床しき一大刺戟を與へたと同時に本縣産業界にも明朗な一揆をかしたるものではあるまいか。

## 下津燐寸株式會社

高松市の樞要地二番丁に於て一千餘坪を劃し一大工場城廓の下に古色歴史を語る燐寸製造工場こそ縣下斯界に悠然獨歩し繁榮を誇る下津燐寸株式會社である。同社は濫觴を高松蜂蟻社に發しその名は世人に膾炙たるものがある。

今や同社の羽翼は全國津々に擴大強化して、驚異的發展を續ける所以にして實にその濫觴に於ける高貴な社會的使命を確守する主宰者下津氏の輝かしき面目でもある。蜂蟻社は明治十二年時の治政變遷後藩主松平伯が創設し、明治十九年に至つて先代下津永行氏それを譲り受け、以來下津製燐所と改

稱經營し來つた。その後四十二年先代下津氏歿後現換一氏之を繼承して勇躍今日の發展を遂げて居る、氏は當時雨後の筍の如く簇々たる縣下各地の業者と協調或はこれを合併して縣下斯業の健全なる發達を劃し更に、世の進運と業界の趨勢を觀取して規格統一販路協調の合理化經營を主眼とする本邦燐寸界の巨頭神戸大同燐寸株式會社と提携を契り、昭和四年從來の個人經營下津製燐所を改めて下津燐寸株式會社を設立嚴然たる基礎に座して年産約一萬數千噸の手印、軍人印、日の丸天人及び家庭用丸金印等優良燐寸を生産し、四國は勿論阪



神方面を販路に又遠く九州、長崎、沖縄兩縣の如き殆ど同社の獨專的商況を示すの盛況にして。これ同社製品の品質優秀を物語るものである。

目下同工場は下津氏主宰の下に牛尾支配人以下二百餘名の職工を擁してある種の事業工場として所管廳の認定を享有し愈よ堅實なる發展を續けて居る。

## 高松合同運送株式會社

現下高松市が四國の關門として本州四國を連結するに國鐵連絡船及自動貨車航送等極めて便利とするは近來交通文化の賜にして、これが本縣産業に齎す恩恵は實に絶大である。然して今やこの國鐵を通じて發着する貨物は一ケ年十萬噸を超へ、更に地の利は將來の發展に伴ひ一層遞増の趨勢にある事は明らかである。

爰にこの莫大なる貨物を鐵道當局の指定によつて一手に引受け送達の際に當るは歴史も古き高松合同運送株式會社である。

同社は現在資本金十萬圓の株式會社であつて、昭和二年鐵道當局の一驛一店主義に基づいてさきの内國通運、國際運送明治運送等の各運送業者が一丸合同し一店主義の指定を受け

て現勢の發展を來したのである。内國通運はもと安藤貞雄氏の經營にあり、五十餘年前山陽鐵道開設以來の古き運送業にして。全國的にも斯界の元老であつた、以來幾多の變遷の後大正十二年貞雄氏の没後氏の女姪現取締役藤澤宜尋氏が擔任從事して居た。又國際運送は久保潤次氏の經營に屬し明治四十年頃氏が憲兵を辭して後運送業務に從事して居た。また明治運送店は田所萬藏氏の經營にて三者は鐵道省公認運送店として互に鐵道を中心に運送に角逐したものである。斯くしてこの競争裡にあつた業者も當局の主義に基き合併して同社を創立運賃及手数料は公定料金を決定して業界を堅實ならしめると同時に、産業上にも貢獻する事となつた。かくて本格的に創立された高松合同運送株式會社は今や本

縣陸運の要位にあつて三者は各々得意の業務を分擔し更に粟林支店を設置して鐵道貨物及一般貨物運輸の大任を盡して居る。就中久保潤次氏は大鐵豫讃線指定運送店組合長及同社粟林支店長として斯界に重きを爲し且その該博なる經驗と濃厚

はさきに市會議員商工會議所議員として貢獻し藤澤氏又敏腕人心の機微に通ずる經營家として、今日同社營業の第一線に奮闘しさらに田所氏は別に自動車部を擔任し西は琴平東は引

田に至る貨物混載定期道線を掌握して各々邁進して居る。尙同社重役は左の諸氏である。

取締役	久保潤次
同	藤澤宣尋
同	田所萬藏
監査役	安藤スマ
同	佐藤市次

## 加藤海運株式會社

凡て商工業の發達は交通文化に負ふ所が多い、而して交通文化の精華と力があらゆる事業遂行上に無限の活力を添へ且つ發展の基根を爲すもので、この絶大なる恩恵に由つて地方の産業は自然に發達成長するのである。爰に高松を中心とし西日本一帯の海上運輸界の龍兒として發展活躍を續けるは加藤海運株式會社であらう。今を去る約五十年前ではあるが、同社常務加藤常太郎氏の祖父加藤彌太郎氏は東濱町に回漕業を創始せし以來堅實に海運業を續けて居た明治四十五年長子

先代常太郎氏營業を繼ぐや早くも氏は瀬戸内海沿岸海運の將來を著目してその理想を實行に移した。即ち加藤海運商會として發動機船に依る組織的貨物運輸を開始したのである。天なる哉時は此の剛健なる氏に恵む所多く事業は次第に伸展し加藤海運商會の名は瀬戸内海々運界の雄として旭日昇天の勢にあつた。その後支店を神戸に又大阪、宇野、尾ノ道等西日本樞要の地に設置し、大々の運輸網を確立せんものと運輸船は自船備船を合して百數十隻、一萬噸を出でんとする勢



々たる盛況を呈するに至つた。  
然してこの間先代常太郎氏は海運事業の外に目もくれず深く自他を誡むる所ありしは更に遠大なる理想を秘めしに、よれど何ぞやこの海運界の驍將加藤氏は昭和五年七月僅に十數時間の間二暨を得て卒去した。當時高松實業界の人々は巨人加藤氏のその海運界に盡せる功蹟と偉業に對し深悼の情切々たりしこそ氏生前の全貌を語るものであつて。而も嘗て高松商工議員にえらばれる事三回、後二回とも信望を擔つて副會頭の要位に推舉され直接高松商工界に盡瘁せるは周知である。これよりさき昭和四年氏はその事業を資本金五十萬圓の株式組織に變更加藤海運株式會社として貿易の地神戸に本社をおき令弟豊市氏この業務を統理し、大阪支店は三弟忠義氏を配置氏は高松にあつて自ら統督劃策し優に高松總輸出入貨物の約

七割を同商會に於て運輸司のみならず、四國中國九州の各港貨物輸送に就いて居た。かくて暗夜に炬火を絶つに似た加藤海運は父を失つた悲報にも次の組織は疾くに構ぜられて居た。即ち長子文氏の實務的修練これにして氏は今や父を襲名して常太郎と號し現社長加藤豊市氏と共に殆ど家族的會社として精神的連鎖も緊密に本縣海運界は勿論西日本運輸界に貢獻しつゝある。同社の重役は左の如くである。

- |       |           |
|-------|-----------|
| 社 長   | 加 藤 豊 市   |
| 常務取締役 | 加 藤 常 太 郎 |
| 取 締 役 | 加 藤 忠 義   |
| 監 査 役 | 入 谷 豊     |
| 同     | 濱 口 本 藏   |

## 株式會社讚岐工藝社

今や高松を中心とする瀬戸内海々上國立公園は待つ程もなく時代の要求として實現したが、素より此大自然の豪壯神秘

な風景美は實に我讚岐に恵まれた天資であらう。然して此天下に冠絶し誇る勝地にいと相應はしき名産讚岐彫拔漆器のあ

る事は又誇るにたる。就中株式會社讚岐工藝社は近時業界にあつて異色の發展をなし。専ら彫拔漆器並に和洋家具を製作し自ら清新の天地に聲名を馳せてゐる。同社は大正十三年資本金十萬圓を以て現重役諸氏の發起創立と同時に現五番丁の適地約五百坪をトシ工場を整へ業向を一般業者未踏の洋家具製作に定め打てば響けよの精進を續けた。されば努力は京都共進會に出品して時の攝政宮御買上げの光榮に浴するや一躍全国的に賞讃的となり、家具界を風靡した。

其後財界不況の重壓には世の産業戦線はおしなべて萎微不振を極めたが同社もこの痛苦に沈淪しつゝ尙且これが打開を決意し逸早く活路を求めて經營の合理化新製品の考案等所謂漆器家具界の尖端を歩み續けたのである。素よりこの期こそ同社の歴史を彩る一大受難時であり、幹部の苦心も又慘憺たるものであつた。

斯の如き犠牲と貴き試練を経た同社は年と共に基礎安定し不況の言葉に聊か免疫性を感じるに至つた。がこれ洵に同社のために祝福すべき事であつて、殊に同社の特に強味とするは會社の構成である。社長に熊田長造氏あり、専務の牧伴五郎氏其他重役諸氏は何れも縣下一流の錚々たる有力者を網羅し

一瞥對外的信用を標識し、されば目下主として生産する洋風椅子、テーブル、コーヒ盆その他一般彫抜き製品は阪神、名古屋の大デパート三越、大丸、松阪屋、高島屋、岡山天満屋の如き一流商店に取り引され、その如何に美術的商品價値の高雅なるかは多くを要しない所であつて、更に全國博覽會、展覽會等に於ても常に好績を示して居るが、これを要して同社の現實隆々たる存在は正に勝地高松發展に拍車をうち他面由來ある讚岐美術に一大彩光を點するものと言ふべきであらう因に同社現在重役は左の如くである。

- |       |           |
|-------|-----------|
| 取締役社長 | 熊 田 長 造   |
| 専務取締役 | 牧 伴 五 郎   |
| 取 締 役 | 細 溪 宗 次 郎 |
| 同     | 大 西 虎 之 介 |
| 同     | 武 田 謙     |
| 監 査 役 | 中 村 新 太 郎 |
| 同     | 千 葉 久 太 郎 |



## 岡内製薬所と千金丹

世は健康か黄金か健康に優る黄金なしとは又名妙な言葉である一健康の獲得のために文明人の多くは不斷に闘争を續けて居るが。古くから高松の地に於て健康のために貢献し讃岐は金比羅宮と共に同じく人口に膾炙たるものに靈藥岡内の千金丹がある。

千金丹の名の下に縣下藥業界の重鎮合資會社岡内勸弘堂が今日の隆盛を齎したも幾多の苦難と努力の歴史が綴綿と秘められてゐる。明治、大正、昭和に亘る春秋四十年の長年月は妙藥千金丹の聲價をして遂に牢固として抜くべからざる古今獨歩の地を固めしむるに至つた。

抑も岡内勸弘堂が現在の如く縣下藥業界の雄として高松市南新町に堂々たる店舗の威容を誇るに至つた所以は、實に岡内喜三氏が卓越した商才と敏明を以て粉骨碎身店業の發展に努力した賜にして、氏は明治二十四年民間に於ける製藥事業が將來必要にして有望なるを想起し、清涼劑千金丹を創製したが意外の好評を博した。其後明治二十九年村雲尼公が本縣

御來遊の御り測らずも船酔ひを催され。この時岡内謹製の千金丹を御試用遊ばされて即刻御快復になりその驚くべき靈藥千金丹の偉効を痛く賞讃され、直ちに感謝狀を賜つた。この感謝狀に喜三氏を初め岡内一門は感激し爾來一層の努力を製藥調劑の上に用ひたのである。

かくて千金丹の名聲はいよ／＼四海に轟き明治三十七八年日露戰役勃發するや氏はこの風雲に乗じ一大飛躍をなし、遂に今日の如き確乎不拔の基礎を築いたのである。越へて大正七年には組織を資本金十五萬圓の合資會社岡内勸弘堂と改め斷然縣下藥業界の王者として君臨するに至つた。

喜三氏の業を繼いだ現店主徳次郎氏又千葉藥學專門學校出身の新智識を以て時勢の進運に伴ふ經營方針に依り四時店務の刷新を圖り今や内地は勿論遠く臺灣、朝鮮、支那、南洋、印度に及び殊に創設四十年來の販賣地區たる三重、岐阜、東關東、奥羽の如き毎年四百名内外の行商員を派し呼ばず叫ばずして巨額の賣上げ高を示してゐるが、この如きはその藥的信用の

一斑を窺知し得る所であつて、同所は千金丹の外「延命一心丸」をも製造しこの兩藥は同店獨特の責任藥にして就中「一心丸」の如きは各種高貴藥配合調製の妙藥にして特に、中暑、急性吐瀉病、痢病、婦人脫血、産前産後病、驚風其他小兒諸病熱病などに特効あり。製藥調劑に當つては多年の經驗をつめる

天弘調劑主任以下全員沐浴齋戒して自己を清め神佛に禮拜して手を下すとのことである。この靈藥千金丹の名は時代は移る洋藥萬能の現代にして尙よく不朽の名聲にかゝりやき誇つてゐる。

## 本縣輪界の元老井筒長太郎氏

今や交通文化の發達は驚くべき勢ひを以て光の如く時間と距離を短縮し以て人爲の偉大さを示しつゝある。この中に大衆的單易と利便に由つて普及を見たものは自轉車であらう。

今や自轉車は誇る國産の名に於て易々樂々都鄙を通じて日常單易交通の要を辨じて居る。本縣に於て自轉車が始めて乗用されたのは明治三十年頃であつて、以來今日では十餘萬臺にも上つて居るが、其縣下輪界の先覺的功勞者として市内南新町井筒長太郎氏がある、氏は明治三十年頃一外人乗用の自轉車に感動し且文明の利器の偉大さに驚嘆遂に意を決して之が販賣普及を着意した。當時は未だ縣下を通じて自轉車を知

るものも數ふる程度にて、故に氏が創業にも酷く冷笑嘲罵を及びせ、一方需要者側また自轉車は轉ぶものなりとの先入主にはすべなき状態であつたが、三十四年郵便局に初めて一臺納入し手とり足とり四十名に操作を教へこの状態に營業又運々たる勿論にして、かくて缺損につぐ缺損の中にも氏は不撓不屈唯々自己の信する目標將來の發展を期して猛進した。

この頃氏が販賣の自轉車は米國製のクリブランド及デイトン號ピアス等何れも百圓以上の高級車であつた。その後安價にして外觀よく更に乗易き英國製ラーチの販賣に轉じ、次で日露の戰端開かるゝや需要激増し營業は漸く殷盛を極め。爰



に從來の健闘は漸く酬ひられ井筒のラーチかラーチの井筒か自轉車ラーチの優秀と共に井筒氏の名聲は斯界を風靡するに至つた。その後順調な業況は續き將來への基礎は築かれたが更に歐洲戦亂に際して自轉車界は輸入杜絶しこの時岡本製ノ一リツ號市場に現るゝや氏は先んじて國産愛用の先驅に立ち大いに活躍し、此のノ一リツ號の輕快丈夫さは漸次舶來自轉車を内地市場より驅逐するにいたつた。

進地愛知縣龜崎港に尾州自轉車工場を設置經營し、メートル號、ミツト號の兩車を製作しつゝあるがその車は堅牢にして優美而も價格低廉すでに關西以西に名聲を轟はれて居る。以上井筒氏はよく大局とこれが臨機應變の妙を得て今日の繁盛を來したのであるが、特に氏の奉ずる世の景氣不況に拘はらず内經費を節約し、常に價格以上の價值ある品物を顧客に提供する。此實踐的薄利多賣主義の貴重な信念は期せずして世の信用を博し日に向上の道をたどつて居る。

## 証券問屋堀池直義商店



さきに小作爭議に累されあるひは借家爭議に手をやいた都鄙の有産階級乃至米價奔落、金解禁等さまざまの社會現象經濟現象に一つは煩を避けんがため二には一時的貨殖の便法と自己の財産擁護にその所有する土地家屋その他不動産

は擧げて換金しあるひは有價證券に又は銀行預金等に轉向して利用された。事實現在の如く經濟機構の變遷と發達よりすれば寧ろ煩多き土地家屋にその所有する財産の全部を托するは蓋し萬全の策に非ざること明かであらう。故に少くとも自己の財産の利殖と保全に一部乃至大部を輕妙なる有價證券に投下運用する事は極めて賢明なる方策かも知れない。斯る見地から一般有價證券は完全に普遍大衆化されたが今

本縣にもこの經濟的趨勢に乗つて證券の流入は莫大なる數量に上つて居る様である。然るに爰に思ふべきはこの貴重なる有價證券の取扱ひに一點の疑義と危險を感じなければならぬ。第一微妙なる經濟界の波動に關心を持つ事であり、更に又これが直接賣買を托すべき株式店の撰擇であつてこの間苟くも輕々の誤りある時はその害實に測り知るべからざるものがある。

目下高松市を中心として縣下株界に雄飛し一誠以て斯業に邁進大衆の信頼を博せる人に堀池直義氏がある。氏の業にも餘地あり祖先堀池半助直實氏は嘗て松平藩の家老として謹直の士として直義氏は明治八年高松に生れ十一歳の時故あつて綾歌郡松山村の豪農渡邊氏方に起居したが爾來刻苦同家の爲に計り其温厚にして至誠は痛く渡邊氏を感動せしめかくて四十一歳同家を辭するまで、春秋三十年人生の殆どを同家に捧げたのである。言葉こそ三十年であれ誰かこの長年月を一日の如く勉め盡し得るものぞ。常人の爲す能はざるや遠しと謂ふべく四十一歳ふと感ずる所あり郷里高松に歸省した時は大正五年である。

不惑の氏もこゝに環境を急變しては顧みて逡巡せざるを得

なかつた。即ち舊來に愛着を感じ又末踏の野邊には不安だにあつた。併し最早思案すべくもなく深く世の大勢を洞察して將來有價證券業の特に有望にして且現實高松に斯業渺々たるを思つては決然外磨屋町二五番地に株式現物業堀池商店を開業した。即ち大正五年である。但し當時にあつては株式に對する世人の理解未だ幼稚なるのみならず、投資と投機を混淆し甚だしきに至つては故意に讒謗中傷牽強附會の惡説を流布する等早くも思はざる困難に遭遇した。蓋し信ずる所あり、ひと度志しを立てんか世評の如き何んぞ超然として唯々堅實なる株式投資の普及と世人の啓蒙に精進した。

かくて大正八年世界大戰後好況の萌しを見るや一般人士の有價證券に對する認識漸く動き、それかあらぬか市内某有力者數氏主唱の下に資本金十五萬圓の證券賣買業高松商事株式會社の創立を見た。同時に懇望あり氏は營業一切を譲めて會社に合流し支配人として入社した。然るに大正九年財界の大變動はまだ設立日尙淺き同社に最大の打撃を與へ、茲に社業挫折の止むなきに至つた。こゝに氏は大阪市北濱株式仲買親氏を中心と同好の士と再び證券業の確立に腐心したが、如何にせん事意に満たず。曰く「好事魔多しとか」この證の如く



氏は心中感慨切なるものあり。沈思熟慮遂に數年前の堀池にかへり雄々しくも七轉八起の決意を秘めて、外磨屋町にふた度證券現物營業を開店した。これぞ今縣下株式界に雄飛躍進しつつある同店の本流であつて。以來受難波瀾の曲折を経験した堀池氏の證券業は漸次進展遂に今日の大をなしたのである。この間長子利夫氏は學窓を出て直に大阪一流株式店に店員として斯業を呼吸し、經驗をつむや歸店して父子相共に同業にいそむ。氏は英才にして其事業に熱及び愛着の念ある

事に將來を期待されて居る。尙堀池氏の人格と徳望更に利夫氏の信條とする客の利益即ち店の利益至誠一貫絶へず證券所有者の善良なる顧問を自負し今日の如く世界經濟の變調に際し又現下我國經濟界の一大危機等、あらゆる經濟的不幸の虚實纏綿たるに際して同店は獨特の調査研究により顧客の注意を喚起し、その歸趨の見解に信賴の念をあつめて悠々闊歩する所は縣下斯界の一異彩をなして居る。

## 躍進する鎌田氏の錘印醬油

高松醬油醸造界にあつて錘印醬油の名の下に近來躍進の歩も目醒しきは高松市栗林町鎌田次太郎氏のオモリ印醬油であらう。この經營者は鎌田長八郎氏の四弟次太郎氏であつて、大正四年に創始し本業に着手する以前は令兄長八郎氏の鑄物製造業に従事してゐた。然に多數兄弟の中にあつて一人位は祖業と別個の方向に進むも亦一興として兄弟合議の上企劃されたのであるが、大正四年現在の場所に醸造場を新設以來令

兄長八郎氏等の協力を得て一 意新事業に邁進しつゝ、その進展は實に陸目的なものであつた。特に次太郎氏は品質本位小賣本位の經營方針を以て臨んだ事に因つて品質の優良は凡ゆる宣傳を超越した日本



醸造協會近畿支部品評會その他各種の機會に輝く表彰を受けて萬丈の氣を吐いて居る。

創立日未だ淺くしてこの地歩を占めてはその商勢逐年に擴大強化さるゝ事は寧ろ當然にして従つて醸造規模の増設とな

り今や五百坪に餘る木の香も新しき醸造工場は飛躍の一途を辿るのみにして令兄の鑄物製造場の發展と共にその華やかなるべき未來性を刮目されて居る。

## 矢野ワイエムゴム工業所

近時都市の發展は概ね商工業に俟つと論ぜらる勿論多くの事實は鮮にこれを語つて居る、近くは坂出の躍進又今治市の跳躍振等何れも各々工業生産に於て潑刺味を見せて居る思へば天利薄倖の高松に於て工業都市の強韌性を副へんとすればこれを何れに求め且拓かんとするか。尊き疑問のそして重大なる謎は正しくこゝにあらう。

しかし道は自ら人これを拓き天蓋不盡の寶庫も又人に依つて開かれるのである。唯それは理想の實踐化と熟慮斷行を以て解決されるであらう。爰にその目標の下に直往邁進し高松産業を名に於いて氣を吐き雄々しき飛躍を續けて居る世にも隠れた産業として市内花園町ワイエムゴム工業所はいまだ、創

立日向淺きにかゝわらずよく本縣ゴム工業界の寵兒を以て自らを開拓精進して居る。同所は鹽上町矢野稔氏専ら重心となつて經營し特に奇異とすべきは勞資協調自治的經營組織をなす事で、縣下事業界にその例少く極めて興味ある經營法であらう。故に其處には自ら勇躍と平和の氣韻が現れ、上下一致常にうるはしき共同意識が更生して居る。したがつて主として生産する源平宛轉其他年産四萬ベイヤーの各種自轉車タイヤは品質他を壓し雄名を馳せて居るが、矢野氏は元木田郡林村出身であつて、現に鹽上町に於て營業所を有つて居る。

昭和五年氏はその營業と密接不離のゴム工業に着眼この經營を決定して地を現工場に定め二月起工六月完成を見て、直



に操業した。殊に人材を擁し設備の完全は小なりと雖も稀な工場として自ら誇る所である。同工場ではゴム類一切の製作修繕をなし就中ゴム白歯の如き縣下農事組合の試験成績に於て賞讃を博して居る。

斯く同所の製品は何れも優秀にして輪界の一存在をなすが

之矢野氏の人格の反映であつて、共に榮へ共に楽しむ高貴な信念の發露である。今輪界に誇る加賀リムもそれは加賀山中に發祥し今日の大をなした如くやがてワイエム工場生産のタイヤーも勝地高松の全幅を擔ひ一層の進展を見せるであらう

## 安藤宇太郎氏と養鶏飼料

嚮に急迫する一般農村疲弊の自家対策として各種の施策は強調されたが就中縣下の副業養鶏は最も有効適切なる自国の



手段として決河の如く普及發達し、今や一般農家は養鶏を以て農業經營上進歩と合理を併有する基本化するに至つた。即ち其産卵と自家肥料の兩生産は優に從來の單農計算を覆し更に一歩

商業的工業的見地に研究飼育する時の利潤は測知し難き妙味あり、若しこれがこの實踐化こそは悲痛なる農村の自力更生

とか又は自国だの、言葉を單に必要以外の辭とする事に難くない。然して凡そ世の人事は總て研究が課せられ向上と進歩はこれに伴つて局面は打開されてゆくものである。

素より養鶏と雖も研究と努力なき所には與へられる筈はない。この驚異的進展を見て居る本縣養鶏界にも漫然着手の飼者は常なき卵價の高低飼料の騰落に一撃二撃し生鶏の別別飼料の良否、鑑別等常に不覺を往復して遂に全損する實例は數へて遑ない程である。これ等は何れも研究と努力の不足に基因して来る當然の歸決である。斯く觀じて現代農業經營と副業養鶏は絶つべからざる自助關係を發見するが將來益々斯業

の健全なる發達は之を期待せざるを得ない。爰に養鶏飼料製造家高松市鹽上町安藤宇太郎氏は農業と副業養鶏而して飼料の重要關係に於て自ら養鶏の機微を究め其營業以外一般農家にそれを指導教示し、副業養鶏の發達に多大な貢獻を爲しつつある、同氏は豫て我國に輸入する鶏卵の巨額と更に養鶏の副業的價値及び將來この普及を必定として決然養鶏飼料製造に着目した。時は大正十五年三月にして其後氏の豫想は見事に適中し、縣下の養鶏熱は高調躍進して遂に現況の如く殆ど縣下農家の全部に普及するに至つた。この間氏は飼料の研究製造に苦心し又自己飼料の販賣は養鶏の實際からとてこれをモットーに一理一註を究め自ら一般農家の指導に當る等その

努力はとても常人の及ばざるものがあつた。同時に氏が創意せる丸A印混合飼料は養鶏飼料として各主精分量の配合適宜使用して經濟、與へて單易等眞に理想的飼料を以て一般斯家の認識を得縣下は勿論四國、中國養鶏家組合に異常の發展聲價を博したのである。

今日丸A印飼料が斯界に獨歩の發展こそ氏が其事業經營にも不斷農村大衆の利益を意識する崇高なる信念と誠實に結ばれた成果にして、且本縣養鶏が近々五六ヶ年にして約百十萬羽の急激なる發達を醸し農村更生に資しつつある。その一面には安藤宇太郎氏の如き眞摯な努力家の啓示的功績も數へらるゝであらう。

## 証券業の小磯定一氏

世界的不況の深化に破壊された世の産業陣營再建に今や農村救済中小商工業者融資等……政治的應急対策が破局に直面した社會的要求として凄壯にも叫び續けられたが、この上更に對外的重大關係を加へて爲政者も非常時國難に善處すべく

眞に必死の努力を須ひて居るが昨年來對内的不況の緩和に資すべくインフレーション政策を實施し物價高と金融の緩和鎖靜を考案された。而してこの非常時的變態的更生政策實施の途上にあつて殊に世の景氣のパロメーターたる株式證券の如



き、その歸趨は興味深々たるのみならず、逆塔すべからざるものあるは關心すべきであらう。

こゝに於て高松市古馬場町高松證券株式會社常務取締役小磯定一氏は縣下斯界の俊雄として馳驅し波瀾萬丈の中に證券業者たる氏の貴き体験と信念は注目し値する。即ち曰く



- 一、業者は絶対に自己思惑をなさざる事
- 二、一攫千金の夢を見ざる事
- 三、支拂金は午前受取金は午後
- 四、業者は絶対手数料本位の事
- 五、業者は特に自己の素行を慎む事

其の他氏の信條とする各項は何れも首肯するに足るものにして要は第一項自己思惑警戒に歸して居る。凡そ人は神ならぬ身の一度思惑を建て、利を見れば結構但し損せる時は挽回策に苦慮焦燥は又嘗ならぬ。これ投機と投資との岐るゝ所であつて、氏の營業方針の手数料本位の堅實はこゝを指して居る此氏を語るに十五歳の時小學校教員の資格を取り更に師範を経て教鞭に就き轉じて大正三年三月二十七歳の折郷里志度町

の老舗米穀肥料砂糖商小磯屋商店を再興した。次いで國鐵志度驛の開設と共に丸點運送店を兼營苦節十年異常の成功を収めたがこの間あるひは町會議員、商工會長、農事振興會名譽顧問、電話組合長等に推され殊に身を商工會長の職にありながら自ら荷車を挽き運送貨物の集散に従事する等粉骨碎身の努力は今尙愉快なる記憶だとは云ふ。其の後運送店は知人に譲り又従来の營業なる肥料米穀砂糖商も廢して有價證券取扱ひを開始した。然るに經驗乏しく初め取引先の撰擇を誤つたと、かの財界變動に際會して思はざる不覺をとり忽ちにしてさきの資財を滅盡せしめた。こゝに氏は敢然として居を高松市に移し西瓦町二五番地に於て證券取扱ひ業を開始し昭和四年四月有力者と共に資本金五萬圓の高松證券株式會社を創設し、市内馬場町に會社營業所を置いて堅實をモットーに努力精進しつゝあるが混沌たる現實證券界に小磯氏の如きは確に明るき存在の一人である。

## オフセツト印刷と光榮社

凡て現代は宣傳の時代と稱し兵は神速を尊ぶとか、若し戦法を先じて宣傳に求むる時戦は既に一步有利の展開を示す即ち國家の外交戦を見よ、時に正しき條理の下にあつても尙且巧妙なる宣傳を以て大局を眩惑し一時は心氣をも奪ふ蓋し不法にも宣傳の價値を認めざるを得ない事實である。況やこの耽々たる劇しい社會生活戰場にあつて正しき宣傳の偉力こそ眞に驚異すべきあるは正に當然にして凡ゆる考案と工夫をこめられた。經濟商戦に於ける宣傳戦法の妙はよく他を制し凱歌を奏して居るこれ宣傳の時代なりとする所以である。

爰に時代の戰術印刷宣傳の任務を天職として社會大衆の良友を自負し宣傳の第一線を馳驅しつゝあるに石版印刷業合資會社光榮社代表者山本庄司氏がある氏は幼にして既に宣傳の將來に着目當市印刷界の元祖松本讀高堂に見習ひ、更に十七歳にして壯志京阪廣島の各方面一流石版工場に身を投じて只管實地の苦闘を重ねた。斯て數年修練の後腕に自身を得て歸高した氏は友人某々等と語らひ獨立自營の清美堂印刷所を経

營した時は明治二十九年である。而して當時は極めて幼稚なる手引印刷であつた。これに當つた同志三人は只その清き前途を祝して細々と立つ煙の下にも侵し難き且功成らざれば斷じて止まない。堅忍不拔の情が躍動して居た。殊に山本氏の如き熾んなものであつた。

かくて努力は日に目にも見え數字にも流れ期待した成績を示したが、大正六年突如資本金二十五萬圓の日本印刷株式會社が創立され、爰に於て山本氏等經營の印刷所は恰も蠅螂の斧にも似たる皮肉な對照を描き遂に四圍の事情と懸望もだし難く山本氏及同志は發展の途上にある自己の印刷所を解散して日本印刷の傘下に入社した。爾來株式會社日本印刷所の工場主任として獨得の才幹を振つて居た、氏は大正十年同社の基礎確實なるを認めて自ら退社し再び心氣を一洗年來の宿志石版印刷を開業した。現光榮社は即ち山本氏等が七思八考新興の意氣にはぐまれた印刷所である。以來氏は今日まで吾に印刷を措いて他に天職なしの信念を以つて精進奮闘し殊

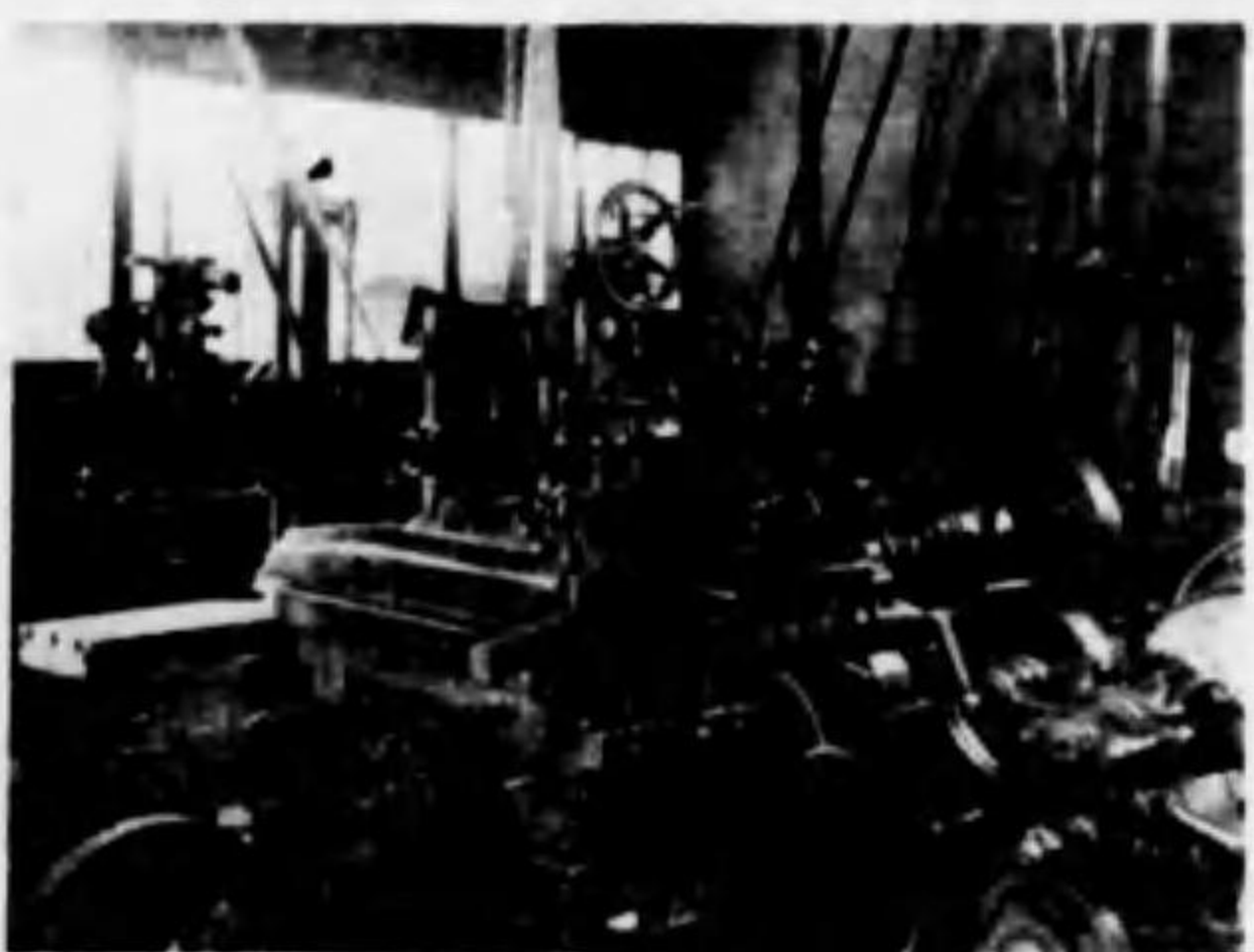


にその自轉車外交は有名にして愛媛、徳島の如き三四十里に上る商用も長驅物ともせず實に文字通りの東奔西走して遂に現況の發展を爲した。目下同社の誇る輪轉式ロータリーオフ

セット印刷機は四國隨一の最新超速度機にして多色宣傳ポスター、レツテル、株券、小切手等の高級印刷は名實共に四國に冠たる聲價を享有し經濟戰士の役徳を買つて居る。

## 身を職工に起した池田芳太郎氏

およそ人の成功と否とは裏表僅に一線を異にするのみである。世に思ふべきは夕べに星を戴き朝戸出霜を踏む汝々營々そしてつめる産も子となり孫の世となれば或るものは財を蕩盡して今や昔日の俸を止めず只徒らに幻滅の悲哀を仰つはこれ現代社會の過酷激甚な生活



身を一介の匹夫より起し發奮精勵遂に名を爲し立志傳中の人として後世にうたはるこれこゝに於て前後は月釐の差をこそ生むであらう。爰に至るや結句其人各々の思慮と行進目標の懸隔にあらねばならぬ。  
今高松市鹽上町池田鐵工所主芳太郎氏こそ立志の途上にあり氏がつむ星霜の半世經路こそ正に忍苦と精勵これにつづられた貴き感激の秘帳である。氏は幼にして恵まれず十五歳の時より鐵工業を志しこれが修練に苦闘刻苦し經驗の月日は流れて最早氏に獨立自營の確信を與へられた。大正四年意を決して現在の鹽上町にさゝやかな鐵工業をはじめた當時氏は營業資本僅に三十圓に過ぎず。この少資を以て工場を設け經營に當つたれば總ての不如意は推して知るべくしかも、事業の

不振を加へては只々強健な身體そのものを不滅の資となして健闘を續けるのみ。かくて大正七年努力は空しからず時運は繞つて歐洲大戰後の好景氣來の初潮に際會して、氏は時こそ到れと手脚を延ばして活躍大いに努めた。これ氏にとつて最初の訪れた發展の恵まれであり、かく時勢に對應した氏は鐵工所として最早安固たる基礎を築き、めぐる世の盛衰を安然

として業界に飛躍して居るが目下同所は農用發動機並に一般機械の製作修繕を業務とし就中最も誇りとするヤシマ輕油發動機は構造簡單にして精巧堅牢シリンダ及びピストンは最新式グラントー仕上の優秀機である、なほ馬力の強大と燃料の寡少その經濟的的特有性は斷然斯界を壓し、而して人と製品は世にも稀な光彩を放つて居る。

## 獨創の英才石岡宇三郎氏

時代の文化は科學の應用と發達をもつて人が人を制するの現實を致して居る。これ正に人間生活の優を競ふ科學文明自然の趨勢でなくてはならぬ。爰に於て發明とか考案が國家的にも社會的にも如何に重要性を持ち且人類生活に於ける絶體的武器なる事を立證するものである。

しかし人間には誰にも驚くべき能力が生れながら備はり更に後天的各人の研究努力を以てする時は發明創造の如き敢て難事でもない。これ即ち人智の偉大でもあらう。

こゝに好恰の例證として市内栗林町石岡宇三郎氏は自轉車

荷受台を苦心考案しその銳利にして貴重な武器を驕して斯界に雄飛今や俊敏の譽れを轟はれて居る一人である。石岡氏は廣島縣福山市に生れ十四歳の折早くも父に死別、高等小學卒業後實弟正義氏と共に大阪に出で自轉車商石岡賢一商店に入り、兄は自轉車の製造弟は販賣方面と夫々當ならぬ忍從苦闘の精進を續ける事七年、二十歳の時此處を退き岡山縣笠岡町江波自轉車商店に雇はれた。その後高松支店設置に當つて氏は店員として高松に來たのである。

かくて間もなく同支店は廢止の運命に遭遇したが、こゝに



桐眼の氏は決然江波商店と關係を絶ち高松の地に止まり直に獨立自營の計を立て遂に大正六年藤塚町にさゝやかな自轉車販賣修繕業を開業した。その後元來製造家出身なる同氏は傍ら荷受台の製造をはじめ細々營業を續ける中に歐洲戦後の好況は訪れ此時店を栗林小學校前に移轉して、業務の一大發展を畫した。今しも時運に努力を正調し然も人の和を加へた石岡氏の事業は見る／＼進展製品は他品を凌駕して抜くべからざる素地を築いて往つた。

更に氏は大正十二年工場を擴張して現地に移轉工場組織を整へ大量生産の陣容を以つて目下兄弟二氏協力親切をモットーに日夜研鑽製作する莫大な荷受台は縣下は勿論四國、中國

九州に石岡式の名も高く驚異的躍進を續けて居る。これもとより氏が若年よりあらゆる修業を積み且人生行路の苦難をなめしその至誠に酬ひられたのであるが、現に氏が製作品中自轉車荷受台各種スタンド、サイドカー、リヤカー、半ケース等にわたつて七種類の最新特許其他サイドカー及びリーヤカ一の車軸受等八件の秀逸なる特權を受領せるは洵に心強い奮闘家の面目である。

氏尙年齢不惑常に温厚人に接して誠實内職工と共に勞苦を實踐しその事業に對する執着と熱意は勢ひ生氣潑刺として、展開し舍弟正義氏の具眼と共に前途洋々その今後における闊歩こそ傍人の興をそゝる所である。

## 四國農具と倉本氏の苦心

本縣昭和六年度の米作減收に驚いた縣當局はその對策として郡農會村農會と共力し今後誘蛾燈の利用に由つて虫害の防除を期して居る。素より油断を大敵として此種被害の根絶を期するは一般農家も當然の義務である。而してこの被害に對

して絶大なる偉力を發揮した誘蛾燈、殊に高松市松島町四國農具商會考案の夫は誘蛾の上に殆ど全縣農村の賞讃を博したのである。尤も四國農具の該誘蛾燈は製作者庫本茂一郎氏の貴き農村觀念による結晶として各部に考案工夫をめぐらしそ

の特別装置に於て燈火は強風に耐へ光力又強く燃油の消費過少等幾多の特殊性を具備すれば本縣農會の認定推獎を受け昭和七年度の驅除盛期には疾風の如き急需用を見てその製作供給は瞬時にして八萬個に達すると謂ふ盛況であつた。斯の如く害蟲根絶を心頭に活躍せる庫本氏は本來農村大衆を相手の糶摺機、製糶機等各種農具の製作に従事し常に農村の福利増進を念ずる所、遂に今回の如き簡單優秀なる誘蛾燈を創案したのである。

本器が他品の絶体追隨を許さざるのみか他に於ても既に專賣特許新案等十六種の特權を所有し之れ等は何れも氏が十八歳の頃小豆島草壁を出でしより名古屋及三重縣に於ける幾

多の經驗と研究努力の賜にして、大正八年高松に現營業を開始せし以作その熱心と天賦の才はさきに昭和四年縣令に依る麥重量検査の施行さるゝやその計量器を完成し、今又效果適切な誘蛾燈を考案する等洵に縣下農村に對して特記すべき貢獻にして更に縣下農機組合の創生を以て斯界の向上發展を劃し又率先町内自治組合の結成を唱へ創立するや選ばれて副長を勤むる等その爲す所營業の私事は勿論自治公事に就ても常に時代的觀察を以て世を裨益しつゝあるが實に稀な奉仕的戰士である。然も尙氏の人情味を知るに失業者、免囚等自己工場に多く使役し救済保護利導に當るその心情温かき流露こそ情意を併せて世の感激をそゝるものである。

## 高松製燧所の躍進

近時高松事業界の一壯調として驚異に値する飛躍進展を遂げつゝあるに高松製燧所がある即ち同所は市の東部御坊川の河畔に工場を置き田丸喜助氏の經營に係るが同氏並にその工場的全貌を通じて現代非常と混迷の一般經濟界に毅然たる何

ものかを明示するものでなければならぬ。即ちこの難面に處して用意とこの意氣だに満ち充つ時不況の辭敢て恐るゝに足らずとは爲すべく唯多くの慄むらくは平常の用意足らざるにある現今非常時と謂ふ時代語を以て諷する非常時に製燧事



業を以てこれを克服前進しつゝある田丸喜助氏この人こそ八歳の時よりマツチ工場の職工として現下津製燧の前進近藤製燧所に這入つたのである素より小學一年を然も優等で修業直に身を爰に投じた氏は以來その身の不遇を啣ちつゝ唯馬車馬の如く如何なる時と雖も無休一意精勤其傍ら夜間苦學を續け以て其欠を補つて居た。かくて學修を積む事十七ヶ年此自己修養と而して工場に於ては主は替れど氏の精勤は亂れない精勤振りであつた、かくて下津製燧が大同燧寸と提携する迄實に卅餘年を勤績し此間官廳の表彰を受くる屢々。昭和三年自己が恩愛を感じる下津製燧が外人會社瑞典系統に從屬するに及んでこ



れを遺憾とし、遂に自己多年の經驗と力行の貯蓄を資本に敷起し昭和四年現在の高松製燧所を創始した。  
この時にあつても所用の機械は殆ど資本の魔手に封ぜられ内地に施すすべもなければ、さては朝鮮大邱に於て調達した程で、この苦心又慘憺たるものあり、かくて漸くにして工場設備を整ふや。氏が永年の經驗暗々裡の研究を繕き自己理想の燧寸製造と合理的經營等用意は着々として實行に移せば孤々たる社外高松製燧所製品も今や四國、中國、九州に意外の好評を博して業運正に旭昇の如くである。  
これ全く田丸氏のたつとき戦法至誠力行動儉一途に邁進するその信念に因るものであつて多難なる世況に獨り毅然たる存在を許す所以である。

## 馬場岩太郎氏の漆器具

本縣特産品中美術工藝品たる彫抜漆器は其の實用的價值と嶄新なる意匠施工に於て夙に全國的の聲價を博して居る、殊に近時一般の生活様式も頓に文化的傾向を來し彫抜漆器類はその堅牢に於て益々普及の狀勢にあるが名勝地讃岐の特産品として最も相應しき産品である。爰に高松市田町馬場岩太郎氏の製作に係る漆器具はその玉藻塗の名に於て近時内外に目覺しき發展を遂げ、高松漆器具界の代表的歩地を築きつゝある特にその漆器具は塗方に獨特の妙あり、氏の面目と器具の生命は素より茲にあるが今や其の生産する漆器は高島屋、阪急百貨店、三越、大丸、十合百貨店等主として關西、中國、九州一流漆器問屋の高段に陳列販賣さるゝこれその製作品の眞價を雄辯に語る所であらう。  
氏がこの特殊技術を以て斯界に誇り得る所にも身をこゝに投じて以來約三十五年間その苦心と研究の收穫なりとせば、名工の修練又容易ならざるものがある。即ち氏が恵まれざる

家庭に生れ十一歳にして兵庫町栗田藤太師の下に入り、旗棹塗を初歩として次いで師と共に第十一師團兵舎の建築塗工に従事する事三ヶ年、其後塗法を修得した馬場氏は高松工藝學校の製作品塗工に勤務中丸龜に入營し歸郷後再び塗工として各所に雇はれて居たが、大正五年五月遂に龜井町に獨立漆器店を開業した。以來一層各種塗法の研究に専心し漸く氏獨特の妙を極め得たものである。

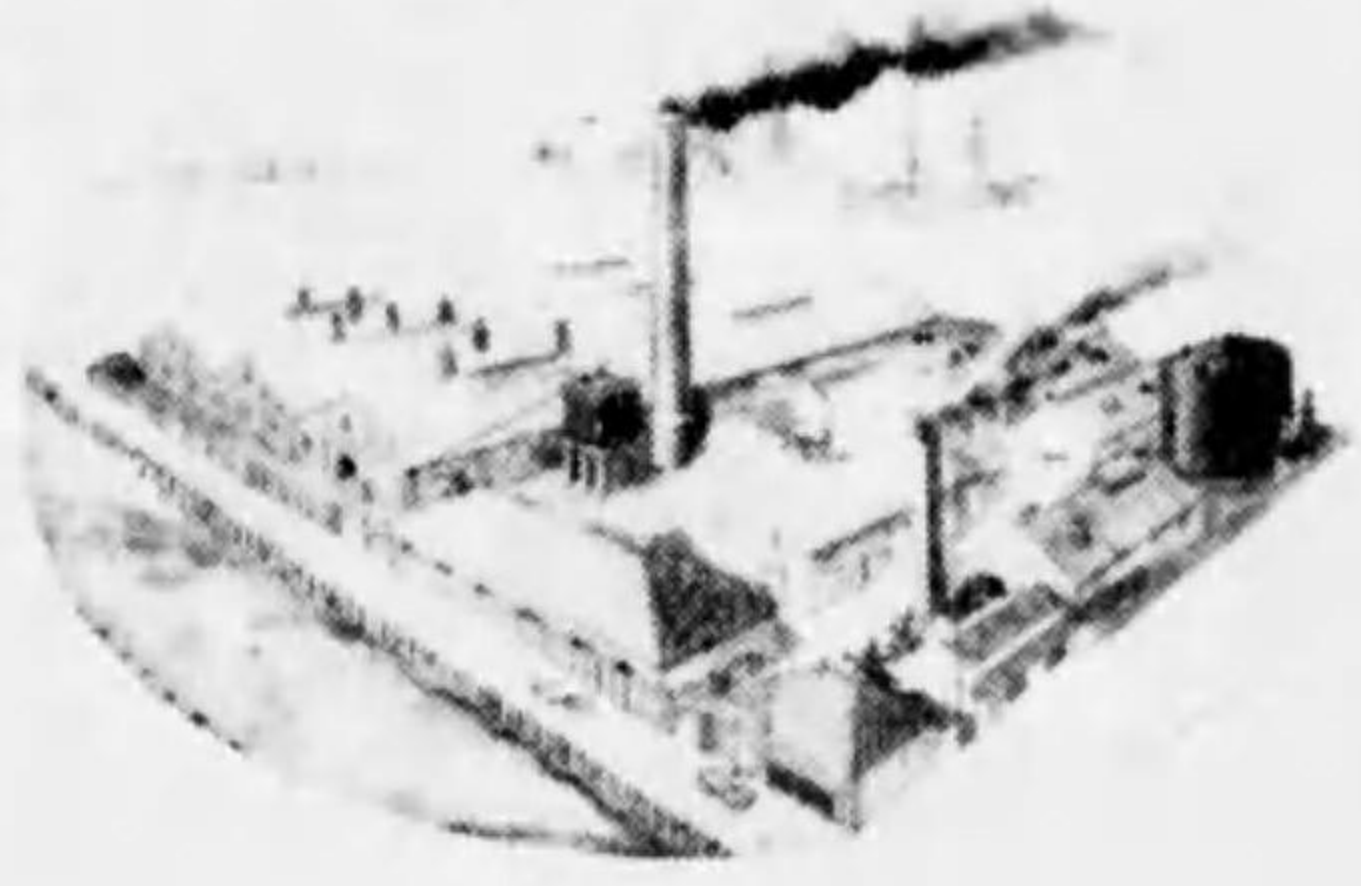
其後大正十一年十一月現在田町に營業の擴張を計つて移轉漸く多年の奮闘努力は今日盛況を見るに至つたが。その製作材料とする和松は安原村に自家材料製作所から又南洋材其他は大坂より直入して居る。然も氏が成功の今日と雖も常に多數職工に伍し分秒を惜しみつ立ち働く所、更に又町自治等に對する幾多の篤行はかつて市長より感謝狀を授かる等、洵に推賞すべき時代の人と謂ふべきであらう。

## 乾卯商店高松工場の苦汁工業



本縣に於ける純正工業生産品中凡そ原料の自給自足にして製品又化學工業用若しくは薬用として重要用途を有つものは即ち炭酸マグネシウムであらう。高松港頭を遙か左手に安大千五百坪の工場には日夜間斷なき振動を響かせるこれ大阪に本店を有する株式会社乾卯商店の高松工場である。同工場は華城實業界の雄乾卯兵衛氏の主宰する資本金各百萬圓の株式会社乾卯商店及び乾卯食料品株式会社の専屬工場であつて、明治三十五年頃同氏が縣下に生産する豊富なる苦汁の精製を著目し綾歌郡松山村に於て事業を創めたが後大正九年現工場竣成と共に移轉して今日に至つた。

目下同工場は大坂高工出身新進の工場長福島誠氏以下數十名の従業員と近代的工場設備に由つて炭酸マグネシウム並に滋強飲料パービスの大量生産をなしその成績頗る良く、炭酸



マグネシウムは概ねゴム原料並に薬用に供され又パービスは滋強飲料として實に美味滋養精力の源泉とも云ふべき貴重成分を含有し當代の如く生活の繁劇に於てはいやが上に過度の精力消耗を産生なくされ、これ等大衆の精神的、肉體的疲勞倦怠乃至は神經衰弱的病症に用ひて驚異的効驗を示す恰好の飲料であつて、これ等種々の病因をなす体内有毒素に對しパービスは所謂乳酸菌の作用に因つて腸内防菌と腸自家中毒を完全に預防するの卓効あり。その賣れ行き又逐年超増しつゝあるに徴してもその効果は明かである。

なほ工場主任福島氏は高松工場經營の意義として高松を中心とする香川縣は工場經營に極めて好適の地區となし、殊に交通發達の今日では原料を移入加工して更に阪神方面に送致するも尙且剩餘利益ありと、同商店のパービス製造も即ちこの都合であると謂ふが、本縣事業界のためには大に了承すべきではあらう。

## 本縣養蠶界と片倉製絲の存在

我國輸出貿易の首位として大に海外に氣を吐いて居る生絲に關する限り片倉製絲紡績株式會社は何んと云つても國家的必要の存在であらう。

片倉製絲紡績株式會社は資本金七千五百萬圓を擁し本社を東京に全國津々六十有餘ヶ所に工場を有して、その釜數三萬釜に及ぶ本邦製絲界の一大勢力であつて、殊に社長片倉兼太郎、副社長今井伍介兩氏は共に我國財界の雄として今更喋々を要しない。この外同社は傍系又は姉妹會社頗る多く。就中片倉生命、片倉火災、片倉米穀肥料の三社は同社關係者従業員並に關係養蠶家等の安定と福利を主眼に設立された保全機關にして、如何に同社の經營構層が合理的進取的なるかを立證して居る。由來同社の營業方針は生糸が我國産業の中軸であり、且輸出貿易の大宗たる重要性に鑑み、常に海外需要の動向を査察してこれが順應に努め特に品質の優良と規格の統一に心血を注いで居る。

されば西日本一帯の同社工場にはさきに六百萬圓の巨資を

投じ御法川式設備を施せるが如きその一斑であつて、同社製絲が常に他絲を壓して優位にあり、その社業の良好もこゝに因るのである、又同社が堅く把持する奉仕觀念は我が輸出生糸の世界的現勢が決して將來の晏如を許さぬ現況を關心して居るのであつて。故に夙にこれが根本對策として先づ我蠶業の合理化を主唱し地方養蠶家と製絲家の提携を計り、かくて品質優良を以て外品と戦ふ、優良の生糸は桑園の改良に桑葉は施肥の良否にこの信念に於て適切なる指導誘掖に努めて居る。この大所高所の遠觀は現時逼迫せる地方農村に多大な活力を與へ、更に國産生糸及び同社の名聲を高めた市内楠上町同社四國出張所も勿論如上の方針によつて縣下一圓に羽翼を張つて居るが、同所は大正五年香川郡佛生山町に初めて縣下集蠶場として設置された、後高松市に移り、同三年楠上町の現地に移轉したが、現所長井上保氏は岡山縣の出身にて未だ三十七歳新進氣鋭、この人こそ蠶業に依つて本縣農村の不振を打開し併せて片倉製絲發展の重大使命を兩秤にかけて悠々



潤歩し居るのである。

されば同氏赴任以來縣下養蠶の合理化を大呼し、直に片倉製糸特約組合を創設し、又は原蠶種組合を作つて優良蠶種の配付と統一を策し、或は専屬養蠶教師十五名を縣下各地に派遣して親しく教導更に桑園の改良その他の場合は特に助成金の交附或は低賃を融通するなど全く判れり盡せりの指導振りはよく縣下養蠶家の理解する所となり、すでに縣下を通じて

七十三組合を創設し、二千三百名の組合員を抱擁して着々緊密なる關係を築きつゝ優良組合には夫々表彰をなす等同出張所の縣下蠶業發達のためにする先驅的歩みは必然自己營業にも頗る効果的であつて、かくて養蠶家も製糸家も双方共存共榮の歩調を共に、共同の利益追及とは少くとも時代の推移と要求を正解する輝かしき賀すべき商策と謂はなければならぬ。

## 平井實氏と慰安事業

高松市事業界に近來出色の人材としては平井興業株式會社



の殿堂玉藻座、玉藻温泉並に琴電瓦町食堂、鹽之江温泉旅館

長平井實氏がある。氏は今や高松市を中心に遠く鹽之江方面にも共事業的驥足を伸し天晴れ時代人物として名聲を轟はれてゐるが、其經營する歡樂

更に玉藻ホテル等偉大なる諸事業を通じて、これが縦横無盡の機略巨腕は只驚異と敬服の外はない。この偉大なる現況の裏にも氏の青年時代よりして一流の惘眼と刻苦があり、これぞ今日輝く同氏の面目にして、且本縣事業史の一項を彩る意義深き事實である。

氏は明治十八年木田郡田中村に生れ長じて粟島航海學校に入學したが、眼疾に依り中途廢學、その後早くも勃々たる企業意識は郎にも躍動した。即ち十九歳の折阿讃國境に於て人夫

三百人を使役する山伐を請負つた。しかしこれにはさすがの

氏も生れて始めての思はざる苦盃を嘗めた。かくて猫額大の一寒村に踏踏するを快しとせず高松に來り棧橋通りの知人佐々木炭店に徒食する中、當時西新通町に高島嘉兵衛門と云ふ易者が出張の事を聞き、佐々木氏に金五十錢也を借て運命の鑑定を乞ふた。然るに料金は二圓乃至十圓にしてこれに驚いた平井氏はしばし書生と押問答を續けて居たが、その中高島氏は氏の熱心を感じし遂に所持の金五十錢也で鑑定を爲すべく協定は成立し鑑定の結果曰く「今は困窮を極めつゝあるもやがて西北位より福徳あり、更に將來の運勢は驚くべき」との事であつた。氏はこれを聞き半信半疑の裡にもいさゝか會心の笑を齎し直に八栗聖天に參詣して自己の現實打開の祈りを捧げたのである。不思議にも數日の後當時の高松鹽務局長末松氏より鹽收納倉庫増築の必要から平井實所有地の借地を申込みがあつた。此時氏は茫然として何んの戸惑なるかと思つたが、熟慮すればさきに某請負入札に際して當時の慣行とする「だんご」金を地所で貰ひこれを某所に入質した。然るに既に期間を経過し流質とのみ思ひ切つて居たもので、此吉報は確かにさきの曠場の適中であり與へられた福徳でもあつた

その後玉藻座を買収經營に當つた。然るに大阪北區の大火

後一大飛躍を試みるべく又あはよくば一攫千金もと匂々氏は上阪したのである。この無謀にひとしき僥倖の夢には天これに與せざるは勿論、氏は與へられずして孤影遺然歸國した歸れば玉藻座は比較的盛運を持続せるを見て、氏はこの玉藻座こそ我に與へられたる幸なりと痛く感ずる所あり、以來蹶起これが經營に當り時代に先驅して逸早くキネマ常設館とし更に昭和三年九月同族を中心に平井興業株式會社を組織、又は玉藻温泉を建設して本格的躍進を續け、次で鹽之江温泉鐵道開通と同時に温泉旅館花屋及虹の瀧別館を建設し、讃岐の寶塚として阿讃の仙境開拓に努め、又琴平電鐵地下食堂を経験し、宛がら蛟龍の昇天隆々たる事業的發展を劃したのである。

而して昭和五年十一月三日不幸玉藻温泉は不慮の災厄に際會、全館烏有に歸したが、豪腹その氏は敢て落膽の色なく直に再興を劃し現温泉を新築し、引つゞき舊村井樓跡をして巨萬の費を投じ宏大なる玉藻ホテルを建築經營して、遊覽地高松に一大美觀を添へたが、この事業的手腕の量大はかり知るべからざるものがある。

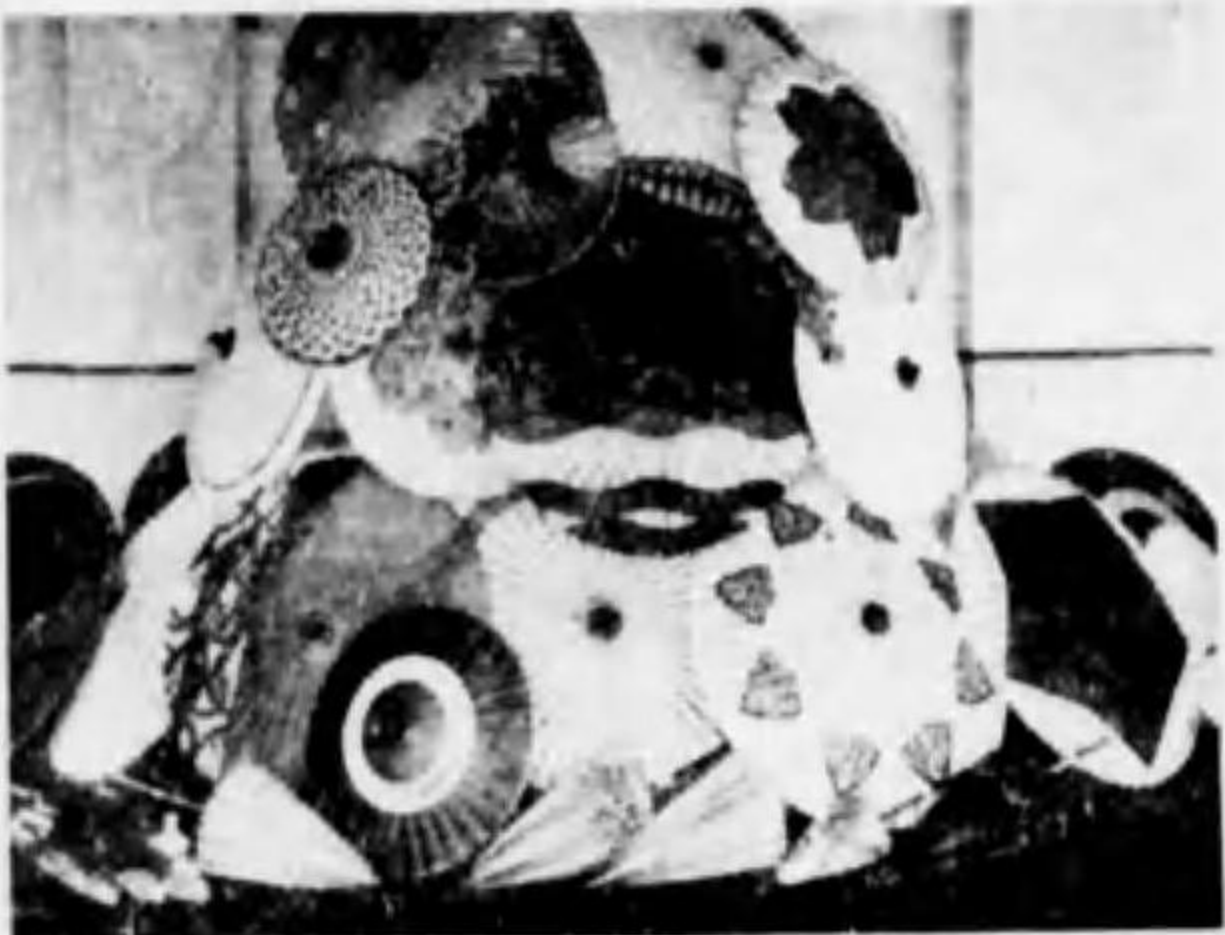


氏の各事業に對する信念は近時人間生活極めて複雑激化し都會生活は勿論農村生活に於ても精神的所勞多く、これに對し安直なる娯樂慰安施設の必要は生産事業と共に近代生活上

缺ぐべからざる機關なりとし、氏はこの要求する大衆慰安娯樂機關それを經營し、これを通じて一片の社會奉仕を致さんとするものであると。

## 讚岐日傘と上春商店

本縣の特産品として有名な存在をなす讚岐日傘はその業史維新前に發し爾來重要特産品として要位に躍進して居る。而して目下高松斯界の合資會社上春商店は斯界の雄たるものである、同店は大正十三年資本金一萬圓を以て、合資會社を組織以來眼見しき進展を續けてゐるが、其創始者にしてよく今日の業礎を確立した先代岩吉



氏の功績は特筆に値する、同氏は明治初年すでに傘製造業の未來性を洞察して知人に其製造を勸説すると同時に自らは傘商人として縣下の販路を開拓した。斯る中に製造業者は次第に増加し、生産も遞増すれば此處に於て同氏はその製品を取纏めて試みに阪神中國地方に販賣せしに意外の好評を博し、製造家も更らに激増を見たのである。而てその當時の製品は多く地傘のみに限られて居たが、上春氏は明治三十年上阪同地の某問屋に於て優雅なる岐阜日傘を見出しその一本を購入して直ちに模倣製作を試みた。これが本縣日傘の發祥とはなり、斯くて明治三十三年には初めて貿易品として海外躍進の機運に向へば、上春氏は阪神商人と提携して大量輸出に邁進し、大正七八年頃には年産額三百萬本金額二百萬圓に達する

の盛況を示した、斯くの如く本縣日傘の漸く確乎たる地歩獲得を思ふ頃、その功勞者上春氏は卒然他界したのである。其後同店は次男上春次郎氏を中心に一族を以て合資會社を組織した。當時二十五歳の上春次郎氏は嚴父急逝の後を繼いでその業に奮闘を續けつゝ不幸、時運に恵まれずして思はざる諸方面の困難に遭遇したが先代の篤行と業界への貢獻に問屋側の同情は集まり、且氏の不拔の健闘に漸く業運の挽回を見初めれば、新進の氏は百尺竿頭一步を進めて直輸出を開始し更に好轉を作したのである。

## 岡坂政五郎氏と醬油事業

四國靈場八栗寺の麓に西は屋島の秀嶺をかざし北は壇の浦の翠波を望む牟禮村に蟠居して床しくも百三十餘年の久しきに亘つてその歴史と牢固たる商勢を誇るものは蓋し岡崎醬油店である。

同店は人も知る縣下醬油醸造界にあつて堅實と製品の優良を以つて名聲を博し儼然たる存在を示してゐるのである。爰

に輝く同店の業績を繙かんか時は寛政二年の頃岡坂醬油の鼻祖岡坂昌勝氏は八栗聖天の信者として尊崇の念殊に厚く、敬虔なる歸依禮讃者の一人であつた。而してある夜の事氏は聖天様の靈夢を感じ山麓の靈水を以て醬油を醸造せば人を利し世を益する事多しと、爰に大なる感動を覺へた氏は、颯起して同年二月一日現地牟禮に微々たる一棟の倉庫を建築し始め

尙最近には同氏の令弟上春喜儀氏が最高學府を卒へて兄弟協力斯業專進し現に高松の本工場以外に佛生山方面に五名の監部を置き製造業者の延人員三千人を數へ、木田郡庵治村に於ても三百人の職工を使用し産額又市内の總産額百三十萬本に於ても三百人の職工を占め、一方製品の如きも日進月歩し現在にては婦人用としてみさや日傘、麗人日傘と呼ぶ嶄新なる日傘を小供用としてスポーツ傘等を考案し活躍して居るが、その大量生産の販路を阪神、京都、中國、九州をはじめ海外では米、英、支那、印度、南洋方面に求め一大飛躍を續けて居る



て醬油醸造業を営んだ。これ現香川縣本土第一の盛大を誇る同店の發祥である。

果せるかな聖天の靈驗あらたかにして漸次需要を増し遂日岡坂醬油の眞價は認められた。随つて店業は年と共に駈々として發展の一途を辿るのみ、其後始祖昌勝氏の業を繼いだ次代政五郎氏もよく父祖の店是を恪守して次いで現政五郎氏の



代とはなつたのである。

當主政五郎氏は明治十六年佛生山町の舊家別所家に生れ長じて岡坂家に入り高松中學卒業後日露戰役に従軍戰功によつて從七位勳六等歩兵中尉に

任ぜられ凱戰後専ら祖業に従事しては居る。しかし當時は未だ諸般に封建臭味を残しこれを遺憾とした氏は早くも將來の發展を畫し先づ自ら小豆島縣立工業試驗場に身を投じ同場にあつて日夜醸造の要義並に原料精選に至るまで學理に實驗を併せ研究し、或は又自家の杜氏を從へて著名なる醬油の産地を巡歴視察する等この努力は遂に氏をして獨特の醸造法を體

得せしめ確乎たる自信を恃ましたのである。

かくて氏の生産醬油並に其商策は一躍世人の認識を高め昇天の如き店運を示した。その製品の資質を語る各地博覽會共進會等には毎次優賞を獲得して、誇らしい行進を續けつゝ目下醸造の約一萬石は販路を大阪高松の中心支店の外百五十餘の販賣網と更に海外浦鹽、シカゴ、パリイ等にも進出圖はれて居る。この驚異的發展躍進は氏の熱と努力が致せる盛況であるが、才幹は周囲の信望を蒐めて東讃醬油同業組合長、商會長の名譽職に推されて居る。

尙氏が公共事業に對する理解貢獻は多大であつて夫かあらぬか閭郷の人士は昭和四年一月その徳を欣慕して頌徳碑を建立し千歳不朽の榮譽を刻した。誠に近來の社會的快事として特筆大書すべき事ではある。

## 屋島登山鐵道株式會社

近くは瀬戸内海々上國立公園の中心景として又遠くは源平干戈の地たる屋島の自然美に更に畫龍點睛を彩るものは屋島登山鐵道株式會社であらう峻阪も輕快燕の如く攀攀するケーブルカーはこれ颯爽



たるものである。もとゞ同社は大正十四年蓮井藤吉、瀬尾等、小西龜吉、大石大、矢野丑乙、米田實の所謂政界往來の巨頭連に依り提唱企劃されしもので、其後競願者續出し纏々幾多の曲折を経て大正十五年遂に前記蓮井氏等の出願に對し牽道施設の認可指令が到り、爰に同社成立の基礎が確然と固めらるゝに至つたのである。

然し當時四國におけるケーブルカーの施設たるや常に晴天霹靂たるのみならず一面事業の性質上經營の將來に對し一片悲觀的危惧を抱くものもかなり多く且つ雜多なる故障累加して會社組織は徒らに遷延を重ねつゝあつた。この時縣下財界の長老景山甚右衛門氏がこれに關與するに及ぶやすべては順潮に進捗し昭和二年資本金六十五萬圓の屋島登山鐵道株式會社は成立し、同時に社長景山熊造氏、常務取締役には蓮井藤吉氏就任した。かくて蓮井氏は専ら業務を總攬して工事完成に當り用地の買収、線路の施設、山上道路の新設等竣成に意を注げば工事は着々進捗し、輝かしき完成の日も日捷に迫つた



その昭和三年八月突如として社長景山熊造氏の悪事を受け同社としては不測の受難に逢着した。因つて直ちに關係者は協議の結果新に現社長大西虎之介氏を迎へて工を急いだ。この結果起工以來二年後の昭和四年四月二十一日、こゝに劃時代的誇るべき登山鐵道は日出度完成した、この總工費約四十萬圓拂込金三十三萬圓にしてケーブルカーは瑞西ギーゼラインベルン會社製の最新且安全優秀なる車輛を以て險阻胸を衝く峻路も僅に五分を要せずして屋島南嶺驛に達する。

かくて營業開始以來も社業遂日盛大に赴き、創立當初の危惧不安は斷然こゝに一掃され、近縣ケーブル事業中稀に見る好成绩を示現して居る。

斯の如くして陽春三月から五月を所謂遊覽客最盛期間とし瀬戸内海の絶景と名所舊蹟に粉黛された天下の勝地屋島の快適極まりなきケーブルカーは天下大衆の慰安に奉仕して居る

尙同社重役は左の通り。

社長	大西虎之介
常務取締役	連井藤吉
取締役	武田謙
同	鹽田智章
同	合田謙吉
同	景山卯吉
同	寒川恒貞
監査役	中村新太郎
同	細溪宗次郎
同	鎌田憲夫
同	武田亮太郎
相談役	景山甚右衛門
同	鎌田勝太郎

## 木太鹽田株式會社

東讃木田平野を縦走する春日川尻左岸四水遊覽電車の車窓を射る廣漠三十數町歩恰も暮日の如く整然たる沼井寮、その周圍を彩る茶屋瓦の色調そして中に立ち働く濱人の甲斐々々しき姿は雄々しき限りである。白旗に出でて赤旗に退く全く軍隊的壯重の就業振りこれは東讃製鹽界に潮を稱ふる木太鹽田株式會社經營の製鹽地である。



同社は明治四十五年資本金十三萬圓を以て創立し大正五年増資現在二十六萬圓である同鹽田はかつて某々等有志の築造にかゝり事業機構の完成せざる頃同社がこれを譲り受け經營に當つたのである。爾來幾多の研究改良

を製鹽上を用ひ日下二等鹽を生産し採鹹面積三十一町其他を合せて三十五町歩餘を所有して異數の業績を續け今日に至つて居る。

只々天候をのみ頼りに寒喧に苦闘しつゝ驚くべき年産額を示せる同社は最近世の思潮に鑑み所有鹽田を自營化し更に經營方法を革め同鹽田を繞る勞資關係も心強き協調裡に共同の

福社を築きつゝあるが、之を合理化時代とは謂へ床しき事である日下同鹽田の經營實務は取締役石橋兵造氏これに當り、よくその大仕事を處理して居るが、氏は昭和二年感ずる所あり鹽田の小作制度を廢し自作經營を發意してこれを決行するや先づ以て従業者の待遇改善に因つて能率増進と製鹽の向上を計つた。即ち彼等に所定の日給を支給する外會社の純益中から三割を割き其の中一割を各自の勞金に應じ全員平等に分配し又一割を勤怠に率し更に五歩を特別賞與に残り五歩は各自の積立金に分配し各自の積立金に對しては相當の利息を附す等専ら共同就業意識の作興に努め、共存共榮の理道を明示して進んだ。

されば一同は期せずして躍心圓滿なる相互關係を確知して百七十餘名の従業者は各々懸命の精進を續けてゐる。又會社は年次の業績を株主總會に報告と同時に従業者一同にもこれを示し共に良績の喜びをわかかつて居る故に毎時高率配當を續けながら斯の如く事業資本家とこれが絶對有機的能動の活動分子が律然として理解各々共同事業の觀念のもとにその使命に向つて邁進しつゝある所は世にも稀なる經營組織にして世の一般事業家に對する一大好示とでも謂へよう。ちなみに同



社現在重役は左の通りである。

取締役	阿河吉之助
同	石橋兵造
同	龜井喜代次

同	織田一
監査役	中村新太郎
同	石橋太平

## 屋島鹽田株式會社

東讃屋島の秀嶺を西に卸して屋島卸しか吹く濱風をそよと受けと云ふ鹽田小唄も高々にこれぞ近時東讃鹽の名聲を代表する屋島製鹽株式會社經營の鹽田であつて、川を挟み木太鹽田と共に東讃に於ける今を盛りの若き二大鹽田である。同鹽田はかつて明治四十一年頃同社大株主半田卯太郎氏の岳父善兵衛氏等が苦心構築し後大正四年資本金十萬圓株主僅に十名の株式組織に改めたものである。

現に採鹹面積十六町七反歩總面積十七町餘反を擁し鹽質の優良を以て誇りとする。殊に同社は經營の煩瑣を避けて鹽田全部を九名の小作者に卸付け更に其下に八十餘名の就業者あり、會社は唯製鹽上の指導監督の簡易經營に止まる。然して

その受耕者は概ね創立當時より今日まで永續の人多く會社と受耕當事者との關係は極めて和やかに就業して居る。尙設備の完整は至れり盡せりにして、かつて卒先分離機を据付け又電力直結の神藤式排水ポンプの如き如何なる豪雨にも驚くべき排水能力を發揮し、製鹽上の支障を尠からしめて居る。斯の如くして生産鹽は最優一等製鹽の指定を享け更に二等鹽を合して年産約四百萬斤を生産する、確固不動の社礎と營業成績の堅實を誇つて居るのである。會社の單易經營は支配人金崎幸七氏之を處理し、殆ど他を要せず。世に類例少き單易會社である。尙従業員には追賞の規定を設け經營の立場を明かにして居るは會社の賢明と内容の充實を語る所にして、且本縣

製鹽界の錚々たる面目であらう。  
尙重役は、

取締役	津島吉之助
-----	-------

同	村上惣助
同	津島太郎
監査役	大野英一

## 富田製藥株式會社屋島工場

我國に於ける苦汁工業の確立者として徳島縣板野郡瀬戸町富田久三郎氏の如き斯界にとつては實に偉大なる貢獻者と謂ふ。即ち氏は明治十年頃逸早くその郷里靜岡縣に於て同業を創始した。これ我國斯業の嚆矢であると當時もその原料たる苦汁は遠く讃岐より供給して居たのであつて、事の餘りに不便なるに因つて明治二十三年頃徳島に來り工場を新設した。其後更に大正九年神戸鈴木商店が新設經營中の現屋島工場を買収して、直に原料の自給自足たる好適の地縣下に於て活動を開始したのである。

次いで大正十一年綾歌郡林田村に於て大阪の實業家藤澤氏と共同の藤富苦汁所を經營した。同工場は昭和六年藤澤氏にその全部を譲渡し隨つて現在では屋島工場は富田氏の讃岐の

本據として硫酸マグネシウム、一日一萬疋、加性ソーダ四百疋、この副産として一ヶ年製鹽十五萬疋を生産して居る。而してこれ等製品は多く人絹製造用として滋賀縣東京九州及一部は支那にも輸出して居る。  
斯の如く苦汁は其用途極めて廣汎なる重要化學原料であるが、我國製鹽業の本場にこの再製化學工業の發展せる事は洵に意を強ふし、この發達の楔機を作れる本工場主富田氏の貢獻は偉大と謂ふべきであらう。氏はこれ等産業上の功勞に因つてさきに紺綬章を下賜された。目下同工場は支配人松島久太郎氏が同工場の創始以來支配經營の衝に當つて居るが其成績見るべきものがある。



## 川島の鈴木醬油釀造場

本縣釀造界の雄として名を縣外に響く印象し偉大なる進展の歩地を刻んで居る本郡川島町鈴木醬油釀造場菱茂印醬油の名は餘りにも明るき存在である。現時斯界は競争日に激化し品質價格及サービスに最善を致し各々自己商品に對する大衆的完全認識を獲得すべく苦心と努力を集中して居る。この



尖鋭化した業界に異彩を放つ鈴木商店。

その経営主鈴木茂内氏は明治二十二年創業以來粒々乎として業を勵み今や本縣醬油釀造界一方の雄として一ケ年三千餘石の釀造高を示すの盛況にある。かて、最近の商勢はその名聲と共に販路擴張し一千五百坪になん／＼とする釀造場もあたら狭少を感ずるとは如何に同店が飛躍發展の趨勢にあるかを窺知される。

而も釀造工程に於ては電動機を主幹として近代釀造用機を完備し、品質の向上は勿論一方能率増進を以て殆ど理想的釀造工場たるに愧じない設備を整へて居る。されば生産の醬油は各地方品評會に出品何時も優等賞を受領し、特に最近京都醬油商組合主催の品評會にも一等賞を受け、また六年十一月釀造協會近畿支部主催の品評會に於ては優等賞を受領する等其の商品的聲價や知るべきであらう。

この特筆大書すべき名聲下にあつて然も氏の業的信念には何人も敬服せざる能はざるものがある。即ち狭少な縣下の角逐を快とせず先縣外に活道を求めさきに明治三十八年大阪支店を同四十二年神戸支店を設置し、異常な進展を示すの外四國、中國は素より東京に販路を拓き尙最近臺灣、北海道に進出しつゝある。その進取的意氣と商策は一般商家も一應吟味すべき要事に値するがこの事業意識を以て邁進する同店は目下營業の中堅に早稲田に新智識を修めた新進氣鋭の茂君これに當つて居る、鈴木氏は他面に永年川島町會議員として自治に盡瘁し其の人格徳望は今尙同町の元老として信望を寬めて居る。

## 山田氏と源氏正宗

東嶺有數の名刹にして尊き靈威の輝く八栗寺その抱擁下に繁榮を誇れる山田酒造場。「源氏正宗」は夙に縣外諸酒を斷然凌駕して名實共に斯界の龍兒として轟はれて居る。

同店の創業は遠く明治初年に發し當時高松藩士たりし先代山田徳三郎氏が廢藩と同時に決然と本體村に斯業を創始した爾來約三十年間刻苦精進の後明治四十三年現主榎太郎氏が父業を繼承し新進氣鋭の氏は更に時代の推移を察して營業を革め事業の發展に努力就中釀法の研究には特に細心酒質の向上を期したのである。

さればその釀酒は全國酒釀品評會近畿酒醬油品評會四國清酒品評會縣下酒類品評會等凡ゆる機會に於て常に優賞を受け聲

價揚れば需要又期せずして高まり。業況は展開された爰に於て氏は大正十五年そのころ意に満たざりし酒造庫並に本邸を新築して大いに面目を添へた。

特に山田氏の機を見る敏なるには冬期原料米の手當であつて、此當用は巧者にして業者をして嘖然たらしむる俊敏さ商才は嘆賞の外ない。

今や同店は過去の榮冠を標識して傳統的商策を把握邁進して居るのであるが。この恵まれた順境を往つゝある同氏は常に郷關の信望厚く目下縣下酒造組合評議員、村會議員、信用組合理事八栗寺其他の總代を努め自己を省みず地方發展にも献身して居る。

## 鹽業家大高恒次氏の發奮

かつて本縣産業史上の一項に燦として輝く特産鹽の三白として膾炙雄名を誇つた鹽、砂糖、綿も近代文化の發達經濟

組織の變遷等あらゆる進歩急進に今は只僅にその片影鹽のみ



史と共に光輝を刻む製鹽事業こそ米麦と共に本縣に恵まれた水陸生産の双璧である。就中縣下水産製鹽は專賣法實施以來愈々進歩發達し、地利の好適と相俟つて堅實無比の業績を示して居る本縣本禮村古高松大高恒次氏は、身を一鹽田耕作者より起し前後約五十ヶ年間これに専心努力遂に巨萬の富を築き且本縣下製鹽界に多大の貢獻を爲して居る。

同氏の目下經營に屬する本禮久通濱鹽田は明治十一年頃揚氏經營鹽田を譲受けたものであるが、當時は專賣前なれば鹽は概ね大阪方面に販賣し地方需要は僅に年末のみ茲に於て氏は自己製鹽の聲價を高むべく種々苦慮したもので、殊に取引の確實と云ふ事で氏の大高鹽はその名を天下に轟はれ、そし

## 本縣蠶糸業と山田惠一氏

さきに大正六年を黎明期に突如として勃興の機運を萌した本縣蠶糸産業は日ならず歐洲大戦景氣に因つて最短期間に驚くべき發達を來したが、この間斯業をして爰に誘致せし、そこには幾多の血と汗貴重な努力と最大の犠牲を點縮する即ち

てよく讃岐鹽の輝かしき名風をなした。

かくて氏の鹽は明治二十年以來各博覽會、水産會等に際して何時も賞牌賞状を受け。この名聲下に氏は愈々發奮し專賣實施後更に二百臺の鹽田を買収して自己本來の輝く希望と理想を達成した。更に氏の事業に對する研究は眞摯にして改良壺セメント臺の如き疾くに着創した所で恒心よく恒産の眞理を如實に体現して居る。尙大正九年帝國水難救濟會に盡瘁の故を以て特に大阪商船會社より終世の優遇を受け。又村會議員として村自治に盡し、今も全國十州鹽田幹事並に東讃鹽田理事平禮鹽業組合長の要務に當る等氏の如き世にも稀な立志成功の人と謂ふべきである。

故人山田惠一氏が献身の努力その賜で、従つて本縣斯界の人々が氏を目して本縣製糸業の父と呼ぶ所以もここに在る。

凡そ世に獨創の貴きを知る如く前人未踏の地を開拓する事又難しと、蓋し自らを信する不拔の信念の下に主一撓ゆまず

倦まず汝々として精進せば局面の打開は必然にして山田氏の遺業と一大功績も即ちこの貴き實訓に外ならない。

山田氏は本縣前田村の豪農にして殊に農事に多大の關心を持ち永年本縣農會長に推されて居た。その天稟の果斷豪毅は大正六年頃當時縣下養蠶業勃々として隆興し、之が生繭の徒らに縣外に移出するの極めて拙なるを痛嘆して、製絲業の必要にして有利なるを思察遂に決然獨力を以て製絲工場設立に着手した。

かくて氏は自ら製絲に關する一切を斯界の先進地に就て究め又人を派しこれを習得せしめなどして、漸く六年六月百八釜の工場を整備し、農村子女二百餘名を收容操業した。この山田氏の苦心果敢な壯舉に對して當時縣當局も地方産業開發上絶大なる讃辭を以て迎へ、特に技師を工場に派遣する等、よくその偉大なる劃期的大事業の發展を助成した。されば内外呼應して山田氏の事業は逐日順境を辿り一躍名聲を轟はれた。この間氏の異常な躍進を眺めて無謀な莫逆者流の續出も又この頃であつた。これと前後して氏は縣農會長に選ばれ且大正十五年貴族院多額納稅議員に選出され、業界政界に活躍殊に頃來襲ひし財界の變動に善處獨得の手腕を發揮しつゝあ

つたが、惜しむらく昭和五年世を擧げて殺人的不況に沈淪し巨器に俟つ處多きに不拘又輝く春秋を残して、五十七歳を一期に十二月十三日氏は遽然他界した。實に此卒去は本縣蠶糸界並に事業界の一大損失のみならず國家的損失でもあつた。而して巨人山田惠一氏逝去後も事業的基礎を確立せる山田製絲場は縣下製絲界の中樞として、令弟堅三氏これを繼承發展して居る。

尙氏の永眠に際して畏き邊りでは生前絲界の功勞に對し特に正六位を追賜され、又大日本蠶絲會に於ても紅授功績章を贈つてその功績と名譽を表彰した。これ死して尙且餘光と云ひ氏及其一門にとつて無類の光榮のみならず、本縣製絲界の歴史を飾る燦たる輝きでもある。



## 製絲業植村裕吉氏

かつて本縣産業戦線に新興の意氣も物凄く然も原料の自給自足を唯一最大の強味として跳躍的展開を爲したものに機械製糸事業がある。

この製糸業は歐洲大戰を契機に時を笑顔と縣下各地に雨後の筍の如く簇出し一時釜數一千釜を數ふるの盛況を見たのであつたが、其後所謂反動的財界不況の波動は温袍育ちの我製糸業に一瞥もくれず、又自ら抗すべくもなく無慘にも昔日の俸は植花一朝の夢と化し去つた。

本縣製糸界の當時の惨風に想到する時はあたら感慨切なるを覺えざるを得ない。もとよりこれ人の世の轉變事業の盛衰興亡は多く馳逐の外にあり然も縣下製糸界のそれは恐らく發展途上に於ける尊き試練にして、その間不堅實なる淵源に激成された泡沫分子は遂に自然淘汰の運命に屈したと謂ふの外ない。只其多難なる試練を見事打開し自家生存の鐵則を完全に把握した現實の優者こそ眞に誇るべき本縣製糸界の事業的名聲を享受し得るものである。

而して本縣製糸界の現況は概ね木田郡を中心として居るが

同郡川添村植村祐吉氏は現下本縣製糸界の雄として將來を囑目されて居る一人である。植村祐吉その人は木田郡前田村に生れ大正五年二十一歳の時父に死別し、當時多額の負債と幼き弟妹九人の養育を脊負へば、爰に意を決して居村山田恵一氏方に奉公し、斯くて辛うじて一家を支へた。去とて將來の責任の重大を思ふ時氏は切々として眞に迫るを覺ゆるのであつた。體て吾に返れば一意主家のために一木一石分秒をも惜しみ以て拔きんづれば主人の信認は素より一般村人もその善行を激賞した。かくて歲月と共に氏は主人經營の製糸事業に興味を感じ且自ら期するありかくて。山田氏に仕へる事十ヶ年遂に大正十四年五月二十九歳にして山田方を固辭し、當時休業中の川添製糸工場(十四釜)を借り受け、以て操業經營した即ち現に本縣製糸界の新人として斯界に萬丈の氣を吐く植村工場こそこゝに端を發し、以來血と肉を唯一無二の資本に空手空拳敢然として嶮難浪濤の斯界に突入した。此時の氏は只

其の有する貴き經驗にながす汗と油、努力を一途に直往邁進あるのみで、殊に藪の買入等には深夜自ら荷車をかけて搬入運送費を節する等、又内にあつては多くの弟妹を督し製糸に心を砕き糸の販賣亦然りにして斯く文字通り涙ぐまじき奮闘精進を續けた。

されば天日の高樓を照す如く業況は進展を萌し爰に氏は内心雀躍の情も禁じ得ず、更に發奮を續け昭和二年九月該工場を買収と一大擴張を劃し遂には六十釜工場を完成した、此躍進を遂げて年額二萬數千斤十數萬圓を生産、一躍縣下屈指の製糸家として盛名を轟はるゝに至つた。これを觀じて縣下製糸家の多くは操業の困難を啣ち或は屍体累々たるその中に獨り植村祐吉氏のみが旭昇の勢ひを以て凡ゆる難苦の鐵原を蹴つて燦然たる陽光に恵まれ、營業基礎の堅實と製糸の優秀を誇る夫一に氏が把持する大儲より小儲百姓すると思つてとい

ふ聊かも投機性を含まざる堅實無比のそれと製品よりは現金人より多く働く。この信條に於て到れり盡せりと謂ふべく、然も十人の兄弟は一致協力奮々として各々共同の目的に向つて渾身の偉力を發揮すれば、繁榮は期せずして現實に植村製糸工場を訪れ問屋は勿論内外の信用愈々高まり、名實共に本縣製糸界の名聲を双肩に擔ふのみならず、斯界の向上發達にも偉大なる貢獻を爲したのである。

更に氏は最近一般財界並に絹糸界不況を眺め且人造絹絲進出の對策として昭和四年絹織部を併設し、自己生産生絲を原料として羽二重生地其他各種紗物友禪物に至るまで製織染色し絶對保證付として多大なる好評の下に賞用されつゝ。尙將來自己生産生絲全部の前記製織化を理想として居るが如き如何に其商策の進取的なるか全く驚異の外なく尙昭和七年十月には萬金を投じて最新操糸機小岩井式を裝備躍進して居る。

## 牟禮山田製糸工場

本縣製絲業の中心地木田郡に於ける斯界の新進花形として

飛躍發展の一人たるは即ち牟禮製絲場の山田愛助氏であらう。



氏は植村祐吉氏と縁戚にあり。且軌も同じく山田恵一氏麾下の駿足であつて、其の最近の努力發展は本縣製絲業界に一脈の颯爽たる英姿成功の巨燈を點じてゐる。

その現況を想見して今は亡き地下の舊主山田氏も亦聊か感快を喫し且徳孤ならずでもあるが、なほ兩氏にしては舊主の靈及び恩顧に酬ゆる最大至上の献香でなければならぬ。

山田愛助氏の奉禮製絲所は昭和四年三月五十釜を設備して創業した。之よりさき氏は大正六年十八歳の時前田村山田恵一氏方に奉公に入り、間もなく製絲技術研究のため愛媛縣に赴き此處に於て大に修練をかさね、歸郷山田氏のもとにあつて氏經營製絲工場の中堅として誠心内外商務にあたり忠實なる輔翼に任じて居た。かくて昭和四年山田氏方に仕へる事十ヶ年、自己本来の理想と使命に向つて進むべく決意し、且老父家族等の切なる協力に斷然として山田方を辭し、現工場地五百坪を卜して獨立自營製絲事業を創始した。時恰も縣下製糸界を風靡する陰慘な氣は一般の不況と共に可成深刻であつたが、その中に身を挺ししかも巨萬の資を投ずる氏を目して世間は一大無謀の舉と酷評するだにあつた。然し世に暗愚多く彼に無智と怯懦は常に追従するが、この間嚴として侵すべ

からざる牢固たる氏の前進意識と、更に拍車を打つ先輩植村氏の激勵は彼等に一顧もくれず爾來兩者は唇齒輔車の關係を以て各々機宜を制し着々實績を擧げ、快然凱歌を奏しつゝある事は蓋し異數の進展にして、且本縣事業界に沈黙の長鞭でなくてはならない。

按ずるに何が氏を今日あらしめたか。即ち氏が主家に仕へる十年の刻苦と事業的修練の健全なる良果にして現下農村極度の不況に直面して、これが救済の一助たる好恰の機業を起し郷村子女七十名を收容共存共榮能率増進をモットーに勇往邁進すれば、従業員一同又何れもこれを徳とし感謝しつゝ従事して居る。而して目下創業日尙淺きになほ年産額十萬圓に上る盛況の共處には、氏が營業方針として投機を排し堅實第一主義を信奉するあり隨て養蠶家及生糸問屋の信用は高く、尙昭和七年九月小岩井式多條操糸機械を設備し、能率と品質の向上を期して活躍して居る。

## 平井町植松酒造場

東讃平井町産業界の重鎮として銘酒「寶美人」の醸造元木田郡平井町植松酒造場の名聲はその歴史と基礎の上に赫々たるものがある。

同酒造場は明治四十一年の創業であるが、最初約三百石の試験的造石に果然その良質は旋風的好評絶讃となり。此處に意を強くせる同氏は、爾



來研究を重ねつゝ總意を經營に注げば、大正五年には造石量一千石に達する盛況を見るに至つた。而して販路も獨り縣内に止らず縣外にも進出し、斯界に万丈の氣を吐いた。

然るに大正九年の財界變動に際會して事志と違ひ、以來經營を縮小するに至つたが、しかしその潜勢力は依然牢固として多年の商業的地盤は確保されてゐる。

當主庄太郎氏は年齢五十八歳、現に同町々會議員、信用組合理事或ひは商工會議員として信望あり。長男順一氏の盛年の氣魄精力を合せた現實、同酒場の前途は刮目されてゐる。

## 酒業問島仁平氏と商業方針

近時東讃櫻の新名勝として大川郡長尾町龜鶴公園は春爛漫の清遊に恰好の地として一躍世に謳はれてゐる。尙この地の佛刹として長尾寺あり更に同町産業界門に於ける。森屋の清

酒登門が刻む古蹟問島酒造場の赫々たる歴史と現實は實に同町産業界の誇として燦たるものであらう。

その輝く歴史も祖代三百數十年をかぞへ、就中現仁平氏の



祖父仁兵衛氏以来の發展は驚異すべき躍進振りにして、殊に先代仁平氏はかつて同地の名町長として令名を馳せ、今尙町衆の思慕断ち難きある事も氏の偉大な餘光であらう。

斯て名實共に東讃屈指の酒醸場として築かれた間島酒造場を繼いだ當主仁平氏も又濃厚なる人格者にして現に大川郡酒造組合長、或ひは又町會議員として衆望を宛めてゐる。



特に同氏が公私世に處する信條として總ての場合人に一步を譲り決して争はない事である。一時勝を譲つて名を得せしめる事必ずしも自己の敗退を意味せず、却て争ふ努力よりか争はざる努力の効果の大なるを自信して居る。この信念のうるはしきそして貴き道徳律を把握する氏の人格と修養こそ床しき限であるが。酒業に於ても夙に自己實力の運用に一切危険と無理をなさず、細心周到なる經營振りはこれ即ち東讃斯界の重鎮たる氏の自重堅實なる商策でもある隨つて吟醸酒登門は酒質と人格を合せての古豪不動の業況を誇る雄名であつて、即ち間島酒造にゆるされた特異の輝きであらう。

## 酒造家 玉木 傳治郎氏

近時東讃酒醸界に於ける麒麟とも謂ふ長尾町玉木酒造場の飛躍進展は又素晴らしい。その吟醸龜鶴正宗は恰も地の名勝龜鶴公園と共に日に大衆の認識を深めて隆々たるものであ

る。

同店は傳次郎氏が明治二十年頃十八才にしてその生家造田村玉木酒造場の長尾方面販賣を擔任せし以來に發し父の、末

子たる氏は生來商才に長け、商況日に見るべきものあり。爰に於て何ものかを自信した氏は數年後自己醸造を決意して獨力前記酒造に着手した。時は二十七年にして爰に最も難中の難たる販賣の秘訣を既に會得し居ればとて最初の三百石は殆んど小賣のみに充當するの盛況を見、其後龜鶴公園の生るゝやその名に因んで龜鶴正宗と銘し、地の龜鶴名勝は銘酒龜鶴に通じて逐日人口に膾炙揚揚龜鶴の酒名は東讃斯界を風靡すると共に事業の根幹は培養されたのである。氏はこの順潮を眺め更に意を醸造設備の完備に傾け時の様



式による酒質の向上を期せば醸酒は毎期各品評會に最優の入賞を續けて、世の好酒家を狂喜せしめた。

素より龜鶴正宗の發展は畢竟玉木傳次郎氏の酒業一念身命を賭した熱誠と其商業秘訣買ふ時果斷賣る時靜慮を總てに授用の結果にして、特に業に従事する一同は常にその行ひを自ら誠め使用人の如き、今尙一切夜間外出を禁じて各々薰化修養につとめしむる等、あらゆる努力は今日の發展の主因をなして居るのである。

現にその醸酒は高松支店の外大阪、岡山、徳島等縣内外に飛躍し酒質を謳はれて居るが、目下主とし酒業に當れる長子俊雄氏は新進の業者として早くも近代的營業戰術を理了して聲價の轟く父業を一層の進展に日夜精進して居る。

## 長尾の龜鶴醬油



さきに世に埋もれし名花とは云ひし東讃長尾龜鶴の櫻も今や時の盛時に際會してこの觀賞價値は愈々燎郎として大衆の認識を極めつゝあるが、此處の事業界に咲く龜鶴醬油も又地の一事業華でなければならぬ。

即ち龜鶴醬油は地の名望醫庵原謙立氏より岐るゝ正謙氏が大正六年の創業にして當時



二十五才の氏は、自ら父醫を外に産業の一線を志し斯業を創始した以來全く無経験の氏は幾多業界の波濤に揉まれ、つ常に自奮自助して、初志に邁進し遂に業況の安定と今日の發展を遂げたこの龜鶴公園の櫻香に因む品質本位の龜鶴醬油とその名聲こそ名醫に育くまれし氏が努力の名花にして尙氏は東讃斯界の評議員とし又町會議員として活躍、同町事業界の新人逸材としてその前途春秋の多幸こそ想はれて居る。

## 青年醸造家小倉九平氏

東讃志度町に於ける醬油醸造家小倉九平氏の如き同地の青年事業家として近時鋭角的躍進の商況を見せつゝあるが、同家は先に金物並に質商より轉じて既に四代の醸造歴史を有つ

て居る同町の舊家にして昭和六年先代九平氏歿後若き當主は父名を襲ひ以來店業に従事



し一意邁進發展を劃した。殊にその有する信用聲價の地阪神は不拔の堅壘にして氏醸造「ヒシモト」醬油の品質盛名はこれを誦はれて日々幸ある進境を示しつゝあるが、今や青年二

十五才の九平氏は時代の要求する事業人材としてその傳統的商才鋭氣を奮つて祖業に精進しつゝあるこそ實に雄壯の限りである。

## 玉木酒醸造場と金龍の香

中考の史實をしかも彩る多き東讃玉木浦即ち現時の志度町こそ史跡由緒の地である。識る人ぞ知ること由緒の地に又近代名華の一輪何んと相應しくも床しき事ではあらう。

こゝに左記玉木浦に因んで銘酒玉木「金龍」を醸造する玉木酒造場こそこの辭をこそ誦はしめて居る。同酒造場は明治廿四年始祖玉木九郎平氏が田村より來つて酒釀を創めたが、以來恵まれの水質と氏の實直を相俟つて漸時東讃斯界に



頭を擽げ、更に不撓の刻苦は愈々確乎たる基礎を築いたのである。

然るに大正十二年九郎平氏が最愛の、嗣柱光明氏は少壯二十八歳を一期に卒去した。この一事は尠くも同家にとつて陽光一時に絶へ暗而愁傷の切なるものにして、就中老年の父九郎平氏が痛心は無常であつた。遂に其九月氏もまた長子の後を尋ねて長逝したが、この重なる一家の悲惨悵歎すべき不幸の洗禮が裡にも逝ける光明氏の妻艶子女は一子良明母小安女と共に父業酒釀經營を決意し、その萬難に當つた。即ち同家は當時二十餘才青春の色未だ失せざるに、しかも身を一家の犠牲として酒釀の一線に立つたのである。事すでに我が大和婦人の傳統として誇る精神美の体现でなければならぬ。



かくて内外商交渉の各般に於ても些の間然なく又眞に男勝りの信念は母と共に柔よく剛を制し、他而飽迄女性を失せざる態容舉止を以つて多くの倉人を總て主従合體一意酒業に精進しつゝあるが、此事は既に十年、現に吟醸する玉浦金龍玉の花等その聲價を誇ると共に業運は舊を凌いで隆々たるも

## 玉浦製糸工場

本縣製絲界の二龍その一つと稱せらるゝ志度玉浦製絲工場こそ同町濱田岩古氏經營の模範工場である。昭和七年三月我國重要物産統制の見地に農林省は、先づ全國製絲界の實情に就て嚴密なる點檢調査を下した。この結果本縣に於ても經營内容の整然完備し然も生産糸質の優秀を擧げて農林省の推賞レベルを衝くもの東西二工場を抽出表彰があつた。

その誇るべき一工場こそ即ち濱田氏の玉浦工場にして、爰に輝く折紙附の同工場は昭和二年頃藤森某の企畫に成つた同工場を四圍の事情上遂に昭和四年濱田氏が經營する事になつた。當時麥稈を業とした氏は之を決意するや全幅の心力を須

のあり今や同女はその一子良明君の成年を心に待つてこれが專一無上の幸慶として邁進する貞婦麗子女こそ近代女性の鑑にして又犯すべからざる尊嚴を合せた敬すべき女事業家とは謂ふべきであらう。

ひてこれに當り、斯くて裝備する三十釜の全能を運轉には先づ技量優秀の職工を配し同時に買入れる、藪を嚴擇して特に糸質の向上を計れば、實績は豫期の如くに進展し漸時事業基礎は築かれて行つた。之偏に氏が最初の發足極めて賢明なりしと終始一貫堅實を一途に刻苦の賜にして、然り其後數年に亘る一般斯界死苦の慘風にも同工場は一日も休むなく獨り超然不動の操業を繼續異常の信用聲價を擧はれてゐる。

## 堅實を誇る讚岐酒造株式會社

大川郡津田町の長汀曲浦を彩る青松白砂を以つて名もゆかしき琴林公園松原は傳ふところ六百餘年前、植栽されたものだと云はれるが、霜雪に屈せぬ節操を綠翠に見せて讚岐海岸美の王座を占め、さきに國立公園の選定委員達によつて海岸美中全國随一とまでの折紙を附せられたのは事實である。

この名邑津田町に千年の榮を競ふ銘酒「琴の露」の讚岐酒造株式會社がある。

同社は大正七年六月の創立  
資本金五萬圓を擁して日進月



歩その進展には驚異的記録を作つてゐる。その販賣網は大川木田兩郡を中心に縣外阪神方面へも若干の進出を見せてゐる尙同社について更に特筆大書すべきは創立以來今日まで常に一割の高率配當を續け、其上更に積立金二萬數千圓を有する堅實無比の營業であらう。

不況の嵐吹荒ぶなかに琴林の巨松にも似て泰然自若恐らく中東讚隨一と見られてゐるが、この好成绩營業状態の蔭に燦然と輝くものは同社取締役社長津川善七氏の功績である。同氏は齡四十歳に至るまで二十餘年間軍隊生活を爲し、大正六年退役するや從兄津川是氏が明治元年に創立した同町の酒造場の再興として會社に關係するや時恰も未曾有の好況時代の潮に乗つて、異常の發展をとげ、軍人出身者中に稀なる業界の成功者として萬丈の氣を吐いた。殊に氏が軍隊生活中に於いて經濟に對する絶えざる關心の賜幸事こゝに判らしめたとはいふべきであらう。

その營業方針の如きも利益金の三分の一を配當に充て、殘る三分の二を以て社の内容充實に努めるといつた飽まで石橋叩いて通るの堅實一方をモットーとして造酒量なども「賣れるだけを作る」主義で放漫政策は斷然退け偶ま収益多かりし際などに無謀なる増石を懲罰する者があつても、一切耳を藉さず株主から事業を預つて經營してゐる以上は自分の事業と



して如何なる不況時代來るとも株主に不快を及ぼす如き種を蒔いてはならぬとの信念から堅實更に堅實を以て進み遂に現在の常緑樹的繁榮をもたらしたのである。従つて氏の感化は常に従業員使用人に反映し其處に醸し出される銘酒の聲價と夫に同社の存在は愈々補強されてゐる。因に同社重役は左の

通り。

取締役社長	津川善七
取締役	大眉強
同	大眉勇
監査役	石井與一郎

## 津田の銘酒「琴の譽」

東讃の景勝琴林公園の白砂青松と共に輝く大川郡津田町の醸造界の巨星に清酒「琴の譽」の醸造元兼原酒造場がある。

播磨灘の岩浪寄せ打つところ琴する如く松林にも傳ふ又杜氏たちの謳歌する酒神パツカスの歌聲も朗かに流れ流れ響いて今や高松以東大川、木田兩郡を中心とその進出活躍振りは眼覺しきものがある。當主木村茂氏は徳島市の生れ普通寺工兵隊に兵營生活を送つた後、木村



家に入嗣したが、氏は生家徳島市屈指の兼原酒造場に於て育まれた。その若き日の酒造の體驗を遂に自らの双腕によつてためさんの時節到來するや先づ同町に於て休業中であつた某酒造場を借り受け創業した爾來不斷の精進を重ねて大正五年その頃附近にあつて寺井屋と稱する老舗酒造場の土地建物器具一切を買ひ取つて、愈々兼原酒造場の本格的活躍を起したかくて逐年その品質の向上と販路擴張に示された木村氏の敏腕は益々芽えて圓熟こゝに四十六歳その濃厚篤實なる人格と相俟つて斯界の信望いよ／＼厚く琴林公園の名に因む琴の譽の名聲を高めてゐる。

## 栗生充武氏と其の醤油

東讃醸造界の新人にして物々たる朝氣に燃ゆる廿九歳の青年事業家大川郡津田町栗生醤油醸造場主栗生充武氏の奮闘は津田の濱邊に躍る磯浪の如く、琴林の松原に奏でる松籟の如く、清新たに澄刺たるものがある同醤油醸造場は當主充武氏より四代前の祖藤三郎氏が同町の名家栗生家を分家創業して以來老舗の名は次第に高く、爾來幾十星



霜、同店の堅實なる經營方針は歴代主の才腕によつて益々盤石のごとき業礎を固め生産品の販路の如きも千鳥鳴く淡路島の彼方、阪神方面の市場にまで進出して讃岐醤油のため萬丈の氣を吐いたが、先代友次郎氏が可惜四十五歳の才幹に春秋を殘して他界した。後に當時僅五歳の當主充武氏は叔父に當る鎌田伊三郎氏の助成により寂しき營業を續けてゐたが、充武氏漸く長じて大川中學を卒業するや、一意専心父業に没入し堅忍不拔の努力健闘を續けて居る。今や栗生醤油の呼び聲は名邑津田町の誇りとして東讃醸造界に未來を期待されてゐるのである。

## 藤目七郎氏の製絲とバス

- 93 -  
近時東讃事業界の奇才として其腕を製糸業並に自動車運輸に奮ひ着々實績を擧げて居る俊材に松尾村藤目七郎氏がある

今や氏の兩事業は天の試練不況の壓力に耐へて輝きの光明をば辿つて居る。



素より氏がこの進境に達する途半には幾多の難路曲折は嘗ならぬものあり。特に強記すべき出發の善意が発見されるのである。

氏は明治五年同郡鴨部村下庄に生れ物心以來村で猫車や大八車に汗を流して家計を樹てねばならなかつた。この臥薪嘗膽の裡に後年の奇才は二十二歳の時明敏にも養蠶業の將來に着



目しまづその飼育研究に着手した。次いで明治三十年には一廉の養蠶教師となつたが。その後縣下蠶業は漸時發達を來したれば、春秋の産繭も驚くべき数字を示すに至つた。

然るに爰に不合理とするは一般農家の經濟智識の幼稚に基く即ち生産を知つて販賣を知らない事である折角不眠不休生産せし繭そのものもあたら縣外不正仲買の跋扈し全く知らぬは佛で、彼等の跳梁に若き藤目氏は痛奮し、遂に本縣最初の繭問屋を開業して、この横暴なる縣外仲買人を牽制すると同時に縣下養蠶家の利益に起つた。

爾來氏の献身的努力と熱誠は本縣養蠶家の衆望を擔ひ、信

用益々高く大正八年に至つて同地方有志は努力の人藤目氏を中心して大川製絲株式會社組織の議起り遂に實現した。現に同氏が専務として經營の一線に立ち活躍せる會社である。同社は目下最新式改良釜七十八其他合せて百釜を操行し、左記重役を連ねて縣下有力製絲工場に數へられて居る。

又現在高松電軌と連御して長尾引田間の交通運輸の衝に當れる大正自動車商會も氏の經營にして、是又幾多の苦杯を喫しつゝ大正十年以來區間唯一の交通文化として獻身社會的使命を全ふしつゝある。

更に引田徳島間の阿讃自動車之も氏の經營に屬し斯る産業と交通の兩事業に健闘貢獻しつゝある氏は、他面、自村松尾村會議員として自治に盡し、殊に村百年の大計として自ら金四百圓を同村部落に金一百圓を村教育費に交附し、これを村大衆に金融し、然も元利を百年間据置き其の蓄積の偉力に由つて全村の福祉増進を企劃する等、又氏は卒先國防費を獻納して。之が本縣最初の軍用金取扱ひであつたと。此如く氏の社會觀念の高貴さはあれと謂ひ是と謂ひ實に衆人の意表に出でざるなく、世の經士として嘆賞すべき行者とするは、隨つて氏を繞る各事業の展望も蓋し洋々たるも當然にして、過般

氏の産業的努力貢獻を多として地方有志關係者は其頌德碑を建立したのである。尙大川製絲の現重役は左の通り。

社長 池田熊吉  
専務取締役 藤目七郎  
取締役 池田善平

### 帝國製藥株式會社

凡そ現代醫學の眞使命が人類の生命保全乃至肉體改造を所謂生存活動の組織整調にありとて、今やその理想は愈々精緻

を究め全く驚異の異域に進展しつゝあり。これ全人類に膺す偉大なる文化の福祉でなければならぬ。



この醫學の驚く發達進歩と共に併進して齊しく國民保

健の上に重要な貢獻を爲せるこそ家庭用藥であらう。本縣三本松町はこの文化的家庭用藥製造の町として夙に著名では

ある。

その各種家庭藥は一般大衆が常に愛用して顯著な效率を示し、直接醫療に途遠き彼等の保健に貢獻しつゝある事は至大である。この地の藥業は大正七年を一期に勃々とし起つたこれより先同地の赤澤忠太郎氏一家はかつてその祖先以來七代三百年に亘る有名な藥種商であつた。

明治十九年忠太郎氏は其祖業を繼承するや早くも醫事に恵まれざる寒村僻地大衆の保健に資すべく、家庭藥製造を着想し、苦心研究の結果これを創始した。以來赤澤製藥所の名に於て各地に行商人を派して販賣せしめしに、此事意外の歡迎

同 松下文助  
同 三木徳次郎  
同 監査役 瀧田三郎  
同 同 阪東幸三  
同 同 多田碧



を受け年と共に發展したが、これを見た氏は一層の責任を感じ更に研究をかさねて眞に文化的家庭即効藥たる名譽を博した。かくて大正七年東讀の鉦々佐野新平氏等有志は赤澤製藥事業の將來極めて有望なると又斯業を以つて地方産業化せしめんとする趣旨より氏および其事業を中心に資本金百萬圓の帝國製藥株式會社を組織し、時代の要求する多量生産機構を整へた。茲に同社は永年の研究經驗の士赤澤忠太郎氏を専務に更に努力と研究を加へてその特製藥千金丹、神藥、神靈丸小兒丸等特撰賣藥五十方劑對症製劑百方劑其他各種を調製全國津々に特効を謳はれて來たのである。

ことにその和漢洋の配劑は眞に遺憾なき家庭急救藥として誇り且地の特殊産業として大いに氣を吐いて居るが、赤澤氏

は社業による大衆の保健に直接間接の寄與貢獻をなしつつなほ地の商工會長とし現に完工中の東洋紡工場の設置の如きは有志と共に五ヶ年の努力を傾けて遂に實現せしめ、又港灣施設等同町發展の全面に盡瘁して地の先覺的人材ではある。ちなみに帝國製藥株式會社の現重役は左の通り。

社長	佐野新平
專務取締役	赤澤忠太郎
取締役	赤澤恒三郎
同	廣瀬岩太郎
監査役	國方潤吾
同	赤澤正寛

## 日本製藥株式會社

世界大戰を一機として一大躍進を遂げた我國内産業中本縣の特殊産業たる東讀三本松の製藥事業の如きも又特筆すべき急角の發展を示して居る。以來同町は讀岐の誇る藥の町とし

て全國的認識下にその生産家庭用藥は國民保健の重要性に於て時日と費用を省く簡便治病劑として大衆保健の安全線確保に寄與しつつある。然も同事業が殆ど縣外移出に俟ち、一ヶ年

の賣上高約百萬圓にも達せんとする現況は同産業の重要性を如實に語るものである。而して最近この地に於て異常の實績を挙げつゝある日本製藥株式會社は

大正六年資本金十五萬圓を以て成立するや、時代の要求する家庭用藥製造に腐心し、遂に同社の獨創二十八組湯千金丹、クリンチン等各種家庭藥を創成し主として關東方面を中心に都鄙を通じて一般に發賣を試みた



が、その著しき效驗は遂に全國的の發展ともなり。今日では海外にも及ぶ盛況を呈するに至つた。

藥中特にクリンチンの如き同社の獨得製劑にして、皮膚刺戟藥誘動藥鎮痛藥消炎藥を適合せるアルコール製劑にして、神經痛、頭痛、リウマチス、疝氣、耳痛等總て疼痛局所の鎮靜に驚くべき藥效を發揮し、又肝油劑の如き何れも時代文化の精進歩の華を刻んだ眞に大衆保健の好資たる重責に愧るなき貴重な家庭用藥だと。故なるかな同社は目下の不況にも極めて堅實なる業績を示して發展して居る。

## 大日本帝國青年團藥院

現下國民的叫びの自力更生は果してこの類蘭を既例に覆へし昭和維新を創造し得るや、尠くともその成否は國家細胞各自がこの難局を處するに決然舊來の不軌不條理の一切を精算し時代的合理的統營を爲すか爲さざるに因つて決せらるゝ問題であつて、即ちこの時局に課せられた國民的の大事業である

この時の自力更生も少しく時代に明るき人々にとつては何等の奇異をも感じないのみならず、何時の世にも當然の處世策ではあらねばならぬ。即ち刻一刻進歩の世には時を問はずその全有機層を動員して怠りなく合理化し統營すべきを本來要求されて居るからである。



こゝに我三本松製藥界にあつて率先その人爲機構を時代化し發展して刻下自力更生の世に以て範示とも謂ふべきものがある。これ同町の大日本帝國青年團藥院にして、その概況は次の如くである。

同院はさきに三共製藥所として山田友吉氏これを経営し、専ら各種家庭用藥を製造販賣しつゝあつたが、昭和五年三月山田氏は現代社會生活並に個人生活の動向を察して、その製造になる各種用藥を全國市町村青年團又は在郷軍人、消防組、

婦人會等公共團體に依りて一般家庭に供給し、然も給付する一定の手数料はこれを各團體の基金として蓄積又は公共事業資金に充當すべく實施したが、斯の如きは販賣の時代化合理化と稱すべきであつて、のみならずその製藥は常に文化の進展に尖端し保健と衛生に不斷の研究を以つて家庭の急回藥として信用を博して居るが、この共存共榮に發足した山田氏の藥院その商策こそ非常を叫ぶるゝの現時に於て意義多き着創ではある。

## 東洋製藥株式會社

世に人生最大の幸福は健康にありと、即ち人の一切の恣意愉悅もこゝに源泉し、故にこのところ健康は人の運命を綜合支配する一種の道德であらう。

健康を烙印するに於てあるひは現實共同社會への大なる奉仕とも謂ふべく、この意識する健康即ち保健に就ては各人の文化的意慾及び現代醫學の權威に於て、着々防護の實績を數へられつゝあるにも尙開拓の途地深々たるものあり。殊に這

般長くも我が皇室には巨額の内帑を以て全國細民階級の醫療施設を助成されし實に國民保健の向上幸福を至念さるゝの尊き御聖旨に外ならない。

素より保健が單に個人の生存活動を意義する外更に國家の生存にも相關する重要事に於て粗視すべからざるや勿論である。近時の如く總ての生活機構は煩雜に彌が上にも心身の過勞を來し、時に保健の注意も及ばざる事あり。特に健康の克

服には充分の用意を必要とするこの時に於いて本縣に誇る藥の町三本松の製藥業は一般醫療界の進歩が恰も無限の曠野を往く如く同地製藥業の行程も又これに追従あるひは先驅し科學的意圖に邁進して、大衆保健に多大なる貢獻を爲しつゝあるは大いに意を強ふする次第である。

爰に同地東洋製藥株式會社はその雄にして、かつて明治三十六年以來現常務港愛象氏が個人經營の愛生堂藥房を大正八年資本金二十萬圓の株式組織に改組、一層の整備を加へて經營せる所である。隨つて港氏の久しき經驗技術並にこれに近

代藥劑科學應用の各種責任製藥は急回家庭藥用として、全國的に發展盛名を博して居るのである。

就中同社の專賣秘藥大効丸、正露丸、長壽丸、大和櫻等は此の藥效眞に驚くべきあり。この外百余種の製藥は殆ど萬病肉體の末梢的異狀にも夫々特異の治癒消炎を作用し、然も尙藥價の低廉と即施治病の輕妙さに家庭急回藥たる眞面目を發揮されて居る。目下同社の幹部は左の諸氏である。

社長 池田善平 常務取締役 河野傳助  
常務取締役 港愛象 監査役 河井久吉

## 三本松の四ツ目酒造會社

東講藥の町として世に誇る三本松町に地の銘酒「男達」を誇る四ツ目酒造合名會社がある。同社は元津田屋と稱し嘉永二年以來歴史ある酒釀を明治三十一年地の有志によつて改稱經營し、更に現經營者中野多吉、中條單三、堤順造、大山ツタの四名が譲り受け今日の發展を策した。就中中野多吉氏は兩來同會社を代表し釀造と販賣に専心して恵まれし氣候と水質にそれ不斷の活動を和してその銘酒「男達」逐年の發展とはな

つた。  
殊に又酒質を語る各品評會における男達の聲價は常に誇るべきであつて、これ中野氏の異常の努力によるものである。





# 白鳥本町の江戸屋醤油

東證白鳥本町に於ける江戸屋醤油の名聲は又赫々たるものである。現經營者橋本安平氏は徳島の人で橋本家に入嗣以來その醤油醸造に専念し良品の小賣専門を以て益々江戸屋の名を高めて居る。又町會議員として地方自治に盡して居るが、江戸屋醤油の祖始は今より三代前の安平氏にして即ち明治初年である。

當時安平氏は祖代の廻船業を営み時の千石船を大阪、兵庫に運航し或ひは遠く關東江戸にも及んだ。而して船積の多くは地の海産物であり、又は引田醤油であつた。茲に於て安平氏はふと醤油の醸造を想ひ廻船業の傍らこれを創始した。以

來世の經驗を積み質實の氏は醸造と海運に由つて資産を築き築けば築く程頭を垂れて世の信望を寬め、遂に今日の大を爲すに至つた。安平氏歿後先代安兵衛氏は廻船業を廢して醸造を一手に經營し、更に當主安平氏に至るが江戸屋醤油をこそ地に嚴たる存在として謳はれて居る。



# 大路辰造氏と其白鳥工場

本縣出身にして縣外に独自の糊業を完成し成功を謳はるゝ人に大阪東區北久太郎町四丁目大路商事株式會社を經營する

同社長大路辰造氏がある。氏は大川郡白鳥本町に生れ明治二十五年十四歳にして上阪、以來立志切々として己を築き、遂

に今日の偉業を建設一般郷黨の人心に生ける誇りと輝く示唆を以て讃仰を寬めて居る。

殊に氏が縣外大阪に確固たる商業的經濟的地盤を築くや、更に本縣産業振興に寄與すべく生地東證白鳥に巨費一事業を設定し經營しつゝある如き、即ち同氏の眞實躍如たるものにして大路商事白鳥工場のそれである。



は其の年の風尙寒き三月職を求めて上阪した。途中帆船に數日の苦しみを喫して半死半生漸く大阪川口に着いたが、初旅

の疲れを休む暇もなく直に口を尋ね歩き漸く大阪東區御堂筋米谷履物問屋に丁稚として這入る事となつた。以來夜となく晝となく花緒の商なひに従事し、殆ど人一倍の勞務勉勵を續けた。何が氏にこの辛勞と刻苦を積ませたか。素より彼には郷里を離れるその時早くも一廉の大商人にならでは故郷に歸らないと謂ふ幼ながらの理想と希望は燃へて居た。

されば育ちの純朴さに性來の志操剛健は自ら群鶴の一鶴として年と共に店主に認められ、囑目の拍車は遂に在店八ヶ年の時機敏の氏は主人に獨立自營の素志を陳べ惜しまれつゝも前途の爲めに米谷の店を離れ爰に斷然として履物店を開いた即ち明治三十三年であつた。

爾來凡ゆる困難痛苦に自らを陶冶しつゝ過去の体験を實行に移し、理想に向つて精進を續けたが、遂に今日氏は我國履物界の俊雄として斯界に君臨し、更にゴムベルト帆布其他生産事業を經營又各種會社に關係して大阪財界に勢威を振つて居るが、その白鳥工場こそ帆布製造工場にして、年額五十萬圓を生産し、ハタツバメ印帆布の名聲も大阪東京、九州、に赫々たるものがある。同工場はさきに花緒原料ベツチンコルーテ



ンを製織しつゝあつたが、這般帆布製織に轉向されたもので現に職工百四十名を使用し、氏の近親新進の山地長八氏工場長として堅實經營に當つて居るが、如上大路氏の如き實に本

縣出身の誇るべき經濟人としてその燦々たる過去及び現實は空虛な理想と淺薄なる欲求にのみ燃へて實踐の勇作はざる多くの現代青年には極めて高貴な實訓でこそあらねばならぬ。

## 白鳥町竹内義太郎氏と醬油業

東讃白鳥町此地に有名なる白鳥神社は古來弓矢の神として國史に威武を綴らせ給ふ日本武尊を奉祠する。然も其の清淨



なる神域の一帯の松原そして一連渺茫たる播磨灘の浪濤も此處では靜に白砂と載れて居る。この風光淨地こそ正に自然の神境にして勝地讃岐の東部名勝ではある。

更に此由緒ある白鳥町の近代産業にも各種機業と醸造業あり何れも生氣發射、特記に値するが殊に地の商工會長竹内義太郎氏は醬油酢を醸造し令名を馳せて居る。その醬油は文政

十二年以來の歴史を有し先代勝三郎氏の創業にして十五歳の折綾歌郡飯野村横田家より同家に入家した義太郎氏は明治三十五年家業の一切を繼承したが、以後其熱と努力は當時百石前後の造石商況を日に月に發展せしめ、今日東讃有数の醬油醸造家として阪神地は素より高松、徳島に支店を置き岡山、廣島等諸地方に聲價を博して居る。

氏の事業經營に巧にして、手腕の卓越せるかはこれを以つて證するに足るが、尙その偉材たるは町會議員として約三十年の長きを勤め、又信用組合長、商工會長等多大なる貢獻を爲し、尙近時名勝白鳥神社と松原を中心に百燈會を組織し、その企にも氏は町民各自に一日煙草二本の節約を強ひ、その

事によつて神社境内に燦々たる電燈を點じ得べしと力説遂に實現せしめた。又白鳥海水浴場が今日の發展も一つに氏の努力による所であつて、此の如く自治と産業の兩面に竹内氏の

人格識見は誦はれ最近名譽町長に推されしは氏の面目を語つて餘りある所である。

## 佐野新平氏と其の井筒屋醬油

東讃事業界の巨人として引田町佐野新平氏の存在は偉大であらう。

その直營する井筒屋醬油は歴史を元祿に發し、以來同地一帶引田醬油の名聲を擡つて江戸積とは稱し、遠く關東地方に移出して一躍引田醬油の聲價を擡はれた程である。

今も引田には幾多の鉦々たる醸造家あり引田醬油の面目は燦然として輝くものがある。佐野氏が祖業醬油醸造業に就いたのは明治三十年頃で以來誇る傳統の聲價を把持し更に營



業の積極化を計つて大阪、徳島等に支店を設置する等異常の活躍を續けた。

その後發展と共に東讃に各種の事業を起して地方産業の振興に資し、更に又縣會議員として二回當選し町會議員として前後四十年の長期に亘つて盡瘁して居る。

これ等産業と自治に對する續られた貢獻は洵に至大であつて、先年實業功勞者として觀菊御宴に召されし事あり。あるひは四國大演習の際には單獨賜謁を仰せつかる等幾多の光榮はこれ氏が過去の公私功績を語るものであつて、感激に値する。目下氏は各種事業に關係を有するが就中この井筒屋醬油は千年の祖業として精進しつゝあり。特に同醬油の特異として誇るべきは獨得の風味にして、その醸法も諸味を必ず二年



乃至三年間貯蔵し完熟後に非らざれば倉出ししない。傳統を嚴守して居る。随つて最上一番生揚醬油は品質に獨得性を講はるゝ所以でもある。

## 醬油地引田の雄山本醸造場

東讃引田町は西に高松東に徳島の兩市を控へ殊に引田灣を擁する海上交通の地利にあり

又國鐵高德線の開通以來地の産業は逐年異數の發展を見つゝある。就中其醬油醸造はあまりにも著名にして品質を以て誇る引田醬油のそれである

山本醸造場は同町の鉦々たる業者であつて、同店は元油屋と號し明治初年三世祖の定次郎氏は同町其醬油醸造場を

買收し之に轉業して銳意從事した。以來斯業に精進逐年増石しつゝ四國は勿論阪神地を販路に店業の發展を期し、次いで



先代の世とはなつた先代の時代に於ては恰かも歐洲大戰の活況に際會し、氏の進取的商策と相俟つて躍進又躍進山本醸造場の基礎は確固とし築かれたのである。

然るに天英明に命を藉さず氏は昭和三年若き身を卒然として他界した。かくて氏の長男現定次郎氏は未だ若く爰に於て先代定次郎氏の令弟既に分家の山本綾助氏は本家の不幸見るに忍びず且盛大なる醸造業を援護の意味に於て目下本家事業の進展に協力しつゝあるが、青年事業家たる定次郎氏は叔父綾助氏の指導下に醸造の經營研究を刻苦しつゝある。

斯く綾助氏の宗家を顧念する世にも美しき心情の發露にして、氏は現に名譽町長、町商工會長として衆望を擔つて居るが蓋しその巨器逸材を語つて居る。

斯の如く引田醬油は概ねその品質を以つて古銘を博したのであるが就中その面目を擔ふ今日の井筒屋醬油こそ時代を超越した確なる存在でこそあらう。

## 引田を彩る岡田醬油合資會社

東讃引田醬油の大众的印象は實に抜くべからざるものがある。凡そ世人の腦裡に刻む印象とは善にして感激に發し惡にして懣焉憎惡に歸するであらう。

然して引田醬油の印象こそは三百余年の古き生産歴史と及びこれを彩る品質の誇るべき民衆的印象ではある。

近時一般醬油界は多事を思はせつゝあるは事實にして。即ち近代科學の發達はその醸造界にも普遍して或は早造り法又は化學的醬油のと幾手法

を須て動々濫造の傾きあり。随つて必然業界の平靜は破らるゝの結果ともなるが、しかし乍らこの近代社會現象は何れの部面にも現はれ吾劣らじと大衆の我田引水の感覺獲得に専念するの情勢にして、この間引田醬油は依然本來の生命たる品



質の牙城を死守し堅持する所に即ち引田醬油たる面目がある爰に近時引田醬油の氣を吐くものに同町岡田醬油合資會社がある。二百年の輝く歴史と品質で賣る親みも深き池田屋醬油の夫れである。

池田屋醬油の當主は岡田忠次郎氏にして、氏は高松池田屋當主の令弟、かつて帝大農科を卒へその新智識を久しく本縣農林行政に携り昭和五年官を辭して以來専ら祖業醬油醸造に精進しつゝあるが、氏が本業經營は先に最高の學究を遂げ、尙且不斷實地の研究を以つて臨んで居る、それかあらぬか大正十年店を合資に改組以來一切の設備醸造方程を一新し眞に新時代商品としての面目を以つて大衆の味覺に上し、四國は素より中國、阪神各地の發展聲價は雄々しきものがある、これ時代の人岡田氏がその醬油醸造を近代化學に溺れず、従として自然の醸化風味を一義とし更に利に趨らず事業の永遠性を至念するの良果にして、常に清新なる意氣を以てする研究活動は商品の上に表示されて、爰に至るのである。



## 野網氏と新名所安戸の養魚

本縣の東端引田町は由來内海有数の漁場にして然も醬油醸造あり其引田醬油の名に於て夙に天下に聲價を博して居る。

而して近時々代事業の展開は更に同町に生色を織る事多大である。就中茲に近代の營利事業とし、將又一日清遊の快適をかねた地の新名所安戸池の養魚事業こそ全國白眉の



壯業にして恰も瀬戸内海國立公園に無類の興を添ふるに足るものではある。

安戸に傳説あり、往古清少納言こゝに漂着し安堵されしに轉訛して安戸とは稱すと、安戸池畔の山上には今も清少納言を祭祀しあり。由緒の程も察せらる。城山公園の名勝を擁した同養魚池は鹹水自然の池湖にして面積二十町歩、四時紺碧を湛へ水温かなればかつて鱒の名所として冬季魚族の集遊を待つて地の漁人の幸とした。然るに近年同池に蟻集する魚群漸減を呈し搦て、一般濫獲に因る漁獵の不振は引田漁人の至大な痛苦には相違なかつた。

爰に於て地の有力漁業家野網佐吉氏はこの一般的傾向を靜思し遂に天恵の池湖安戸池を利用して魚族の養殖供給を爲すと同時に地の一部漁人救済を企劃した。これ即ち我國隨一の鹹水養魚地として今日成功を見つゝある所である。

抑も野網氏の養魚着創は昭和二年である。性來靜慮斷行の氏は當時漁業組合の管理下に試験的養殖の結果成績極めて良

好を見て驟然その行使權を買収し、更に十數萬圓を投じて養魚と風致の設備を完整した。かくて鯛、ハマチ、ボラ、チヌ等を放流し速成養殖を始めたが、就中ハマチの成績見るべきあり。以來毎年一二寸の稚魚十數萬を三重縣地方より移入し五、六月に放流すれば此ハマチは適當の飼料に因つて百餘日を経過して八月頃には優に一尺に成育し、逐次一般市場に供給が出来る、その生鱗躍る豊滿のハマチは安戸のハマチとして赫々たる名聲を轟はれ、殊に荒天不漁に際して新鮮そのもの、澄刺味は獨りこの人工養殖生魚のみに俟つべきなれば、この點同事業の特殊使命と確固永遠性は保證されて居る。

野網氏はこの社會的重要使命に愈々自奮して更にその設備を備へ魚族百萬放流を期するのみならず、遊覽施設を整備し

以て大衆の遊樂池たらしめんと計劃しつゝあり。斯の如き露露的野網氏の本事業然も經營極めて困難なる養殖事業にこの成功は素より氏の不撓邁進努力と犠牲にあるが、這般農林省は此壯業に一萬圓の補助あり。氏は之を養魚飼料貯藏庫建設に用ひて、矢野式アンモニヤ冷藏庫の近代設備は整へられたが、一個人に政府補助の如き全く異例とする所であつて、使命の重且大は洞察される。

氏は此外丸サ醬油を醸造し阪神地方に聲價を博して居るが自治方面にも現に町會議員として活動して居る。就中安戸池の利用養魚は事業と遊覽を兼ねた前途多望の近來的事業にして同町將來の寶庫にも値するものである。

## 自力更生の先陣大川ロープ組合

刻下國家的非常時に際會して國民的自奮自力更生は強調されて居る。即ち自力更生とは理論でもなければ議論でもなく唯各々が刻下の世相國情を諦観して今一步各自の充實を要求

する事で、これ以外に何も無い筈である。故に議論や理論によつて自力更生は達成されない。只その全智全能を自己の生産と生活の全領野に移植し、實用化する事夫に依てのみ



國家も個人も此非常状態を打開克服して遂には更生の明期に觸れ得るのだ。

こゝに農村自力更生の方便として大川郡相生村の副業たるロープ生産はその実績見るべきものあり。時しも農村更生の好例として特記に値する。同村のロープ産業は歴史も古く明治初年に發し同村字坂元三谷キサなる者地の漁人より依頼されてなひ始め、これを魚引繩と云つたのである。

以來きはめて強靱なる所から漁業者の使用は漸次増加し同村農家の健全なる副業とはなつた。其後又小豆島醬油業者の樽繩として使用々途をも加へ更に深海漁業用網として使用さるゝに及んで、この大小ロープ販賣を専業とする者だに續出し、生産又一躍倍加の盛況を呈するに至つた。

勿論當時業繩にはオナイ大目繩アラテ荷造繩等あつて原料薬は各農家に持ち賣行は益々盛んとなればこの副業ロープ製



造は相生を中心として、間もなく全大川郡に普及した。こゝに於て大正七年同村當業者等相謀り讃岐ロープ株式會社を創設し生産の奨励と販路の擴張に努めたが、其後昭和三年該會社を解散産業組合法に準據して、大川ロープ販賣利用組合は創設された。

同組合は斯業の統制と農村副業生産販賣機關として組合員七百七十九名、六萬餘圓を出資し組合長經營に當る以下理事監事等幹部は献身的に活動を續けた。殊にロープ製作に必要な雨天共同作業場を始め、事務所倉庫等完備尙繩網運送用機船機構も整然たるものにして、この全村一致の精進はこの不況時にあつても年産七萬五千餘圓を計上し、近畿、四國、九州を主に發展聲價を擲してゐる。尙この副業ロープによつて収入の大部は加工賃金として各自の収入に歸し、副業農村の安直を喫して自力更生を地で往くこの景況は近代のうるはしき農村風景ではあらう。尙現在役員は左の諸氏である。

組合長 永峰孝象  
専務理事 田村國一

理事 丸山綱次郎  
同 長町房榮  
同 中原幹平  
同 大畑晋一  
同 河井政左衛門  
同 三谷幾太郎  
同 桑島兵次  
同 大山儀七

同 荒井雪藏  
同 松村武左衛門  
同 山上貞三  
同 監事 矢野貞之丞  
同 中山葵象  
同 岩佐保  
同 中村脇次

### 讃岐電気株式會社と香南の文化

嚮きに山靈の地となした。香川郡南部山岳地方も近時頼に時代の色調を加へて濺刺たる生彩に面目を施しつゝあるが、爰に香南安原村に本社を置く讃岐電気株式會社の如きは本郡稀に見る事業會社で誇るべき業態にある。

同社は大正九年五月同地素封家上原勇太氏外數名の有力者によつて香南一帯の電燈文化を畫し、大正十一年四月資本金二十萬圓を以て創立したのである。

最初には香東川支流西谷川の流れを利用して水力發電し以て燈用に供すべく計畫の下に創立せしも、其後受電計畫に變更され現に四國水力、高松電軌兩者の給電を得て鹽の江、安原川東、淺野、由佐、池西、川岡、木田郡三ヶ村を區域として約七千燈三千三百戸に點燈して居るが、創業當時の九百燈に比較して隔世の感こそある。殊に同社營業開始前會社の發起人にして社長の上原勇太氏死亡後現重役經營の衝に當るや以



來一意香南地方の開発と社業の發展擴充を期した。

目下同社の株主は僅に十六名、毎期一割配當をなし社礎の堅實は本郡中比類なき業態で、殊に社長北村苟吉氏は謂ふまでもなく本縣電燈電鐵界の先覺者であり又權威者でもある。爰に氏が同社の總攬に當るや其信する堅實主義を以て移り變る時勢に對應し、更に能ふ限り需要家側の便益を考慮し以て文化的貢獻に努めた。何分世の文化に粗疏たる遠隔の地方の事なれば點燈の普及遅々加ふるに電柱電線費徒らに多く假りに市街地の電柱線費は一燈當り三厘程度なるに比し、郡部は四錢以上の負擔に當るが如き經營の苦慮をこそ憶はれる。然るに同社は此苦間役員は一切無報酬更に同社の北部需要地の點燈工事修繕等は同じく氏の主宰する高松電軌會社に於て便

宜扱はしめ斯て一日も早く同社礎の確立に努め、遂に今日の安固を築いたが、茲又同社の賢明は昭和六年時代を明察率先して電燈料金値下げを敢行したのである。此英斷こそ平日の備へ完壁なる同社並に北村氏の周到に於てのみ爲し得る事であつて、この赫々たる業容と意義ある同社の存在は儘かに本郡を通じて一種特異の光彩でなければならぬ。尙現在重役は左の通り。

- 取締役社長 北村 苟吉
- 取締役 井戸 文四郎
- 同 録野 藤太
- 同 上原 準一
- 監査役 安田 美代造

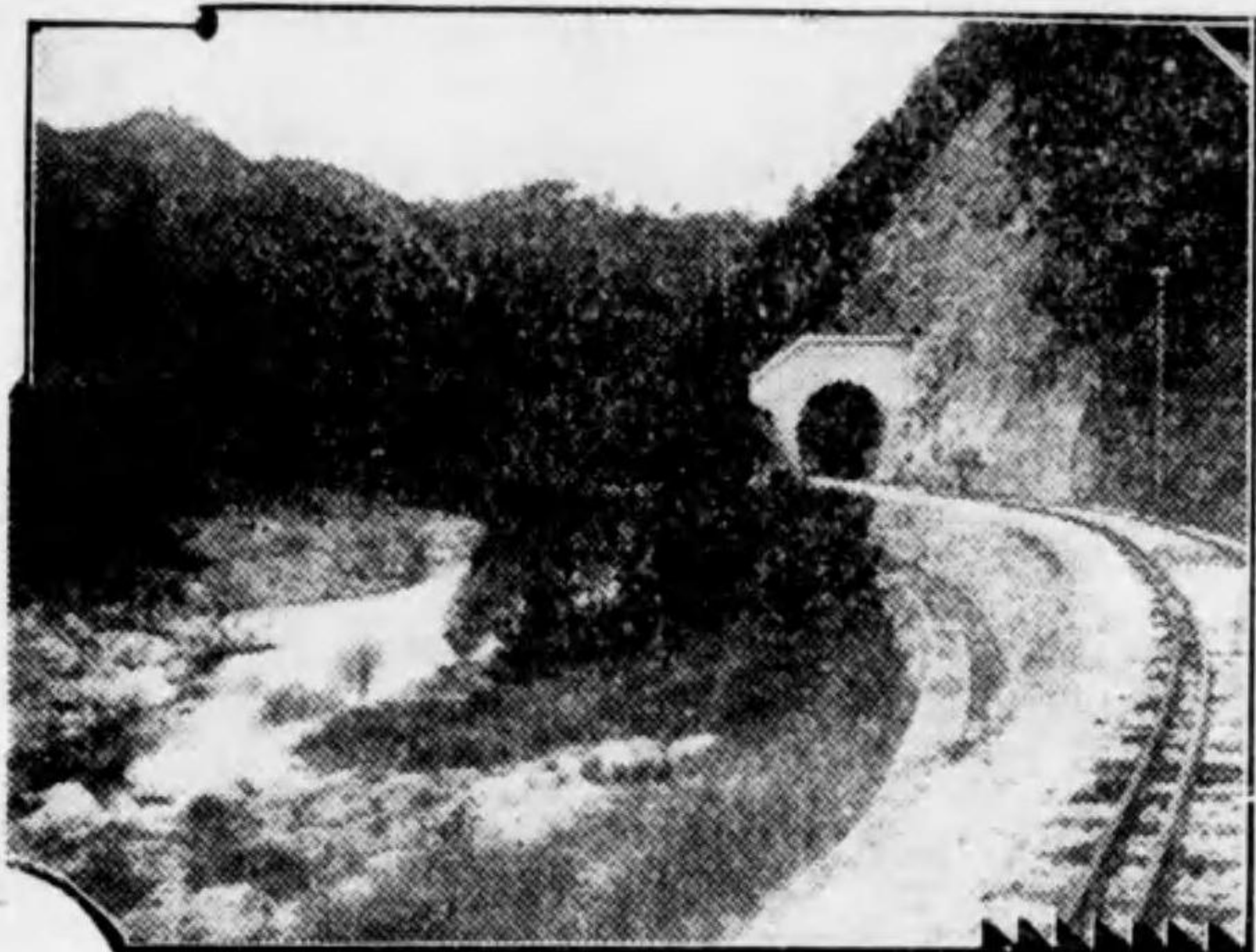
## 鹽江鐵道株式會社

現代讃岐の遊覽舞臺に交通文化のスターとして躍る琴平電鐵は讃岐名勝の中央部をスマートな快速力で以て縱走し其至れり盡せるサーピスと共に來遊客の寵兒たる觀を呈して居る

が、更に同社は他面其重要使命たる沿線地方開發に寄與せる外同社の姉妹會社であり且培養線たる鹽鐵に連絡して遊覽共同線を張つて居る鹽の江溫泉鐵道株式會社は、香南阿讃の要

所鹽の江の自然郷開發と文化に惠まれざる一帯の更生に一線を畫すべく使命に、資本金七十五萬圓を以て昭和三年現社長大西虎之介氏等の提唱に因り創立した最新式ガソリン鐵道である。會社創立後直ちに工事に着手し、昭和四年十一月建設、工事完成と、もに琴電佛生山驛に接續乗換て仙境鹽の江に至る延長十哩一分にガソリン軌道車を運行して營業を開始した沿線には幾多の古蹟、名勝を數へ殊に南進と共に香東川の清流は隨所に紺然たる深淵を貯へ轉在する奇巖怪石碎かる、奔流の飛沫等一見心氣の爽快を覺ゆる。更に岩崎驛以南連々直下の山脚を登ひ進めば愈々香南の一大幽邃境鹽の江である。その間車上約四十分降車せばこの地こそ四期山溪の美を誇る幽勝の佳境にして四季とりどりの雅趣を轉換し、春は奥野千本櫻、ワラビ狩、初夏は新緑ホタル狩、殊に避暑は海拔一千尺涼味浸々として我に返り、又鮎釣の一興もある。

更に秋に至れば連山一面紅葉して實に高雅は友禪その儘で松茸狩菊人形のそれと共に一層興趣を喚び、冬の温泉籠りも又格別であつて、兎もあれ同社は本縣不二の仙境を繞つて創業以來萬難を排し、拮据經營一意地方文化の開發に貢獻しつゝあるが、同鐵道開通以來縣下各名勝地とその選を異にし雅



も堅く力強き歩程を邁進しつゝある。因に同社重役は左の通

致なる山紫溪谷の美に温泉情緒を添へるモダン鹽の江は、よく都人の無聊を一氣に癒し心境の更生に最も好適の自然境として此處に杖をひく者愈々多き現況は蓋し同社にとつて最大の面目にして目下同社は創業日向淺きにも意を諸般の整備に須ひ其貴き使命遂行を向上と發展の理想を共にする緊密不離の琴平電鐵株式會社と有機的連鎖



りである。

取締役社長	大西虎之介
取締役	津森之治
同	入谷哲平
同	細溪宗次郎
同	武田謙

同	鹽田正太郎
監査役	中村新太郎
同	中村實
同	合田健吉
相談役	景山甚右衛門
同	鎌田勝太郎

### 本縣製紙界の新人岡保市氏

高松市鷺田村の縣道に沿つて敷地約千五百坪の壯大なる近代的工場が悠然と構へて居る。この工場こそ近來駭々として斯界に頭角を擡げた丸岡製紙工場である。

同工場の經營者は岡保市氏年餘未だ三十七歳新進氣鋭の青年製紙家として其前途大いに囑目されて居る。氏は父安吉氏と共に去る大正四年手漉製紙の製造を開始し、以來斯業の研究を重ね大正十五年手漉製紙の非時代的なるを悟るや直に機械製紙に着手し、更に雄心勃勃たる同氏は時代の進運に呼應して昭和四年斷然巨資を投じて従來の工場に一大改造を施し

最新式ヤンキー大型製紙機を二臺据付け、大量生産の工場設備を完成した。

目下同工場は保市氏の外八十餘名晝夜兼行作業に従事し阪神を販路に年産六十萬圓の塵紙を生産して一躍斯界の花形とは謳はれ居るが然も同所塵紙は品質優良實用的にして一般に好評を博して居る。殊に昭和三年高松産業博覽會及昭和四年朝鮮博覽會等に出品して各感謝状を受領し、その良質を證明された。斯の如く丸岡製紙の業績は新興隆々たる中に保市氏はつねに粗服を纏ひ多數職工に伍し自ら營業工務兩部を統理



のみならず斯くては自治の本義にそむき、時代文明の恩澤にも觸手し難き迂遠を胎す事にもなる。爰に香西町は今や町と

し尙、特に同所の強みとする所は安市氏は長兄であつて、以下五名の弟は克く和衷協力長兄を助けて、一意専心その事業の發展を期せる事である。

### 愛染藤太氏と其の事業

香川郡の北部に位置する香西町は近時其自治的施設經營に一新機軸は劃されつゝある事は町の爲めに大に祝福したいおよびそ地方自治の發展は即ち民衆意志の協力を俟つ所で、其徒らに當事者の經營

能力にのみ萬事寄頼して拱手鷹揚なる時は自治の發展は愚か恐らく非時代的の讒を免れないであらう。

その共同の奮闘努力は期せずして就業員一同に極めて善き感化を與へ、業況の上に表示現し歩一步新しき輝かしき天地に歩を進めて居る。

して大いに青年心理を振起し、和衷協同更生の意氣物凄く教育地帯の轉更、港灣修築、遊園地造化等々時代的要求の各般に於て完成を急ぎ更に轉じて産業方面にもよく舊套を訂正して時代化の機運に向ひつゝある事は蓋し注目し値する所である。然してこの近代的发展姿勢の裏に何れも同じく、先覺的人材の指導的努力と活躍を見るのであるが、もし同町に於て非役にこれを求むればそれは素封家愛染藤太氏だと謂ふ。そこには氏が過去及現在同町の爲に致せる奉仕的努力に對して信頼の念を集めて居るのである。茲に愛染藤太氏の事業的部面に就て描録するに明治二十八年頃當時四國隨一の鐵道交通機關たる讃岐鐵道株式會社が高松に延長を企劃されし折、これを耳にした愛染藤太氏の嚴父富三郎氏は同志と共に香西將來



の發展について深く考慮し逸早く該鐵道線の香西通過を希望して直に會社に運動を開始すると同時に極力地の有志の奮起を促したが如何にせん會社は終始好意的態度を保持し係らず地元は寸眼尺首の固陋にして遂に此愛染氏等の努力は空しく茲に好機を逸し去つたのである。間もなく該線開通後暗愚どもの狂奔を見たが後悔先に立たず。徒らに死兒の歳を數へ千歳の恨事とはなつた。斯くて地方將來のために斷腸の思ひを秘しつゝあつた氏は別途にその頃縣下鹽業の漸く佳境に這入り愈々有望なるを感得して斷然鹽田築造を企圖し、遂に三十一年これを完成操業した。即ち同町唯一の橋本鹽田のそれであつて、爾來幾多の災厄に見舞はれつゝ苦心これを打開し、現に採鹹十六町、當主これを經營して二等鹽を生産年額五萬圓を算する盛況である。殊に現藤太氏は聰明なる岳父と共に製

## 香西酒造株式會社

香西町に於ける唯一の株式會社として資本金七萬五千圓の全額拂込を擁し營業の堅實を以て矜り、且信條とする香西酒

造株式會社は大正八年香北の有志等に依つて創立したが、其後間もなく急轉直下の測らざる財界變動と以來の不況に豫期



以上の苦杯を喫しながら關係者一同の苦心と努力よくその難局に處し、社礎愈々鞏固を加へつゝある現況である。由來醸造技術の傳統を有ち又多數社氏の出身地として冬季醸造期に於ける倉人の稼高も優に數萬圓に上ると謂ふも同町であるこの醸造の本場たる地にかつて見るべき醸造場なくこれを遺憾とせし地方有志に依つて創設されたのが即ち同社にして。故にその面目を共同意識して

大正八年會社の創立成るや醸造場を信仰の地お四國と廿四拜の脚下清淨の地平賀神社の下に撰び、社長泉川亮平氏、専務取締役神邊庫太氏各就任社務を總攬して以來特に酒質の向上に意を須ひた、されば吟醸の清酒「勝賀」は萬人向きの優酒

として噴々たる名聲を轟ち得、共進會、品評會毎に優賞を受けて居る。

この如く同社醸造酒は目下世人の大なる歡迎の下に毎年巨石を醸造し此財界不況にも會社は既に免疫性を感じて不動にも無比の業態にあることは斯界の異とする所であり、殊に社長泉川氏は同町における有力者で、現に信用組合長其他の要務を帯び専務神邊氏人格手腕をかね社務を擔任して、堅實の二字を信奉し以て今日の展開を致さしめて居るが、更にこれに階和して各重役は何れも地方の有志を蒐めて、こゝに同社をめぐる陣容と然して業容は誇るに足るものである。因に同社重役は左の通り。

社長	泉川亮平
専務取締役	神邊庫太
取締役	久保榮吉
同	南原千太郎
同	徳田源一
同	片岡龜吉
同	愛染藤太
同	泉川文内
同	久保森吉
同	高橋伊太郎
同	山下留次郎
同	監査役
同	在役



# 岡内酒造場の飛躍

香西の町でむきくなど牽強附會の過去の言葉も外に近代の香西町は香北の町として素晴らしき發展を遂げつゝある。只この町にして産業の特異性を擧ぐるに比較的乏しきは蓋し現代香西町に課せられた發奮を要請する將來への願望でもあらう。但し同町は疾くに酒類醸造杜氏の本場として、人口



今同町で醸造する、銘酒「宵月」は實にその輝かしき面目であらう。銘酒「宵月」酒釀

の經營者は岡内猪三郎氏であつて、本店を高松市上横町に置き隆々たるを謳はれて居るが、同氏は木田郡十河村の出身にして小學校卒業後苦學力行を以つて十八歳の時陸軍軍人を志し普通歩兵第四十三聯隊に入隊した。爾來軍務に精勵し日

露戰役には下士として従軍、奮戰殊勳の戰功に依り感狀並に金鷄勳章を授かり戰ひ收まると同時に感ずる所あつて退役し其後丸龜稅務監督局に奉職、間もなく普通文官試驗に見事パスし、稅務屬として高知、愛媛、高松の各地に勤務しつゝ、あつたが、明治四十四年舊の創傷再發し、醫師の切なる勸告もあつて名残を止め乍、同四十五年官吏生活を斷つに至つた。かくて身輕になり再發の創症も快癒して自適の折偶々勸説する者あり。遂に酒類營業を開業した。素より前職稅務官吏として酒類に對する見識を有し且斯界の機微に通ずれば實に天與の適業たるに相違なく、氏は性來の不撓不屈を以て酒店經營に當るうち、饒て大正七八年大戰の好況を迎ふるや躍進はこの機なりと業容の擴充に邁進せば正に順風を壯翼の風情にして氏は爰に牢固たる營業の基礎を築いた。

其後更に數歩の發展は大正十四年香西町井上酒造場の土地建物、用器一切を買収自己醸造を開始して酒名を宵月と銘し眞個の活躍姿勢を整へたのである。爾來年と共に設備の改良



彌が上にも偏狹と輕薄と焦燥を強られつゝあるこの實相は正に人の世の生地獄たるの憾を深うせざるを得ない。

整頓は勿論酒質の改良を圖り、尙昭和四年醸造倉庫の増築等不況に構はず隆々躍進の一途を辿つた殊に銘酒宵月の酒としての誇は夙に總ゆる品評會にて優賞を受領せる事實及び氏が事業に研究の熱意と其人格經歷に於て稀な人才の所有者たる

所に今日の順境をなしたと謂はなければならぬ。されば氏は同業者間の信用又厚く目下高松酒造組合副組合長、高松酒商組合顧問、家屋稅調查委員等公私に精進活躍を續けつゝある。

# 鬼無植木販賣組合

縣下產業界にあつて、これが一地方的と雖も極めて急速の展開を爲し時代の要求する産業として多分に潑刺性を示して居るものの上笠居鬼無の觀賞樹産業がある。即ち植木、盆栽

花卉の本場として、狭少なる分野にも尙且年産十餘萬圓を出んとする盛況は蓋し時代産業の偉大さを語る所である。凡そ煤煙と砂塵交通地獄の錯交する現代都會生活は更に

都會にあつて世の文明と戦ひ且時代に貢獻する人々が偶々の安息に際して清新の氣を求め自然の風光に接し、或ひは渺茫たる大洋雄峻なる山容そのの颯々たる長風に無限の悅樂を感じつゝ眞に生命の泉の如く、忽然として自我の一切を解消し盡すは當然であらう。

されば近時高松を中心とする本縣勝地に觀光遊覽客の漸く多きは爰に所以して居るが、更に又彼氏等が家庭にあつても自慰を欲して庭園を築き、或は書齋に食卓の一隅に時々の盆栽、花卉を飾つて楽しむ等は何れも現代文化生活と自然殊に植物との心的作用を要視し、活動心理の更生に源泉を爰に求める。夫即ち近代文化生活の態容であつて、斯く生活美化の







## 庭木商の荒木和太郎氏



植木の木場鬼無  
上衣掛池の東北宏  
大なる地面を割し  
各種巨木奇樹の蒼  
々として人目を惹  
く一帯列立の庭木  
園は之同地庭木專  
門商として近來異  
數の進境を示し斯  
界の錚々を謳はれ  
て居る荒木和太郎  
氏所有園である。  
經營者荒木氏は  
夙に幼時より父業  
の植木商に従事、  
熱と勢力を以て今

日の盛大を來さしめた。然も樹勢を視るの明と造園に長ずる  
事を以つて特意となし、一般顧客の信用は年と共に業況の展  
開を見せ目下同地方一流庭木商として新進の氣を吐いて居る

### 一ノ宮村谷口製材工場

香川郡一ノ宮村國幣中社田村神社の森々たる社稷近くに宏  
大なる製材工場がある。即ち谷口亮氏經營の工場であつて、  
その業況は日に向上發展を辿り同地方一帯に絶大なる信用を  
博して稀な商況にあるは蓋し異とする所であらう。

同製材場に關し特記すべく又誇るべきは縣下製材工場とし  
て恐らく機械鋸使用の先驅にあるが、かつて氏の先代榮太郎  
氏が明治三十五年頃同地方の不便を省察して些々たる材木商  
を營むや、間もなく香川縣下一帯に恐るべき大暴風雨の襲來  
あり。この好まざる結果として材木の需要頓に増加し材木商  
たる氏の商況は測らずも一大躍進を遂げた。此當時縣下の製  
材所は何れも手挽の調材であつて、能率の遅々は勿論不便に

## 庭木専門の 半田好太郎氏

一般業者は長嘆するのみ。爰に偶々徳島某工場に於ける機械  
鋸使用の好成绩を耳にした氏は時を移さず直にこれが研究に  
着手し苦心の末卒先自己工場に設備した。即ちこの設備こそ  
本縣斯界の白眉たる所であつた。  
斯の如く先鞭着歩した氏の經營事業は年次發展を添へて着  
々成功し、誇るべき今日の基礎を築いたが、氏の他界後當主  
亮氏は父の業を繼承し目下主として地松建築用材並に縣下特  
産彫抜盆材の調材に當り年産巨額を示しつゝ、かたわら身は同  
村々會議員として自治に盡瘁して居るが、圓滿な人才の所有  
者である。

本縣植木の中心地香川郡上笠居村鬼無に於ける半田好太郎  
氏は庭木商として斯界に何れ劣らぬ發展を爲して居る、尙ほ  
同氏は殆ど一生を通じ終始一貫植木商を營み、此間幾多の不  
境にも常に困苦を凌ぎ今日の基礎を造つた性來の濃厚はよく



(寫眞の庭松は植込十八年にして庭松として珍姿高雅を極  
めた逸木である)

一般顧客同業  
者の氣受よく  
これ氏の隠れ  
た資産とも謂  
ひ得るであら  
う。  
近時營業の  
發展は目覺し  
く然も所有の  
庭木園には四  
時各種の庭木  
を豊富に藏し  
何時如何なる  
需要にも直に  
應じ得る用意  
がある。



## 宮武醸造場の白酒、秣山

琴平電鐵の開通を契機に香川郡佛生山の地は非常な生彩を加へたこれが嘗に農事試験場の設置とか競馬場の新設等是一些事とするも地の人心を強打する一大刺戟、これを地人が日と月に具体化する所に交通文化の幸恵は偉大且永遠である。最近同町では遊覽の新施設を以て更に應ふべき由であるが、尙茲に同町の名物として古今に謳はれて居る白酒、味淋、焼酎と銘酒秣山の醸造元たる宮武静夫氏の事業は地の産業的誇りであらう。

佛生山法然寺の涅槃と謂へば地方での有名行事で、この涅槃に集ふ人々になくはならぬ唯一の名物土産が即ち宮武氏の白酒と味淋、焼酎である。

去る七十年の昔氏の祖父仲太氏がこの醸造を開始するや、

酒質芳醇にして一度これを口にすると時その何れも我を忘れた無憂の恍惚感に打たれるのであつた。かくて遂には病人の外はこれを口にすべからずとさへ讃へられる名聲である。

素より該白酒は仲太氏苦心の結晶にして餅米と焼酎を原料として吟醸されたものであれば、この壓倒的聲價裡に同店は着々基礎を築き、その後大正の初期に於て更に清酒秣山の醸造を附加したが、獨得の酒質に斯界の雄とは謳はれて居る。

現經營者静夫氏は長兄一氏の歿後祖業を繼いで唯々堅實を一條に名物白酒味淋焼酎並に銘酒秣山を醸造し、更に最近令弟をして醬油醸造を創始せし等、協力縣下醸造界に飛雄しつつあるが、その意氣壯にして然も圓滿なる人格は内容の堅實と共に同地方の興望を蒐めて居る

## 廣瀬醬油醸造場と感謝狀

世に商人は多しと雖も商品を買ふ客人からこれを賣る商人に對して辭も篤き感謝狀を贈ると謂ふ事は近來の異聞にして且社會的快事に値する。爰に香川郡一宮村醬油醸造家廣瀬吉應氏は四十年來の父業を繼承して一意醬油醸造に精進してゐるが素朴な農村事業家たる氏は十年一日の如く業務に携はり然も氏は信條として農村大衆との共存共榮を強く意識し常にその實情を洞察して己が事業の規矩と爲し、その絆の下に繁榮をきざむべく店是として居るが、その先代八百次氏がかつて明治二十五年頃雜貨商より轉業し斯業を創始以來數ふべくなき苦闘を経て漸く其の基礎をきづき今を去る約十年前吉應

氏の經營とはなつたが、尙前記信念を以て醬油の品質向上と價格の低廉に視點を注ぎ、爾來品質は價格を凌駕し親切な營業振りには刻一刻不況の重壓に憫む農村大衆をして極度に感激せしめ、かくて同店との間に共同購入會が組織され健全なる取引關係を樹立すると共に廣瀬氏は犠牲的價格を以て之等多くの人々にその日常必需品を提供して居るが、この繼續既に十餘年に達すると。而して各地購入會では氏の奇特と親切に對し特に感謝狀を贈つて多年の厚意に酬ひつゝありと、彼我この麗はしき心情は聞くだに農村の佳活にして一般事業家にとつても他山の石たるの感を深ふする。

## 素麵と園藝の倉橋秀次氏

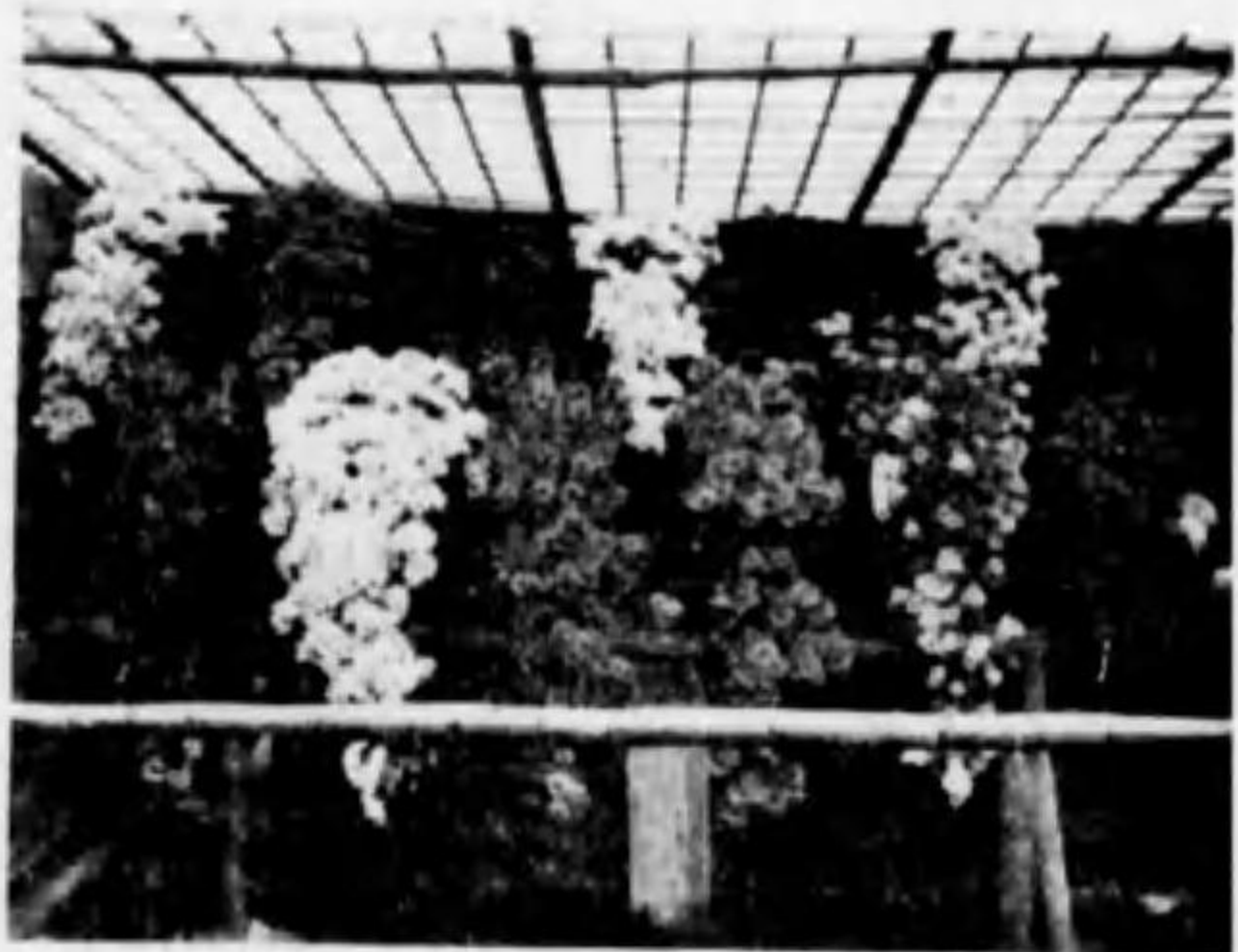
香川郡佛生山と謂へば直に由緒深き法然寺を聯想されるが更にその地の特殊物産手製素麵は又見逃す能はざる著名な生産である。同地素麵は其の歴史も古く凡そ三百年前地に舊藩主との縁を發せしより副業又は本業としてこの一帯に製造を

始められ、手製素麵の名に於て資質を囃された。現に年々巨類の生産を爲し益々名聲を高めてゐる。

近時同町斯界にあつて極めて發刺たる營業振を示し、時代適應の商程を辿つて活躍しつつあるは倉橋秀次氏であらう。



素麺に生れて素麺に終ると謂ふ牢固たる決意其處には一種異様な慎重眞剣味が窺はれ、今日の展開を爲したが、氏は播州の人二十三才にして文字通り徒手空拳此處に來り、兼ねて佛生山の素麺を知悉せる氏は夙に生地播州に於て技術は勿論一切を修練したれば、直ちに製麺業に従事した素より異郷にあつて思ひ半にも達せず、然も迷路に物を尋ねる幾多の不憚困厄に際會しつゝ、尙一意邁進を続ける中漸次營業の基礎は築かれ遂に現況の盛況を招來するに至つたが、その間の苦心努力は實に何を以てもつくし難くたとへ難き全く貴き試練にして、目下同氏製造にかゝる手製素麺金白髪、銀白髪は共に誇るべき斯界の優品である、その他機械製各種は何れも他の追隨し難きを備へ、好評嘖々一般の需要に應へて居る。尙最近同所産の日の出干饅頭の如き饅に時代的食料として



恰好の適品であつて。氏が其全製品を通じて四國及山陰、山陽の地に一日の長を誦はれつゝその驚異すべき發展は氏自ら原料の撰別製法の密なるに加へて就業する職工の一心協力に因る所であらう。

尙同氏は昭和二年度より性來の趣味に發する菊花の栽培を爲し、その名も精華園として規模の大、そして大菊小菊各種を蒐集し更に氏一流の研究改良を加へて嶄新なる種別を創成して居るが、その優秀逸さはよく東京、名古屋の流行を凌駕し總種四百に及ぶと、隨つて最初觀賞に造りし同園も目下では或程度事業化の餘儀なきに至り目下各地より種子の分譲又は株分等の依頼に接し是又非常に名聲を高めて居る。

寫眞は氏の作育せる懸漉菊

## 子守から農機王の野田文次郎氏

近時農村經營の合理化を自覺した一般農家は其の經營諸方式に於て異常の改善進歩を見せて居るのである。特に多角的經營法の如き其研究努力によつては非常な収益を擧げ得るの



みならず。今に陰慘なる農村も一變明朗にして感快も漂ふ農村樂土化す事も敢へて難事でない、現にこれが事實はよくも見聞する所であつて、縣下に於ても凡そ産業組合の發展せる農村は略々その行を往きつゝある所であらう。

又斯の如き趨勢下に農業操作上にも驚くべき進化をなした即ち各種機械作業の夫である。中にも收穫作業の如きは正に加速の進歩にして従來の方法に幾十倍の能率を示す所に農村にも現代科學の侵入を思はせるものがある。

爰に本縣の誇る救農者として綾歌郡西庄村野田文次郎氏の救農の一念は恰も炬火の如く燒き盡さざれば熄まざるの熱と努力を以つて不振を叩つ農村匡救に打ち向つて居る。

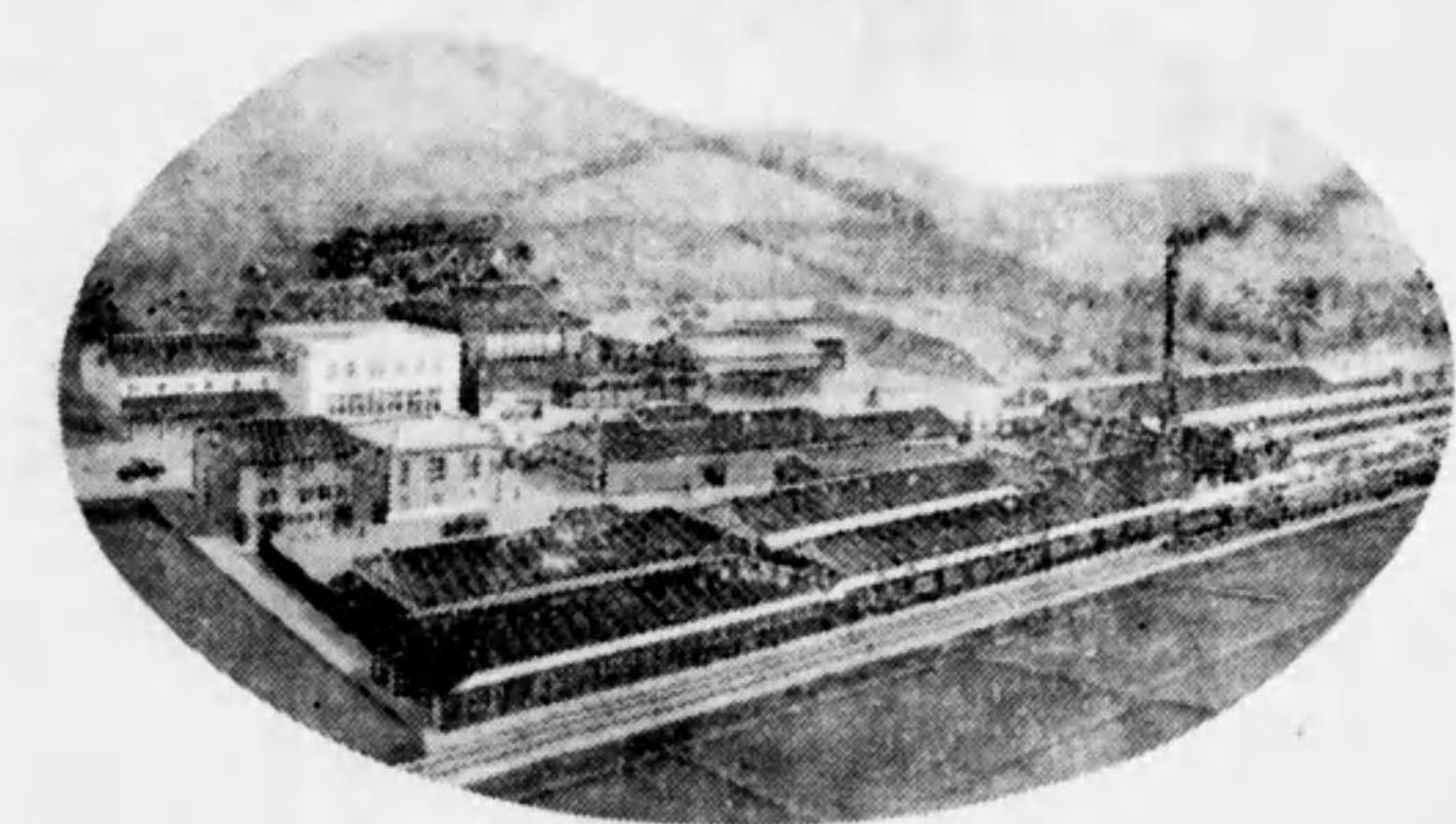
かくてその誠と熱の結晶として各種農機具を案出し農業經營の能率化を以て我國農業史上に特筆すべき貢獻を爲しつゝあるが、その製作にかゝる農村救済號野田式摺摺機の機能と同氏のこの製作事業の偉大なる發展には何人も驚異せざるものはない。然も氏が目に一丁字だになしとするに於て實に光彩陸離の感こそある凡そ世に學問に出で學問に亡びる者は多くも實地に出で學問を凌駕し更に世を裨益する士は極めて稀である。況やその赫々たる實際家の野田氏が今日本一を誇る野田式摺摺機を以て一世に名を爲した敬服すべき過去五十年



の奮闘血涙を回顧する時夫は、洵に妙算を極めた人生訓であり世の事業家青年教化に一髮千鈞の金文字である。

氏は明治十八年野田全蔵氏の息として中讃綾歌郡西庄村に生れ、兄妹十四人中第九子にして、そして極貧の農家にしかも十數人の大家族とて遂に十歳の春、文次郎少年は父の命ずるまゝに子守奉公に出た。かくて二ヶ年を過ごし十二歳の頃岡山のさる桶屋の弟子とはなり、此處で氏は營々習業する事九年廿歳の時、父母の膝下に歸つて始めてさゝやかな桶屋を開業した。その後かたはら麥稈米麥の仲買或ひは營林署に雜木の拂下げを受ける等雜多な業務に手を染めた。即ち金五圓を以て小麥百石を買ひこれに奇利を博するあれば麥稈を買つて雨節の爲めに全損を招き、更に廿五圓を以て莫大なる雜木の拂下げを受け巨利を博する等七轉び八起きの苦盃を悉くなめこの間氏の最も貴重な精神的收穫は徹頭徹尾努力の二字であり。敢て人にたよらざる信念でこの氣魄と豪膽の血脈は既に氏の巨軀につちかはれて居た。之人の成敗を岐つ重大要素にして氏の面目躍如たる所である。其後桶屋の本職に勵みつゝふと氏の事業的意識は動いた。即ち手なれた舊來の糶摺機に對する改良考案にして將來の農村經營も又工業化動力化に

あるべきを秘かに洞察し、爾來該機の改良試作に日夜研究を



重ねその達成に努力を傾注した時は明治四十年頃にして次いで四十二年第一次改良糶摺機製作に成功した。この時氏は斷然糶摺機製作を専業としたのである。その名野田興農商會も爰に發祥の一步を爲し、かくて氏の糶摺機は大正三年綾歌郡山田村主基齋田の御用命を蒙るに及び

一躍聲名を馳せ縣下農村を風靡し光榮と感激の氏は一層の努力を機械の改造考案に注ぎ、大正七年その勞は酬ひられ遂に理想的野田式糶摺機の完成を告げたのである。

以來今日に至るまで氏は農村振興の一助として心に一分の間隙も残さず更に糶摺機麥摺機等の農具改良に寧日なき精進を續けたればこの間專賣特許或は新案特許を受くること四十有餘種をも數へ現に名も農村救済號天下無類の野田式ロール總自動糶摺機以下大小數種の糶摺機を發明して一大成功を遂げて居るが、今日同商會は西庄村に約五十萬圓の巨費を投じ宏大二千坪の工場は設備の偉容を整へ、従業員二百有餘名、主以下全員それ職工として年産約一萬臺の糶摺機を製作然も同機の優秀にして經濟的なることは定評の如く他の追従を許さず。恰く天下獨歩にして大正三年以來全國博覽會共進會農具展覽會に出品し何れも賞狀金牌を受領せざるのなき好績は同機の眞價を實證するものである。

斯くて野田文次郎氏は一田人に身を起し今日巨萬の基礎を築きなほ破れ服に身を包み朝に霜を夕べに星を載くその健闘ぶりは正しく凡俗事業家と聊か類を異にし、尙その實踐躬行の氏は曰く。

「私は糶摺機を賣るのではなくして野田文次郎の誠意を賣つたのです。又一般農村の人々もよく此文次郎を買つて下さつた事を心から感謝して居ます。故に今日農村の不況を眺めて利益を外に私の糶摺機を通じて私をして唯一の社會奉仕を爲さしめて下さる事を誠に光榮に思つて居る次第であります。」

右の如き清き信條を以て活躍せる氏には必然なものかは與へられ最近その事業は如何に分業的能率増進を以てしても需要を満す能はず、遂に高松刑務所内に一部工場を設置し製作する状況にして、この現況は同商會の盛大と繁榮の一斑を示し且本縣機械工業界の一大誇りでもある。

然してこの盤石の基礎を築積した氏はその巨軀二十餘貫常に頑健温厚にして狭氣酒々落々たる所これ世の大器にして、目下氏に相和す、養嗣子文俊氏又新進機敏にして兩々相俟つ同商會こそ我國農機界の寵兒とはされて居る。



# 近來の快男兒松浦伊平氏

本縣政界にあつて少壯熱火の如き意氣と常に誇々の論を以て自他共に議政壇上の花形と呼べるゝは即ち綾歌郡松山村出身の松浦伊平氏であらう。

氏が縣政界への初陣は昭和二年卅六歳の時であつた。従つて俗的なれば未だ修練の途上に當るとは云へ、既に千軍萬馬

を往來して社會各般の

辛酸は勿論政治の基本

妙諦を體得せる氏には

この常例は通じない。

故に一度増上に獅子吼

叱咤する時は肯綮に當

つて人心を強打する所



がある。

最近の縣會に於ても氏が對滿洲一見識として縣下中等學徒に滿洲語教授の必要を力説し、滿場この卓説を傾聴これが實施の急を認むるに至つた如き氏が政治的見解の大衆に忠なる

一例ではある。尙特筆すべきは氏が政界進出の發心イデオロギイにして凡そ政治を論ずる者は須らく世の經濟潮流にも一隻眼を所有し然も政治の實際に與る者夫自體の經濟的根據と一切の實力の虛實は其行使する政治的迫力と効果に輕重の差大なる事を諒承し、即ちすべてが理論夫實行の現代に於て假に千百の名論高説も、これが實行能力なかりせば何等の政治的効用をなさざるのみならず、却て一害を醸するの所以を識る事である。

これに理ありとして氏は今しも人生の壯年を東奔西走縣政と自己事業に文字通り挺身の活動を續けて居る。今日の松浦氏を目して縣民の多くが驚異すべき近代兒とて敬し、尙その將來の進展性に多大なる興味と期待を持つ事も蓋し氏が實際性を多分に持つて居るからである。

而して其政治的活動の根源を自己事業の發展に希求する所に輝く特異は發見さるゝのであるが氏は明治廿四年綾北松山村に呱呱の聲を擧げ、嚴父伊平氏は同村に於て米穀の仲買と

鹽田に従業の傍ら時々小規模の土木請負等をしてゐた。その

二男たりし當主伊平氏幼名濱吉は小學校卒業後直に父業に従

事した。世に梅檀は二葉より香しと謂へり、腕白時代よりし

て既に人を睡若せしめる豪放さがあつた。氏は十七歳の時父

に無斷丸龜に行つて事こそあれ米二百俵を買入れたのである

これを聞いて嚴父伊平氏は轉怒その無謀を責めたが當時の少

年濱吉氏は恬然として微笑、これに答へて曰く、兎に角どう

にかなるからと澄したものである。動々あつて結果は相當の

利益を収めたとこれは快き話題の一つであるが、以來その直

情徑行に加ふる豪膽は請負事業に興味を唆り、これに専念す

る中大正七年林田村大場水門縣營工事を請負つたのである。

幸なるかな人生の本格的活動の第一歩たる本請負に氏は見事

に成功した、次には大正十一年實に氏をして全運命を賭した

乾坤一擲の大事業高松高等商業學校新築敷地土木工事の請負

を敢行した。時に氏は三十一歳にして、従つてこの關ヶ原的

請負工事に當つて周圍には是非の議論多く、遂に親族會議を

も開いたが、その決意の牢固として動かすべからざるあり氏

以て完成を見たのである。

氏は此の成功を契機として以來縣下請負業界の彗星とされ又新進氣鋭として逐年破竹の勢ひを以て業界に活躍した。工事も鐵道省管轄土讚北線紀勢線作備線三吳線等幾多の大工事を夫々完成し、目下同省建設局管轄の契約高は全國第十二位に數へられ宮内省、大藏省、逓信省の指定請負人としてその本據を高松市西内町に置き、支店を東京、大阪、福岡、岡山に有する外現場請所を全國七ヶ所に直屬組員六十餘名は目下施工中の土工部姫津線姫工第五三區土工其他新設工外二工事建築部大阪工業大學應用化學實驗室新築工外三工事等に從事し、松浦組の業運は全國的に旭昇の發展を示して居る。

氏は更に滿洲への進出も企畫しつゝあり。又一般事業界にあつても坂出瓦斯株式會社專務取締役、大藏製鹽株式會社取締役及び金山新鹽田株式會社取締役としてその才幹を揮つてゐる。斯松浦氏が其英氣の嚆ふ所全國業界の雄として又先に村會に三期連續縣會に二期各々飛躍々進の精彩は實に燦然たるものあり。爰に氏に残された將來の展望を想ふ時只壯觀の二字にしておのづから痛快味を覺ゆるものである。



# 松山銀行と其の存在意義

凡そ地方産業の振不振には金融の圓滑に因る事頗る大である。近時唱導され現に實行されつゝある銀行の合同大銀行主義の實施は一面銀行經營上の安全保持に主眼を置くに拘はらず他面これが利用者たる殊に中産以下商工業者は從來に比し極めて不便を啣ちつゝある事實は、これ制度の不全としても大いに考慮を要すべき事でない。

爰に近時産業の村として世の注目を惹きつゝある綾歌郡松山村に於ける松山銀行の存在は眞に地方銀行として完全に其使命を盡くし地方産業の開發々展に寄與しつゝあり。大銀行主義時代に於ける皮肉な對照として注目し得るその松山銀行とは如何、即ち同行は綾歌郡北部松山村にあり。隣村林田加茂、府中、王越の五ヶ村を概ね營業區域とする資本金五十萬圓の銀行で、然もその有機作用は殆ど營業地方の純生産面に活用されて居る。殊に資金の運用はその人格人情を知悉し對人信用に重點を置くに於て特に薄資有爲の人材事業はこれを健全培養につとめ、かくてこゝに地方産業の振興は展開し

意氣もある。之地方金融業者の社會的使命に由る貢獻にして近時大銀行は動やもすればその營業中緊要なる資金の放出を千偏一律一體の規矩に依つて最も必要なる地方的人情及産業の特異に就て極めて白眼の事大の色調の嫌あり。然も集積する、預金資金は都會又は直接地方産業に何等の必要な場所に流用して、自ら嘆ずるの愚にも至るは時々散見するこの松山銀行には小なりと雖も、その愚作なく寧ろ平素の品行人格に由つては程度以上にも融通し其人と事業を支援するの方針を採つて居る。抑も松山銀行は明治二十九年頃地の信用組合として生れ、三十五年松山産業株式會社と變更し現頭取三野氏の嚴父岩八氏現專務香川金三郎氏、渡邊眞通氏等先覺者の經營下にあつて、大正元年時代の變遷時流を察して一般銀行法に因り地の金融機構を整ふべく種々物色中、折柄岡山縣倉敷在に合名會社岡銀行あり香川氏等はこれを買收移轉して合名會社松山銀行となした。其後大正九年株式に變更と共に資本金を五十萬圓に増資して今日に至つて居る。目下預金六

十餘萬圓、貸出略同額を示しその堅實なる運用經營は一般預金者株主は勿論同地方産業發展の上にその機能發揮し其證左には現松山村産業の盛況豪華を以て窺知し得べきにして、之が先陣明治二十九年頃三野、渡邊、香川氏等の時代に先覺的貴き一石は四十年後の今日赫々たる松山産業を成果して居る殊に專務香川氏の如き以來その衝に接して今日に至り頭取三野氏と共に特筆すべき功勞を呈して更に致々たるは以て多とする所であらう。因に同行現重役は左の如くである。

頭取	三野良晴
專務取締役	香川金三郎
取締役	品治隆
同	三野伊三郎
監査役	三野利幸
同	都崎六太郎
同	松浦開二

# 大藪製鹽株式會社

本縣屈指の産業村として全國に誇るべき松山村の産業豪華を構成する同村大藪製鹽株式會社の業況には驚く同鹽田は面積三十二町餘あり明治二十九年頃當時地の豪家にして先覺的偉材とも謂ふべき渡邊渡氏久木氏海老名幸一氏等は元砂鹽の産地として有名なりし、同地方も永年の不作に村を通じて疲弊を極めこの窮狀を心痛した。前記諸氏はこれが匡救の一法として鹽田築造を評議し遂に村有志の共鳴を得て大藪製鹽株

式會社を創設し、明治二十九年其一部を構築した、更にその後採鹹地を擴張して二回の増資後現在資本金七萬五千圓七十五圓拂込み一千株の會社とはなつたのである。この間約四十年會社は堅實なる經營を續け尙時代に順應する設備の改良を施し、目下二等鹽を年額六百五十萬斤内外生産し、全部請負制度の下に極めて好成绩を挙げつゝ年來高率の配當を持續し尙多額の積立金を保有して居る。随つて株價



の如きも常に二百數十回を下らず茲に専賣關係ありと雖も同社の経営宜敷結果にして、現三野社長は地の舊豪、就任以來よく社を經營し最近の業績も資本に對する四割の年益を擧ぐる好績を示して居るが又請負人等もその性質極めて誠直にして會社に協力し共存共榮の實を上げて居るなどその全部を通じて同社の誇りとする所である。尙現重役は左の通り。

取締役 三野良晴  
同 浦生藤次郎

同 松浦伊平  
同 松浦開二  
同 猪熊善次郎  
監査役 浦生正  
同 川西久吉  
同 三宅惣七  
同 三野三平

## 乃生鹽産株式會社



綾歌郡の最北端に位し全村殆ど山地よりなる王越村に於ける唯一の産業たる製鹽業に近來隆々の好成績を収めてゐる乃生鹽産株式會社は創立以來此處に三十年を垂んとしその間悉ゆる艱難苦闘の社史を残してゐるが、由

來同村はその地勢上産業に恵まれず徒らに寒村の名も荒ましきあり。然るに明治三十七年に至り松山村渡邊眞通王越村大和藤太郎、東原好太郎氏等地方の有志によつて資本金四萬圓同村の劃期的唯一の産業會社たる乃生鹽産株式會社が創設された。然るに同村は香川綾歌兩郡界を爲す瀬戸内海に突起し潮流急奔して沿岸を洗ひ隨つて同鹽田工事施行に當つては稀に見る難工事であつた。

しかし關係者は不撓不屈遂に海神を征服して翌三十八年完成全十六町歩を九軒前に分ちなほ各一軒毎に各個の作業をなし得る施設を特長として同鹽田の誕生を見たかくて渡邊眞通氏は自らこの難地業の經營社長に就任し、以來異常の犠牲を拂ひ精進をかさねること十ヶ年、その間業礎確立を圖つて株主配當の如き一切これを行はず、其の後大正五年大和藤三郎氏渡邊氏の後をうけて社長に就任、更に昭和三年十二月香川金三郎氏社長に就任するに及んで、資本を倍加し、現額とはしたが氏は昭和四年以來近代製鹽界の發達に鑑み諸種の施設改善を企圖し、まづセメント臺に改築その他新諸式を採用設備して一意業績の向上につとめ、今年年産三百餘萬斤の産鹽

を見一割以上の配當を續行しつゝあり、創業以來の艱苦に換ふるに近時の盛業を以てし精彩を加へてゐる。尙目下同社の重役は左の諸氏である。

取締役 香川金三郎  
同 大和藤三郎  
同 田畑卯太郎  
同 都崎六太郎  
同 北條藤次郎  
同 乃込亦五郎  
監査役 東原竹藏  
同 中井隆三郎

## 松山村小原醸造場

綾歌郡松山村の酒醬油醸造家にして、銘酒白宗鶴の聲および醬油の白露を以て近來目覚しき躍進を見せてゐるものは小原醸造場である。同醸造場は先代小原新藏氏が明治廿四年醬油醸造業を創始し其の後四十二年酒造場を併設して今日に至

つたが、地に由緒も深き近江酒造の後身として酒業經營以來は専ら品質本位を以て異常の精進を續けた。





然して一度歐洲戦後の活況に際會するや氏の進取的氣魄は好潮に會つて業運忽ち躍進また躍進の盛況を見、全く確固不拔のものとなつた。然も好調に驕らざる堅實さは必然の反動的な不況に備へて一意品質の醇良を期した程で、現新藏氏又夙

に先代と共に斯業の研究経験を嘗め先代歿後爾餘の發展を擔つて邁進し。殊に本春醸造倉庫を全部改築する等よく松山村勢の進展に歩調して活躍しつゝある温厚な醸造家である。

### 産業加茂の雄綾川酒造株式會社

中讃の沃野を貫流する綾川の清流加茂村に灌ぐところ其の水邊に接して麓をつらねた産業加茂のシンボルを投影するもの即ち綾川酒造株式會社である。

由來醸造業の興隆を當然とするこの地に同社の創業も起るべくして興りしものにして綾川の清流に集められた同地方有志の關心が遂に發して大正四年一月資本金五萬圓を以て創立を見るに至つたのである而も天はこの新興酒造會社に惠むに歐洲大戰のもたらせる活



況を以てしたが、社運は忽ち天馬空を行く勢ひを示し飛躍を重ねて同社吟醸の銘酒寶千鳥綾千鳥の名聲は瞬くうちに中讃を風靡して社礎はよく確固たるものとなつた。同社はこの發展に安ぜず更に地方民の便益のためその製米部を開放して共存共榮の實を蒔いて需要家の便にも資した。  
現社長岡崎庄太郎氏はさきに坂出商業に教鞭をとり徳望の士又支配人末包定次氏は多年社務に携はり何れも社業發展に努力の人にして一般株主の信頼をあつめて居る。尙同社現重役は左の通り。

社長 岡崎庄太郎  
取締役 後藤輝己

取締役 阿河梅市  
同 未澤和太郎  
同 水谷清三郎  
監査役 小比賀才八

監査役 荒井彌太郎  
同 細谷正孝  
支配人 末包定次

### 新銳カネ大醬油と末包淺市氏

中讃府中村の事業家としてカネ大醬油の醸造元末包淺市氏近代の活躍進展は實に目醒ましい。

末包氏はかつて小學校に奉職し教鞭に従事して居たが感ずる所あつて醬油醸造業に向し、以來研究を続ける事約十年明治四十年頃醸造場を創設爰に天稟の才氣と敏明の氏はよく地方人心に投じて着々營業の地盤を固め文字通り急進の發展を遂げた。



素より其商業方針は薄利多賣の徹底にあり商品の大衆化をモットーとして一步は一步踏固め往く堅實振りには中讃醬油界の新進事業家として盛名を博するに至つたのである。  
目下氏の巨石の醸造醬油は阪神、岡山、廣島、九州にも進出して正に旭昇の勢ひにある。未だ五十三歳春秋多き氏はその長子弘君の新鋭を營業に加へ身はその傍ら村議として活躍を續けてゐる。



## 山内村のヤマセ醤油醸造場

東部綾歌の醸造界にヤマセ醤油の名で知られてゐる綾歌郡山内村小比賀高三郎氏經營の小比賀醸造場は近時その名聲頓に高く、所謂ガツチリした經營方針のもとに中讃を主としてその販路の一部は岡山方面にも進出し播きなき産業界を占めてゐる。



同家は代々近在の豪農として知られてゐたが當主高三郎氏の祖父三吉氏は産業に關心深く遂に意を決し明治初年醤油醸造業を創始した。ついで先代清五郎氏父業を繼承するや刻苦勉勵よく事業の發展を圖り東部綾歌の有力醸造場たるべき業礎を築いた。

その後家業をうけた現高三郎氏は従來の農業と合せてその醸造業に傳統の經營方針を遵守し飽まで誠實な歩みを続け而も他面同村在郷軍人分會長を勤める等村内中堅人材として活躍稀な人格者である。

## 荒井醤油醸造場

綾歌郡府中村にあつて歴史も古き荒井醤油醸造場そのヤマ大印醤油は當主荒井充氏の經營醸造するところである。同場は明治初年當主充氏の亡父大吉氏が創始し、以來晴陰に關せ

ず刻苦を積んで大に基礎を堅めたが、明治三十五年頃氏は四十歳の不惑を一期に惜しくも病歿爰において盛況なりし醬油業も一時休止のやむなきに至つた。

かくて休業十年の後亡父大吉氏の長男信次氏が成年に達して營業再店の運びとはなつたものゝ、幼にして經驗の父に死別し業務に演練すくなければその進展遅々たるにおいて信次氏の實弟當主充氏はこれを遺憾とし自ら父業を昔日に復すべく奮起し、兄に代つて經營にあつた。充氏は爾來一意精進

醬油の品質向上と親切を以て着々舊地盤を奪回し、今や大分縣、阪神に品質と商事の着實を以て信用を博し、又居村では信用組合理事村會議員に推され少壯敏腕家として事業と村自治に馳驅その將來を刮目されて居る。

## 蒲生醬油醸造場

晨に聖峯白峰の翠幃を瞻ぎ夕に綾川の清流を掬する中讃綾歌郡加茂村産業のスター蒲生醬油醸造場は二百五十有餘年の歴史に立つ老舗で、而も其の老舗を双肩に擔つて精進する當主清一氏は年齒まだ廿三歳、春秋多望の好青年である。熱と希望に燃えつゝ高遠なる理想に邁進する此の青年



事業家はおよそ若きに正反對の對照たる實踐躬行の人として謙虛身を以て勞資協調の範を垂れ粗衣と諸味にまみれつゝ醬油の品質向上と經營に腐心餘念なき姿は、加茂村産業の輝かしき主人公であり得よう。

即ち同醸造場は前記の如く今を邁る二百五十餘年の創業にかゝり、父子相傳の醸造術と誠實を以て今日を礎いたのである。當主清一氏の祖父蒲生文造氏は懇勉よく父祖の業を振興し、また綾歌郡北部鹽田の開拓者の一人として仰がれ、郡會議員の榮聯にもつき中興の祖の名を家譜に留めた。その後を受けし長子正氏は由来豪膽な事業家であつたが、酒神の寵兒



となり健康を大ひ静養の人となるや、當主の清一氏をして店業を經營せしめた。これとて天の配劑の妙ではあらう以來家業に専念勤勞を以て最上の快とせる若き氏は醸造にあたつて原料を精撰品質の向上に細心し、此ところ中濃醬油界の雄と

して確乎不動歴史と内容を誇る蒲生家最大の面目を輝かして居る名望家であり事業家なる當主清一氏の此不斷の活動は地の産業事業界に偉大なショックを與へてゐるが、同地方青年に對しても清き感化を與へずば措かないであらう。

## 白陵藤原醸造場

綾歌郡松山村近時同村々勢の進展充實は洵に慶すべきものである。就中工業生産農業生産副業除虫菊の栽培は何れも全國屈指の生産額を示し其他産業自治の發展は村内を通じて平和の理想郷を築き意氣揚々たるものがある。



この産業の村松山に名も白陵の銘酒は藤原嘉左衛門氏の經營にして創業以來異常の發展を續けて居る。氏の良妻ムネ女はもと老酒舖牛田家に生れ氏

に嫁した。酒造創始以來はよく夫君を扶け聞くも涙の内助を以て白陵今日の名聲と基礎を築いた。  
目下嘉左衛門氏は痼疾を得て營業に遠ざかれりと雖もムネ女は養子笹一氏と共に専心店業の經營に當り、其醸酒は縣下は勿論中國、吳方面にも進出し品質を以てして謳はれて居る尚白陵の銘はかつて三土忠造氏の養父三土梅堂氏の命名にして名はよく地の白峯陵下に誇る酒質の高雅と經營の堅實を謳つてゐるものであらう。

## 林田村に名實を築いた濱崎嘉平次氏

さきの荆棘にも時代と人爲の努力を課す時にけ豊穡の垂るゝ良田とは化す。今しも天下に誇る産業鹽産の村を以つて輝かしき村勢にある綾歌郡林田村こそ昔を偲んで洵に祝福すべき現況と謂ふべきである。



素より産業の發達が天恵のそれに係る所大なりと雖も手を拱いて果して桃源に到るや實に建設の努力こそ必要である  
爰に鹽業林田の異彩とも謂ふべき濱崎産業株式會社はその社長濱崎嘉平次氏及同族の建設苦闘を語る鹽業會社であるが、その奮闘の歴史と家族制

度の美習はこれを現況に照して燦然たるものである。

同社の經營する鹽田は明治三十年頃には松山養魚株式會社として仔鱸の飼育場であつて。其後廢棄の狀態のまゝに外壁堤防のみが残存して居た。爰に於て當時同地方有志中この廢

墟に鹽田を構築すべく發議する者あり。其買收方を濱崎嘉平次氏に懇請する等これが活用の機運は表面化せられた。かくて愈々これが實現を期して埋立に着手し、明治二十五年この完成を見るや、更に三十七年鹽産會社の創設を見た其後濱崎氏は逐次同社の株式を買收し遂に大正九年その全部を收了し現在の濱崎産業株式會社となした。目下同社鹽田は埃鹹面積十數町歩其年産二百餘萬斤を生産し、濱崎一統として至寶なるのみならず、偉大なる世益に資しつゝある。

殊にこの濱崎嘉平次氏が今日を築いた其途半には聽者をして終始感激せしむるの事實を以て綴られて居るのである。凡そ人が時を得て發奮するその力は蓋し測るべからざるものにして、時に自らを不能と爲し又みだりに人の能力を評するの輕々あるべからざるは勿論にして。氏の幼少時代は正に虚無的陰慘そのものゝ生活を續けた。その原因は岳父周吉氏が當時瘴炭の苦惱に喘いでゐた村民のために正義の志士として悲慘極まる末路と、これが必然的に加せられる社會の冷罵と更



に家庭の赤貧洗ふが如くなるに因由してゐる。こゝに氏の性格も長ずるに従つていよ／＼すさみ、いつしか暗黒に彷徨する反逆兒となつた。然し悪の花を清算すべき時は来た。即ち遂に四ヶ年間園圃の月を眺めしめた。こゝに氏は人生の何もかをもさとり悔恨の涙に一切を淨化し、性の善に翻然と立ち歸つた。時に三十二歳、この期を一轉機として氏は一路更生の過程を奮進し、悉ゆる辛酸苦闘をなめた。此新生活に氏は漸く前途に希望の陽光を發見し、かくて居村林田に産鹽事業勃興するや身をふるつて活躍遂時その基礎をかため。間もなく擧げられて村會議員となつた。こゝに於て當時全く顧みら

## 總社鹽田と廣瀨氏の功績

綾歌郡北部鹽業の村林田村に於ける總社鹽産株式會社最近の業績は又見るべきものがある。同社は明治三十六年頃濱本清、森崎紹氏等の主唱のもとに資本金六萬圓を以て會社を創設現社長廣瀨小三郎氏は以來擧げられて社長となり、三十餘年の間建設經營の苦心又大正三年に於ける大洪水堤防決潰の

れざりし林田港築造の急を知るや卒先その計畫を樹て是又寢食を忘れて東奔西走、海國にすら點記なかりし同港をして今日の設備展開あらしめたのである。

斯く七轉び八起きの濱崎氏は今日同村に輝く各鹽産事業に基本的努力開發の勞を捧げ自らの濱崎鹽田は之を一統に經營せしめつゝ大器晩成の譽を全うして七十五歳の今日餘世を信仰と社會奉仕に過ごしてゐるが、世にも稀な特異と自奮の輝く生た記録であつて目下濱崎産業會社は氏の息嘉一氏彌右衛門氏その他によつて經營されてゐる。

災害多事にも撓まず常に事業の前途を確信し、今日の誇るべき業況を展開せしめて居るが、その創立當時の資本は僅に六萬圓であつて、當時豫定地區四十町歩の鹽田外廓工費に過ぎなかつた。

而して更に次に採鹽施設其他の急費を訴ふるや早くも一頓

挫の情勢とはなつた。即ち堤防築造の難工は意外に多額を要し該工事遂行上致命的打撃とはなつたのである。

斯く難局に立つては株主の多くは當務重役の不明として批議するものである、こゝに同社も殆ど事業中絶の危機進退存亡の狀態として増資拂込を以て既設の工事を生かすか六萬圓を棄るか岐路に立ち、こゝに廣瀨社長は既に工事の前半を



經過し餘す完成の懼びを棄つるの忍びざるに於て、直に六萬圓増資敢行を株主一同に力説し遂に其至誠は株式五十圓券を百圓に資本金六萬圓を十二萬圓に増資を決議し内八萬

四千圓の拂込として一同の承認を得、即時該工事に着手したこの工事資金難に當面した會社は又他面工事請負にも幾多の脅迫身に迫る危険と澁滞を見つゝ廣瀨社長は常に泰然自若斷の一字を以て初志遂行に邁進した。

斯て明治卅九年四十町歩の大鹽田を完成して採鹽の運びとはなつて、茲に關係者一同の懸命に築かれた該鹽田は以來豫期以上の好調を續けて居るが、此廣瀨社長の剛膽徹志企劃經

營こそ同社今日の懼びを分つ所以として株主は感謝して居る

其後大正三年大洪水の受難あり、當時々價三百圓の同社株式は一夜にして四十圓前後に下落、目も當られざる破目に墮ちたが、廣瀨社長以下一同はこの復舊に努力し、約五ヶ月にして完成した、其後無難にして目下年産約七百萬斤の好績を擧げつゝその經營を二十四名の請負制度として至極圓滿裡に社運の進展を見つゝあるが、同社今日の繁榮も斯の如くして築かれ想へば現社長廣瀨氏の全貌が語る獨特強靱性の然らしむる所にして、氏が現下本縣政界水産界の重鎮とし自他共に許す資材なる事も自ら明かであらう。尙目下同社の重役は次の諸氏である。

社長	廣瀨小三郎
取締役	小松忠八
同	猪熊彌三郎
同	濱崎嘉一
同	中川精逸
監査役	猪熊常八
支配人	濱垣矩久太



# 林田塩田株式會社

中讃坂出を中心とする一帯は本縣鹽業の中心盛地として幾多大鹽田は連々晝夜の別もなく黒煙濛々として天を掩ふの盛觀にして、爰にその雄たる林田村林田鹽産株式會社は其歴史並に事業發心の動機には世をこそ経れども感激そのものが織られて居る。

林田地方はかつて砂糖の村として莫大な生産を示し村勢の裕を誇つて居たが、其後明治十五年頃に至るや他地糖業は漸時林田糖を壓迫し鹽て村勢は疲弊目も當られぬ慘狀を呈するに至つた。而してその時村長中條六三郎氏はこの慘



狀を切に痛心し産業の轉向を以て村民を匡ふに若かずと熟慮の末その地先に鹽田を構築し同事業を以て刻下の急を救ひ且

以て村治百年の計とはすべく、直に時の郡長藤井定親氏に諮り至大なる諍辭を受けた。しかも當時の鹽田は概ね海濱の砂地を一區劃掘り下げ僅に均したのみの鹽田なりしに、先覺にも氏の築造法は既に現行の築造方式を著創して居た。當時氏の築造法は一部村人の冷笑だに買つたが、氏は頑としてこれが力説高唱し。遂に潮尾景嚴、荒木岩太郎、鹽田時俊、佐野數二、宮井孫三郎、大林膳平、濱本喜多八等同志に由つて一萬六千八百圓を醸出し明治十八年右工事に着手した。

さればとていざその後の責任とも云へば何れも進んでこの大工事を然も目前の資金難を控へては責任を負擔する勇者はもとよりなく、爰に及んで中條氏は今己は村治の衝にあり村民大衆の福祉を思ふに發せし本業である。いかでか他を顧みる邊やあらんと決然自らその身の財を投減の一大犠牲を覺悟し、剩つさへ親戚一同にもこの旨を含め斷然同鹽田四十町歩の築造完成の責を引受けたのである。

爾來工事の進工と共に要する巨費は氏及び其一族に於て無

# 林田醬油株式會社

理苦心して調達一意完成へと進んだ。明治二十年工事は竣工を告げたのであるが、但しこの時は中條氏は私財は愚か生命をも捧げし状態ではあつた。次いで明治二十一年正式に資本金三萬六千圓の林田鹽産株式會社となし、更に二回の増資後今日に至つて居る。初代の社長は潮尾氏にして明治三十二年まで經營に當り、ついで鹽田時俊氏社長となり明治四十五年荒木岩太郎氏、更に大正十三年現鹽田定一氏就任社業の進展に努め、目下隆々として年産約一十萬斤を生産し、資本金二十一萬六千圓に對する。毎期高率配當を持続しつゝ縣下有數の大鹽田として社礎堅實同村一帯の人をして生産事業の恩恵を蒙らしめて居るが、憶へば中條氏の敬服すべき先見企劃乃至その甚大なる物心の犠牲が今日同鹽田盛況の基礎をなす所以として讃仰措かざる所である。

尙現鹽田社長の下には前川寅太氏あり會社と就業者間に介在して共に先賢中條氏が當時の苦心を休して勤儉力行を實踐しつゝあるが、同鹽田こそ林田村民の幸福をこめた寶庫ではある。尙會社の現重役は左の諸氏である。

取締役	鹽田 定一
同	荒木 喬
同	宮井 卯太郎
同	佐野 龍一
監査役	猪熊 彌太郎
同	岡田 中央
同	大林 英夫
同	井上 秀孝
相談役	末澤 潤吾

林田村産業の雄を語るに林田醬油醸造株式會社がある。同社は明治二十年同地の森貞二氏の創業に係り後明治四十五年

岡崎助四郎氏之を繼承するに至つて時代の要求を察した氏は同地有志と共に資本金十萬圓の株式組織に變更し、以來地の



富豪濱本清次氏社長として社業の發展に盡し、今日の信用と基礎を築いた。殊に其醤油は品質を本位に醸造し創業以來各品評會に入賞數ふるに違なく七年の日本醸造協會主催全國酒醬油品評會に於ても特撰入賞し品質優良の烙印は輝きわたつて居る。

濱本清次氏は老軀のため社長をしりぞき、代つて取締役河合七郎氏社長に就任、前社長の長子濱本浩太郎氏専務取締役



として社業の一切を處理し、近時の不況にも每期益金を計上して他方償却積立等に努め社礎を固めつゝあるは同社の最も誇りとする所である。因に社の現重役は左の通り。

取締役社長	河合七郎
取締役	濱本浩太郎
同	松浦太次郎
同	加門實次
同	松田辰次
監査役	保井吉太郎
同	大美嘉四郎

## 大阪藤澤藥舗と其本縣林田工場

綾歌郡林田村新開の海岸に九下餘坪の敷地を劃して立ち並ぶ工場の屋根と二大煙突より吐く黒烟に其龐大なる生産力を象徴する株式会社藤澤友吉商店林田工場は、中讃製藥界の重鎮として近來加速度の躍進を見せてゐるが、其處に集まる百

餘名の従業員の眞劍其ものゝ活動振りと管理人丸石俶弘氏の多年の經驗と堅實なる經營とは大藤澤商店の發展膨張を如實に示し、林田産業界に一入の活氣をそそぎ込んでゐる。

同工場は大正十年十二月前身大阪アルカリ工場の後を享け

て大阪製藥業界の巨人藤澤友吉氏が當時親交厚かりし徳島の富田久三郎氏と共に創業その後昭和五年七月に至り藤澤氏の個人經營となり同六年八月株式会社藤澤友吉商店に併合せら



れ株式会社藤澤友吉商店林田工場と改稱現在に至つて居る現在同工場に於て製造さるゝ主なる製品は工業用炭酸マグネシウム及硫酸マグネシウムを主体とし副産物として肥料

鹽カーナリット及素製プロームの採取をなして居る。炭酸マグネシウムは年産額二五〇萬斤價格四十萬圓に達し硫酸マグネシウムは人絹工業の紡糸加工原料を主とし、一部

局方及工業用として一般地方に販賣し年産額七五〇萬格磅價九萬七千圓を示してゐる。

尙副産物たる肥料鹽二五萬貫價格七、五〇〇圓、カーナリット一二萬貫價格七、二〇〇圓、プローム三萬磅價格一八、〇〇〇圓も亦見逃す事の出来ぬものである。

而も炭酸マグネシウムの原料たる苦汁は附近の鹽田より供給される點は同工場の位置を價值するものであつてさらに其の硫酸マグネシウムに至りては品質の優秀なる點に於て全國隨一を誇つてゐる。

丸石氏は藤澤商店動績二十五年餘同工場へは創立と共に赴任して今日に及び、林田村を第二の故郷として同村産業發展の支持者である。(寫眞は丸石氏)

## 金山鹽田株式會社

綾歌郡金山村大字江尻に十四町歩の製鹽地を有する金山鹽田株式會社は創立以來三十有餘年を経て、年産額三百二十萬斤に達し、その間小作人と會社との藹々たる機和協調には一

點の波瀾もなく、従つて小作人の眞面目なることも多く鹽田業者の羨望を集めてゐることである。この平和鹽田にもその創業當時幾多の難事苦闘貴き記録を綴つて、今日の榮冠を獲



得して居るが、抑々同鹽田は明治三十三年五月に創立し、當時この附近は西讃産業界の恩人久米榮左衛門翁の努力に因つて埋立されし地であつた。

この人為滄桑の變を以て荒磯は一大美田を爲したが端なくも灌漑水の缺乏は關係農民の困窮を叫ぶるゝに於て、時の金山村長高木健三郎氏は同村福江の實業家都崎秀太郎氏と諮り



寧ろ此地を鹽田化するに若かずなし、遂に資本金三萬圓の金山鹽田株式會社を創設した即ち同社發祥の一步である。其後都崎氏は鹽田工事竣工と同時に社長に就任、經營に

當つた。然るに如何に燭眼の達士にも地中天來の異變にはこれを制する能はず採鹽の結果品質極めて粗惡加ふるに隣接田畑への鹹水浸潤には創立の惱み以上にして暮々たる非難は氏の頭上に注がれ、遂に一時作業中止のやむなきに至つた。去りとて之しきの困難破面に逡巡退陣の都崎氏ではなかつた苦しみを厭ふ者に成功は與へられない。農作不適の故を以ての一石二鳥たる此大事業遂行上途半の忍苦は未だ買ふべし

と氏は更に苦心研究鹽田施設に改良を加へ、其實績を見て關係農家に理解を求めた。道の農民も氏の熱と道理と其將來性に脆くも龍頭蛇尾凱歌は快よく都崎氏に擧げられた、かくて自他の爲に苦慮多かりし局面を打開した。同氏は其後一意事業の確立に腐心し、ついで十五年後鹽專賣法實施と共に異常な業運を展開し、不拔の基礎は築かれたのである。

尙都崎氏はこの外紡績事業、銀行業其他今日赫々たる本縣産業機構の創案經營に或ひは又政界に馳驅する等敬すべき先輩偉材なりしは謂ふを要しない所であつて、現社長都崎發太郎氏は嚴父の後を受けて大正十五年以來就任、氏又直接教育界に多大の功績をとどめ同社を始め幾多の會社に關係し本縣教育經濟の兩面に重きを爲せるは周知の如くである。

目下同社は專賣局の指示に基き製鹽場の合併或は最新設備を施して一等鹽を生産時代經營の完璧を期してゐる。同社現重役は左の諸氏である。(寫眞は都崎發太郎氏)

- 取締役社長 都崎發太郎
- 取締役 大浦新次郎
- 同 鎌田芳夫
- 同 前田正夫

- 監査役 大浦次良吉
- 同 前川博

- 監査役 大村英夫
- 同 北條新之助

### 金山新鹽田株式會社

本縣鹽業界にあつて最新の施設を誇り今やその青年的鹽田機能を發揮し、更に未來に多大の期待を冀むるは蓋し綾歌郡金山村金山新鹽田株式會社であらう。同鹽田は金山舊鹽田に北接し坂出港の東方綾川の裾より西方に向つて自然に形成された寄洲を利用開拓した三十三町餘歩の新鹽田である。

同社は大正十四年三月資本金三十萬圓を以て創立直に着工昭和三年工事竣工事業開始とはなつた。これより先舊地域に於いて同事業を自論みし小富士製鹽會社があつた不幸にもその事業は中途にして挫折成功覺束なきに際會して、當時本縣産業界の雄俊都崎秀太郎氏等はその社業の未成惜しむべき退轉を眺め地方産業開發の趣旨に基きその權利既設の造物一切を譲り受け遂に採鹽設備の一切を完成したのである。隨つてこの間都崎氏以下各關係者の苦心計劃は實に想像外に

して、殊に設備に於ては最新の粹異を收め就中鐵筋コンクリート鹹水溜鹹水濃縮装置遠心分離器等誇るべき施設を以て近代の合理化操作の範を整へて居る。故に一個の鹹水溜も優に八百石の鹹水を貯藏し、この數四十四を數へ、在來の粘土製に比して實に劃期的設備にして又即時水分を分離する分離器この外鹹水汲み上げ排水の兩装置等何れも見るべきものあり其の業績の如き築造後間もなき今日と雖も現に年産七百萬斤を算する優秀さにして、向後青年期に於ける好績は推するに難くない。

然も會社統營の衝に當る現社長都崎發太郎氏は先代秀太郎氏跡のを受けて就任常務の經營に當る津島吉之助氏は明治鹽田、屋島鹽田の社長として斯業に通曉し經營の妙は既に定評を有りその潑刺たる氣力と十八歳よりの經驗は昭和六年十月



同鹽田堤防決潰の一大災事に逢着するもあへて動ぜず、直に復舊工事に着手し數萬圓の大補修復工事も可及的迅速に施行して株主の信頼に應へ以來、一、二等良鹽の生産を以て着々社礎を固めつゝあるが、これ等は鹽田業のあらゆる體驗智量の所有者に非ざれば爲し能はざる處策にしてかくて、同鹽田は新興の理想も快く愈々佳境に入れるは寧ろ當然である。因に目下同鹽田の重役は左の如し。

社長 都崎發太郎

取締役 津島吉之助  
同 西條欣吾  
同 北條新之助  
同 前田正夫  
同 小松忠八  
同 松浦伊平  
監査役 須崎利吉郎  
同 北伊三太

## 坂出同盟銀行と洲崎準一氏

凡そ人類の活動の生氣がその血清の環流と然もこれが聊かの遲滞だにあるべからざる完通の機能に由ると同じく世の一般産業界にあつてもその安固と進展を期す上に最も重要にして、且經濟血液とも謂ふべき金融機關の整備活動が如何は實に其地方及び産業の興廢を決定するものでなければならぬ。

近時中讃坂出地方がその生産事業の發達躍進を以て縣下唯一の産業都市然として更に近き將來異常の祝福すべき展望をこそは現實坂出の雄姿にして、この驚異すべき發展性の坂出には歴史を誇る鹽業の外製粉製麥業あり、醬油、紡績其他各種の生産等其取引の股賑は彌が上にも坂出町勢をして生氣充滿潑刺たらしめては居る。

現に同町及びその附近の鹽産にして年額五百萬圓を算しこの不動の迫力を基本とする所に坂出の實力は強靱である。随つてこれに培養さる各種事業の成功性強き所以にして然も産業の血脈ともする。其地金融機關は夙に遺憾なく機能を動員し血肉合体を呈して今日の盛況を招來せしめて居るが、その金融機關中本店銀行たる坂出同盟銀行は明治二十年頃荒涼たる漁村坂出時代より文



化的現代坂出町に至る此間金融機關の大任を負担して一意生産都市坂出建設に偉大なる貢獻を爲せるは特筆に値ひする同行は明治二十

年頃現専務洲崎準一氏の嚴父笹一氏が主唱して合資會社坂出同盟銀行たる金融機關創設以來専ら氏が中心となつて一般金融界に活躍した。

其の後株式組織に改組され大正七年資本金五十萬圓の株式會社坂出同盟銀行として時代的本格的金融機構を整へ、洲崎氏は自ら頭取として堅實をモットーに同行今日の基礎を築い

たが、現専務は父君の下に支配人として共に經營の衝に當つた經驗の士であつて殊に金融機關の重要性とこれに携はる責任を自覺し地方銀行の眞使命は産業の開發にありとし坂出地方商工業者に對しては最も善良なる利用機關時に指導機關として活用せしめた。

其後地の同業綾歌坂出兩銀行は縣外銀行に合併し以來は同盟銀行のみ獨り本店銀行として坂出産業を双肩に擔つて萬丈の氣を吐いた。洲崎準一氏の歿後現専務はこれが統營の衝に就き昭和二年讃岐銀行を合併するに至つて資本金を二百萬圓に増加し、支店を多度津、飯野に置いて活躍して居るが其の預金三百萬圓餘この有機資金は概ね同行の本領とする地方事業資金に運轉して堅實不變の業績を示して居る。

更に洲崎氏は本業一人一業を金融業者の眞諦として他を顧みざるはこれ同行の爲に敬慕すべき一事にして今日坂出町が旭昇の現實を謳はるゝ内面に同行の存在乃至専務洲崎氏の人格識見を以てする産業上の寄與と及び直接氏が町議として自治に對する貢獻等は實に至大なるのみならず、氏を以つて急角に發展しつゝある現實坂出に貴重なる人材たるは謂ふまでもない。尙同行の重役は左の如くである。



専務取締役	洲崎準一
常務取締役	村井清治
取締役	平田喜平太
同	清水磯五郎
同	眞鍋長平

取締役	後藤豊
同	山本廣治
監査役	中川正一
同	村井半助

# 琴平急行電鐵株式會社

神郡琴平町と中讃の新興坂出町間十五キロ七分を快適三十分にして繋ぐ颯爽オールスチールカーによつて交通社會奉仕の一路を精進せる琴平急行電鐵株式會社は、昭和二年五月の創立にして、百九萬九千二百五十圓の資本を擁し木村榮吉氏社長に就任と同時に郷土愛に燃ゆる白川友一氏の犠牲的工事請負により昭和四年四月着工以來約一ヶ年の後五年四月七日最新式オールスチールカー六輛を運轉して華々しく營業を開始した。

商來國鐵を初め備讃商船、合敷鐵道、合敷自動車、伯備線及び大阪商船と連絡し、更に坂出港より驛まで自動車連絡を

以て旅客の便益を圖り、中讃交通界の寵兒として逐年躍進を重ねてゐるが、同社目下の重役は、

社長	木村榮吉
取締役	鎌田晃
同	安達賢
同	島田恭平
同	宇都宮徳次郎
監査役	鎌田榮
同	佐藤清三郎

の後敏鬼才の諸氏を集めて、精彩を放つてゐるが、琴平に旅

客を送る同電鐵が沿線に持つ勝地讃岐富士の明媚は特別に同社の明日を約束するもの一つたるに値する所であらう。かつて攝政宮殿下のあかつきに駒を止めて見上ければ



讃岐の富士に雲ぞかゝれる

と御詠になりしこの名山は、久しくその寶玉的景観と傳説の

地を擁しながら拓られずして訪るゝ人も稀れであつた、之が急行電鐵開通に因つて山麓登山驛に下車する人の數も日を逐うて増し、一躍讃岐名勝の寵兒となつた。

同山は標高四百二十二米、中讃平野に巍然として聳立し而も登山道路も坦々としてピクニツクの快適地を思はしめ更に山頂の眺望は筆舌に盡せず山内には縣社飯野神社、峯の薬師堂、岩窟の不動尊、石槌大權現、五重の塔の靈場の外魔の足跡噴火口の蓋石等の奇觀あり。従つて同山景は同社隆運の重要な役割を恃まれては居るのも無理ならぬかと。

この外同社は飯野驛に於て時々各種の催物を爲し興を添へる等琴平と坂出を最短距離に連結すること急行電鐵こそ沿線開發に貢獻すると同時に外客にも便し且その將來は坂出の成長に同行して逐日擴充されては往くであらふ。



## 坂出港頭を壓する日清製粉工場

坂出港頭西景橋に近く巍然として天空を壓する五階建の大工場は東京市日本橋區末廣海岸に本社を有する日清製粉株式會社全國十二工場の一つたる坂出工場である。

同工場は大正十四年三月一日當時資本金百萬圓を以て經營中の讃岐製粉株式會社を買収し、爾來發展今日に至つた。買収當時の日産一千袋は日下日産三千八百袋を生産の大工場たる機構は整へられ業況の全般に於て今昔の感深きを覺ゆるものである。徳べばさきに坂出町有志が本縣産小麦の良質と其豊富さに企畫經營した讃岐製粉株式會社を時代の推移に我國製粉界の權威日清に其全使命を委ねて以來、日清に於ては其裝備に大改善を施し前記一大能率工場とはした。殊に同工場の特異は本縣産小麦を消費内麥中八割使用し、生産製粉は四國、廣島、岡山、阪神、北海道又最近に於ては滿洲に驥足を伸ばし、活躍を續けて居る。

然も其製粉機は中外に誇るべき最新式ローラー十五臺二百馬力の動力により百雷の如き機械交響樂を奏でつゝ小麦貯藏



原料小麦を保管し得る二千坪の大倉庫とであるが、更に業況

タンクから流出する複雑精巧なる經過によつて瞬く間に製粉

と殘糟とを完全に分離するが、原料から製品への流動中の防危設備のときも海水と鑿井とによつて完璧を期しその他諸設備もすべて模範的大製粉工場の名實を整へて居る現工場は五千餘坪の中に本工場と二十五萬俵の

の躍進と坂出將來の其れに着目し、同町海岸埋立地一萬一千五百坪の宏大なる地域が近き將來に於ける新工場敷地として約束されてゐる現況にして斯くの如く近代的偉容と發展を誇る大工場を統率する工場長作道豐藏氏は入社以來十八年の精

勤家であり、坂出工場創設と同時に赴任して幾多の經營苦を體驗打開し同工場をして盤石の基礎を築くと同時に本縣事業界にも多大なる貢獻の士である。

## 坂出益田と岩瀬氏の功績

畏くも大正十一年攝政宮殿下行啓の光榮に浴せる坂出鹽田は採鹹地百二十餘町歩年産二千五百萬斤約六十萬圓に上り我國十州鹽田中の最大生産田である。この鹽田と鹽産合資會社の活躍は過去に於いては坂出町發展の酵母にもあたひし、隨つて同鹽田經營にその七十餘歳を獻け來つた老専務岩瀬庄太郎氏の功績は輝く七彩の虹よりも绚烂たるものがある、抑も同鹽田の起源は遠く文政の普通賢久米榮左衛門翁舊藩主頼恕公に獻言して此處に鹽田を開拓して以來藩の財政を賑す所となつたが、廢藩置縣の際功臣達に分與しその一人としてこの經營者となつたのは現専務庄太郎氏の祖父徳右衛門翁で斯くて時代の變遷要求に明治初年坂出鹽産合資會社の誕生を見た

其後庄太郎氏は推されて重役の席につき爾來終始同鹽田經營の任に當つたが、その功績又實に多大である。

素々庄太郎氏は安政三年に生れ十二歳にして嚴父に死別し以來鹽田業に従事、その間の忍苦と努力は筆舌もよくつくし得ざる所であつて、長じて基督教を信仰し、これを通じて憫みの中に歡びを知り、その披かれた大雅量は徒らに物質慾に走らず共存共榮を一念として善處した。大正十年頃氏は産業組合法に準據して先づ同年十月廿六日同社内購買販賣利用組合を設置し同十三年一月には更に信用部を加へて購買販賣信用利用組合となし、組合によつて同鹽田七十軒前の使用人の利便を企圖するなど、萬難を排して鹽田に生活する者の經



濟確立に努力し、その間地方に於いても町會議員の榮職につき今や功成り名とけて縣下鹽田界の生字引とまで謳はれつゝ信仰的餘生のうちに専務として精進してゐる。因に會社の現重役は左の諸氏である。

顧問 鎌田勝太郎  
専務取締役 岩瀬庄太郎

取締役 大石正一  
同 綾吉之助  
同 山本廣次  
監査役 綾佐之吉  
同 山地清右衛門  
同 清水磯五郎

## 綾醬油株式會社の躍進



本縣下に生産事業の町として不斷生氣の躍動と且これを誇る坂出町こそ近く更に生産都市の面目をもとへて澁刺たる市制施行もすでに時間の問題とはなつて居る。この異常の發展指數の中に醬油醸造を以て一般町勢の進展以上に赫々たる商況を示せるは即ち綾醬油株式會社である。

同社長綾佐之吉氏は其先代當時薪炭商を營み更に米穀商に

轉じ氏が三十二歳の時明治三十九年はじめて坂出の前途多望なるを意識するや醬油醸造を創始した。素より地の有力なる穀物商として商機を見るに敏なれば其原料仕入れ販賣の兩面常に機微を制し加ふるに氏の人格圓滿と業務に着實は醸造に轉向以來着々基礎を固め、年次増石發展を辿つた。かくて創業當時僅に三四百石程度の造石も大正五六年頃には早くも數千石の巨石を示し、更に大正十年に至つて事業組織を資本金二十五萬圓の株式會社となし嚴然本縣斯界の錚々として環視の商社とはなつたのである。

爾來綾氏はその獨特の商才と一路に精進は外に發展内に充實誇るべき現況を成業したのである。現に斯界一般は不況の嘆聲未だ拂ふ能はざる商況にも同社は年産五千餘石を醸造し丸紫の名も雄々しく愛媛、徳島、廣島其他に比肩なき名聲を博して居るのみならず、其品質の高雅を誇るに各品評會に於ける好成绩はその何ものにも優る立證であつて、この如く異

數の躍進盛況を礎ける綾氏の面目も近來世人より發展繁榮の言葉奪はんとする坂出町の現勢に照して光彩陸離たるものである。尙氏は醬油業の外町會議員として町自治にも貢獻し一偉材として信望益々高きは氏が把握する穩健着實の本領が然らしむる所である。

## 醬油の水尾本家

讃岐の三盆國中でも坂出の鹽は名實共に天下に冠たると共に國家的必需品である。

この地の利天の恵み深き坂出町に赫々たる光輝を放ち天下の銘醸逸品と推獎さる「水尾醬油」こそ同地の舊家にして醬釀界のナンバーワンたる水尾本家の吟醸にかゝるので



ある。

水尾家の先代長太郎氏は夙に斯業の將來性を遠觀こゝに意を決して勇躍業を起し一路精進粉骨砕心以て今日の隆盛に至らしめた偉才である。更に氏の公的生活方面に於て成された業績は人をして尊敬の念をはらはしむるにたるものが多々あつた。就中斯業の先達とも云はれ業界組合を良く率先唱導して今日の基礎を作つた實に斯界の恩人ではある又品質改良の意に厚く一大信念を以て優良品の製造を専念し、其卓絶する技能は常に斯界の寶玉として迎へられた。



然るに天此の偉材に誇をかさず先年惜しくも歿するや、當主二代目長太郎氏は若くして先考の遺鉢を享け明敏よく家業に精勵して益々發展隆盛に至らしめ其の商才たるや實に業界の新人として盛名高き所であつて、常に技量卓越する杜氏を招き最新式の設備と大量購入による精選せる原料を以て家傳の秘法合理的醸造法と相俟つて誠に當代に誇る逸品を醸出してゐる。

其苦心は酬ひられ今年産よく數千石を製造し廣く京阪神北海道、中國、土佐方面に販路を求め其販賣店たるや何れも

## 惠まる、坂出瓦斯株式會社

新興都市への曠目的躍進を重ねてゐる坂出町の近代化に一段の精彩を加へたものに坂出瓦斯株式會社がある。同社は昭和二年瀧勇、松浦伊平、今澤義三郎等の諸氏提唱のもとに計劃し翌年五月商工省へ瓦斯事業開始許可申請、四年六月八日附で許可を得るや直に創立準備に着手し、西條欣吾、津島太郎、香川善吉、川西久吉、龜井萬太郎、小松忠八、三野三平

地方屈指の大問屋である。これを見ても如何に同家の商略が時代的當を得てゐるか察するに難くない。この好評嗜々たる名に背かず、例年醸造協會主催品評會を初めとし各地博覽會に於て優等賞を連續得てゐる。わけて大正十一年攝政宮殿下大演習に行啓の御役も天覽に供し奉り宮内省の御買上げを賜はつてゐる等、これらは特に強記すべきものでかゝる名譽と光榮に輝く同店は、新興の都市坂出鹽の都の坂出によくも意氣を投合して邁進してゐる。

松浦開二、島田恭平の諸氏によつて計畫を發表されたが、その株式は瞬間的に滿株に達し、昭和五年六月三日創立總會を開き資本金十五萬圓の坂出瓦斯株式會社の誕生を見た。

斯て社長に瀧氏専務に松浦氏等就任、殊に社長瀧勇氏は瓦斯事業界の一權威者として自他共に許す鬼才であり、専務松浦伊平氏また人も知る本縣政界請負事業界の精銳にして斯の

如く卒爾として生れた會社は直に活動營業準備として瓦斯發生装置タンク建設等に取かゝつた。時しも一般物價は奈落の底に低迷し又世人の多くも不況の慘風に脅へ委縮退嬰それ事とするこの時に於いて、決然工事を進めた會社こそ實に惠まれの好期をつかんだ。即ち物價安の惠澤はその建設費意外に少く僅に五萬數千圓を以て最新設備を完了したのである。

一切の營業施設を了して瓦斯供給を開始したのは五年十月であるが、當初の瓦斯使用戸數は三百餘戸にして、尙これが供給管四萬數千尺一日の瓦斯送分量二百數十立方米突、創業早々にこの成績を示し、爾來着々開拓して現に四百數十戸三百二十立方米突の高熱瓦斯を供給して居る。

此状態にして營業勘定に於ても新設會社稀に見る成績を挙げ一方坂出町勢の發展を尺量しつゝ生活文化の使命を果しつゝある。一般瓦斯事業の堅實性は多く言を俟たざる所である

が就中同社の母體坂出町近時の驚くべき發展性にこれを綜合して同社の前途は多幸の外ない。因に目下同社の重役は左の諸氏である。

取締役社長	瀧	勇
専務取締役	松浦	伊平
取締役	今澤	義三郎
同	龜井	萬太
同	川西	久吉
同	津島	太郎
同	松浦	開二
同	新野	一
監査役	西條	欣吾
同	小松	忠八
同	三野	三平

## 精麥業津島才助氏

坂出の明神町は精麥産業の町である。その大小工場から間

断なき精麥の騒音は坂出が誇る産業中樞の鼓動にして又生氣



の源泉にも當るであらう。

而してこの町の津島精麥所主津島才助氏は同地斯界の雄と

して近時の發展は實に目醒まし  
いものがある。



同精麥所は大正十一年の創業  
であるが、これより先津島氏は  
明治四十一年以來精穀業を經營

し、偶々歐洲大戰の活況期に際して氏は一轉精麥界に進出し  
た。この頃坂出の精麥業は地利と麥質の優良で以つて全國的  
聲價を博し一般に異常の躍進を見たものである。  
然るにこの盛況を眺め群少精麥が續出したが彼等は後に於

て自然淘汰を餘儀なくされたが、拂はざる犠牲に報なきは當  
然旺んなるもの又衰ふ慣ひか津島氏は此間今日の犠牲は明日  
への收穫を約束するものとして最も多難なりし精麥界の一期  
を精進努力したれば次に掲げられた業界好轉の光明は氏の全  
部面を直射して、その業運は全く驚異の展開を見せた。  
以來氏は身を以て原麥の仕入、工場精麥、これが販賣等寧  
日なき活動の日を續けた。されば目下にては年産數萬依を精  
麥し全國に移出して坂出精麥界の雄勢を築いて居るが、他方  
又公的方面にあつても現に同町會議員、商工會及信用組合理  
事として活躍しつゝあり、氏の如きこそ眞に現代坂出の要求  
する人材ではあらう。

### 西川精麥台資會社



新興の氣運八紘に漲る坂出  
町の産業界に燦然たる一方の  
星座を占める精麥業は今や年

産五十萬依を越え十州鹽田の最高たる同地方の鹽田發達史に  
伴ふ相即不離の躍進を重ねて完全に全國的聲價を獲得した。  
その盛觀のなかに更に斯界の重鎮として自他共に許す事業家

として同町明神町に大工場を有する西川精麥台資會社がある  
其創業明治三十年精麥坂出に於いても老舗の誇りこそある當  
主西川馨氏は仲多度郡垂水村の出身で約五十年前坂出に出て  
米穀商を創めたが、時あたかも同地方鹽田の發展期に際しそ  
れに伴ふ輸送機關の發達を見るやたまたま便船に委託して精  
麥の縣外移出を試み、又需要者の精麥に對する嗜好を調査す  
る等、精麥搖籃時代にあつてよく今日の盛大に至るを洞察し

て先鞭をつけた。創業當時に於ては一日の精麥量僅々二十石  
内外に止どまり又幾多斯業の難事に際會して氏はよく不撓不  
屈漸次業礎を築き精麥機の如きも獨特の工夫改良を施し他面  
販路の擴張に努力する等異常の精進は酬はれ今や精麥量も年  
平均十二萬依産額五十萬圓に達し、最近令弟三人と合資組織  
に因つてその業に愈々邁進してゐるが、一方氏は町會議員と  
して町政に盡し重きをなして居る。

### 山地三代吉氏の精麥業

坂出町梅園町山地三代吉氏の精麥業は大正七年創業以來日  
進月歩して現在その年産數萬依に達し殆ど全國津々浦々に發  
展の盛況である。殊に最近、北海道、東北地方の不作による  
同地方の精麥需要は果敢激増し遂に供給不足を告ぐるの活況  
を呈するに至つたが、坂出精麥界の爲には祝福すべき現象と  
謂ふべきである。

この恵まれる中に山地氏は夙に朝鮮臺灣方面へも進出し盛  
んに輸出しつゝあるが、その積極進取の氣魄こそ現代坂出精

神の發露であらう。山地氏が今日坂出斯界にあつてよく錚々  
となすもその昔日露戰役當時丸龜聯隊の勇士として出征數多  
の勳功を樹て、凱旋するや縣の穀物検査員となり、奉職十一  
ヶ年この間米麥業に對する興味を覚え、同時に坂出に於ける  
精麥業の進展性を洞察した氏は恩給年限近き検査員を恬然と  
して辭し、理想の精麥業に轉向直に某所有の麥稈工場を買収  
し精麥工場に改造して愈々斯業に一步した。

氏は年來の研究見識を傾けて一意邁進し斯くて歐洲大戰時



の好況に恵まれると共に漸時業礎は築かれ今にして氏は坂出  
精麥界の雄として實力信用を謳はれて居るが、爰には氏の誠

實努力と創見の眞面目さが輝く今日に到達せしめて居るので  
ある。

## ヤマセ醤油醸造場

中讃讃岐富士の名を以て知らるゝ飯野山はその山容嚴とし  
て壓するの感があり、中讃の一名勝でもあるがこの秀嶺下に  
一際目立つ生産の牙城ヤマセ醤油醸造場も又斯界に於ける婉  
然秀嶺の感深くヤマセ醤油は  
山本清太郎氏の経営であつて  
先代清五郎氏が明治の初年農  
より出でて醤油醸造創始以來  
粒々として築いた商業本據で  
ある。



當主清太郎氏は早くより父  
と共に斯業に殞頭して建設經  
營に當つた體驗の主なれば先代の老後及び歿後に於ける醸造  
と外交に不斷比倫なき活動を續けて益々巍然たる業態を示し

た。即ち活動に與へられ明朗にして殊に氏の事業に對する  
信念としては徹底的奉仕の活動を以てする外に何もものもなく  
従つて商品の生命保持の爲めにする努力その取引先毎に自ら  
調味鑑定して各嗜好に適合の醤油を供給する等眞に時代的商  
品たるの萬全を期せば大衆への商品魅力は新鮮である。  
同時にその外交に於ても自ら一線に立つて三伏零下の晨を  
厭はず馳驅し而も人に接する情味と温容は其圓滿なる人格の  
流露にして斯の如く特異の營業方針の下に商品の優秀を加へ  
たヤマセ醤油は現に其巨石を縣下は勿論愛媛、高知、阪神に  
販路を求めて赫々たる業績を擧げて居るが事業經營に就いて  
時代の要求を収めてこれを活用飛躍する山本氏の醤油醸造場  
は中讃斯界に誇るべき存在をなして居る。

## 酒造芋阪と銘酒綾の鶴

清洲綾川の上流は良質の米産地域と共に一面絶好の酒造郷  
である。綾歌郡羽床村大字羽床上に輝く芋坂酒造場の綾の鶴  
の如き實に誇るべき地方銘酒  
である。

同酒造場はさきに元治元年  
先々代芋坂廣次氏の創業であ  
るが、元來芋坂家は酒造の名  
家として聞こえ、その宗家は  
今を去る二百數十年前徳川の  
中期同村に於て初めて酒造業  
を興し、代々これを繼いでゐ



た。廣次氏に至つて分家し自ら酒造を創め時に宗家と吟醸を  
競ひ酒造芋坂の双龍としてならび躍る壯觀を呈したが、その  
後宗家は酒造を中止し今や歴史も古き酒造芋坂の聲價は支流  
の芋坂に集中し中讃斯界に萬丈の氣を吐いて居る。

斯の如き支流の業基を築いた廣次氏。更にその後を受けた  
貞吉氏の努力等に依つてその酒業は不動化せられたが、當主  
和夫氏は大正五年三豊郡粟井村より同家に入嗣し、その生家  
また酒造の歴史を有する事に於て幼時より育まれた酒造知識  
は更に光芒も新に爾來養父貞吉を助けて祖業を双肩に擔つて  
その販路たる坂出、琴平方面より中讃一圓に活躍し銘酒綾の  
鶴の聲價をして愈々高からしめてゐる。

## 笑の友と宮武酒造場

中讃の銘酒笑の友綾美人岡正宗の名聲を以て知られる綾歌

郡法動寺村宮武酒造合名會社は中讃斯界での大生産量をほこ



る老舗である。同酒造場は先代宮武茂三郎氏が明治二十九年創業したもので當時三十二歳であつた氏は既に同村における砂糖製造業の成功者として謳はれてゐた。而も同氏の活眼は糖業の家内工業として未來性少きを察知するや斷然轉業して酒造に着手し初期の試験的醸造の極めて好評を博するに及んで、氏は爰に會心し更



に本格的に經營に移り精進四十年遂に造石量一千石に達する酒造場として今日の成功をとげた。其外氏は居村の自治にも中堅として活躍し道路改修、耕地整理にも獻身的につくしたが大正十四年同氏六十二歳にして歿するや、二兄弟覺三郎、茂男の兩氏は父業を繼承して事業を合名組織に改め以來兄弟相和して經營發展してゐる。最近は覺三郎氏の令息一男氏が叔父茂男氏と共に商戦の第一線に立ち笑の友の聲價を中心に中讃酒造界に雄飛してゐる。

## 小島酒造場と歌の種

綾南の酒造界に光る栗熊村小島酒造場の堅實なる業程と時代と共に培はれた名聲こそ特筆すべきである。同酒造場は明治卅七年先代小島秀三氏によつて創始されたが同家は元來村内でも舊家でその頃雜貨商として盛況の裡に理財に長じ先見の秀三氏は酒造業の進展性と附近の地勢よく同業に適せるを痛感して一念發起し酒造場に轉向身を以て努めよく今日の業礎を築いた。當主卓氏は十九歳の時先代に死別し、坂出商業

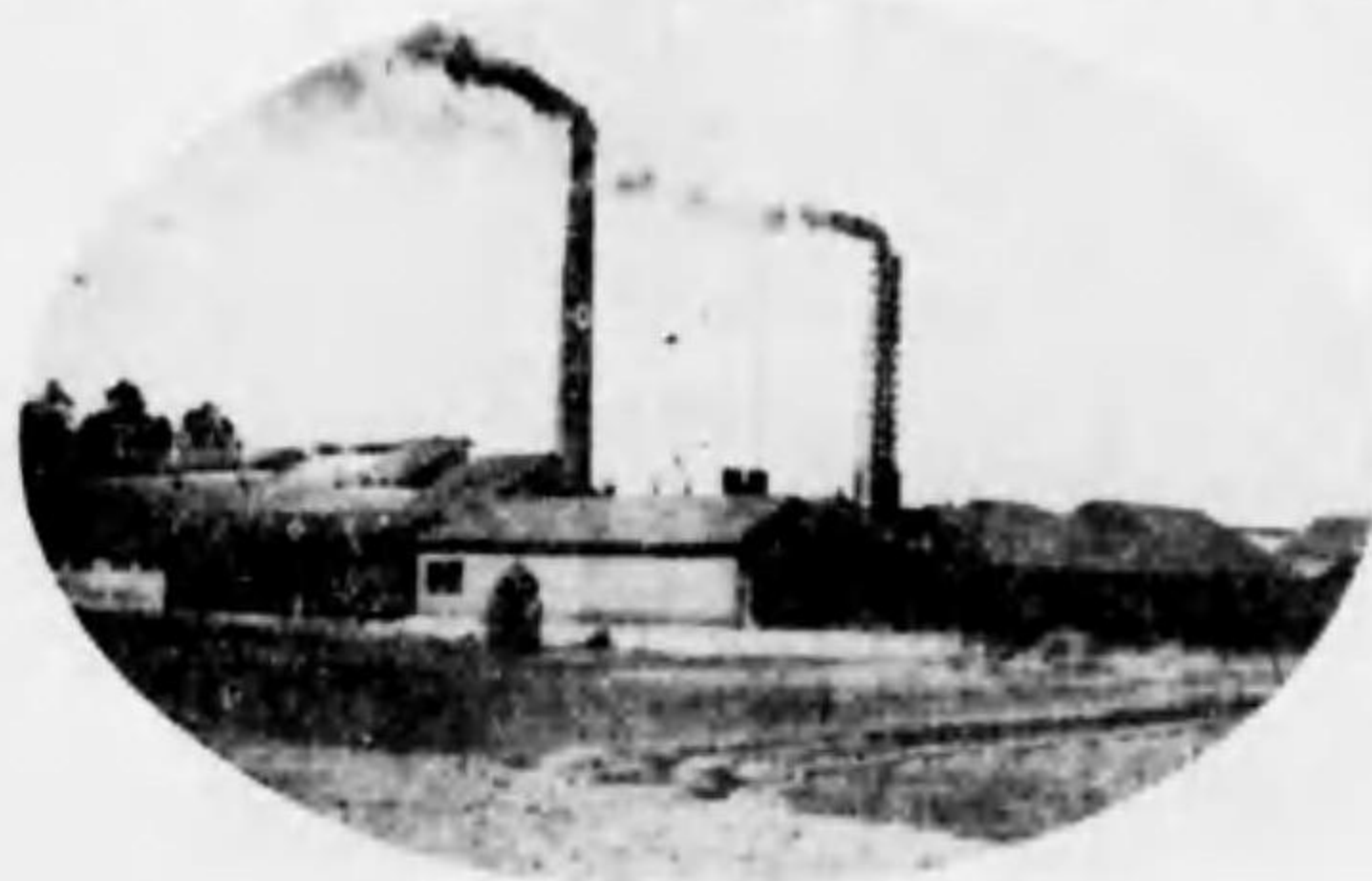
を卒業するや直に父業を繼承して以來此處に十餘年酒造業に専念し今や其事業と人は恰も盛期にあり釀酒歌の種を以て同地方に於ける異色ある銘酒の聲價を獲得して居る。



## 宇多津化學工業株式會社

中讃土器大東の兩川を繋ぐ海岸沿線につらなる宏大の鹽田地區此處こそ全國に著名な宇多津町の諸鹽田地帯である。

而して此地の鹽業副産苦汁精製會社として宇多津化學工業株式會社は同町隨一の工業會社として異常な好成绩を擧げて居るが、同社は大正六年鎌田勝太郎、中條秀太郎氏等發起のもとに資本金五萬圓を以て殊に宇多津鹽田株式會社の姉妹會社として創設された當時本縣の苦汁精製界は日露戰役時の黄金時代經過後長足の進歩發達を見てこれが更に歐洲大戰に遭遇するや一層の活躍期に際會した。この一般的趨勢にスタートした同社は宇



多津港に面して四千坪の敷地を構へ堂々たる工場をととのへて宇多津町民に霹靂の感を深ふせしめ。かくて宇多津鹽田株式會社の副産苦汁を原料に炭酸マグネシウム、鹽化マグネシウム、硫酸マグネシウム、ブロームカーナライト、鹽化加里固形苦汁、粉末苦汁、苦汁エキス等多彩な生産然も年額約十五萬圓に達する業況を示し、製品は阪神地方、北海道或は支那方面へ輸出し盛況を極めて居る。

因に同社現重役は左記の諸氏である。

専務	豊島登代造
取締役	堺 芳太郎
同	岩 潮 純一
同	豊島小太郎
同	監査役 龜井長太郎
同	眞鍋 豊行



# 宇多津鹽田株式會社

中讃取出宇多津の一帯は縣下鹽業の最盛地にして大鹽田會社又隨所において其生産額は本縣生産の大部を示して居る。爰に宇多津町の鹽業を擧ぐれば三大鹽業會社あり。その合計約百軒前の鹽田に殆ど全生活を委ねて活動する現實宇多津住民にとつては正に製鹽事業の幸惠大なるを感ずるものあらう。



津鹽田株式會社である。同社は明治二十三年の創立にしてこれより先夙に舊藩時代に於ける藩主の産業關心は宇多津地方有志をしてすでに鹽田を開拓せしめて居た。

然るに極めて錯雜の事情の下に經營されて居た該鹽田に突如物議を醸し遂にこれが訴訟沙汰とはなつて争つた揚句爰に同鹽田は競賣に附せられ揚行藏氏が落札しこれを經營しつゝあつた折柄、同地方鹽業關心の有志等は揚氏の鹽田を譲り受け株式會社組織の發議ありこの事忽ち具體化しついで資本金三萬六千圓の同社は創立直ちに揚氏の前記鹽田を買収、これが經營に當つた。

當時これが企畫實現に中心的努力せしは現相談役鎌田勝太郎氏にしてその功勞は今尙地人の感激措かざる所である。かくて明治二十三年設立以來三回の増資を敢行し、今日二十四萬圓の資本金として堅實なる基礎と好績を誇つて居る。

現在同社は所有鹽田の外に委託經營十軒前を合せて五十二軒前これが諸建物二百五十棟、全面積七十餘町歩、年産二千



明治三十五年六月眞鍋猪平太、長尾長太郎、原岡永江、豊島小太郎、阿比野勇の諸氏により資本金五萬五千圓を以て計劃

# 宇多津東鹽田株式會社

萬斤の巨額を示し、常に製鹽施設に改良を加へ能率と品質の向上には特に意を注いで居る。昭和二年二階建コンクリートの洋館事務所を新築したが縣下鹽田會社中隨一の新裝にして宇多津の近代美觀の一つをなしてゐる。因に同社現重役は左の諸氏である。

専務取締役 豊島登代造

宇多津東鹽田株式會社は宇多津三大鹽業會社中餘いまだ新しき鹽業會社で其の所有鹽田は宇多津川の兩側にあり。大正十年四月地の東鹽田及大東鹽田の兩會社を合同結成された。さきに鹽田築工の難事を以て多く省られざりし地区も

取締役	堺	芳太郎
同	久住	脩平
同	豊島	小太郎
監査役	長尾	勝
同	浮田	脩二郎
顧問	鎌田	勝太郎

創立した。東鹽田株式會社は當時直に宇多津驛北方古濱鹽田の地先十六丁五段歩の海面埋立を出願し許可と同時に堤防構築に着手しこれを了すや直ちに鹽田地盤九軒前の釜屋附屬建物等を建設した。

更に明治三十六年三月には綾井氏所有の古濱六軒前十町餘歩を買収し、かくて合計十五軒前の同社鹽田は三十七年七月に至つて漸く採鹹の運びとはなつた。然るに時恰も日露戰役に際し財界の激變は創業淺く基礎未だ全ふからざる同社に多大なる經營難の痛苦を味はしめた。然してこの難局に直面し



た各重役は一同協力してこのが打開に邁進し各員ともその職  
身的努力は翌三十八年九月に至つて著しき好績を止め、爰に  
始めて年六分の初配當を敢行する事を得たのである。

次いで明治四十年時の社長眞鍋猪平太氏は辭し現原岡氏就  
任兩米致々として經營に當つた。一方明治三十九年東鹽田會  
社關係の人々を以てする宇多津川東平山海面を埋立鹽田築造  
を目論む資本金三萬七千五百圓の大東鹽田株式會社は創立し  
既設東鹽田と川を挟んで築造工事は起され、まづ堤防工事に  
着手したが、殆ど完成の域に達せし頃一文字堤防決潰の厄に  
遭遇し又は豫想せざる淡水浸透防禦工事のために意外の工費  
を要して最初の目論見は全く齟齬し再三増資優先株の發行を  
も餘儀なくされ完成の時は會社の資本金は七萬四千圓にも上  
り辛じて所期の鹽田築造は竣成を告げたが、如何にせん其後  
業況は毎期所謂赤字決算を續くるの外なく斯くて關係者は其  
面目上全力を注いで經濟經營に努め大正元年茲に創立以來七  
ケ年目に一分二厘の初配當したのである。

此多難を克服した同社は以後相當順調に經過し大正四年に  
は斯界に卒先して電動排水唧筒を設備し大に品質の向上産額  
の増收を計り大正六年には八分五厘の配當を爲す等見るべき

成績にあつた。しかるに大正七年九月の大洪水は再度の天災  
に見舞はれ堤防は決潰して地盤は一朝に荒蕪地化し諸建物鹹  
水溜は破壊しこの損害數萬に及んだが、直に復舊にかゝり間  
もなく完成した。この東鹽田大東鹽田とも系統も同じく當然  
早晩合併すべきは豫期されて居たが恰も大正十年機運遂に熟  
しこれが實現された。即ち現宇多津鹽田株式會社である。合  
併後の資本金は二十三萬圓鹽田四十餘町歩年産一千萬斤を生  
産して宇多津鹽業界の中堅會社とはなつた。

同社長原岡永江氏は嘗て代議士に推され人格徳望高く少壯  
時より社長として社業を總攬し又専務堺芳太郎氏は創業以來  
の取締役に於て大正十二年専務に就任其堅實なる經營振りは  
常に内容充實に腐心専念し、株主作業請負人何れよりも敬慕  
と信頼の念を寬めて居る。重役は左の通り。(寫眞専務堺氏)

取締役社長	原岡永江
専務取締役	堺芳太郎
取締役	豊島小太郎
同	豊島登代次
同	長尾勝
監査役	杉山清平
同	池井昌平

# 丸沖製鹽株式會社

由來綾歌郡宇多津町はその昔舊藩時代には松平藩の藩庫所  
在地として米穀其他貨物の海陸集散地港を以て股賑を極めて  
居たが、ひと度廢藩となつて藩庫は絶たるるに至るや、港の  
出入は次第に尠く寂々として日に生氣なき町となつた。

此姿を憂へた有志等は斷然之が氣向の轉換を鹽業に求むべ  
く爰に發奮し、遂に今日地に  
鹽業約百軒前その盛況を謳ふ  
ては居る。素より鹽業の堅實  
有利は何人も認識する所であ  
るが、其反面花美しくして蒞  
本と晴雨天災の支配を受くる事極めて多き等にして如何に專  
賣管下にもありとも鹽業又難いかなと謂ふべきであらう。



あり之が比  
類なき困難  
は蓋し天恵  
の地區にも  
巨大なる資

此處製鹽の町宇多津に鼎立三鹽田の一として同町産業の本  
格に貢獻せるは即ち宇多津製鹽株式會社である。

同社は明治二十七年三月同市有志長尾長太郎、豊島小太郎  
氏等の發起に依り資本金二十四萬圓を以て創立、四十七町二

十七軒前の大鹽田で以來幾多の苦難を排して邁進今日の基礎  
は築かれたが、今や製鹽施設は改良を加へられて一ケ年の生  
産額約一千萬斤を算し、その成績誇るべきものがある。

尙現専務豊島小太郎氏は大正十二年以來専務として今日に  
及んで居るが、氏は同社創立以來社務に携り功勞者たるのみ  
ならず同地鹽業の恩人にしてまた永年同町々會議員の公職に  
もつき宇多津町史に特筆すべき人ではある。目下同社の重役  
は左記の通り。

専務	豊島小太郎
取締役	堺芳太郎
同	豊島登代造
同	長尾勝
監査役	久住脩平
同	杉山清平



# 乃木草履の片桐久助氏の面目

近時丸龜産業界に颯爽たる風姿を築き一面立志傳中の人も嘆賞せらるゝ同市中府乃木草履本舗片桐久助氏はその鬼才と信念を以て今日を掴んで居るが恐らく何人にもこの如く不拔の信念を把握し邁進すべきを時代は要求して居るであらう幼少恵まれざりし氏は貧しき環境のために琴平町某呉服店へ丁稚として這入つたが、爾來命をまゝに働いては居たものの歳と共に尠からず異色を認められた何事も主家の爲にと謂ふ以外私事に淡々として格闘の夫である、かくて二十二歳となるや自己の將來に關して熟慮の結果遂に自立を決意しこれを主人に語つて快よく許されるや直に丸龜市に於て木綿反物商を開業した。その後と云ふものは人目をも奪ふ一心不斷の活動を続け漸次店は發展を遂げつゝあつたが、其後時代の變遷に太物類の需要は進展



なく寧ろ質實剛健の氣風に代ふるに華美輕薄の氣向は太物の實需日に衰へる状態である。更に大正三年歐洲大戰は勃發し其後世を擧げての活況にも餘りに恵みなく尙此頃氏は木綿裏地の染料暴騰に憫み種々研究中ふと染料製造を思ひ立ち一面商況も閑散なればこれに取りかゝつて居たのである。しかしこれとても期待が程の餘徳もなく何等窮通の途ともならなかつた。此氏に通學兒童あり之が使用の草履極めて弱く且價格の比較的高きを思ひ仕事の餘暇に自ら藤裏の通學草履を考案してこれを使用せしめた。然るに其の結果驚くべき使用價值を見て忽然氏の雄心はこれに趨り更に苦心研究し之がもし所期を達成する時は全國通學八十萬兒童の上に至大なる利益なりとして一層渾身の研究を続け、こゝに從來のハツ折式に表裏花緒共大いに改良を加へ之を再び供用せしに實に履心地よく持も非常に強ければ遂に之を事業化すべく決然轉業し同時に自己が自信ある創案の該草履の特殊性に基きこれ

が當局に新案特許を申請した。この時に於ても氏が常に信仰せる金藏寺に縁りも深き殉忠烈士軍神と崇める一世の義將乃木將軍の乃木を冠して乃木草履とは銘した。

然して見事乃木草履の特異は認められて新案特許四二九四九號は附せらるゝや、氏は想へらく四二九四九は「ヨニ久シク」に通ずこれ至誠天に通ぜりと氏は勇奮奮躍あらゆる健闘を以てこれが普及に挺身した。この自信のもとに邁進した乃木草履は間もなく全國浦々に其の特質を認識されて需要は一日一千足の製造もなほみだし得ざる盛況を見るに至り爰に氏

は年來の苦心を結晶して巨萬の資を築いたのであるが氏がこの途半の奮闘は實に筆紙にもつくし難き所であつて特に氏が一言の信條として

咲けば散る咲かねばならぬ世の中に  
咲かず散る花ぞ悲しき

これは氏が今日の面目を語るものにして、自ら努力名實を全ふせし片桐氏は乃木將軍を崇拝し乃木草履で名を爲した事に由つて、その庭園には乃木將軍の記念碑を建立してあるが、氏の熱誠に東郷元帥は眞筆の碑題を贈られたのである。

# 琴平參宮電鐵株式會社

西讃丸龜、  
多度津、善通  
寺、琴平、坂  
出と一市四ヶ  
町を或は國鐵  
と並行し又は  
捷徑を通じて



陸上運輸の交通網を布陣する琴平參宮電鐵株式會社はその過去に交通事業の殆ど通例ともする初期幾多の難關苦闘を突破して今や愈々黎明の曙に到達せんとするが、同社の近況はまことに當然の酬ひと謂はなければならぬ。琴平參宮電鐵は明治四十四年資本金百萬圓を以て創立し其後十ヶ年餘にわたる創業の難澁を経験し漸く大正十一年に至つて多度津、琴平間を運轉し、更に引續き線路を延長善通寺



から丸龜に次で坂出町へと進出經營しつゝあるが、この延長二六軒の道線にして開業後大正十二年その經營極めて困難に達し遂に八十萬圓に減資、更に倍額増資を敢行する等あらゆる手段を以てこの經營難を善處した。

素より重役株主は勿論就業員に至るまで絶大なる犠牲忍ぶべからざる極度を耐へて一意交通事業の使命遂行に邁進したこの經營上の大手術と大衆が同社事業の讃仰を和して業績漸次好轉し殊に七年四月以來琴平、善通寺間に急行バスを管營し異常の成績を示してゐる。將來この自動車部の擴充はなほも期待すべきがあるのみならず、この沿線各地の發展は刮目に値ひし又全国的に由緒の琴平を始め各名勝地を連ねた同社交通事業こそその將來更に興趣を加へらるべきは蓋し當然

### 保多織と龜井合資會社

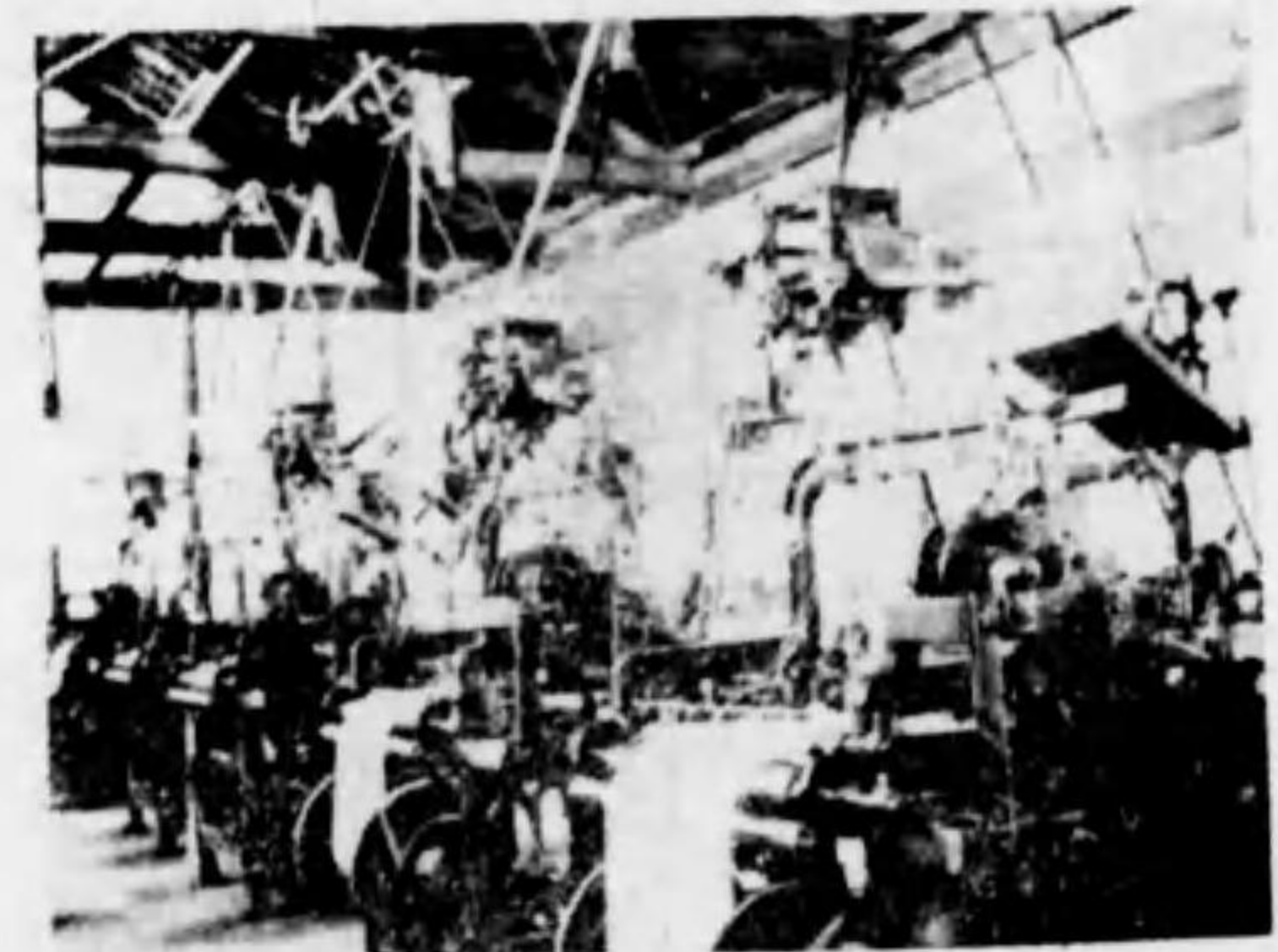
本縣製織産業中特産の歴史も輝く讃岐の保多織この保多織は其濫觴を元祿二年の頃だと謂ふ。當時松平初代の藩主として松平頼重公の讃岐に就封し其後幕府へ絹織物献呈すべく特に京都より北川伊兵衛常吉なるを招致し同氏をして異織に專

心せしめ遂に一種の改良織柄を發明して同五年絹保多織五反を奉納せりと、爾來之を國産として藩主納品の外他に販賣讓與を禁じ其製法も一子相傳を出なかつたと。斯の如くして製織した織物は之を保多織と謂ひ後其の地質染色共に多年を保

の歸趨でなければならぬ。尙目下の會社幹部は左の通り。

代表取締役	湯淺豊三郎
常務取締役	鈴木半平
取締役	鈴木仁十郎
同	田中隆
同	竹内長正
同	安達賢
同	龜井榮造
監査役	木原吉太郎
同	富山玄七
同	白川朋吉

つところから保多年織と改められ、更に保多織と通稱せりと謂ふ。此の由緒に其の後該織物は一般化して本縣特産の織布とはなつて居るが、目下本縣斯界にあつてよくこの面目を維持發揚せるに丸龜本町龜井榮造氏の織布合資會社がある。



由來この保多織は値高價の評あり随つて非大衆向の評あつてこれが爲萎靡不振を免れなかつた。これを遺憾とした龜井氏は大正五年現會社を組織し其製品を以て斯界に清新なる氣を注入すると同時に貴重な刺戟を與へたのである。氏の製品は上布、白毛地、中形、湯上り地、絹保多、麻保多等あつて何れも斯界に覇を成しよく本縣保多織の面目を誇りつゝあるが、其聲價の一端として嘗て大禮記念京都博覽會及東京大禮博、名古屋大禮博、中外産業博、全國産業博等幾多權威ある機會に絶賞され又三越、大丸、松坂屋等各デパートに於ける定評はこれを氏の眞摯なる郷土的生産的良心とそ

縣下酒造界に於て百三十年の歴史も輝く銘酒綠松の名とともに健全なる發展を遂げて愈々斯界に重きを爲せる丸龜市河

### 綠り松の河口酒造場

口酒造場の現況こそ又燦たりと謂ふべきであらう。同酒造場はかつて初代忠兵衛氏の創始にかゝり品質本位の



酒造としてその基礎を築き二代忠兵衛氏之を繼ぐに及んで益々名聲を高めた。

當主爲吉氏は温厚な人格者にして且斯業に熱心不斷酒質の向上に意を須ひ名も縁松の常縁の聲價を博して居る。

目下店業は主として息佐一氏これに當り氏は丸龜酒造の社長及び同地酒造組合副組合



長として活動して居るが、その時代的才幹は斯界の人材として將來を刮目されてゐる。

## 尾池松太郎氏と團扇會社

目下丸龜市の重要物産として年額二百萬圓近くを算する團扇製造業の發達は實に驚異的躍進でなければならぬ。然してこの如く急展開の事業には何れを問はず統制上の難事の伴ふを常とするが。現に丸龜團扇界にあつても業界の統制には痛く彫心したものである。

爰に於て丸龜團扇合同株式會社社長尾池松太郎氏の如きは常に組織ある發展と共同の利益を主張し且これが實踐化の士である氏が今日丸龜市の人材として重きをなし同市團扇産業今日の發展に寄與する所尠からざるは何人もこれを認識し且讚辭を惜まないところでもあらう。



氏はかつて團扇製造の經驗を経て丸龜政界、事業界に活躍しつゝ大正十五年團扇の發達と時代の要求に依つて丸龜團扇合同株式會社を創設し、一業界の統制ある發展を期した。その後丸龜の團扇は遠く海外にも雄飛し、かくて團扇製造家も逐年増加し産額又二百萬圓を摩すの盛況にあり。しかも此移出には團扇骨を總額の六割として完成品は四割の實情で骨製造家は聊か多産の傾向にあり。この生産過剩は素より

業者夫自体の不利なる事に於てこれが又統制の必要を感じた尾池氏は昭和六年重要物産工業組合法に因る縣下業者を一丸として香川縣團扇骨工業組合を組織結成し、斯業の根底を固め同時に外に發展を期した氏は目下同組合長として精進しつゝある。氏の丸龜團扇界に於ける功勞はこの如く實に至大であつて、尙永年丸龜商會會長として又波瀾多かりし過去丸龜市政に參與して名議長の評ある等その公私に於ける社會的貢獻は正に文字以上にして氏を目して丸龜市に必要な一偉材とする所以もこゝにある。

## 丸龜無盡株式會社

現下急迫せる中産以下一般勤勞階級にとつて最も簡易に重寶有利なる金融機關無盡業が近來着々その實績を擧げ、利用者また著しく増加し、庶民金融機關の使命を充足してゐることとはこれ時代の推移として當然なりと雖も喜ばしき現象である。爰に歴史と實績を誇る丸龜無盡株式會社の活躍を擧げる

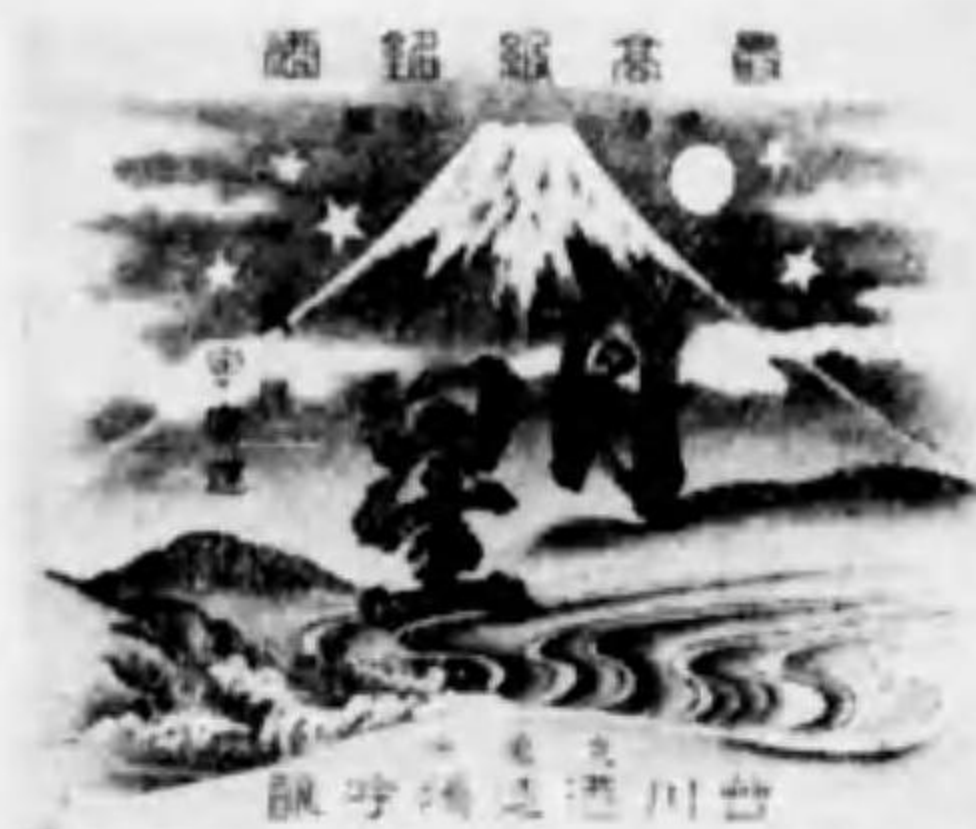
が同社は西平山町にあり大正三年井上榮吉、尾池松太郎氏等が發起し資本金三萬圓を以て創立せるものにして、爾來大藏省の監督の下に堅實第一を綱領として常に着實なる經營を續け丸龜市を中心に綾歌仲多度兩郡の農商家殊にサラリーマン階級の渴仰を集めてゐるが、加入者も年と共に増加し今や千



五百名共契約高百八十萬圓を突破するの活況である。而も同社はその掛金種類の如き第一種の最低百圓會より最高二千圓に至る十二類に分ち、土地家屋の買入れ及び新築事業の資本自作農資金より結婚費、教育費或は負債の整理、不時災厄、保険、旅行遊覽費とあらゆる利用路を擁し法の許す範圍に無盡金融の魅力を發揮しその堅實性は愈々社運の隆興

## 曾川酒造と銘酒月星

丸龜酒造界に於て夫が毅然たる存在を謳はるゝものの中に府町の曾川酒造場がある。その吟醸する銘酒月星は斷然中濃斯界に萬代の榮を誇るかの盛況を續けてゐるが同酒造場は始祖善七氏が安政元年創設以來一意専心業礎の確立に努め二代目文吉氏又父業を繼い



で更に活躍し業程に精彩を加えしめた。當主淺七氏は本年五十九歳父祖二代の確立せる酒業を繼承後なほ時代的經營をモットーとして特に品質の向上を計り且其販賣線の延長強化に全力を注ぎ寧日なき活躍を續けて今日の聲價を博してゐるが其圓熟洗練された商才はこの酒業をして將來一層の進境を想起せしむるのみならず、長子重行君の新進戰士を加へ又永年至誠を以て同店業に従事せる支配人田中幸次郎氏等その堅實なる酒陣こそこれ斯界に輝く月星の名に愧ない所であらう。

展開を保證づけられて居る。尙その重役は左の諸氏である。

- |     |       |
|-----|-------|
| 取締役 | 尼池松太郎 |
| 同   | 吉田龜吉  |
| 同   | 富羽政吉  |
| 監査役 | 香川金八  |
| 同   | 江崎晋吉  |

## お福足袋株式会社

丸龜市通町に今や堅實無比を誇つて飛躍せるお福足袋株式會社はその創立大正九年にしてこれよりさき明治初年丸龜に於て古着と端布を業とせし三谷甚助氏はその春より夏の業閑期を利用し手縫足袋の製造を始めた。時は明治十四年ごろであつて、其後時代文化の進展と共に古着端布の商況に嫌たらざりし現社長兵吉氏は當時岳父の慈惠もあり斷然足袋製造に轉業を決意し直に數名の職人を求めて斯業に一意精進した。斯くて明治廿九年ごろミシン機械の出現と共にこれを求め以來三谷父子はその全能を傾けて只夫前進したのであつた。

かくて氏の製造するお福足袋は三十六年大阪天王寺公園に於ける第四回全國博覽會に入選しこの名譽を記念して名譽お福足袋とは改稱した。尙これは明治三十九年正式に登録したがかくて寸進尺歩業を築きつゝあつた三谷氏の足袋製造業は更に恵まれた時機に到來した。即ち歐洲大戰の一般的活況であつてこの時運に際會するや氏は正に蛟龍の天に昇る如く商況の展開飛躍は寧ろ凄じき程である。

この來潮期に氏は遺憾なく基礎を固め次で大正九年三月店業を現在の資本金三十萬圓お福足袋株式會社とはしたが、この時にも計劃豫算三十萬圓を財界の變動物價の暴落によつて二十萬圓で全部の考案施設を完了する等何處までも恵まれのお福足袋ではあつた。

會社創立後三谷氏は専務に就任社務の一切を統理し目下一ヶ年百萬足を製造して四國、九州を最として朝鮮、滿洲及臺灣にも進出して居る。而も創立以來一割の高配當を持續し尙且多額の積立金を保有するが如き全國足袋界稀な良績にして専務三谷氏は現に本縣足袋同業組合長にして其人格手腕は夙に定評あり。手縫足袋から自己の偉大な着創と努力を基本として擴充された同社業の日に進境を拓く繁盛こそ多望な姿ではある。尙同社の幹部は次の諸氏である。

- |       |       |     |       |
|-------|-------|-----|-------|
| 専務取締役 | 三谷兵吉  | 取締役 | 前谷寅次郎 |
| 取締役   | 合田房次郎 | 同   | 岩瀬純一  |
| 同     | 三谷助四郎 | 監査役 | 松本傳次  |



## 酒造の藤井忠太郎氏

我が讃岐の生んだ銘酒として今や全国にその名をうたはれてゐるものに丸龜市下地方藤井忠太郎氏の醸造にかゝる主基の香がある。藤井氏は今より十八年前即ち去る大正二年清酒醸造に着手し、その名もゆかしき主基齋田の主基の二字をとりて主基の香と命名した、以來氏の絶えざる研究と手腕は遂に縣下清酒界に嚴然たる歩地を築き、その名聲は實に噴々たるものあり。即ち各種の品評會に出品して何れも名譽の賞牌を受けて居る。

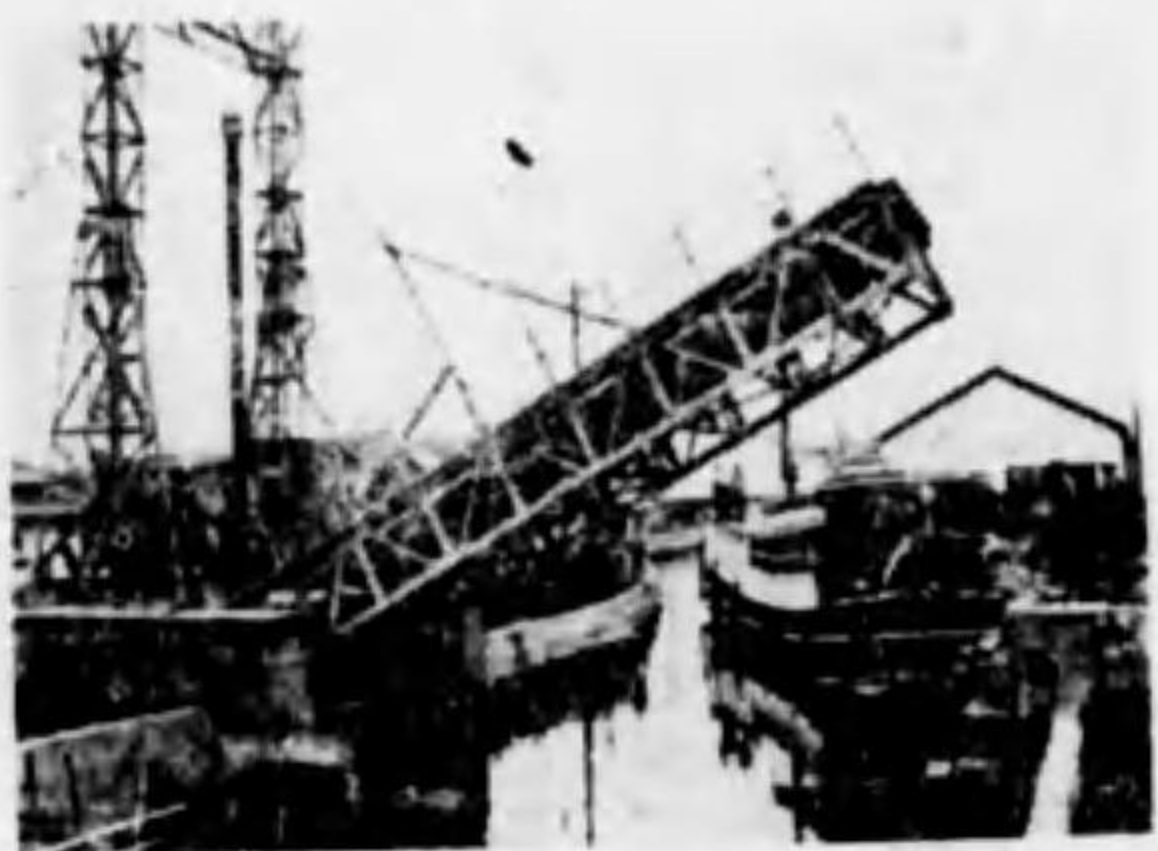
この縣下清酒界の新鋭主基の香の驚異的今日の進境もこれ全く藤井氏の盡きせぬ奮闘努力の賜にして、氏の得意や察するにあまりあり。然も氏は未だ四十歳を過ぐる多からず、その圓満なる人格と相俟つて前途は刮目に値ひするが、尙此の外に氏は一族を擧げて或は醬油醸造に或は藤井女子商業學校の建設に其他各種の事業を劃し努力貢獻せる事は人のよく知るところである。

## 三豊紡績丸龜工場

近代都市の發展要素とも謂ふべき一般生産工業の内容に恵まれなかつた丸龜市が其産業的活躍の尖端を三豊紡績丸龜工場の創建に求めてこれを實現し、日下全能率を發揮して居る事は眞に同市産業のために祝福し且雄々しき光景である。

これより先産業的勢力充實を至念した丸龜有志並に大須賀市長は昭和三年三豊紡績が岡山縣倉敷の事業家大原氏等によつて創設される、や三豊の先鞭に地方有志の紡績工場熱望の焰は炎上した。其の後大原氏に丸龜にも工場新設方に就いて

懇談するや大原氏も三豊紡績擴張の志意あり此機運に乗つて大原氏の果斷と丸龜市有志の犠牲的努力は遂に現丸龜工場を完成せしめたのである。かくて昭和四年三豊紡績の資本金を三百萬圓増加六百萬圓として愈々現在に新設すべく着工し翌五年操業を開始した。而も工場裝備たる堂々一



萬六千七百坪の廣域に建築坪數四千坪紡機三萬錘男女三百數十名就業して年産五萬四千捆の綿絲生産は丸龜産業の現面に一時期を劃したものであつた。殊に同工場施設の最も誇とするは原料製品の運搬に獨自の考案になる海路掘削で運搬船は隨時工場地内に跳上橋を通過して上下するが該橋は特に市費を以て架橋せしものである。其他全施設を通じて最新最良の諸設備はよく能率を高めて丸龜市民の全幅の期待に副つて居るが、現工場長富海教全氏は創設以來獻身的活動の士にして、多數従業員等の敬慕する所である。(寫眞は同工場の跳上橋)

## 株式會社丸菱百貨店

近時小賣商人よ何處へ往くの言葉は全く悲痛そのものである。この言葉は即ち現代商業戦術の激化し姑息より明朗へ因循より潤達へと創造された時代の要求を、その儘に一般商業線上に否群小商人の頭上高々と奏で聞かると時代の挽歌であらう。

近來各都市に凡ゆる大衆への魅力を整へて誕生する百貨店。この百貨店こそは正に時代の寵兒ともして居る。本縣の商戦場裡も三越百貨店の進出以來その投げた時代の礫は異常な波紋を描き、正に虚々實々である。この一大刺戟を感受して快く發芽せしものに丸龜市の丸菱



百貨店がある、即ち同市のメインストリート通町に今や近代的輪奐の美も明朗を誇つて三階洋館の豪壯な一城廓株式會社丸龜百貨店の誕生がそれであるが、同店は現重役小野理喜松片山徳治、吉津虎吉其他數氏の發起により資本金十萬圓を以て昭和七年三月創立直に現在の場所にて三百坪を以て近代式鉄筋コンクリート三階建洋館を建設し一階雜貨部、二階呉服部、三階食料品部と夫々陣容を備へて同年十月全市民歡呼裡に開業し以來多數男女店員の明快なる顧客サービスと百貨は妍を競ふて購買力を沸らせ同市を中心にして近町村の顧客を吸収し文字通り盛況を續けてゐるが、



## 丸龜團扇と大久保瀧次郎氏

現時丸龜産業の白眉としてその團扇は餘りにも天下に轟名である。凡そ團扇の祖場は奈良なりとも傳ふが今や丸龜團扇は奈良その他を完全に凌駕してその伸べ行く所は内地は元より海外各地に其の實用並に藝術的香氣を瀰はれて居る。洵に丸龜斯界の爲めのみならず、本縣産業の見地からこの發展を祝福せざるを得ない。

丸龜團扇の發祥は明治二十三年頃で當時鹽屋の近郷は時々海水浸入して土地は瘦從つて不作に喘ぐ附近農家は非常に困難を來しさとて他に何等の適業をも發見する事は出来なかつた。この悲惨なる状態を目した地の西山俊治氏は種々想を馳せた結果遂に竹細工團扇骨製造に着眼し、直に三豊郡高瀬村の田中幾次郎氏を聘し、これを當時十五才の大久保瀧次郎氏外男工五名女工四名に習得せしめた。これを楔機として濫觴した丸龜團扇は爾來盛衰の波動裡に研究と集積された經驗は現に年額二百萬圓の團扇を生産して確固たる産業的基礎を築いて居るのである。

爰に嘗て三十餘年の昔率先手法を習得し以來斯業に専進して目下丸龜斯界の權威ともする大久保瀧次郎氏がある。氏が斯業を習得以來漸時發達の緒を萌したが、日清戰爭當時はそ

現専務小野理喜松氏は廿三歳の時より同市通町に於て雜貨商を經營して多年の商業經驗を持つ老練家にして、また明朗なその社交才氣は百貨店經營に最適の人たるを失はない。更に片山氏も商主として共に明日への同百貨店を擔ひかくて發展躍進は約束され期待を集めてはゐる、目下發足早々にも一ヶ年四十萬圓の賣上を目標に試練時代より本格的活躍期に展進しつつある同店こそ時代の意志と近代人の總意を滿載した陸の商船とも謂ふべきであらう。因に同社現重役は左の諸氏である。

専務取締役	小野理喜松
常務取締役	片山徳治
取締役	吉津虎吉
同	秋山治三郎
監査役	西山庸三
同	尼池松太郎

の打撃に一時中止の悲況に沈淪せしも、平和と共に再び商勢を回復し二十九年頃には一日約九千本を製造して居た。

かくて明治三十七年大久保氏は矢野馬太郎氏と共に大矢商會を起し男女職工七十餘名を役使して多量生産を以て一躍縣外にも進出した。その後生産も増加して一日一萬三千本を示し一方その製品の改良統制の必要を感じ、大久保氏等は團扇職工組合を組織して改革の一助としたのである。

次で時代と共に鹽屋團扇合資會社に改組した、此新機構完成後斯界の躍進は實に跳躍的にして次いで大正二年頃には一日四萬の莫大なる生産を示し、又此時に一職工の脇竹次郎氏は團扇骨製作上劃期的切込機及穴明け機械等を發明し一層生産増進の實を擧げる等斯界の發達は實に目醒しきものである。かく本格的な地方産業團扇界を絶へず指導的立場に在りし大久保氏は更に取引の改善を痛感して丸龜團扇共同販賣所を設け取引の格一を期して好績を収め、更に大正十一年には同族を以て合資會社大久保商會を起し、尙龜阪團扇株式會社丸龜團扇合同株式會社を組織して大に活躍した、又大正十五年には時代の要求する丸龜平柄團扇販賣組合を設立し以來その組合長として活動して居るが、氏が斯業習得以來約卅五年